●勅二天之命一唯時惟幾。（晉經）

【しも】霜

元眞。青友。鉛華。玉屑。鋪レ玉。成レ花。凝レ曉。横レ秋。封レ條。隕レ葉。倒レ蓮。破レ菊。九月蘁。白土休。

おきまよふ。霜をれ。鳥のあと。霜ばしら。霜がれ。霜さやぐ。霜けぶる。霜こほる。霜さゆる。はつしも。葉分の霜。霜の衣手。夜床の霜。霜のむらぎえ。霜の八重ぶき。

●初霜〳〵おきやすく、またとけやすし。住あれどもふとしからず、花あれども凋むに早し。雨冠に相の字を書きしは雨と雲との相のものか。もとの雲来の雲の順にあたらば、さしつめしもの凋なるべし。それ寄女至〻時を感じ、君子ふみてなき人を思ふ。軒の妻さへしろ〳〵と、あらたに源氏紙しだる橋のゆきけた所庭に、二つ三つ四つ足跡の殘りたる、月おち烏啼き、楓の橋の舟の疑覚、しら菊の花の心あて遣も、いつしか師走女の霜焼となりて、つひに手水鉢の堅き氷にも至りなん。青柳の糸よりかくる春にもなれば、百たらぬ八十あまり八の夜の別をや歎くらん。（蜀山人）

●いみじう霧渡れる空も只ならぬに、霜はいと白う置きて誠の懸想もをかしかりぬべきに、さうん〳〵しう思ひおはす。（紫式部）

❷二十日の月遣かにすみて、海の面面白く見えわたるに、霜のいとこちたう置きて、松原も色まがひて、萬の事そゝろ寒く、面白さも哀れさも並ちそひたり。（同）

❸さて冬がれのけしきこそ秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。みぎはの草にもみぢのちりとゞまりて、霜いと白うおけるあした、やり水よりけぶりの立つこそをかしけれ。（集好）

❹けさも見出したれば、雪のいと霜の白し。音昨夜の姿ながら、驚ぐもいと哀なりて、驚ぐもいと哀なり。あなさも雪恥しき霜かなと、口掩しつゝかゝるみの、頼むべかんめる人共のうちきこえごちたる、たゞならずなん覚えける。

❺九月のかげに玉篠の霜の、所せき渡しなるが、さら〳〵と見えたるなど、中々をかしき冬枯の野べの景色、閨ならましかば口をしからまし。（宣長）

❻又の日のまた早朝、霜のいと白きに、さて今の間はいかゞとあれば、

起きながら明せる霜のあしたこそ勝れるものは世になかりけれ。（和泉式部）

❼瑤臺霜滿てり、一輪の玄鶴空に鳴く。巴峽秋深し。五夜の哀猿月に叫ぶ。もの冷まじき山路かな。有明の月も限なき深更に、山のかひより見渡せば、所は下邳の川波に、渡せる橋におく霜の、白きをみれば今朝はまだ、渡りし人の跡もなし。うれしや今ははや、思ふ願ひも滿つ朝の、曉かけてはるかに、夜馬に鞭うつ人影い、駒をはやむる氣色あり。（謡曲、張良）

❽故人眠早く罷めて、悲は六十の花に過ぎ、心は茅店の月に嘯き、身は板橋の霜に漂ひ、白頭の雪は積れども、壱を登ふ滝川の、水や心を清むらん。（謡曲、養老）

❾あはれ知れ、霜より霜に朽ち果てゝ、世々に巻りにし山蔭の、袖の涙の身の苦。（謡曲、定家）

❿聞きしにまさる要害は、またさたかへる春の夜の、霜にさらめく軒の瓦、しやちほこ天にひれふりて、せきるゐ高く築きにげたり。（浄瑠璃、國姓爺）

●おき明す秋の別の袖のつゆ霜こそ結べ冬やきぬらん。（後成）

●菊の花冬の野風に散りもせでけふまでとても霜やおくらん。（是則）

●天とぶや雁の翅のおほひ羽のいづくもりてか霜のふりけん。（袋葉）

●鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける。（家持）

●冬来ぬ槻の葉白く霜さえて朝さびしかる信樂の里。（經正）

●冬くれば門田の水もかれはてゝいながらしろく霜ぞおきける。（土御）

●風わたるかり田のあぜの霜くづれゆきゝの人の袖やさゆらん。（自寛）

●きゝの葉によるの霜ふる山ざはゝいとゞおきさの音ぞさえゆく。（長流）

●有明のきえにしかげを松の葉にしばしのこせる霜の色哉。（千蔭）

●雄渡江の今はたかるゝあしの葉に霜の花さく色ぞむけき。（春湖）

●霜白し烏のかしらかへり花。（言水）

❶初霜やわづらふ鶴な選く見る。（蓼村）

❷朝霜や鮒を握るつるべ縄。（同）

❸霜ふれて韮を刈り取る爺かな。（同）

❹脱かける舟梁の霜や渡所。（太祇）

❺日三竿檜原にたえぬ霜の色。（召波）

❻羊煮て兵を勞ふ霜夜かな。（同）

❼朝霜や茶湯の後のくすり鍋。（同）

❽はつ霜の泥にこれつ草の色。（支考）

❾初霜や砂に鯛のそりかへり。（同）

❿はつ霜や声折遠ふ濱づゝみ。（同）

⓫かけ直すあら木の橋に此あさげ霜の翁わたりぞめしつ。（岩翁）

●七八のかや野の草のかれはてゝもえぎの色も見えぬ初霜。（清澄）

●ぬぎすてゝ浮世をよそのその庭の面など心なき霜の袴ぞ。（橘洲）

●蟲の音のたえたる霜の寒き夜に鳴くものとてはこれきりゝ〳〵す。（光）

●あかつきの雞聲が霜すぎゆけば朝霜おける板橋の上。（船鹿）

●木々の葉な落し嵐もそろ〳〵としもかゝりたる庭の面かな。（呉顔）

●井戸側へ覆輪かける今朝の霜。（川柳）

●銀瓶取下浸二椒花一水。已被二霜風凍作一氷。

●十墓峨山墓。三霜楚戸砧。（蘭廷瑞）
●月照萬家霜。（杜甫）
●月上一樓霜。（彭性仁）
●曉霜楓葉秋醋。（盛太古）
●霜天楼〻酒遅。（葉子奇）
（孤苑丘）

【じやう】情

塵情。感情。熱情。薄情。性情。餘情。哀情。愛情。遺レ情。なさけ。つれなき。ものゝあはれ。

●中將既に打ち立たんとし給へば、北の方袂にすがり、都には父もなし母もなし。捨てられ奉りて後、又誰にかは見ゆべきに、いかならん人にも見えよなど、泪るこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憎み給ふとも、又こと人にもや情なかくべき。何處までも伴ひ奉り、同じ野原の露ときえ、一つ底の水屑ともならんとこそ契りしに、されば小夜の嵐のむつことは、皆偽になりにけり。（平家物語）
●熊谷餘にいとほしくて、何處に刀を立つべしとも覚えず。目もくれ心も消え果てゝ、前後不覚に覚えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く〳〵首をぞ掻きける。あはれ弓矢とる身ほど、口惜しかりけることはなし。武藝の家に生れずば、何しに唯今かゝる憂きめを見るべき。情なうも討ち奉りたるものかなと、袖を顔におしあてゝさめ〴〵とぞ泣きゐたる。（同）
●五日のあした、宮づかさ車の事いひて、北の陣より五月雨はとがめなきものぞとうちやましがりて今一つして同じくはなどいへば、否と仰せらるれば、聞きもいれず、情なきさまにてゆくに、馬場といふ所にて、人多くさわぐ。何事するぞととへば、手づから馬の口を引きて、門わりなり。さらぬ情だに折柄物は嬉しきに、かしこき御情も深く、色をも香をもと、思しめし出づるも御使の嬉しさは、げにいかなりけん。同じたぐひならん身は、げにいかでか、羨しからん。ありがたき面目、生ける身の思ひ出とぞ、よそに思ひ知られて侍りし。（中務内侍）
●あゝまれなるかも、この少女、いまだ驚の衆を果ず、連理の枕を並べずして、北の情百年の夫婦に勝ぎたり。爾るを信乃は情にひかれて、その心を動かさず、よくその情に従ふて、男女別ある趣を得たり。（馬琴）
●北をつく〴〵見かへれば、杳渺として迹もなし。人間の哀情、遊族に多く、就中朋を断つこれ秋天、張儀が僕つかれ、玄豹が馬痩せたり。（同）
●ほて此方と已とは敵同士、志津馬殿に縁のある、この親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ。これ〳〵此土の情には、平作が未來の土産に、敵の有所を聞かして下されいの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はいまい。不思議に始めて逢ふた人、如何うした縁やら我子の様に思ふ者、何の此方にひけ取らす様な事、此親に、かしこき御情も深く、色をも香をもと、思しめし出づるも御使の嬉しさは、げにいかなりけん。同じたぐひならん身は、げにいかでか、羨しからん。ありがたき面目、生ける身の思ひ出とぞ、よそに思ひ知られて侍りし。（中務内侍）
●あゝまれなるかも、この少女、いまだ驚の衆を果ず、連理の枕を並べずして、北の情百年の夫婦に勝ぎたり。爾るを信乃は情にひかれて、その心を動かさず、よくその情に従ふて、男女別ある趣を得たり。（馬琴）
●北をつく〴〵見かへれば、杳渺として迹もなし。人間の哀情、遊族に多く、就中朋を断つこれ秋天、張儀が僕つかれ、玄豹が馬痩せたり。（同）
●ほて此方と已とは敵同士、志津馬殿に縁のある、この親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ。これ〳〵此土の情には、平作が未來の土産に、敵の有所を聞かして下されいの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はいまい。不思議に始めて逢ふた人、如何うした縁やら我子の様に思ふ者、何の此方にひけ取らす様な事、此親が、さあ此親仁が致しませうぞ、是が一生の別れ、一生の辱み、聞かずに死んでは、迷ひますわいの〳〵。これ拝みます〳〵旦那様と、子放の園も二道に、分けて生を歴非。（浄瑠璃、伊賀越）
●思ずとてさやはいさめんよの人のなさけしるなる道ぞこの道。（千隊一）
●おもひねにわが心から見るゆめもあふよは人のなさけなりけり。（忠岑）
●なさけありし昔のみなほしのばれてながらへまうき世にもあるかな。（西行）
●たえずとふ覚の水の情こそおとづれながらさびしかりけれ。（爲家）
●いかなりし人の情かおもひ出づるこしかたかたれ秋のよの月。（爲家）
●心ひくかたばかりにてなべて世の人になさけのある人ぞなき。（爲子）
●今はまたうきおもひ出となりにけりうれしかりつる人の情の。（成章）
●いつまでもわすれずしひてしのべとやうき泉にかけし情ふるらん。（白雄）
●行水や情に落入る方丈記。（白雄）
●似た星の似た星に照る情哉。（大江丸）
●月の情冬を定めり極木原。（曉台）
●冬ごもりとかくして世の情に落ち。（同）
●冬の情月明らかにあられふる。（同）
●野ざらしに何の情ぞきりぐ〳〵す。（雨柳）
●契りぬる君が情のうす化粧あとからはげておもてうらめし。（行廣）
●情しからじ君が情にかき貝の身をばこふんの粉にはたくとも。（諏人不知）
●組討に遺言を聞く武士の情。（川柳）
●千代のめぐみよの柳はみどり、花はくれなゐよ、人はたゞ情、これ、梅はにほひよ。（俗諺）
●楊花直是可憐生。也似レ無レ情也有レ情。獻レ媚何曾分二冷熱一。家々門巷逐二春聲一。（秋村）
●長安一片月。萬戸擣レ衣聲。秋風吹不レ盡。總是玉關情。何日平二胡虜一。良人罷二遠征一。（李白）
●酷憐風月爲二多情一。還到二春時一別恨生。倚レ柱思レ思偏惱恨。一場春夢不二分明一。（張謂）

【しやうにん】商人

商賈。商品。行商。商客。賈客。販賣。市場。算レ緡。移レ船。

●冬の情月明らかにあられふる。（同）
●野ざらしに何の情ぞきりぐ〳〵す。（雨柳）
●契りぬる君が情のうす化粧あとからはげておもてうらめし。（行廣）
●情しからじ君が情にかき貝の身をばこふんの粉にはたくとも。（諏人不知）
●組討に遺言を聞く武士の情。（川柳）
●千代のめぐみよの柳はみどり、花はくれなゐよ、人はたゞ情、これ、梅はにほひよ。（俗諺）
●たえずとふ覚の水の情こそおとづれながらさびしかりけれ。（爲家）
●いかなりし人の情かおもひ出づるこしかたかたれ秋のよの月。（爲家）
●心ひくかたばかりにてなべて世の人になさけのある人ぞなき。（爲子）
●今はまたうきおもひ出となりにけりうれしかりつる人の情の。（成章）
●いつまでもわすれずしひてしのべとやうき泉にかけし情ふるらん。（白雄）
●行水や情に落入る方丈記。（白雄）
●似た星の似た星に照る情哉。（大江丸）
●月の情冬を定めり極木原。（曉台）
●冬ごもりとかくして世の情に落ち。（同）
●冬の情月明らかにあられふる。（同）
●野ざらしに何の情ぞきりぐ〳〵す。（雨柳）
●契りぬる君が情のうす化粧あとからはげておもてうらめし。（行廣）
●情しからじ君が情にかき貝の身をばこふんの粉にはたくとも。（諏人不知）
●組討に遺言を聞く武士の情。（川柳）
●千代のめぐみよの柳はみどり、花はくれなゐよ、人はたゞ情、これ、梅はにほひよ。（俗諺）
●たえずとふ覚の水の情こそおとづれながらさびしかりけれ。（爲家）
●いかなりし人の情かおもひ出づるこしかたかたれ秋のよの月。（爲家）
●心ひくかたばかりにてなべて世の人になさけのある人ぞなき。（爲子）
●今はまたうきおもひ出となりにけりうれしかりつる人の情の。（成章）
●いつまでもわすれずしひてしのべとやうき泉にかけし情ふるらん。（白雄）
●行水や情に落入る方丈記。（白雄）
●似た星の似た星に照る情哉。（大江丸）
●月の情冬を定めり極木原。（曉台）
●冬ごもりとかくして世の情に落ち。（同）
●冬の情月明らかにあられふる。（同）
●野ざらしに何の情ぞきりぐ〳〵す。（雨柳）
●契りぬる君が情のうす化粧あとからはげておもてうらめし。（行廣）
●情しからじ君が情にかき貝の身をばこふんの粉にはたくとも。（諏人不知）
●組討に遺言を聞く武士の情。（川柳）
●千代のめぐみよの柳はみどり、花はくれなゐよ、人はたゞ情、これ、梅はにほひよ。（俗諺）
●たえずとふ覚の水の情こそおとづれながらさびしかりけれ。（爲家）
●いかなりし人の情かおもひ出づるこしかたかたれ秋のよの月。（爲家）
●心ひくかたばかりにてなべて世の人になさけのある人ぞなき。（爲子）
●今はまたうきおもひ出となりにけりうれしかりつる人の情の。（成章）
●いつまでもわすれずしひてしのべとやうき泉にかけし情ふるらん。（白雄）
●行水や情に落入る方丈記。（白雄）
●似た星の似た星に照る情哉。（大江丸）
●月の情冬を定めり極木原。（曉台）

●房悽何必讀二鐘情一。嫦娥人宜レ住二錦城一。小婢上レ燈花欲レ暮。蠻奴掃レ雪落無レ聲。春衣互翫番楽重。繡被聯吟曉夢清。一事感レ獨眞悲解。知余心潤不レ沾レ名。（張船山）
●欲レ雨青山似レ有レ情。雲煙漠々暦二江城一。浪華橋上別離恨。村與杜鵑長夕鳴。（秋里）
●撒豆家々闡二追儺一。誰知老境易レ傷レ情。婿猟菜熟燈前笑。欲レ爲二衰翁一算二歳庚一。（張謂）
●楊花直是可憐生。也似レ無レ情也有レ情。獻レ媚何曾分二冷熱一。家々門巷逐二春聲一。（秋村）
●長安一片月。萬戸擣レ衣聲。秋風吹不レ盡。總是玉關情。何日平二胡虜一。良人罷二遠征一。（李白）
●酷憐風月爲二多情一。還到二春時一別恨生。倚レ柱思レ思偏惱恨。一場春夢不二分明一。（張謂）

あきびゝ。あきなふ。あきもの。市人。市にたつ民。ものうること。たびあきびと。うりかひ。人あきびと。

●近代泉州に唐かねやとて金銀に有徳なる人出來ぬ。世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて三千七百石つみても足かろく、北國の海を自在に乘りて難波の入湊に、八木の商賣をして次第に家榮えけるは、諸事につきて其身調義のよきゆゑぞかし。總じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商もある事なり。その米は藏々にやまをかさね、夕の嵐朝の雨日和を見合、雲の立所をかんがへ、夜のうちの思ひ入にて賣人あり買人あり、一分二分をあらそひ、人の山をなし、互に面を見知たる人には、千石萬石の米をも賣買せしに、兩人手打ちて後は少しも是の相違なかりき。世上に金銀の取りやりには預かり手形に請判、證に何時なりとも御川次第と相定めし事さへ、其約束をのばし出入になる事なりしに、空さだめなき雲を印の契約なたがへず、其日切に損徳をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大現中にして、それ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景　數千軒の間丸、甍をならべ、白土壁の曙なうばふ、杉ばえの俵物山もさながら動きて、人馬に付けおくれば大道轟き地雷のごとし、上荷茶船かゞりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先をあらそひ、若ひしの勢虎臥竹の林と見え、大幟雲を飜し、十露盤腹をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひゞきまさつて、其家の風曝簾吹きかへしぬ。

●屋鳴には浦吹く風も烈しく、磯うち波も高かりければ、兵攻め來らず。商客の行き通ひも稀にして、都のつても聞かまほしく、空掻きくもり、霰うち散り、いとど沿え入る心地ぞせられける。（平家物語）

●粟田口松坂や、四の宮河原逢坂の、關路の駒の跡にたちて、いつしか商人の、主度となるぞ悲しき。（謠曲、烏帽子折）

●武具は勿論公家武家の、冠烏帽子下女小者が襪沓まで、買調へて賣るが商人。それ不思議とて御詮議あらば、日本に人種はあるまい。一寸だめしも三寸繩も、商賣故に取らるゝ命、惜しいと思はぬさあ殺せ。（淨瑠璃、忠臣藏）

●うら山しその家々にうる道のかひある名にもたつの市人。（重治）

●とはまほしやまとことのはさまん〳〵もうる道いがに三輪の市人。（爲廣）

●空にたつちりとやかるの市人のおもきからに身をもかふらん。（實隆）

●わたらひの心ぼそさもしられけり糸うる賤の絕えずくるには。（筑波子）

●しろしらぬ人は立田の市なれば誰をわきてか又もたのめん。（愚總）

●よもの國辭なる世を市人のさわぐにつけて思ひしるかな。（常縁）

●さわぎたち何をうるとや知るしらずともなひつるゝ里の市人。（定縁）

●くちね名をたつの市人ゆきかへりふみ見しあとも夢れてしがな。（師兼）

●十錢を得て芹賣の歸りけり。（小春）

●商人を吼ゆる犬あり桃の花。（蕪村）

●たれが子ぞ商初に若菜賣。（門慧）

●京綿の頭巾で來たり蕎賣。（曉臺）

●商人や干鰯かけたる鹿の角。（同　）

●夏野ゆく村商人や單衣。（召波）

●親も子も酒き心や蓮賣。（耳角）

●相生の松虫なれやあき人の聲の高砂聲のすみよし。（高丸）

●ちとばかりえんはあれども片ひざしうきとこ店の夜も寢られず。（眞顏）

●商人も遊女は買ふなたとへまた賣ても床のねかしものなる。（園子）

●はきものゝきりかれんとも下駄日ともいふ魚賣ははだしなりけり。（豆人）

●根櫃日毎にひさぐあき人は花に旅ねの心なるらん。（千代丸）

●初瀨相模女と一つ園はしるも尻の早き商人。（一友）

●町々は居ながらにして商人のかけはを引きてかふあやめ草。（木公亭）

●元ねにもならのものとてしぶ〳〵に手をうちは賣りかせぐ商ひ。

●商人の店は現金世界にて誰もはらうて行く袖の雪。

●初咲の梅は杯か市人の二りん三りん爭うて見る。（同　）

●二歩出たは紙屑買ひの親の代。（川柳）

●小間物屋箱と一緒に年が寄り。（同　）

●鼠の迷ひさと取かへる鰯や。（同　）

●奥服屋で色の黑いは背負て出る。（同　）

●膳だてをするが椀屋のまけじたく。（同　）

●油賣これになさいとかいで出し。（同　）

●へつらはぬ商人の來る淀の船。（同　）

●羽織着て車を押すは荷主なり。（同　）

●手桶賣値が出來首をやツとぬき。（同　）

●又上げる爲めとは輿屋出そこなひ。（同　）

●吾は都のものなるが、人商人にいざなはれ、吾妻に下る玉鉾の、さもあらけなき武士が、あやめ〳〵と打つ杖に、あゝ父母のこひしやと泣くより外の事ぞなき。（俗謠）

●にしきおるてふ機ものも夜さむいとはにし波島のきぬ、染めて着暖のいろわかぬ、同じながめと白妙や、雪はひとしほきぬ〳〵の、なさけ商なふにぎはひに、すがた言葉はいやしくも、心ばかりは皆やさしかれ。（同　）

●商賣供敵。（俚諺）

●商賣は原價にあり。（同　）

●馴れぬ米商より馴れた糠商。（同　）

●買客無定遊。所遊惟利井。（俗雜言）

苦乘時取重輕。心計析秋毫。揉鉤倂懸衡。錐刀既無棄。轉化日已勞。徼福禱波神。施財遊化域。要約雕金劒。女垂貿珠纓。高資比封君。奇貨通倖卿。趨時鷙鳥思。藏器盤龍形。大艑浮通川。高樓次旗亭。行止皆有樂。園染自無征。農夫何爲者。辛苦事耒耜。（劉禹錫）

●金陵西賈客多。船中生長樂風波。欲發移船近江口。船頭祭神各澆酒。停杯共說遠行期。入蜀經年別離。金多衆中爲上客。夜々算緡眠獨遲。秋江初月照々語。孤帆夜發瀟湘濟。水工持楫過暗灘。直過山邊及前浦。年々運利西復東。姓名不在三牒籍中。農夫稅多長辛苦。

裏ノ菜長爲二阪寶一翁。（張籍）
江城雨霽百花休。正是清和四月頭。殘尾拖來聲慢々。行商叫賣碧紗厨。（星巌）

【しやうび】薔薇

牛棘。刺紅。紅薔。翠條。芳姿。長條。妖艶。柔葉。清香。淡香。籠レ烟。帶レ雨。

ばら。うばら。いばら。芽ぐむ。棘あるみき。はしの下のさうび。からたちのうばら。

●御前近き前栽、くれ竹、した風涼しかるべく、木だかき森のやうなる木ども、木深く面白く、山里めきて、卯花垣根、ことさらにしわたして、昔むばゆ、花たちばな、撫子薔薇くだになどやうの花のくさ〴〵をうゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。（紫式部）

●舟岡の子の日の松もいつしかと、君にひかれて萬代を經んと思ひて、ときはかきはの緑の色深くみえ、もたひのほとりの竹葉も、末の世遥にみえ、はしのもとの薔薇も、夏を待がほになどして、さま〴〵めでたきに、朝拜よりはじめて萬にをかしきに、宮の御方の女房のなりども、常だにあるに、まいて物あざやかに、かをり深きもことわりと見えたり。（榮華物語）

●花ごゝろなく日數へて、夏は來にけり香久山の、山にはあらぬ水際の松に、衣乾しつゝひとりわび、痛につかへぬいたづきの、重き枕も許さねば、この儘にして玉緒の、絶えよと思へど生憎に、絶えもしらで、時しり顔にうばら花ざきにけり。（馬琴）

●固より川の向には、さ露時なく立ちこめて、水音おどろ〳〵しく、其處とも見たゞこなたなる、岸の茨に花はさけども、針のみのけいよたつのみなし。（同）

●築のほとりの竹葉は、巻を得て熟すると、階のもとの薔薇は、また夏に入って開くとか。（諸曲、風草）

●からたちのうばらかりぞけくらたてんくそとほくまれくしつくる刀自。（萬葉）

●なつかしくてにはならねど山殿の垣根のうばら花ざきにけり。（好忠）

●いばらさへ花の盛はやはらびて折る手ざはりもなき姿かな。（言道）

●鬼の子は鬼なりけりな今年生の茨もいばらありと見ゆるは。（同）

●荊の花猶さらしや旅ごろも。（風雪）

●むつかしき中にも香あり荊の花。（同）

●荊さく心も老となりけるか。（野坡）

●あの子よい子だあの子と添ふなら、三年三月も裸で　薔薇も脊負ひましよ水も汲みましよ。（俗謡）

●托レ賀依二高架一。攅レ花對二小堂一。晩開春去後。獨秀院中央。剪碧排二千葉一。研朱染二萬房一。煙條逸二石綠一。粉蕊撲二雄黄一。根動形雲湧。枝搖赤羽翔。九微燈炫轉。七寶帳熒煌。淑氣蒸行徑。清陰接二歩廊一。照レ梁迷二藻税一。耀レ壁變二雕牆一。裊者遲然久。殷二於葉得一嬌。合羅排二細撮一。醉眼淺深粧。乍見疑レ廻面。遥看誤斷レ腸。畫屏風自展。綉幟蓋誰張。翠錦挑成レ字。丹砂印著レ行。猩々凝二血點一。悉悉燈二金蕊一。散亂委二紅片一。尖纖破二紫芒一。觸レ衿飄二香袖一。留レ岐冒二羅裳一。（白居易）

●菅レ戸種二薇蕨一。枝葉大歲變。不レ搖香已亂。無二風花自飛一。春閨不レ能レ靜。閑レ庭理二明妃一。曲池浮采々。斜岸列依々。或聞二好音度一。時見二街レ泥歸一。且對二清酤進一。其餘任二是非一。（劉禹錫）

●過レ譽含レ風垂レ樹開。呼レ童淨掃架邊苔。湘紅染就高張起。蜀錦機成新剪裁。公子但貪桃夾道。貴人自愛葉翻堦。寧知野老矛茨下。亦有二繁英遂二一杯一。（楊萬里）

●四面垂條密。浮陰入レ夏清。絲擢傷レ手刺。紅頗斷レ腸英。粉著蜂黏翅。光凝蝶翅明。雨中君亦好。況復值二初晴一。（朱熹）

●日遲風暖燕飛飛。古柳高槐面面垂。薇。接二上疎籬一無二一事一。滿池春水照二薇一。（吳激）

●綠樹陰濃夏日長。樓臺倒レ影入二池塘一。水晶簾動微風起。一架薔薇滿院香。（高駢）

●錦被爲レ堆燻爛光。回レ首空憶水西莊。長從二花裏一尋二師去一。紅霞醉レ衣三日香。（竹外）

●薔薇一架滿院香。

●薔薇殿二衆芳一。清レ美飄二緋衲一。（小山）

●滿架薔薇一院香。（高駢）

【じゆつくわい】述懐

心折。骨驚。惆悵。飄零。愁客。歸興。往事。流年。感レ時。攬レ鏡。聞レ砧。しづむ身。世のねがひ。住みわぶ。世をいとふ。おもひで。やすげなき身。あれはある世。あるかひもなき。をしからぬ世。うきはならひ。思ひつきせぬ身をうき草。

●かくかたく〳〵につけて、一ふしのおもひ出、取るべき事なくて、すぐしはべりぬる人の、殊にゆくすゑの頼もなきこそ、慰め思ふ方だに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに、思ひ侍らじ。その心なほ失せぬるや、物おもひ増る秋の夜も、端にいでぬ月やいにしへをめでつゝながめば、いとゞ月やいにしへをめでつゝながめば、いとゞ催すやうに侍るんと見えたるありさまを、必わたり侍りなんと憚られて、すこしおくにひき入りてぞ、さすがに心のうちにべし。世の人の思むといひ侍るとがを、は、つきせずおもひつゞけられて侍る。風の涼しき夕くれ、きゝよからぬ獨琴をかきならしては、歎加はるときゝ知る人やあらんと、ゆゝしくなど覚え侍るこそをこにもあはれにも侍りけれ。さるはあやしう黒みすゝけたる晋司にさうの琴、和琴、しらべながら、心につれて、雨ふる日、琴柱たふせなどもいひ侍らぬまゝに、塵つもりて、よせたりし厨子と柱のはざまに、くびさし入れつゝ、琵琶も左右にたて侍り。大きなる厨子一よろひに、ひまもなくつみて侍るもの、一にはふる歌物語の、えもいはず虫の巣に成りたる、むつかしくはひちれば、あけて見る人も侍らず。片つ方に書ども、わざとおきかさねし人も、侍らずなりにし後、手觸るゝ人もことになし。それらを、つれ〴〵せめてあまりぬる時、一つ二つ引き出でゝ見侍るを、女房あつまりて、お前はかくおはすれば、御さいはひは少きなり。なでふ女がまんなぶみはよむ。昔は經讀むなだに人は制しきと、しりうごちいふを聞侍るにも、物いみける人の行末、命長かるめるよしとも見えぬためしなりと、いはまほしく侍れど、思ひぐまなきやうなり。（中務）ことはたさもあり。萬の事、人によりて、ことゞ〳〵なり。ほこりがにきら〳〵しく、心よげに見ゆる人あり。萬つれ〴〵なる人の、まぎるゝ事なきまゝに、古

き反古ひきさがし、おこなひがちに日ひぐらかし、數珠の音高きなど、いと心つきなく見ゆるわざなりと、思ひ給へて、心にまかせつべき事をさへ、我つかふ人の、めにはゞかり、心につゝむ。まして人の中にまじりては、いはまほしき事も侍れど、いでやと思ほえ、心うまじき人には、いひて益なかるべし。物もどきうちし、我はとおもへる人の前にては、うるさければ物いふ事もものうく侍る。ことに、いとしも、物のかた〳〵えたる人はかたし。たゞ我心のたてつるすぢをとらへて、人をはなきになすめり。それ心より外の我面影をはづと見れど、えさらず、さしむかひ、まじりゐたることだにあり。しかん〳〵さへもどかれしかなと、はづかしきにはあらねど、むづかしと思ひて、ほけられたる人に、いとゞなりはて〳〵侍れば、かうはおしはからざりき。

（紫式部）

●昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過きにすぎゆく世の中を、つく〴〵と思へば哀わが世も幾程ぞや。手を折りて數ふればはや三十にもあまりけり。命見くて七十八十生けらんにてだに、早く半すぎぬる世と思へば、まだ世籠れるやうなる身も、行先ほどなき心地のして、心細くぞ覺ゆる。かくのみはかなく心なき草木鳥獸の同じ列に、何すとしもなく明し暮しつゝ生ける限の世なつくして徒に苦の下に朽果てなんは、いと口惜しくいふかひなかるべきことゝ思ふにも、萬にいたり少く、拙なき身にしあれば、何事をし出でゝかは、世の人にも數まへられ、なからん後の世に、朽ちせぬ名をだに止めましと、いとゞ人に似ぬ愚さゝへ取添へてぞ、悲しく心うかりける。さりとはた、身をえうなきものにはふらかし果つべきにもあらず。かくのみ拙なく愚なる心ながら、何業にまれ、怠なくわざと心に入れて勤めたらんには、遂には一つゆゑづけて、なのめにし出づるふしも、などかはなからんと、あいなだのみにかゝりてなし、身のならはしこそはかなけれ。上に在つては下を憐まゝ、富んでは驕りを知らざるなり。然るに平家、世を取つて二十餘年、誠に一昔の、過ぐるは夢の中なれや。諺永の秋の葉の、四方の嵐に誘はれ、散々になる一葉の、舟に浮き波に伏して、夢にだにも歸らず。籠鳥の雲を戀ひ、歸雁つらを亂るなる、室定めなき旅衣、日も重なりて年月の、立ち歸る春の頃、此一の谷に籠りて、しばしはこゝに須磨の浦、うしろの山風吹き落ちて、野もさだまる歸る海ぎはに、舟の夜となく暮となき、千鳥の聲も我袖も、波にしをるゝ磯枕、海士の苫屋に共寢して、須磨人にのみ馴染の、立つるや夕煙、柴と云ふもの折り敷きて、思ひな須磨の山里の、かゝる所に住居して、須磨人になりはつる、一門の果ぞかなしき。

（謠曲、敦盛）

●げにや現在の果を見て、過去未來を知ると云ふ事、今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十日の今日の難を、のがれつるこそ不思議なれ。唯さながらに十人餘、悲の覺めたる心地して、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる有樣かな。然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の波に沈め、山野海岸に、起き臥し明す武士の、鎧の袖挾、かたしく隙も波の上、ある時は舟に浮び、風波に身を任せ、ある時は山岸の、馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨の石の、とかく三年の程もなく、敵を亡し靡く世の、其忠勤も徒に、なりはつる此身の、そも何といへる因果ぞや。實にや思ふ事、叶はねばこそ浮世なれと、知れどもすがなほ、思ひ返せば悼ましの。すぐなる人は苦しみて、讒臣は彌増に世にありて、遠遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしのうき世や。

（謠曲、安宅）

●今頃は半七さん、どこにどうしてござらうぞ。今更返へらぬことながら、わしといふものないならば、半兵衛様もお通にめんじ手迄なしたる三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七さんの身持も直り、御勘當も有るまいに、思へば〳〵この國が、去年の秋のわづらひに、いつゞ死んで仕まうたら、斯うした難義は出來まいもの、お氣に入らぬと知りながら、未練なわたしの輪廻故、添臥はかなはずとも、お側に居たいと辛抱して、是迄居たのがお身の仇、今の思にくらぶれば、一年前にこの國が、死ぬる心がつかなんだ。こらへてたべ半七さん、わしやこのやうに思うて居ると、恨みつらみは露ほども、夫を思ふ眞實心、猶彌増る憂き思ひ。

（淨瑠璃、艷容女舞衣）

●昨日しや淺ましや、過ぎつる辭永二年、源平兩度の戰、平家の大敵を切り靡けり、孤篠原兩度の戰、平家の大敵を切り靡けり、遠遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ、高名埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしのうき世や。

（淨瑠璃、盛衰記）

●をのこやもむなしかるべき萬代に語りつぐべき名はたゞすして。

（憶良）

●いつかわがみ山の里のさびしきにあるじとなりて人にとはれん。

（慈圓）

●いつかわが昔の袂に露おきてしらぬ山ぢの月を見るべき。

（家隆）

●なしむ共惜まれぬべき此よかは身をすてゝこそ身をばたすけめ。

（西行）

●かばかりと恨みすてつるうき身ほどうまれんことの猶かたき哉。

（定家）

●おもふことなくてふる身を人とはゞかたらひ草は何をつまゝし。

（枝直）

●おもふともあらばうれしき身ならましありのすさみはあるよながらに。

（貳淵）

●うれしきはともにと人もいふめれどうきをなげくは身一つにして。

（たみ子）

●ともすればとはずがたりぞせられける心ひとしき人しなければ。

（春海）

●かく斗うき身のほどもわすられておもふことならぬ世をうらむ哉。

（土滿）

●泣てよむ短册もあり花の夢。

（其角）

●影ゝ笛縫ゝ簑花に晴せん浮世かな。

（同　）

●花鳥にさとればもとの白髮かな。

（支考）

●翁已後旅人なしや月と花。

（野坡）

●花に埋もれて夢より直に死なん哉。

（越人）

●行秋のさゝ〳〵人をなかせたり。（同　〵）
●来る秋を好きけるものを袖の露。（北枝）
●死なぬ身に幾度さゆる袖の玉。（同　〵）
●朝夕にかたらふものを袖の露。（去来）
●鬼灯のさすればつぶす歟かな。（風雪）
●物いへば唇さむし秋の風。（黄葉）
●四へちろり東へちろり暁の明星やたゞ我身なるらん。（蕉庵）
●くる年も又くる年もわくせきかせげどもいとならぬ口すぎ。（貞宮）
●世のちゝ父のすねこそこひしけれ獨でくらふ事のならねば。（光　〵）
●雲霧がむさい事ならいつとてもあとからうしが来ると思へや。（鶏山）
●世の中の人には時の狂歌師とよばるゝ名こそなかしかりけれ。（赤良）
●こゝに一夜かしこに一夜さゝ鳴きの身はうぐひすと飛びありくなる。（はね炭）
●なみならぬ川事もたんとよせくれば釣にゆくまもあらいそがしや。（元成）
●前の世に無間の蛭もくはぬ身の此世はかねにせめられにけり。（暮輔）
●かゝる時何とせんりのこま物屋伯樂もなしにづかひもなし。（越人）
●から猫のみすぢの糸につながれて何の因果にばちあたる身ぞ。（きねや仙女）
●面影のかはらで酒のつのれかし終には下戸の赤くなるとも。（去来）
●顔による涙の音かは耳もなり筒もこゆるぎのいそぢすぐれば。（蕉角）
●月かげにうつる姿の、エ、にくらしい臘抱に明月而長終、知レ不レ可二乎躁得一、託二遺響於悲風一。蘇子曰、客亦知二夫水與レ月乎。逝者如レ斯。而未二嘗往一也。盈虚者如レ彼、而卒莫二消長一也。蓋將自二其變者一而觀レ之、則天地曾不レ能二以一瞬一。自二其不レ變者一而觀レ之、則物與二我皆無一レ盡也。而又何羨乎。（東坡）
●三決レ死突而不レ死。二十五回渡二刀水一。五乞二閻地一不レ得レ閑。三十九年七處徙。邦家隆替非二偶然一。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈二皮膚一。猶餘二忠義一填二骨髄一。縹緲定遠不レ可レ期。丘明馬還空自企。荷明二大義一正二人心一。皇道奚患不二興起一。斯心奮發誓二神明一。古人云斃而後已。（東湖）
●雙蛺浪蒼哀可レ憐。空餘二傲骨一被稜々。（星巌）
●學稽二經世一終虚喝。詩未レ名家且謾吟。滿眼英雄千古血。一天風雨五更燈。手披二殘卷一窮床冷。欲レ借二山僧蒲柳琵一。（星巌）
●生者爲二過客一。死者爲二歸人一。天地一逆旅。同悲萬古塵。月兎空擣レ藥。扶桑以一レ薪。白骨寂無レ言。青松豈知レ春。前後更歎息。浮榮何足レ珍。（李白）
●表海勦潜多千林。讌賀二馬骨一值二千金一爲

経鋤絜白青髪、滿眼英雄誰子矜。庶幾學レ分登二殘肉一。弓招難レ棄首邱心。候生僅塞君休レ怪。欲レ報二信陵知遇深一。（山陽）
●消息寂寥三月餘。便風吹若一封書。四門樹被二人移去一。北地園教二客寄居一。紙裏生薑掛二藥種一。竹籠比布記二齋儲一。不レ言二妻子飢寒苦一。爲是還慙懶懐余。（道眞）
●行二過天涯一等二聖蓬一。作詩博得一生窮。可レ憐老境窮々甚。常在二荒山破驛中一。（陸游）

〔しよ〕書

黄巻。簡帙。四庫。五車。儲書。抄書。琴書。萬巻。詩書。經史。汗牛充棟。
ふみ。ふみのちり。からぶみ。とりのあと。まき〳〵。ことのは。むかしぶみ。ふみの道。玉の緒ある。しみのすみか。内外のふみ。御法のふみ。
●いにしへの才ある人、書讀むときは考あり。考あれば撰びあつめて、兒孫後世に貽すもの、慈善の心なしといはんや。しかれども覧ること博からざれば、その考は久しからず。慈善のこゝろなしといはんや。いと羨しく思ふのみ。企及びがたきを知れり。しりつゝ丸木の橋の霜、ふみつくる人といはれてし、冬の朝日のがけよりも、はかなき世わたりをいかゞはせん。あだなる名のみ、立つこと早きわが年浪も、小動のいそぢを一つ過ぎがてに、大かたならず翁さびて、氣力もいたく衰へたり。こは年來おもはずに、えうなきふみを綴るとて、發生おろかなりけん、くやしく思へば今玆より、硯に對ふ日は稀にて、宵ねがちなるねざめ〳〵に、ひとりつく〳〵と思ふやう、わが壯なりけるときは、記憶ありと人にもいはれ、自身もさ思ひしものが、この三年四歳が程より、閑せし書のうへなども、あちこちとなく忘れにけり。かくても猶幸に、六七十に至りなば、無下に老いさらぼひて、活る甲斐なき物にやあらん。人なみ〳〵の事はえせず、益なき筆のすさみなりとも、書よむ事を好めるかひに、考へたりける條々を、とにもかくにも綴りなして、心ある人に見すべきか。よしやそこまでならずとも、さきにわが著せし燕石雜誌東雅の記に考へて、もと兒孫後世に貽せるもの耻かしからず。慈善のこゝろなしといはんや。いと羨しく思ふのみ。企及びがたきを知れり。しりつゝ丸木の橋の霜、ふみつくる人といはれてし、冬の朝日のがけよりも、はかなき世わたりをいかゞはせん。あだなる名のみ、立つこと早きわが年浪も、小動のいそぢを一つ過ぎがてに、大かたならず翁さびて、氣力もいたく衰へたり。こは年來おもはずに、えうなきふみを綴るとて、發生おろかなりけん、くやしく思へば今玆より、硯に對ふ日は稀にて、宵ねがちなるねざめ〳〵に、ひとりつく〳〵と思ふやう、わが壯なりけるときは、記憶ありと人にもいはれ、自身もさ思ひしものが、この三年四歳が程より、閑せし書のうへなども、あちこちとなく忘れにけり。かくても猶幸に、六七十に至りなば、無下に老いさらぼひて、活る甲斐なき物にやあらん。人なみ〳〵の事はえせず、益なき筆のすさみなりとも、書よむ事を好めるかひに、考へたりける條々を、とにもかくにも綴りなして、心ある人に見すべきか。よしやそこまでならずとも、さきにわが著せし燕石雜誌東雅の記

は、書肆等にいそがされて、そが利の爲にせしものなれば、こゝにあらぬことさへに、いたく誤をかされたり。せめてその失を補はん料までに、又さる書を編まばやとて、よにこりづまの硯の海に、珠を捄れる蜑とはなりつ。しかはあれど　藏書に乏し。老いてはよろづ懶くて、立ちまじらふがうるさゝに、友垣結ぶことのなければ、他の書をば借るによしなし。されば筆とりそめにし日より、しか〳〵の事は、かの書にあらん、この書にこそと思ひつゝ、そのふみどもの得がたきは、引きもらせるなん多かりける。昔、諸大家の隨筆は、おのづからなる隨筆なれば、誰とすべき文人とも、飽までに引くことなし。後々の隨筆は、おのづからなる隨筆ならねば、一事なとくに數十部なる、書を引けども飽げりとせず。學問は博きをいとはず、窮理至極したらんには、そも亦得がたきわざなれども、管もてみるも天は天なり。わが引く外に引くべき書はあらじと思ふも外目には、なほもらしつと見るらあるべし。われさるまろが人きねに、老の學の松なたのみて、よに限なき書を涉獵らば、この書全なる時あらじ。日はくれなんとして道遠かり。只見しまゝに、思ふまゝに、かきあつめつる言葉の露と、筆と落ちて後竟に、ふみまき川のすゑにも入らず、淺くもむすぶかひはあらん。かうはかりつゝあみもてゆけば、なかなかに後やすかり。これ將よしとするには　已むことを得ざるのみ。おのが僻事いへばさらなり、儒書、彫工にあやまられて、脫もあらん、衍もあらん、そは閲する人正しねかし。

（馬琴）

●ひとり灯のもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなるまき〳〵、白氏文集、老子のことば、南華の篇、此國の博士どものかける物も、いにしへのは、あはれなることおほかり。

（源好）

●我右山に籠り、源氏六十帖を書き記し、亡き跡までの筆のすさび、名の形見とはなりたれども。

（諺曲、源氏供養）

❷庭上には文者の譽名に高き、北畠の玄惠法師、述作の魁本うづ高く詩繪の案に積み、上覽に供へ扣へらる。侍從之助御前に向ひ、先達て仰付られし書籍出來に付、持參致させ候と言上あれば、義詮御機嫌うるはしく、此程内見相遂げしが、文法と云ひ作意といひ、あつばれ〳〵。當今の臨德いみじく、南方はあつて無きが如く、かゝるめで度御代を祝し、則外題を太平記と名づけ、末世の鑑となすべきと、仰に列坐の大名小名、玄惠もはつとぞ感じ入る。

（浮瑠璃、菊水の卷）

❷はゝそ山峰の嵐の風をいたみふることのはをかきぞあつむる。

（貫之）

❷情みせてのこせる文の玉のこゑ主をとゞむる物にぞありける。

（伏見院）

❷するすみの色し見えずば水ぐきの流れての世のあとをとゞめ〻や。

（同）

❸誰か世にながらへてみん書きとめし跡は消えせぬかたみなれども。

（紫式部）

●一卷にちゝのこがねをこめたれば人こそなけれ空はのこれり。

（惠慶）

●かしこきやならの都の富人とかたらふものはふみにざりける。

（于薩）

●ふみ見ても神ぞ𣏌れけるふりし世に心をよせし友としのべば。

（同）

●わけ入りてとふもかたるも靜けしなやまとのふみの深きをしへに。

（春滿）

●くだちゆく此世のさがもしらざらん書見て遠きあとをとはずば。

（春海）

❸引くうしのおせあゆるまでつみそへてふりぬるふみの收ぞしられぬ。

（同）

●見わたせば下つ手さとのくまもなし古ぬる書や高讀なるらん。

（胤淸）

❸紅梅は文選よみの色香哉。

（越人）

❸紅梅の色あぐる御世の論語かな。

（同）

●損料の史記も師走の靈かな。

（其角）

●待つ春や机に摘ふ書の小口。

（浪化）

●書を干して龍と添臥の鼾哉。

（沾德）

●菜の花や書もく〻喋る鴛の中。

（來始）

●文好む水を右にしてやり梅を左にかざす御代ぞ賢き。

（赤貝）

●かきつばた昔の伊勢の物語今はめでたく開く三河記。

（同）

●よみやすき文かも雁のかへり點句をきり星の見ゆる晩。

（光）

●春の日のまだ暮れやらぬ節用や永字八方かけあるけども。

（的丸）

●腐げたる文に見とれて半日はおのれの腹しほす土用干。

（道頓）

●窓の外に雪をあつめて文見つく心の扇の道をこそしれ。

（孫彦）

❷よめねへ木が出やしたと左官いひ。

（川柳）

❷石山で出來た書物のやはらかき。

（同）

❷うたゝ寢の顏へ一册屋根にふき。

（同）

●もろ〳〵の書を見ひらいて蚊に入。

（同）

●京傳と左傳の並ぶ古本屋。

（同）

●書毎に信ずれば書なきに若かず。

（俚諺）

●論語讀みの論語知らず。

（同）

❷書之爲書也、上蔑倭賞、爲ㇾ師爲ㇾ友、會二于萬人之聖賢於一室、盡二千萬世之言行於一時而盡二千萬世一也耶。是亦甚難矣。嗚呼非ㇾ玩ㇾ物非ㇾ喪ㇾ志。然後以二己所ㇾ有二其不ㇾ沒者一存矣。此書在ㇾ茲、

（惺窩）

❷石山で出來た書物のやはらかき。

（同）

❷うたゝ寢の顏へ一册屋根にふき。

（同）

●もろ〳〵の書を見ひらいて蚊に入。

（同）

●京傳と左傳の並ぶ古本屋。

（同）

●書毎に信ずれば書なきに若かず。

（俚諺）

●論語讀みの論語知らず。

（同）

❷書之爲書也、上蔑倭賞、爲ㇾ師爲ㇾ友、會二于萬人之聖賢於一室、盡二千萬世之言行於一時而盡二千萬世一也耶。是亦甚難矣。嗚呼非ㇾ玩ㇾ物非ㇾ喪ㇾ志。然後以二己所ㇾ有二其不ㇾ沒者一存矣。此書在ㇾ茲、

（惺窩）

●盛つ春や机に摘ふ書の小口。

（浪化）

●書を干して龍と添臥の鼾哉。

（沾德）

●菜の花や書もく〻喋る鴛の中。

（來始）

●文好む水を右にしてやり梅を左にかざす御代ぞ賢き。

（赤貝）

●かきつばた昔の伊勢の物語今はめでたく開く三河記。

（同）

●よみやすき文かも雁のかへり點句をきり星の見ゆる晩。

（光）

●春の日のまだ暮れやらぬ節用や永字八方かけあるけども。

（的丸）

●腐げたる文に見とれて半日はおのれの腹しほす土用干。

（道頓）

●窓の外に雪をあつめて文見つく心の扇の道をこそしれ。

（孫彦）

❷よめねへ木が出やしたと左官いひ。

（川柳）

❷引くうしのおせあゆるまでつみそへてふりぬるふみの收ぞしられぬ。

（同）

●見わたせば下つ手さとのくまもなし古ぬる書や高讀なるらん。

（胤淸）

❸紅梅は文選よみの色香哉。

（越人）

❸紅梅の色あぐる御世の論語かな。

（同）

●損料の史記も師走の靈かな。

（其角）

●待つ春や机に摘ふ書の小口。

（浪化）

●書を干して龍と添臥の鼾哉。

（沾德）

●菜の花や書もく〻喋る鴛の中。

（來始）

●文好む水を右にしてやり梅を左にかざす御代ぞ賢き。

（赤貝）

●かきつばた昔の伊勢の物語今はめでたく開く三河記。

（同）

●よみやすき文かも雁のかへり點句をきり星の見ゆる晩。

（光）

●春の日のまだ暮れやらぬ節用や永字八方かけあるけども。

（的丸）

●腐げたる文に見とれて半日はおのれの腹しほす土用干。

（道頓）

●窓の外に雪をあつめて文見つく心の扇の道をこそしれ。

（孫彦）

❷よめねへ木が出やしたと左官いひ。

ㇾ察、取ㇾ之而不ㇾ竭、髮不ㇾ育之所ㇾ得、各因二其才一、仁智之所ㇾ見、各隨二其分一、才分不ㇾ同、而求無二不ㇾ獲者一、惟書乎。

（東坡）

❷有ㇾ迹、崇二臣文一、無爲拜二老君一。春秋三十卷。道德五千言。口誦窺二衝後一。心軌到二夜分一。二經充二晩學一。那問窓丘墳。

（道眞）

●不ㇾ必傾ㇾ筐珠二白魚一、曝來萬卷果何如。除二非經史數篇一外。多是人間無用書。

（秋村）

❷日日抄ㇾ書幗ㇾ出ㇾ門。小窓弄ㇾ筆到二黃昏一。丁頭婢子忙勻ㇾ粉。不ㇾ管先生硯水渾。

（劉克莊）

❷千卷藏書忘二歲月一、一尊燭酒信二乾坤一。

（放翁）

●門無二客到一惟風月。案有二書存一但老莊。

（同）

●一生勤苦書千卷。萬事消磨酒百分。

（余靖）

●讀ㇾ書貧裡樂。搜ㇾ句靜中忙。

（裴說）

●清ㇾ墨點二舊史一、磨ㇾ丹注二前經一。

（韓愈）

〔しろ〕城

西安。南武。粉堞。黃雲。金湯。鉄瓮。巨防。要津。九重。萬里。

長堅。巨濠。長城。凌雲。崇ㇾ墉。堅ㇾ壘。盤ㇾ水。連ㇾ山。圍ㇾ國。守ㇾ民。

おほき。きど。大手。からめて。岩がき。とりて。ほりめぐる。やぐら。國のしづめ。まもるとりで。あた守る。

●千餘騎城の寄手に、前の勢八十萬騎に、又赤坂の勢吉野の勢も加はりて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物相撲の場の如く打ち圍みて、尺寸の地をも餘さず充滿たり。旌旗の風に飜りて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、鎧の日に映じて耀けること、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく所には、山勢是がために動き、鬨の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。此勢にも恐れずして、讒に千人にたらぬ小勢にて、誰を憑み何をか待つともなきに、城中にこらへて防ぎ戰ひける倫が心の程こそ不敵なれ。此城東西は谷深く切れて、人の上るべきやうもなし。南北は金剛山につゞきて、しかも峰嵯ちたり。されども高さ二町ばかりにて、廻り一里に足らぬ小城なれば、何程の事かあるべきと、寄手是を見侮りて、初一兩日の程は向攻をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊まで、かつぎいれてぞ上りたりける。城中のもの少しもさわがず、靜まりかへりて、高櫓の上より大石を投げかけ〳〵、楯の松を微塵に打ち碎きて、漂ふ處をさしつめ〳〵射ける間、四方の坂より轉び落ち、落ち重りて手を負ひ、死をいたす者、一日が中に五六千人に及べり。

（太平記）

●さる程に、木曾義仲は自は信濃にありながら、越前國燧が城をぞかまへける。かの城郭にこもる勢、平泉寺の長吏濟明威儀師、稻津の新介、齋藤太、林の六郎光明、石黒、宮崎、土田、進部、入善、佐美を初めとして、六十餘騎こそこもりけれ。所本より屈竟の城郭、磐石そばだち廻りて、四方に峰を連ねたり。山を後にし、山を前にあつ。城郭の前には、能見川、新道川とて流れたり。彼二つの川の落合に、大石を重ね上げ、大木を伐りて逆木に引き、しがらみを繁しう插き上げたれば、東西の岩根に水せきかゝりて、湖に向へるが如し。影南山を浸し、青くして滾漾たり。波四日を洗めて、紅にして大瀾淪たり。かの無熱池の底には金銀の砂をしき、昆明池の渚には德政の船を泛べたり。我朝の燧が城のつき池は、堤をつき水を濁して、人の心をたぶらかす。船なくしては、容易く渡すべきやうなかりければ、平家の大勢向の山に宿して、徒に日數をぞ送りける。

（平家物語）

●さる程に、幕田葉藤は、三四百の賊徒をぬて、既に城の後門へ寄せ來りければ、妙棒は轎子よりやをら立ちいでゝ、葉藤にさゝやくやう、這城内には、昔より一箇の脫路ありといへども、今は人これを知らず。其里より入らば、便宜なれども、年來干鬼の石をもて、出口入口を塞ぎたれば、目今はせんすべあらず。惣ればこそ架橋を渡してはやく入らんのみ。いでゝ〳〵といひつゝも悼より一條の麻索をとり出して、城に向ひて擲ちければ、其索長く閃き亘りて、八九丈前面なる塀の上にかゝるとその儘、忽然として巧み成す雲の梯にぞなりにける。工妙谷般も及ざるべき手段に賤ざるものな

く、しばしなかめて左右なくは渡る者なかりしを、葉藤頭に進ちて既に渡の就きたるに、とく〳〵すゝめと下知すれば、はやりをの眤徒五七名、各劍を按みて、道渠梁を渡りゆくに、危な氣もなく見えしかば、みな〳〵ともにうちつゞきて、輙く渡り果る程に、妙椿は葉藤を先立たしつ、もろともに渡りて城にぞ入りにける。

（馬琴）

●さても平家は述前の、燧が城を責めおとし、都合其勢十萬餘騎、此砥進山まで押しよする。味方はわづか五萬餘騎、計略を以て防がんとて、白旗あまたとゝのへつゝ、黒坂の上におし立てゝ、敵の心を疑はしめ、山中に屯させ、夜に入り道手搦手より、一度にかゝり俱梨伽羅が、谷へ敵を落さんと、用意をなして義仲は、勢を七手に割ちつゝ、其身は特に精兵一萬餘騎を引したがへ、垣生に陣をぞ取りにける。

（謡曲、木賊）

●總じてこの城の、前は海後は山、左は須磨石は明石の、とよりかくより行きかふ舟の、共音の千鳥も聲々なり。

（謡曲、龍）

●北條が城原の案内は、某具に傳へ申さん。元來相州小田原の城、堀深うして塀高く、要害の名城なれど、猶さは落つ可らず。霞晴れたる時節を窺ひ、箱根山より見下せば、敵地の搆へよく知るべし。其時に謙信が家の軍法細作の、犬を入置き後より、勘助是にと切て出で、放火を相圖に甲斐越後、諸軍一度に矢先を揃へ、指詰め引詰め射るならば、さしも堅固の城なりとも、直に乘り取り、氏時が首を卷にさらさんは、道三が老後の思ひ出。

（淨瑠璃、甘四孝）

●それ齋藤龍興がたて籠つたる稻田山の城廓は、凡東國第一の名城、一夫是を守れば萬卒破り難き堅固の要害、此城を落すには、瑞龍山の峰傳ひ、西に聞ゆる瀧の音を、心の當途に谷へ下り、水に從ひ出る時は、からめ手の水門口、敵の油斷な爰一つ。

（淨瑠璃、日吉丸）

●大手口土手の並木の松風も、唯どう〳〵と響かせて、櫓にっゞくあふちの木、枝葉繁りて隆をなす、實にくわん〳〵たる城構へ。

（淨瑠璃、忠臣青砥刀）

●あはれ其大城のあとに鹿火たきて山田もるらんをならはだが子ぞ。

（諸平）

●岩くゝて破回の城門はあれにしを夜聲さむくもよする波哉。

（同）

●千代しむる御城の高垣高らかに松も根ざして苦むしにけり。

（同）

●鎌倉の大城のあとはあか駒のほらばふ田居となりにける哉。

（久胤）

●かたばかり殘る大城の岩垣にちしほをそゝぐ蔦紅葉哉。

（治堅）

●綿頂の城たのもしき若葉かな。

（蕪村）

●月見せん伏見の城の捨郭。

（去來）

●城外の鐘聞ゆらん紅葉山。

（支考）

●御城へは何に入やら女郎花。

（其角）

●たかとりの城の寒さや吉の山。

（同）

●栗の花の中に城あり郡山。

（同）

●城跡や古井の清水まづとはむ。

（芭蕉）

●月高く涼しき城の夜明けかな。

（淡々）

●城山に雉子出でけり小六月。

（山店）

●城跡に處をしめて葬將棊のかさぎも今はよせめ閑けさ

（稽丸）

●池の面に集り勢やうきぐさの根城も持たぬ盛合戰。

（長根）

●紅葉する比叡のお山は主城の守袋の錦なりけり。

（成元）

●この秋も負け色つきて木々の葉の落支度するこふの城跡。

（来人）

●田圃からむかふにあたる鬼が城。（川柳）
●楢は郎うき將のやうに城が見え。（同）
●にげあしに筵蓆の城を一首よみ。（同）
●まんろくに城をなして行国宗老。（同）
●ひよんこらこいの小風で馬喰町焼けろ、紅葉落葉松皆やけた、紅葉府松やけよともまゝよ、殿の御城は残すよに。（俗謡）
●伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ。（同）
●見たか見て来たか大阪の城は、前は淀川鯉がすむ。（同）
●川心に城亡びず。（俚言）
●余遊渓辨三、每過古城、未嘗不欲登以觀成敗之跡、而未能也。今茲又遊焉、則亦雨不果。豈古城之猶有所忌、而不欲人之窺其墟耶。當天正之際、熊谷氏虎踞此山、威名著一州、而能來侮敵者、武田光和也。余來時過武田氏古城下、見道傍祭大石、高如人長。問之則曰、光和所手投云。二將勇力相傚、地險相敵、勝負相持、而今皆亡矣。厚壁深塹、火樓重塞、所以備要害圖久安者、其不皆鞠爲煙爽、而樵牧徒而麋鹿棲矣。此因知亡常數、古人皆謂從日龍行、無足怪者也。然要之上下二百年之間而已矣。則安知二百年後不反覆相替如斯哉。（虎山）

●將軍將委師、西南突遁服。故壘猶江上。狩煙晦喬木。登臨直前長。周覽壯前躅。塹平陳葉滿。墉高秋蔓緣。廢井抽寒藥。毀牆生谷蕨。耕人得古器。宿雨多遺鏃。楚塞猶重疊。蠻溪分詰曲。留此數仞基。幾人生遠目。（劉禹錫）
●高城新築壓長川。虎踞龍盤氣色全。五里似雲根不動。一重如月弦長圓。河流暗與溝池合。山色遙將埤堄連。白有此來當汴口。武牢何用鎖風煙。（羅隱）
●絕塞依天險。雄關鎖地維。石橫千仞壁。松偃萬年枝。晝日無飛鳥。經秋臥老羆。槐花秋雨裏。重憶裕題詩。（王漁洋）
●行々古城頭。歷覽古城下。水鳥傍人煙。河流隔桑柘。秋山弊晴翠。野老親時稼。民訟今已稀。開窓聽官舍。（梅堯臣）
●江上荒城猿鳥悲。隔江便是屈原祠。一千五百年間事。只有灘聲似舊時。（陸游）
●古城秋後不勝荒。人跡新行一逕長。竹影已將半日。草根猶有夜來霜。（楊萬里）

●去年築城卒。霜壓城上骨。今年築城人。汗灑城下塵。大家擧杵莫住手。城高不用官軍守。（高啓）
●一雁過連營。繁霜覆古城。胡笳在何處。半夜起邊聲。（儲光羲）
●結廬古城下。時登古城上。古城非疇昔。今人自來往。（裴迪）

【しろ】白

白日。白刄。白草。白沙。白雲。白月。白衣。白雨。純白。半白。青白。紫白。雪白。淡白。潔白。明白。三白。飛白。

しろし。しろむ。しらぐ。しらむ。しらじらし。しらたま。しらなみ。しらひげ。しらまゆみ。しろたへ。

●この翁も、その頃大宮なる所にやどりて侍りしかば、御祭にこそ驚きて、いといみじう承りしかば、翁いで見奉りしかば、空はかすみわたりたるに、月はいみじうあかくて、御直衣のいと白き御指貫に、よいほどに御くゝりあげて、何色にか、いろあ

る御衣どもの、ゆたちより多くこぼれ出でゝ侍りし御容儀などよ、御顔の色月かげにはえて、いと白う見えさせ給ひしに、鬢茎のけちえんにめでたくこそおはしましゝか。やがて見つぎ／＼に御供に参りて、御額つかせ給ひしも見奉り侍りき。（爲業）
●いとてはなちにあらく／＼しげにて、苫といふものを一重うち葺きたれば、月のこりなくさし入りたるに、紅の衣うへにきて、うちなやみて臥したる、月影さやうの人にはこよなく透きて、いと白く清げにて、珍しと思ひて、かきなでつゝうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、急ぎ出て別るゝ心地いとあかずわりなし。（孝標女）
●風もふきあへずうつらふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、哀ときゝし言のはごとに忘れぬものから、我世の外になりゆくならひこそ、亡き人の別よりもまさりてかなしきものなれ。されば白き糸の染まんことを悲しび、道のちまたのわかれんことを歎く人もありけんかし。（兼好）
●片つ方は廣やかなる所の砂子、はろ／＼と白きに、松原しげりて、月のいみじうあかきに、風の音もいみじう心細し。

●雪の白きを白しとするは、鷺の白きを白しとするが如きか。鷺の白きを白しとするは、肌の白きを白しとするが如きか。雪は女の肌にして、女は雪の肌なり。怪きを見て怪まされば、怪みおのづから消ゆるとなん。（蜀山人）
●柳が浦の秋風の、追手がほなる跡の波、白鷺のむれ居る松見れば、源氏の旗をなびかす多勢かと、肝を消す。（謡曲、清經）
●さる程に、夜神樂の時移り事去つて、宜禰の鼓も數至りて、月も霜も白和幣、振り上げて聲澄むや。（謡曲、龍田）
●みゑや姿も残りの雪の、髪鬚白き老武者なれども、その出立は花やかなる、粧ことに曇りなき、月の光ともし火の影。（謡曲、實盛）
●歳は文治に改まり霜月初つかた、大内山も白妙や初雪の見参とて、百宮百司の沓の端、隱るゝ程に降積れば、所の衆瀧口など、雪を重ねて雪の山、色々の鳥獸、兎毛色の白鶴は、誰が細工とも白斑の鷹、唐犬唐猫迄、御巧の隙減る御談、御庭が衛士の篝火も、曉方白く焚きすさび、興ある雪の御遊なり。（淨瑠璃、鎌倉三代記）

●ぬば玉のやみもけたれし雪の色をかさねてみがく有明の月。（盧庵）
●みなかみは雲ゐる山の雫にて岩がねゆする瀧の白波。（千蔭）
●たび衣かさねて山もうとしとやおほふばかりの峰の白くも。（契沖）
●おもふことわれも石もてかぞへ見んくろきが白くなりやまさると。（同）
●あけやらぬ閨のいたまのほの／＼と白むはゆきのつもるなりけり。（枝直）
●かひがねのけさより白くみゆめるはよはのしぐれや雪となりけん。（春海）
●かひがねははや雪白し神無月時雨て越るさやの中山。（蓮生）
●鵲のわたすないづこ夕霜の雲ゐに白き峰のかけはし。（家隆）
●見わたせば松のは白き吉野山いくよ積れる雪にかあるらん。（兼盛）
●山がらすかしらも白く成りにけり我かへるべき時やきぬらん。（増基）
●雪降や紅梅白し花の春。（杉風）
●眞白にかしらの花や年男。（許六）
●やへなりの顔も白し桃の眉。（其角）

●時鳥啼かぬ夜白し朝熊山。（女考）
●先づ秋の夕ぞ白き鶏頭花。（越人）
●初菊や頬白の頬の白きほど。（風雪）
●蒲鉾うちて眉妮白し年の暮。（同）
●白魚の白き匂ひや杉の箸。（元道）
●つゝじ咲いて片山里の飯白し。（蕪村）
●卵の花も白し夜半の大井川。（晋水）
●白きとて雲にも似ねば櫻ほど疑ふこともなしの花さく。（瀧近）
●月雪のみたても飽りしらゝ〳〵ししらけていはゞあれは卵の花。（孫彦）
●白魚とる夜もしらゝ〳〵としらぬ火の個に見えて又寒さ橋。（面堂）
●真穂がたてしふしんの根つざして白壁と見る宿の卵の花。（眞顔）
●顔見世の白らゝ〳〵明ぞめでたけれ頭に霜の降わたして。（赤良）
●庭の面しろ〳〵として笛の音のひゞき渡れる霜の夜かぐら。（来人）
●櫻とは疑ひとけぬ白妙やよし野を花の雪に囲めて。（田鶴丸）
●一面の花はお盤の上野山くろ門前にかゝる白雲。（赤良）
●生之謂レ性也、猶レ白之謂レ白與。曰然。白羽之白也、猶レ白雪之白、白雪之白、猶レ白玉之白一與。曰然。（孟子）
●機心存二于胸中一、則純白不レ備。純白不レ備、則神意不レ定。（荘子）
●黄牛廟磯石如レ蚓。想看驚濤成鬚白。（范成大）
●萬緑遮殘半片白。凝城城堞漸分明。（星巌）
●遠清篭レ烟青不レ淺。遥峰留レ雪白無レ多。（同）
●晨遊二百花林一、朱々雑二白々一。（韓愈）
●江畷春潮白。山長曉岫青。（王勃）
●越女天下白。鑑湖五月涼。（杜甫）
●淡白梨花面。輕盈楊柳腰。（李白）
●白羽揺如レ月。青山断若レ雲。（驍資王）
●洲白芦花吐。園紅柊葉稀。（張均）
●上徳若レ谷。大白若レ辱。（老子）

ざこそ不思議なりけれ。
●箱にいる歌がるたにもおく霜の白きを見する五月雨のかび。（爲慶）
●しほらしひ道具に遣ふ白あばた。（川柳）
●見にくるもしれねと顔へへげるほど。（同）
●塗桶にうつる娘の指白し。（同）
●白きとて雲にも似ねば櫻ほど疑ふこともなしの花さく。（瀧近）
●月雪のみたても飽りしらゝ〳〵ししらけていはゞあれは卵の花。（孫彦）
●白魚とる夜もしらゝ〳〵としらぬ火の個に見えて又寒さ橋。（面堂）
●真穂がたてしふしんの根つざして白壁と見る宿の卵の花。（眞顔）
●顔見世の白らゝ〳〵明ぞめでたけれ頭に霜の降わたして。（赤良）
●庭の面しろ〳〵として笛の音のひゞき渡れる霜の夜かぐら。（来人）
●櫻とは疑ひとけぬ白妙やよし野を花の雪に囲めて。（田鶴丸）
●一面の花はお盤の上野山くろ門前にかゝる白雲。（赤良）
●世の人のくらうする程白くなるかみのわ

●八朔は我が有りったけ白むく。云ひつぶされぬ紋を付け。（同）
●あまり間の無いは白むしお月さま。（同）
●おもしろい日を念川が白くよび。（同）
●森の子烏夜の鶏、うつゝのやみにうるゆきの、思ひなき身にくらべこし、さつと淺黄に染めしより、もとの白地がましぢやもの。（俗諺）
●三とせ四とせの思ひをすてゝ、物もいはずにいやゝと、是非にいやならのきもせうぞ、もとの白地にしても。（同）
●色の白いは七難隠す。（同）
●烏の天窓の白くなること無し。（同）

すゝかぜ 涼風

涼氣。涼景。秋涼。微涼。露下。追レ涼。侵レ衣。過レ籠。報レ秋。

松かげ。ならの下風。はしのにふくる。夏をよそなる。秋かとおもふ。秋をはらふ。おばしますゞし。繁みをもるゝ。清水のあたり。

●寝殿の東面拂ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さるかたにをかしうしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心留めてうゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の聲々聞え、蛩しげくとびまがひて、をかしき程なり。（紫式部）
●青葉の梢若かへで、なまめかしう繁りあひて、ひとへに夏によろしと見ゆる下かげに、水より通ふ風涼しう打ちそよめきて、春秋の外のあはれも、所がらことに深かりけり。（夏陰）
●裏の程の墨けさは、水の上さへむとくにて、いと堪へがたかりしを、やう〳〵日影も傾きて、木の間よりそよぎいづる風のいと涼しきに、ゆあみなどして立ちいづれば、月のかげさへほのめきて、蚤の苦しさも、かつ〳〵忘られぬ。（馬琴）
●誰がかちそめし三日の月、蛾眉形の、尻掛石も周ふれて、稍暖き着衣、脱ぎかへねども夏の夜の、秋涼しき松風に、梳らして夕立の、雨に洗うて乾す髪の、蓬の下に鳴く虫の、秋としなれば色々に、呑のもみぢばおり映し、錦の床も假初の、宿としらでや鹿ぞなく。（謡曲、関寺小町）
●颯々たる涼風と衰爽と、一時に来る初秋の、七日の夕に早なりぬ。今日七夕の手向とて、糸竹呂律の色々に、ことを盡して数鳥の、道を願ひの糸はへて、織るや錦のはた薄、花をも添へて秋草の、露の玉琴かき鳴らす。松風までも折からの、手向に叶ふ夕かな。（謡曲、関寺小町）
●天の川、月の御船もかげ添ひて、逢ふ瀬の波もゆたかなるに、後夜まさに明けんとす、しきりに涼風颯々の、聲に驚きて、見ればそなたに棚引ける、横雲靜に消え、曙の山や残るらん。（謡曲、七月七日）
●半ばゆく、空みな月の影更けて、秋程もなき御祓川、風も涼しき夕波に、心も澄める水桶の、もちがほならぬ身にしあれど、命の程は千早振、神に歩を運ぶ身の、宮居くもらぬ心哉。（謡曲、加茂）
●武士の、八十宇治川と名に流れ、底の濁りも友川や、水の綠も涼しげに、風吹き渡る宇治橋の、往來もしげき五月頃、盛狩にと来る人の、足休めやら氣ほうじの、花香はこゝが一森や、貴賤老若差別なく、たぎる茶釜の湯氣に立つ、名さへ出花の通圓が、店は人絶えなかりけり。（浄瑠璃、朝顔話）
●月見花見は何所も同じ、諸國名所のそのなか〳〵に、類ひなにはの舟遊び、老いも若いも下人も主も、男女がござ〳〵船に、秋涼しき川風は、秋といひても虚でない。（浄瑠璃、今宮心中）
●なつの日もやすの河原の柳原吹きこす風は下ぞ涼しき。（仲實）
●立ちよれば涼しかりけり水鳥の青葉の山の松の夕風。（光延）
●室の浦のせとの早船浜たゝでかたほにかくる風の涼しさ。（信實）

●窓近きいさゝ村竹風ふけば秋におどろく夏の夜の夢。（公職）

●こよろぎの磯のなみわけまだきより秋きにけらし風のすゞしき。（千隆）

●みな月のてる日もさすがかげろふの夕さりくれば風ぞ涼しき。（蘆庵）

●くれ竹を萩よりさきのやどりにてよるよるすゞし軒のした風。（宣長）

●かは風の柳をわたるすゞしさにひとはやすらふ橋の上哉。（契沖）

●河原風かよへるやどにをす巻きて月まつほどの秋すゞしも。（たみ子）

●夕立はよそにすぎても涼しさを送る心の風はありけり。（有功）

●涼風や虚空にみちて松の聲。（鬼貫）

●涼風や苔田の上の雲の影。（許六）

●涼風の曲りくねつて来りけり。（一茶）

●涼風も隣の竹のあまりかな。（同　）

●涼風や爽一をまねく女なし。（其角）

●涼風や九々の鱗のともし哉。（支考）

●涼風や峠に足をふみかける。（許六）

●風涼し生地へかへる涙の音。（北枝）

●涼風や流れの末に生駒山。（閑更）

●蓮葉に雨のくれたる水玉をいけになげうつ風の涼しさ。（宮人）

●大團扇涼しき風の雲井から吹きぬかせ見よ汗の玉簾。（田耕）

●腰かけへもてこし下女が茶と共に酒までさます風の涼しさ。（深根）

●暑さをも巻き揚げさせて夕暮にいよよを秋莫レ歎須知分（近住）

●紗巾草履竹疎衣。晩下二香山一踏二翠微一。（白居易）

一路涼風十八里。臥乘二籃輿一睡中歸。（同　）

●煙波清廻泛二輕航一。蘋末風生六月涼。此景祇應二圖畫一見一。十洲三島水中央。（張廷玉）

●沅溪夏晩足二涼風一。春酒相携就二竹叢一。莫レ道絲歌愁二遠謫一。青山明月不二會空一。（王昌齡）

●遠水環レ沙翠作レ灣。紅蕖飛不レ入二青山一。涼風一枕秋宵月。夢遶千巖萬壑間。（謝彦皎）

●心事得レ勝暫抛レ愁。醉臥涼風拂レ鏡秋。半夜覺來新酒醒。一條斜月到二床頭一。（雍陶）

●窓近きいさゝ村竹風ふけば秋におどろく夏の夜の夢。（公職）

●こよろぎの磯のなみわけまだきより秋きにけらし風のすゞしき。（千隆）

●みな月のてる日もさすがかげろふの夕さりくれば風ぞ涼しき。（蘆庵）

●くれ竹を萩よりさきのやどりにてよるよるすゞし軒のした風。（宣長）

●かは風の柳をわたるすゞしさにひとはやすらふ橋の上哉。（契沖）

●河原風かよへるやどにをす巻きて月まつほどの秋すゞしも。（たみ子）

●夕立はよそにすぎても涼しさを送る心の風はありけり。（有功）

●涼風や虚空にみちて松の聲。（鬼貫）

●涼風や苔田の上の雲の影。（許六）

●涼風の曲りくねつて来りけり。（一茶）

●涼風も隣の竹のあまりかな。（同　）

●涼風や爽一をまねく女なし。（其角）

●涼風や九々の鱗のともし哉。（支考）

●涼風や峠に足をふみかける。（許六）

●風涼し生地へかへる涙の音。（北枝）

●涼風や流れの末に生駒山。（閑更）

●蓮葉に雨のくれたる水玉をいけになげうつ風の涼しさ。（宮人）

●大團扇涼しき風の雲井から吹きぬかせ見よ汗の玉簾。（田耕）

●腰かけへもてこし下女が茶と共に酒までさます風の涼しさ。（深根）

●昨夜涼風又颯然。蒼飄葉墜臥床前。逢レ秋莫レ歎須知分。一紀漂安二十年。（白居易）

●紗巾草履竹疎衣。晩下二香山一踏二翠微一。（白居易）

一路涼風十八里。臥乘二籃輿一睡中歸。（同　）

●煙波清廻泛二輕航一。蘋末風生六月涼。此景祇應二圖畫一見一。十洲三島水中央。（張廷玉）

●沅溪夏晩足二涼風一。春酒相携就二竹叢一。莫レ道絲歌愁二遠謫一。青山明月不二會空一。（王昌齡）

●遠水環レ沙翠作レ灣。紅蕖飛不レ入二青山一。涼風一枕秋宵月。夢遶千巖萬壑間。（謝彦皎）

●心事得レ勝暫抛レ愁。醉臥涼風拂レ鏡秋。半夜覺來新酒醒。一條斜月到二床頭一。（雍陶）

●窓々涼景生。加二我林窓清一。驅レ煙入二碉

〔すゞき〕薄

芒。芭茅。杜栄。石芒。鬼薏。級薏。

いとすゞき。かれすゞき。衣のすゞき。ますほの薄。もとはの薄。しのゝをすゞき。尾花が波。白ゆふ尾花。ほなみよる。風になびく。

●尾花がうれな秋とはいはんと、あがれりし代の歌によみけるはことわりなりけり。秋の野の哀れさも、をかしさも、薄にこそあれ。色々の花どもの中にまじりて、露けたれず、葉の細やかなるが、なよ〳〵と露さて、露の玉をぬきとめたるなど、いはん方なきに、又人招く袖と見ゆらんも、心あるさまなりかし。かくをかしき物にしあれば、近くて朝夕見まほしくて、黒木の橋のつらに、一もと移し植ゑたるに、薄紫に穂の出でたるさまなども、をかしういみじ。植ゑてだに見じとは、よからぬ人のことにこそ。（高尚）

●前栽どもなど小き木どもなりしも、いと茂きかげとなり、一村すゞきも心に任せて亂れたる、つくろはせ玉ふやり水の、水草もかき攻めて、いと心行きたる景色なり。（紫式部）

●かれ〳〵なる前栽の中に、尾花のものより殊に手をさしいでゝ、招くがをかしう見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒の、はかなげに打ちなびきたるなど、例の事なれど夕風なほ哀なることなりかし。（同　）

●玉更の天明けゆく比、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被かんと探る手に、何物にや、さや〳〵と音するに目さめぬ。面にひや〳〵と物のこぼるゝを、雨やもりぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は戸もあるやなし。賀垣朽積れたる間より、荻薄高く生ひ出でゝ、朝露うちこぼるゝに、袖湿ぢてしぼるばかりなり。（秋成）

●此ほどは人日をつゝむ我宿の、垣ほの薄吹く風の、聲なも立てず忍び音に、泣くのみなりし身なれども、今は誰をか憚りの、何か忍ばん時鳥、名乗出よ。（謡曲、清経）

●加茂のみあれにかざりしは、糸毛の車とこそ聞け。糸櫻、色もさかりに咲く頃は、來る人多き春の暮、穂に出づる秋の糸薄、月に夜をや待ちぬらん。今はた曉が繰る糸の、長き命のつれなさを、思ひ明石の浦千鳥、音をのみひとり泣き明かす。（謡曲、黒塚）

●さらばとよ友人名殘の袖を、招く尾花のほのかに見えし跡絶えて、草茫々たる朝の原に、虫の音ばかりや殘るらん。（謡曲、松虫）

●人の心は白雲の、我は曇らじ心の月、出てゝ御僧に帰はれんと、薄おし分け出でければ、包めども我も穂に出で、尾花招かばとまれかし。（謡曲、通小町）

●靡ろ〳〵と鳴る神も、分けて尋ねん天の川の、星の数々懸しや子供。花の顔色秋待ちあへず、散り〳〵になれば、母は冬野のうら枯れ、つき放れ子故に狂ふ。庭の萩原野邊の薬、野分に騒ぐ狂ひ咲、狂ひ出るぞとつ國や、隅田河原の邊りに近き蓬生。（浄瑠璃、双生隅田川）

●秋風烈し鳥羽の里、木の葉時雨に埋るゝ千草の色も、虫の鳴音も枯れ〳〵に、いとも隠さで鳴く音かな。

ゞ哀はますほの薄し（浄瑠璃、金平法問浄）
●わらはゞ笑へ老なわすれて、尾花招けば萩ほうなづく、風の子ゆゑのあいにうかる、親子草。（浄瑠璃、鬼稚兒浮名扇模）
●心なき草の秋も化すゝき露ほしあへぬ秋はきにけり。（貞親）
●うづらなくまの〳〵入江の浜風に尾花なみよる秋の夕ぐれ。（後頼）
●荒れまさる宿には植ゑじ花薄まねくにとまる人しなければ。（公任）
●まねくとて立ちもとまらぬ秋故に哀かたよる花すゝき哉。（好忠）
●まねけとて植ゑし薄の一本にとはれぬ庭ぞ荒りはてぬる。（信実）
●旅人のうちはらひゆくたもとさへまねくにまがふ露のなすゝき。（宣長）
●天川かはべに立ちてまねくらんひれかとみゆるはつをばなかな。（千蔭）
●あまのがは河べのを花かたよりになびくもほしの心をやとる。（春海）
●いつしかとおもひし秋のはつを花ほにいでゝほしの枕にやかる。（蘆庵）
●一方に露きそろひて花薄風ふく時ぞみだれざりける。（県樹）

❶蜻蛉の往來ひまなきすゝき哉。（東岸）
❷山火のがばと起き行く芒かな。（召波）
❸蛇の皮かけて芒のみだれ哉。（暁雀）
❹ひら〳〵とうす霧かわく芒哉。（道彦）
❺茨老い薄痩せ萩おぼつかな。（葉村）
❻蜉蝣中の淋しさゝゐ薄かな。（風雪）
❼ひら〳〵と日を誘ひたる薄哉。（野坡）
❽捨草やすゝきはねて浦の寺。（同）
❾薄のみ閨の花野の枝をり草。（同）
❿押分けて見れば水ある薄かな。（北枝）
●春日野は知らねど鷺の羽薄を今の男らかりにいにけり。（月の桂）
●村長が羽織の紋とついたけに袖をすりあふ薄の羽薄。（和樽）
●落武者はすゝきの穂におちる。（俚諺）
●蘭並變而不芳兮。茅藑化而爲茅。（離騒）
●白華宵兮。白茅束兮。（詩經）
●風動茅花月滿墀。（唐球）
●茅葉翻々帶宿雨。（陸游）

「すゞむし」鈴虫（虫之部參照）

ふりいでなく。涙ふりそふ。枕に近き。ふりすてがたき。

❶げに聲々聞えたる中に、鈴虫のふりいでたるほど、花やかになかし。秋の虫の聲、

いづれとなき中に、松虫のなん、すぐれたるとて、中宮のはるけき野べわけて、いとわざと尋ねとりつゝ放たせ給へる、しるく鳴傳ふるこそ少なけれ。名には遊びて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせよ。人きかぬおく山、遥けき野の松原に聲をしまぬも、いと隔心ある虫になんありける。鈴虫は心やすく、今めいたるこそらうたけれなどのたまへば、宮、

大方の秋をばうしとしりにしたふりすてがたき鈴虫の聲。

と忍びやかにのたまふ。いとなまめいて、あてにおほどかなり。（紫式部）

●閑の此方と思ひしに、跡になるや音羽山の、名殘惜しの部や、松虫、鈴虫、きりぎりすの、鳴くや夕陰の、山科の里人もとがむなよ、狂女なれど心は、清瀧川と知るべし。（謡曲、蝉丸）

❷數々咲ける露草や、露にむつるゝ聲々の、綾を込め總を込め、人の哀れを知れとてや、如何につれない中だにも、一夜は逢うてくれごとに、何を松虫同時までか、何時こうろぎも白萩に、亂れて鳴くは寶虫、神樂が岡に鳴く虫は、神の心を鈴虫や、あらぬ方より吹く風に、尾花領づく振見えて、急いで逢はせぬ密虫、胡蝶の異潘れそめて、虫さへ情あればこそ。（浄瑠璃、小栗判官）
❸鈴虫の聲ふりたつる秋のよは哀に物のなりまさるかな。（和泉式部）
❹鈴虫の聲亂れたる秋の野はふり捨てがたき物にぞありける。（敏行）
●たまさかにけふあひ見れば鈴虫は昔ながらの聲ぞきこゆる。（忠見）
●人のいもかと聞く迄女郎花本ごとになく鈴虫の聲。（みつね）
❺年へぬる秋にもあかず鈴虫のふり行くまゝに聲のまされば。（公任）
❻さよふけぬねざめよとてや鈴虫のふり出づる聲のおどろかすらん。（契沖）
❼鷺するてかへるかたの〳〵ゆふまぐれ尾花がもとに鈴虫ぞなく。（千蔭）
❽ふりいで〳〵鳴く虫のねやおのが名のすゞろに秋のあはれそふらん。（同）
❾ゆふされば露ちるをの〳〵秋風にふりいでなくすゞむしのこゑ。（春海）
❿秋さむくなりゆくまゝにひろまのみ聲ふり立つる野べのすゞむし。（蘆庵）
●鈴虫や松明先へ荷はせて。（其角）
●鈴虫のなくやころ〳〵と玉の露。（暁雀）
●蟲も鈴振るや住吉大明神。（一茶）
●鈴虫の音にみだれけり女衆。（也有）
●鈴虫の啼きそろひたる千ぐさ哉。（桃妖）
●すゞむしに客を通すや廻り椽。（兒觥）
●鈴虫に心のかはる在所かな。（三惟）
●曉に何御用ぞと錠口へ來てわかりたる鈴むしの聲。（常持）
●背の間は窓の戸明けて鈴むしのころりとねさへをしき曉。（起衆）
●露霜のふるの社に秋ふけてなきよわりゆくすゞむしの聲。（蕪田）
●なく音をもまろばす中に鈴むしはふり捨てがたき聲にざりける。（磐根）
●神垣の柳がもとに鈴虫の聲ふりたてゝ何ねがふらん。（松蔭）
●秋の野は神もほとけもわかぬにやそこに鈴むしこゝに松虫。（真成）
●夏はてゝまたいく日にもならねどもなるほど涼し鈴虫の聲。（麹人）
●雀鮫の十二調子もそろひけり神樂が岡の鈴虫の聲。（行就）
●めざましは申しつけねど秋の夜もはや曉となれる鈴むし。（袖廣）

㊟夏過ぎて三番さう〳〵翁草さらば鈴虫まねらせんざい。（息人）

●秋の野のちぐさはやへも白露のふつて出でたるすゞむしの聲。（赤良）

●御離縁のあと鈴虫のなくばかり。（川柳）

●三味線で鈴虫の音をとめるなり。（同）

●鈴虫はお寝間淋しく夜をふかし。（同）

●秋の夜中に牡丹花の、蟲籠をとりの一ふしに、殘る蚤を凌がんと、大門口のたそがれや、いざ鈴虫を思ひ出す。（俗謡）

●仇し野の露の命の鈴虫も、むきはてられて今更に、鳴くになかれね物思ひ。（同）

●百種秋蟲耳根鳴。唯有鈴蟲似鈴聲。中皆枝巢啼不止。啼旨三四更二月初傾。滿園秋草汝所安。三寸籠中厄此生。異能災身物皆然。衆鵲群腰前疫明。添聞啾更遠此理。解道爲巢不近名。那識螳蜋不解音。唧々唯使三懶蟲驚。十月霜寒覆其霜。健羽長脚倒樓横。異聲凡音死等耳。無能無用夏何是。築。（東進）

〔すゞめ〕雀

嘉賓。黄口。素質。巣堂。穿屋。解語。賀厦。五色。白翮。群雀。凍雀。

むらすゞめ。友すゞめ。いなすゞめ。すだつすゞめ。すゞめのひな。のきばにすだく。

❶風にさそふ蜂の木の葉の雨、枕になるなるこゝそほつの音、又東雲もほがら〳〵とも物せぬ窓に、烏の世をすてにたる涼しき、群れ居る雀の聲のかしかましきさる事にて、かゝる傍邊の軒をも、朝げの空より月細りて、際など打亂して、うるさき鳥なめり。されど心とき鳥にて姿ひいて、山里の遊敵には奥あるものぞかし。（長明）

❷うつくしきもの、瓜にかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするに、をどりくる。又紅粉などつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむるも、イとうたし。（清少納言）

❸もるとせし、おくての稻葉苅りはて、山田の畔にひとりたてるかゝしあり。むれ渡るいな雀の、落穂ひろひけるが、例の日さがなくてわらひけるは、養山は百歩に柳のはをはづさず、義家は鳴弦を雲の上にひゞかせ、頼政は鵺を射る。その外武將名士の弓箭に功ある、皆その藝を發して、世に名をふるへり。なんぞやあやしの竹に繩はりて、射る事しらぬ弓の形をいつはり、我雀をおざむかんとするや。（也有）

❹晩稻の小田も刈りしほに、色づく秋の村鳥を、李生の浦舟漕ぎ連れて、思ひ〳〵の囃子物、あれ〳〵見よや、よその舟にも打つ鼓、空に鳴子の村雀、追ふ聲を立て添へ、扨いつも太鼓はとう〳〵と。（謡曲、烏追船）

❺チヽ上げませいで何とせう、今上げます、まちつと靜立其間、お氣に入の雀の子、モウ親烏がくる時分、そこへ直してお慰。アイ〳〵〳〵と千松が、返事はすれど立憎み、あゆも姿もたよ〳〵と、置直したる小鳥籠。忠と教る親烏の、軒端の竹に飛びかはす、子は孝行に面痩て、はごくみかへす烏羽玉の、涙を隱すうなゐ髪、かゝればすぐに仮に成る、ソリヤもう仮ちやと悦ぶ子。コレ千松何共ないといふ下から、せはしない何の事ぢや。いつも謡ふ雀の歌、謡ふて御前の御機嫌とりや。ヱヽどんな子で有るわいと呵られて、おろ〳〵涙しやくりながらのしめり聲。こちの裏のちさの木に、ちさの木に、雀が三匹とうまつて〳〵、一羽の雀がいふことにや〳〵、夕ヤ呼だ花嫁御〳〵。竹の下葉を飛おりて、籠へ寄くる親鳥の、餌ばみをすれば子すゞめの、咏さしよする有さまに、アレアレ乳母、雀の親が子に何やら吸しをる。おれもあの機に、早ふ飯がたべたいと、小鳥を咬む御心根。（浄瑠璃、先代萩）

●宗清氣をつけ、やれ小鳥共の軒に宿りて暮しきに、あれ追ひ拂へと云ひければ、なふ情なやふくら雀の羽の憾み、雪に折れ伏す篠竹の、筐に一夜の假の宿、たのみにいたくなの給ひそ。はや夜も更けぬ床寒し、音せでお寝れと勸めける。（浄瑠璃、烏帽子打）

●鷹籠の鳥なる梅川に、こがれて通ふさと雀、忠兵衛はとぼ〳〵と、外のくめん内の首尾、心は雲でかくなはや、十文色も出でくるわ、南無三寶日が暮ると、足を空に立ち踊り。（浄瑠璃、冥途の飛脚）

●人ぞうきすゞめのひなの手なれつゝしばしも身をばはなれざるらん。（知家）

●むら雀こゑする竹にうつる日の影こそ秋の色になりぬれ。（永福門院）

●雪うづむ岡の吳竹をれふしてねぐらもとむる村すゞめ哉。（西行）

●友よぶや霜のおくての稻すゞめいまいくほどの秋をたのめる。（枝直）

●朝な夕なむつまじき哉むらすゞめすゞのやの軒になれつゝ。（千隆）

●船がらにすだく雀ははがくれてまれにのこれる穂をや爭ふ。（蘆庵）

●むら雀こゑしづまりて暮れわたるたけのはやしに風たつなり。（幸文）

●村雀ひさしにあさる音さへもいつより聞きし朝いなるらん。（言道）

●名月や竹を定むるむら雀。（其角）

●水うてやせみも雀もねる〳〵程。（同）

●雀子や明〳〵障子に筆のかげ。（同）

●日の影やごしくの上の親雀。（珍碩）

●荷鞍踏む春の雀や椽の先。（土芳）

●飛び交す矢たけ心や親雀。（蕪村）

●雨晴れや木々の芽ぐくふ雀の子。（完來）

●昨日まで雀がくれと見し草の分つるほぎに屆く夏の野。（仮盛）

●定紋と人や見るらん雀子と共に羽をのす軒の若竹。（稻葉）

●尺八の根引のあやめふく軒の下に雀のすごもりもあり。（台下）

●くみかはす銚子のさゝにからまりて酔を雀の時を江戸節。（赤良）

●もとよりも雀はさゝが好なればふざしの竿にさゝつさゝれつ。（村路）

●ありし世をうらみし人のすくせとも思ひし竹に馴るゝ雀は。（夜宴）

●いくらともかぞへがてなる雀こそいくみの竹に塒しむらめ。（水彦）

●猫にましてめでたしくれ竹にむるゝ雀の子代のさへづり。（明庭）

●鮒化して雀はさゝの相手なり。（川柳）

●とひやばで竹に雀は氣をいため。（同）

●初雪に雀良とは耻しらず。（同）

●朝かへり竹に雀の鳴く時分。（同）

●住吉のすみに雀が巢をかけて、さこそ雀は住みよかろ、さこそ雀はすみよかろ。（俗謡）

●竹に雀は品よくとまる、とめてとまらぬ色の道。（同）

●わたしやこの町の軒端の雀、軒端はなれりや巢に困る。（同）

●雀の千聲萬の一聲。（俚諺）
●勤學院の雀衆求を噪る。（同　）
●燕雀鴻鵠の心を知らず。（同　）
●雀百まで踊忘れず。（同　）
●雀の涙ほど。（同　）
●雀兒に針。（同　）
●黃雀舞二承塵一、倚二悼主人仁一、主人忽不レ仁。取二彈弓一相見、何不二遠飛去一、逢二羅正繁一。高粒無二人爭一。食レ之足レ爲レ珍。其レ親二翻車一要、親翻罪有レ因。黃雀不レ知レ言。（孟郊）
●噴々野田雀。不レ知二軀體殘一。閨窮深叢裡。相引時來啼。斜路豈不レ捷。清田豈不レ肥。水長路且遠。懶々與レ心違。（儲光羲）
●大廈初成日。嘉賓集二香梁一。衙レ書表二周瑞一。入レ扉應二玉祥一。暮宿江城裏。朝遊漣水傍。願齊二鴻鵠志一、雀逐鳳凰翔。（李嶠）
●百千寒雀下二空庭一。小集梅梢一語晚晴。特地作レ團喧殺我、忽然驚破寂無レ聲。（楊萬里）
●勝負無二心欲一レ晴。寒蕉交レ影照二庭蕪一。不レ知雀約爭二何事一、蹋碎殘紅大半珠。（星巖）

●午日烘開豈蔑萱。啓扉飛動雀爭レ巢。朦朧眼無二安處一、閑室二鎖烟一到二竹梢一。（范成大）
●煙波半落新沙地。鳥雀群飛欲レ雪天。（劉禹錫）
●風竹時驚二雀噪一、月窗誰伴二梅橫一。（范成大）
●雀喧知二巢靜一。燕戲識二鳥閑一。（許渾）
●雀馴常傍二簷楹一飛。（張臣亭）
●燕雀豈知二鴻鵠之志一。（史記）
●止雀一枝。（張玉龍）

「すゞり」硯

潤澤。研磨。石穴。溪源。雲痕。紫石。滿レ墨。染レ毫。端溪石。螳如レ玉。

石すゞり。さがいし。硯の水。すゞりの海。むかふすゞり。かたき契。床のすゞり。硯のちり。

●硯さたなげに塵ばみ、墨の片つ方にしけなくすりひらめかし、勞おほきに成りたるが、さゝしなどしたるこそ、心もとなしとおぼゆれ。よろづの調度はさる物にて、女は鏡、硯こそ、心のほど見ゆるなれ。男はまして文机清げにおしのごひて、かさねならずば、二つ懸子の硯の、いとつきゞしう、蒔繪の樣もわざとならねど、なかしうて墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたてたるこそなかしけれ。とあれどかゝれど同じ事とて、黒箱の蓋もかたしおちたる硯、僅に墨のゐたる、塵の此の世には拂ひがたげなるに、水うち流して、青磁の龜の口おちて、首のかぎり穴のほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。（清少納言）
●花ほとゝぎす月雪のあした夕は更なり。はかなきことの折につけつゝ、心一つにあまる思をのべんとては、まづ打むかふよつの友なん。いづれとわかずむつましき中に、動きなき世の例にもしつべきは硯なりけり。千草ならねど海といふ名のあればにや、みるいしといふ名をもおひけん。草木は生ひねども、なかといふ處あれば、山といふ所もいかでなからん。よき人のよしともてあそび給ふらん、やまと唐土うるはしきは數多かめれどそはしらず。こゝに年

頃もてならす一つの硯は、たが國よりたがもて來たりけん、その色は鴉にひとしく黒けれど、かしましくさへづることなければ、にくげもなし。思ふ事のかゝんには、あしとて事かくことなければ、いとむつまじ。玉の硯はしらず、我日ひとつの玉ゝし見んに、なでふ事かあらん。されば昔の人のいひけん、人のめとむばかりこそかたからめ。きたなげなからまほしかるを、それすら塵ばみがちなるや。

かき流す心のちりに朝な夕なすゞりの海にうかぶもくづは。（桂子）

●この稚人のざうしなどに、おのづから落ち殘りたる女房の心地いはんかたなし。おはしよす殿を見れば、近き御づし御調度どもなにくれ、硯などもさながらうち散りて、只今までおはしましけるあとゝ見になが、ら、宮人などだに一人もなし。（堺鏡）
●硯に花鳥のうつは物ならんに、風雅のたよりなからんはいやしく、硯は墨さもの先たふとし。紫の花やかならんにはしらず。あるは人しれぬこひの中そらに、筆のなぶねのこがれあひて、硯の海の深き思をもよせつ。あるは故郷のこひしきには雁に越路の便を得て、忠義の人のたとへにも引くる。臣は此水のつきざらんになぞらへよの舟うかぶらん。
●曇明卿を承り、筵の内よりも、小硯料紙とり出し、墨すり筆を和しけるが、思ひ案ずるけしきもなく、古書を寫すが如くにて、やがて願書をかき終る。（謠曲、木賊）
●飛花落葉のなり〳〵は、すける道とて草の戸に、硯をならしつゝ、筆を染めて藻鹽草、書くや言葉の枯れ〳〵に、あはれなるやうにて強からず。（謠曲、關寺小町）
●後に尾上は胸迫り、忍び涙の漏も瀬も、翌日は亡き名を白紙に、硯の海の底はかと、無き長文もあとや先、書置く筆の命毛も、露と消え行くはかなさを、絶え入る斗り忍び泣き、涙と共に書さゝめ、革の文箱も浦島が、明けてくやしき遺恨の羣鳧、文諸共に文箱の、紐引締めて傍へなる、手箱の中なかたみ分け。（淨瑠璃、加賀見山）
●妻戀ふ鹿の果ならで、なんぎ硯の海山と、苦勞する墨染事を、數書くお筆が身のゆくへ、いつ迄はてし難波潟。（淨瑠璃、盛衰記）
●四方の海を硯の水につくすとも我思ふ事かきもやられじ。（俊成）
●いつとなくすゞりに向ふ手習も人にいふべき思ひならねば。（安徽門院）
●あかざりしむかしのことを書きつくる硯の水は涙なりけり。（和泉式部）
●そこひなく深きことばのうみならば硯の水のさきにやはひん。（契沖）
●藻鹽草なほかきくゆる事はあらじ硯の海もつきぬ世なれば。（春滿）
●おのづからしづけきもの、世々をへてつきぬ例をみる石ぞこれ。（千陰）
●墨ふでもかみもむかしのそれならでかはらぬ友は硯なりけり。（宣長）
●我中はなほあふことやかたからんすゞりの石の世をつくすとも。（蘆庵）
●あふことのかたきためしと見ても先硯の水にそふ涙かな。（蔷薇）
●手なれつる硯の海も心あらばわれによせなん玉のひとつを。（有功）
●見ぬ世をも筆にうつすと朝な〳〵向ふ鏡はすゞりなりけり。（諸平）
●筆とるは硯やほしき兒ざくら。（嵐雪）
●五月雨や硯箱なる庶がらし。（同　）
●點滴を硯に容なり郭公。（其角）

●松陰の硯に息なしぐれかな。（同　）
●院々のふるき硯や今日の月。（雁宕）
●雪信が蠅打ちはらふ硯かな。（蕪村）
●さゞれ石のしげき俤わけて初硯。（磐太）
●山寺の硯に早し初氷。（也有）
●みやぎ野の萩に摺りたる旅硯紫石に色はそへけり。（長丸）
●言の葉の濱の眞砂のひろひかきすなる硯も干潟とぞなる。（琴重）
●硯の龍の出る時には高島の硯の海もすみにごるなり。（こりふ）
●つれ／＼なわぶるすさびのむだ書や硯に向ふ永の日暮し。（讀人不知）
●汐干狩女もすなり日記なかく硯石との土佐の海ばら。（行就）
●硯より外に知りてのない病氣。（川柳）
●向ふから硯を使ふかゝり人。（同　）
●紫翅の邪氣して洗ふ硯石。（同　）
●われがおもひに身なこがす、胸はけぶりの富士なれや、袖はなみだの淸見潟、うき契りに淺はかな、硯の海のよるべさへ、なんとしがらむ緣の綱。（俗謡）
●えにしゆかりはのこれども、もし秋風や吹かぬかと、心は文字のせきぢなる、硯の海に打ちむかひ、千里なかけて雁がねの、たよりな松の言のはや、かりのたよりな松のことのは。（同　）
●硯へ文字を書くと手があがらない。（俚諺）
●不ニ必端溪龍壁產一。不ニ必鳳咮雕雖名一。堅六七寸橫相稱。松採凝レ烟映ニ格英一。田君曾過北海側。偶然手探一片石。千栽波濤吐復呑。其質堅硬色淺碧。歸レ家半日風雨來。黑雲壓レ家聞ニ吼聲一。知是龍神所ニ愛惜一。從底十襲不ニ肯開一。君重ニ意氣一好ニ文學一。玩物喪レ志心所レ惡。脫レ手相贈誰宜レ當。天下信人來君叔。來君得レ之喜可レ知。作レ硯送レ我求ニ我詩一。硯兮汝聞ニ吾所レ告。古來榮辱亘多岐。汝毋レ或レ如ニ楊家物一。曾染ニ劇秦美新筆一。汝毋レ或レ如ニ李家藏一。世修ニ降表ニ涙ニ士節一。須レ如ニ文相玉帶生一。敎レ主叛表ニ忠誠一。須レ如ニ坡老文星石一。敎レ主文章四海轟。田君自今封レ汝即纍縣。朝磨夕礲永莫レ變。田君來于元石交。萬古不レ渝如ニ斯硯一。（旭莊）
●遠向ニ端溪一得。皆因ニ郢匠一成。鑿レ山胥露斷。琢レ石紫花輕。散レ墨松香起。濡レ毫漢句淸。入レ離知ニ價重一。著レ而恐塵生。持レ黑須金レ器。臨レ池垂者レ名。春憐揩就處。筆鋒載將行。不ニ獨雄ニ文陣一。兼能助ニ筆耕一。英レ嫌ニ涓滴潤一。深染ニ古今情一。洗處無ニ瑕玷一。添時識ニ滿盈一。蘭亭如見レ用。敲戛有ニ金聲一。（徐寅）
●活水源頭一脈淸。文林藝圃藉ニ滋榮一。旗搖ニ彩彩一龍蛇動。筆奪ニ元機一風雨驚。螢火不レ愁乾欲レ死。蘇魚今喜放長生。遙思紫玉潭中事。靈怪紛々鬧幾更。（祖右）
●追ニ琢他山石一。方圓一勺深。抱レ才雖守レ墨。求レ用每虛レ心。波浪因レ文起。塵埃爲レ廢侵。邀レ君更研究。何啻直千金。（李山甫）
●端溪誰製紫雲腴。萬古文心向レ此攄。小點墨池成ニ巨浪一。就中飛出北溟魚。（顧陳㙻）
●一研二十年。曾伴ニ我修レ史。同レ吾閱ニ與込一、墨銹在ニ肌理一。所レ惡不レ爾勞。日給ニ數勺水一。（賴山陽）
●端溪溫潤石。價重ニ百車渠一。一滴元潭水。蜿頭萬卷書。（李俊民）
●接レ思强揮レ毫。窺レ詞幾焚レ硯。（陸龜蒙）
●平生江湖心。聊寄ニ筆硯中一。（陸游）

【すだれ】簾

半捲。低垂。齊簷。窣地。翠戸。銀鈎。約レ風。篩レ月。織レ珠。

桃レ紡。蝦鬚。

玉だれ。玉すだれ。こす。こもすだれ。玉のすだれ。いよすだれ。軒ばのこす。玉のすだれ。芦のすだれ。ふせやのすだれ。

●雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして、ものがたりなどしてあつまり侍らふに、少納言よ、香爐峰の雪はいかならんと仰せられければ、み格子あげさせて、み簾高く捲きあげたれば、笑はせたまふ。人々も皆さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。猶この宮の人にはさるべきなめりといふ。（淸少納言）
●其夜はさばかり暑くわりなき闇にて、何事も狹う瓦ぶきにてさま異なり。例のやうに格子などもなく、只めぐりて御簾ばかりをぞかけたる、中々珍らしうなかし。（同　）
●雲のかきくらしふるひはもす、ながめくらして、世の人のすさまじき事にいふなる、しはすの月夜の、曇りなくさし出でたるを、みすまきあげて見給へば、むかひの寺の鐘の聲　枕をそばだてゝ、今日もくれぬと幽なるをきゝて、

おくれじと空ゆく月を慕ふかな終にすむべき此世ならねば。（紫式部）

●御門の御母女院十一月うせ給ひにしかば、内のうへ御服たてまつる。天下ひとつにそめわたして、柒簾垂とか、いとまがくしきものども、かけ渡したるも、あはれにいみじくぞ見ゆる。（増鏡）
●此主人かへり來て、先見るより今日の暑さなかへすぐいひつゞけ、汗おし拭ひ、扇うちならしつゝ、伴ひ入る南表なる所、伊豫簾かけ渡し、あたり／＼いとさはらかにしつらひたるに。（宣長）
●難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、雨のあし過も亂るゝかたな波、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらり／＼ざらり／＼ざつと、風のあげたる古簾、つれ／＼もなき心おもしろや。（謡曲、蘆苅）
●妻戸をきりゝとおしひらく、御簾のおひ風にほひ來る、花の都人に、はづかしながらみゝえん。（謡曲、千手）
●降る雪の音聞く程に靜なる、竹より奥の一つ庵、猶の通路跡付けし、唯一筋の道細く、油火ほのかに搔き立てゝ、女の業かしどけなき、引きさき紙を結びつぎ、半ばあげたる伊豫簾、嵐ぞ雪をもて來る。（淨瑠璃、烏帽子折）
●たまだれのをすのまとほり獨ゐてみる印なき夕月夜かも。（萬葉）
●年をへて世にすゝけたるいよすだれかけさげられて身をばすてゝき。（光俊）
●玉すだれ糸のたえまに人をみてすける心はおもひかけてき。（拾遺）
●すだれこそ見えみ見えずみへだつめれ思ひのしるべなにかさはらん。（利政）
●かりそめにかけしいよすを一重山へだてゝすめる思ひなりけり。（千蔭）
●玉だれのをすかゝげては高殿にふじの高ねのかぜかよふまで。（同　）
●河原風かよへるやどにをす卷きて月まつほどの秋すゞしも。（たみ子）
●いつまでかをすのたれすのたれこめて花も紅葉も見ずてやみなん。（春滿）
●かりそめにすきま多かるいよすだれ月もれとてやつくりそめけん。（春海）
●今日にかはる淨瑠璃殿の背簾。（其角）
●夏山に我は御簾とる女かな。（同　）

❶五位六位色ことさまざまよ青簾。（嵐雪）
❷粟簾ごしに向ひの人の夕涼。（支考）
❸簾まき雨に提げ来る杜若。（其角）
●湯の花や金魚にかゝるいよすだれ。（同　）
❹かけて待ついよ簾も輕し桐の秋。（同　）
❺佛名や打數ほめる御簾の内。（許六）
❻紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ。（芭蕉）
❼昨夜まきし簾に來入る螢かな。（淡々）
❽大團扇涼しき風の雲井から吹かぬかぜみよ汗の玉簾。（田耕）
❾袈裟なる巻揚げさせて夕暮にいよすをくる風の涼しさ。（近住）
❿香爐峯の雪をうつして水茶屋のいよ簾を巻て見る樓哉。（道帆）
❶涼しさは晏もさけの醉過ぎて肆のすだれのくだや巻くらん。（松盛）
❷内からは見え外からは見えぬやうに誰があみ出して掛簾なる。（廣住）
❸よしすだれ今日かけそめて湯上りのいよ染ゆかた着たる涼しさ。（相樓）
●さつといふ音は雨かと疑はん簾もりくる風の涼しさ。（讀人不知）
❹涼しさはあたらしたゝみ奇すだれ妻子の留守に獨みる月。（橘洲）
●日かよきて茂る柳の繩すだれよりくる風になびく涼しさ。（雲井園）
❷右左かけしいよすの府の數も湯桁なれど八つと九つ。（打麿）
❸玉簾でゆかしく霞む小春亭。（川柳）
❹雪もびつくり御簾を捲く手の清さ。（同　）
❺思案する肩に一すぢ繩すだれ。（同　）
❻見しや玉だれ、うちぞゆかしき思ひづま、引くな唐猫、綱にまかせて、追風くゆる心を、誰にかこちて夕ぐれ、あだにはきかぬうき名を。（俗謡）
❼ふけよ松風あがれよ簾、いまの小唄の主や。（同　）
❽ちらとばかりの面影なみすの追風さらさらにわすれもやらぬ身ぞつらき。（同　）
●繩暖簾にもたれるやう。（俚謡）
❾裏葉と腕押し。（同　）
❿清風時入簾。紫殿幾舍　秋。曖々籠窗　閑。機々上玉鈎。窓中翡翠動。戸外水精浮。巧作二盤龍勢一。長廻二飛燕遊一。（李嶠）
❶夜深閨到二戟門邊一。却繞二行廊一又獨眠。明月滿庭池水綠。桐花垂在二翠簾前一。（元稹）
❷錦繡湖山鬼畫樓。君家住在二小瀛洲一。洞簫吹上花間月。十二珠簾不下鈎。（沈翊）
❸疊影重紋映二畫堂一。玉鈎銀燭共熒煌。舍人曉得神仙在。休下眞珠十二行。（羅隱）
❹低按新翻曲。人聽意每猜。簾疏遮不斷。嬌透幾聲來。（高啓）
❺嚴君平下帘於成都市。日閉二數人得一百錢一。即閉レ肆下レ簾。而授二老子一。（史記）
❻盜刻曉戸之簾。此其亡行義之先至者也。（賈誼）
❼水晶簾動微風起。一架薔薇滿院香。（高駢）
❽珠簾暮捲西山雨。（王勃）
❾風簾入雙燕。（謝朓）
❿落日在二簾鉤一。（杜甫）

〔すまふ〕相撲

角觝。決レ勝。競レ力。誇レ雄。努レ力。爭レ先。鳴レ鼓。揭レ旗。童すまふ。辻すまふ。最手。助手。拔手。加手。あひうつ。とりて。くじる。まろばす。とりくむ。けたふす。

❶相澤が弟の彌七郎に出でよといふ。すこし辭退に及びしな、船越ひきたて、たづなとりかへ出しけり。としにおきては十五なり。妻をしのにたとふれば、まだ堅わかき鷲の谷より出づるもかくやらん。たれなか相手にさすべきと、座敷をきつと見まはしければ、瀧口が弟の三郎出でよといふ。言葉の下よりいでにけり。年におきては十八なり。いづれも相撲は上手なれば、おのおのさしよりて、つまどりしたるありさまは、昨まちかねてさく梅の、雪をふくめる如くなり。われ人力はしらねども、くもふきたつる山かぜの、まつとさくらにおとたて、、鳥もおどろく情かと、讀人日なこそさましけれ。彌七はちからおとりたれども、手あひはましてぞ見えにける。三郎は力はまさりてありければ、くまんとのみにて、さしつめむすべばすてぬけ、なぐればかけてまはりしは、たうくはの節會の雞の、心をくだき羽をつかひ、勝負を爭ふとりあはせも、これにはすぎじとぞ見えたりける。老若ざしきにこらへかね、あつばれ浮世の見事やと、上下しばらくのゝめきて、東西さらに靜まらず。されども彌七は地さがりへ、おしかけられ、とゝろはしりて浮く腰な、つかれて遂に彌七ぞまけたりける。兄の彌六つゝと出で、三郎をはたとけて、やすからずおもひ、はかまのこきざみにうち倒す。瀧口むねんにも踊り出で、大力なりければ、彌六はてまかせて、しとくをおそしとひきゝり、たづな二筋えり合せ、つよくをさめ走り出で、ちるゝ〳〵とさしあひて、力びきて見ければ、大の男がふみはりて、すこしもうごかされず。一定われもまけぬべし。まことやすまふは力によらず、手だにまされば、みぎはまさりの、あひてをうつものなと、思ひ出してあひだは、みぎのこぶしをにぎりかため、瀧口がびんのほづれ、きれてのけとうちけれ ば、瀧口うたれて、さうの拳をうちかへす。その後まけじおとらじと、てをはなちはりあひける。今はすまふはこらで偏にたゝき合ひなぐり合ひ、これにはすぎじとぞ見えたりける。老若ざしきにこらへかね、あつばれ浮世の見事やと、上下しばらくのゝめきて、東西さらに靜まらず。されども彌七は地さがりへ、おしかけられ、とゝろはしりて浮く腰な、つかれて遂に彌七ぞまけたりける。兄の彌六つゝと出で、三郎をはたとけて、やすからずおもひ、はかまのこきざみにうち倒す。瀧口むねんにも踊り出で、大力なりければ、彌六はてまかせて、しとくをおそしとひきゝり、たづな二筋えり合せ、つよくをさめ走り出で、ちるゝ〳〵とさしあひて、力びきて見ければ、大の男がふみはりて、すこしもうごかされず。一定われもまけぬべし。まことやすまふは力によらず、手だにまされば、みぎはまさりの、あひてをうつものなと、思ひ出してあひだは、みぎのこぶしをにぎりかため、瀧口がびんのほづれ、きれてのけとうちけれ ば、瀧口うたれて、さうの拳をうちかへす。その後まけじおとらじと、てをはなちはりあひける。今はすまふはこらで偏にたゝき合ひなぐり合ひ、これにはすぎじとぞ見えたりける。兩方さゝへんとするところに、彌五郎ひまなくつゝと入り、瀧口がこまたをかいてはなじろにおしするゐたり。いきほひしたる瀧口、あへなくまけしかばしばらく相撲ぞなかりける。（曾我物語）

❸中納言伊實卿、相撲競馬などをこのみて、學問なんどをばせられざりけるを、父のおとゞ伊通公、常に勘發したまひけれども、猶しひられざりけり。その時相撲なにがしとかやいふ上手ありけり。敵の腹へかしらを入れて、必くじりまろばしければ、これによりて、腹くじりとぞいひける。件の相撲を忍びやかに召しよせて、この中納言が相撲をしのび好むがにくきに、くじりまろばかせ、さらば縣頭すべし。しからずばなくなさんずるぞと、仰せ合はされにけり。則、中納言に、汝が相撲好むに、この腹くじりとつがひて勝負を決すべし。勝ちたらばわれ制止する事あるべからず。負けたらんにおきては、永くこの事停止すべしとのたまひければ、中納言おそれをなして、かしこまりておはしけり。さる程に、腹くじり召しいだされて、やがて決せられ

ける程に、中納言は腹くじりが好むまゝに、身を任せられければ、悦びてくじり入りてけり。その後中納言、腹くじりが四辻をとりて、前へ強くひかれたりければ、頭もなれぬばかりに覚えて、やがてうつぶしにたふれけり。おとゝ興さめ給ふ。腹くじりは返電しにけり。その後中納言、相撲制止の沙汰なかりけり。（成季）

●チヽこりや今日の相撲を、ふつて遣らざ成るまいわの。ハヽア、彼とおれとが立合ふこそ幸、美しう振つてやり、あいつに勝を譲つておいて、其上で退引させず、頓むが捷徑上分別、とは云へ名取の鉄が最、どう魂膽してなりとも、投げ殺さにや成らぬ相撲、云はゞ一生懸命の、大事の相撲を命故に、振つてやる猪名川が、心の内の切なさ汚なさ、摩利支天にも見放され、相撲冥加に盡きたのかと、思ひ廻せば廻す程、空恐ろしき日惜しさ、思はず拳を握り詰め、身を顫はして男泣き。（浄瑠璃、千両幟）

●大木戸指して行く内に、濡髪〳〵〳〵、放駒〳〵〳〵、是今日の結びの関と、内外の評判取々に、どちらが勝つか知らねども、一度にどつとときの聲、木戸はもやつく果て太鼓、明日もとうからどんからの、音にもまれて諸見物、潮のわくが如くにて。（浄瑠璃、双蝶々）

●秋の野の錦のまはし角力草所せきわき小結の露。（赤良）

●勇むらしよらば蹴はやの勢にかたづなのみの宿禰方かも。（貞久）

●野角力のありたるあとに野分して風にくみあふ薄刈萱。（乗安）

●大きな男ふんどしをねだるなり。（川柳）

●同を四五人でもつへぼ相撲。（同）

●土俵入りまける景色は見えぬなり。（同）

●死んだかと思へば起る角力取。（同）

●角力取一つ所をふんで居る。（同）

●横鼻褌を故郷へかざる角力取。（同）

●假借で関取二人ぐら〳〵し。（同）

●すまふとりだの宿なしだのと、穢多や番太の子ではない。（俗諺）

●他人の横鼻褌で相撲とる。（俚諺）

●脳なしの振り角力。（同）

●王孫清暑不レ勝レ間。終日宮中樂戯間。竟抱二強弱一観二勝負一。故将二角觝一逞二愚頑一。相當兩々無二優劣一。輪收齊々有二唉顔一。非二是戰場排二劍失一。特教二英勇逞一二機關一。（失名氏）

●角力ほど立合ふ鶴をながみては砂をつかんで戻るひな人。

●我慰は相撲太鼓をかつぐ人かた思ひにて過行ぞうき。（千種花）

●秋の野の錦のまはし角力草所せきわき小結の露。（赤良）

●勇むらしよらば蹴はやの勢にかたづなのみの宿禰方かも。（貞久）

●野角力のありたるあとに野分して風にくみあふ薄刈萱。（乗安）

●大きな男ふんどしをねだるなり。（川柳）

●同を四五人でもつへぼ相撲。（同）

●土俵入りまける景色は見えぬなり。（同）

●死んだかと思へば起る角力取。（同）

●角力取一つ所をふんで居る。（同）

●横鼻褌を故郷へかざる角力取。（同）

●假借で関取二人ぐら〳〵し。（同）

●すまふとりだの宿なしだのと、穢多や番太の子ではない。（俗諺）

●他人の横鼻褌で相撲とる。（俚諺）

●脳なしの振り角力。（同）

●王孫清暑不レ勝レ間。終日宮中樂戯間。竟抱二強弱一観二勝負一。故将二角觝一逞二愚頑一。相當兩々無二優劣一。輪收齊々有二唉顔一。非二是戰場排二劍失一。特教二英勇逞一二機關一。（失名氏）

●角力ほど立合ふ鶴をながみては砂をつかんで戻るひな人。

●我慰は相撲太鼓をかつぐ人かた思ひにて

●慶場処戯関程好。機得二天顔一笑開一。角觝時選罷。宴。巻班出二殿戯一花回。（楊萬里）

〔すみ〕墨

松煤。黒染。松煙。黒玉。半圭。烏金。落レ紙。吐レ魚。畫掌。する墨。すみがき。うばたま。墨染。墨繩。すみつき。すみいろ。

●法盛は亀山殿にすぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひも聞えず、哀なる程の御ありさまにて、墨をすりたらんやうなる空の気色のうとましげなるを、ながめさせ給ひなどするに、例の中将そぼちまゐりて、侍めくもの一二人、弓などもたせて、御宿直つかうまつらせ侍るべし。（増鏡）

●伏姫はなか〳〵に、見るもゆゝしく疎ましくて、絶えて言葉もかけたまはず、石室の端近うゐて、硯に墨をすりながし、殊りすくなくなりにたる、料紙の数を引き延ばして、わがうへ、櫃者の示現まで、辞みちかく義理深く、いと哀にぞかき給ふ。（馬琴）

●それにつけても、誠に御車のさまこそ、又世にたぐひなく候ひしか。御くつに至るまで、たゞ人の見物になるばかりこそ、後にはもてあるくと承りしか。さて御給遊ばしたりしさまにけうあり。さはしり車の輪には、薄墨にぬらせ給ひて、大さのほどやなど、しろしには墨をにほはせ給へりし、げにかくこそかくべかりけれ。猶ねぶたさもしらず。あぶらさしそへつゝ見もてゆくに、遠き世の人も、唯さし向ひ語らふ心地す。さうし作りてなかしきふしん、あるはふと思ひえたる事などなば、墨かきつけなどするもをかし。（慶足）

●黒き紙に、夜のすみつきもたど〳〵しければ、ひきつくろふ所もなく、筆にまかせておしつゝみて出し給ひつ。（紫式部）

●実盛つねに申しいは、六十に餘りて軍をせば、若殿原のあらそひて、先をかけんもや生中當に無筆ぞと、偽る筆の毛を吹いて、疵を求むる類ひかや。（浄瑠璃、碁盤太平記）

●慶場処戯関程好。機得二天顔一笑開一。角觝時選罷。宴。巻班出二殿戯一花回。（楊萬里）

〔すみ〕墨

松煤。黒染。松煙。黒玉。半圭。烏金。落レ紙。吐レ魚。畫掌。する墨。すみがき。うばたま。墨染。墨繩。すみつき。すみいろ。

●法盛は亀山殿にすぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひも聞えず、哀なる程の御ありさまにて、墨をすりたらんやうなる空の気色のうとましげなるを、ながめさせ給ひなどするに、例の中将そぼちまゐりて、侍めくもの一二人、弓などもたせて、御宿直つかうまつらせ侍るべし。（増鏡）

●伏姫はなか〳〵に、見るもゆゝしく疎ましくて、絶えて言葉もかけたまはず、石室の端近うゐて、硯に墨をすりながし、殊りすくなくなりにたる、料紙の数を引き延ばして、わがうへ、櫃者の示現まで、辞みちかく義理深く、いと哀にぞかき給ふ。（馬琴）

●それにつけても、誠に御車のさまこそ、又世にたぐひなく候ひしか。御くつに至るまで、たゞ人の見物になるばかりこそ、後にはもてあるくと承りしか。さて御給遊ばしたりしさまにけうあり。さはしり車の輪には、薄墨にぬらせ給ひて、大さのほどやなど、しろしには墨をにほはせ給へりし、げにかくこそかくべかりけれ。猶ねぶたさもしらず。あぶらさしそへつゝ見もてゆくに、遠き世の人も、唯さし向ひ語らふ心地す。さうし作りてなかしきふしん、あるはふと思ひえたる事などなば、墨かきつけなどするもをかし。（慶足）

●黒き紙に、夜のすみつきもたど〳〵しければ、ひきつくろふ所もなく、筆にまかせておしつゝみて出し給ひつ。（紫式部）

●実盛つねに申しいは、六十に餘りて軍をせば、若殿原のあらそひて、先をかけんもや生中當に無筆ぞと、偽る筆の毛を吹いて、疵を求むる類ひかや。（浄瑠璃、碁盤太平記）

●ア、聲高な合點ぢや、請取りせんと駈け入るも、人は見ずやと硯水、滝本流の墨也や生中當に無筆ぞと、偽る筆の毛を吹いて、疵を求むる類ひかや。（浄瑠璃、碁盤太平記）

㉓する墨の色しみえずば水堂の流れての世の跡なとめゝや。（土御門院）
●する墨もおつる涙に洗はれて戀しとだにもえこそかゝれね。（永實）
●しのばれんことぞともなき水ぐきのたび〳〵袖に墨の付く哉。（後恩）
●しら浪に墨のいろなる島の島筆もおよばゝ絵にかきてまし。（阿佛尼）
●するまゝにくなるおのが色見せて墨もまなびの道教へけり。（宴長）
●おのづから老せぬ宿のすゝみとて千代もにほはせ松の煙を。（春海）
●中々に色どる筆ぞけたれけるたゞ墨がきの心たかさに。（同）
●たくぶすましらぎの墨の舟かたも棹かちほさぬ貫なりけん。（諸平）
●うつしつる人こそ忍べうす墨のゆふ露ふかき秋はぎのはな。（同）
●世にすめばうきことにのみなれ衣早くぞ墨にそむべかりける。（長流）
●みどり子の墨かいつけし硯かな。（蓼太）
●御秘蔵に墨をすらせて梅見かな。（其角）
●空は墨に高根のざきの郭公。（風雪）
●墨付けし百灯をなくさりくす。（越人）
㉔石経の墨を添へけり初しぐれ。（丈草）
㉕草の戸の年とるものや墨と筆。（松風）
●花を見る人の秋に墨つけん。（移竹）
●香は墨にとゝめて梅の行方かな。（白珍）
●白梅や墨芳しき渦鶴翁。（蕉村）
●昼に墨つく稚兒のすゝみかな。（千那）
●千代へても色うるはしきふる墨は松の烟にねればなるらん、（文政堂）
㉖墨と硯はこひなかなれど、人が水さしや薄くなる。（俗諺）
㉗雨やみて日も寺小屋の裏あがり墨する雲もなく時鳥。（東作）
●月ならで雲の上まですみのぼるこれは如何なる油煙たるらん。（貞柳）
●五月雨に硯も水のひた〳〵と庭にいけつき空はする墨。（かくれん坊）
●薄墨のえならぬ雲の足ばやに往來の人もかける夕立。（孫彦）
●奈良墨を枕にかさん筆つ虫我が文机に今宵來てなく。（同）
●玉章を泪もてかきくどくには墨よりも濃づ日こそするなれ。（同）
㉘墨呼、墨豈易レ譏哉。来庵之譏二孕墨一何其津々也。夫古今唯此墨也、其論二諸筆一而落二諸紙一也。人人皆然、而能爲者、匪々風指、何哉、蓋川レ墨有レ法、而法不レ綿レ墨、蓋筆之力、透二紙之背一、而不レ滲於

（土御門院）（松風）（移竹）（白珍）（蕉村）（千那）（文政堂）（貞柳）（孫彦）（同）（同）（同）（同）（同）（同）（同）（同）（俚諺）（同）（同）

レ右、墨之爲レ能也、方領之利二乎鳥迹一、未レ有レ墨也。六籍皆竹簡漆書、亦未レ有レ墨也。有レ墨而證能否形焉。李之棨、棄之緑、張之草、鍾王楮顛皆與行狎、然後墨之態極矣。至二於蘇米一、專以墨成レ字、山谷謂東坡用レ墨太豐、不二其然一乎。增與レ董、則白謂レ古墨法一、而墨之能蟬遷其、總之、皆能焉者也、能者之難二遽如一レ此、其墨不レ可二常視一。於レ是知二之不一而捐レ之、則墨自易レ位、後之學者、安從而索二其墨一哉。明清人之筆未二必盡能一也、而其墨猶レ可レ觀矣。凡此墨之過レ海而東、有レ佳有レ惡、有眞有レ贋、有レ可レ法、有不レ足レ取、墨豈易レ譏哉。是米庵所二以搜羅指摘一再而不レ已也歟。而勞及二九研瓶滴一、亦墨之浸淫者焉耳。夫米庵之墨、已捐二之腕矣。而又譏二之曰、用相證左、染横淋漓、乃能不レ貧於二此墨一不レ然則長爪產還之罰、噪々者何限。蹙曰有レ墨、而腕無レ墨、將焉用レ之、余是以推二服米庵一也。而米庵特レ紙、使二余一言一焉。余曰與レ腕皆無レ墨者、捫レ腹柒レ之、不レ得二一點一安能著二其意一。雖レ然、於二歷代能者之跡一、頗嘗覽觀、是其眼則猶有レ墨也。於レ是乎言。時文政丁亥仲冬十四日、寒其墨渠、可レ告、是之爲レ能也、方領之利二乎鳥迹一、未レ有レ墨也。六籍皆竹簡漆書、亦未レ有レ墨也。有レ墨而證能否形焉。李之棨、棄之緑、張之草、鍾王楮顛皆與行狎、然後墨之態極矣。至二於蘇米一、專以墨成レ字、山谷謂東坡用レ墨太豐、不二其然一乎。增與レ董、則白謂レ古墨法一、而墨之能蟬遷其、總之、皆能焉者也、能者之難二遽如一レ此、其墨不レ可二常視一。於レ是知二之不一而捐レ之、則墨自易レ位、後之學者、安從而索二其墨一哉。明清人之筆未二必盡能一也、而其墨猶レ可レ觀矣。凡此墨之過レ海而東、有レ佳有レ惡、有眞有レ贋、有レ可レ法、有不レ足レ取、墨豈易レ譏哉。是米庵所二以搜羅指摘一再而不レ已也歟。而勞及二九研瓶滴一、亦墨之浸淫者焉耳。夫米庵之墨、已捐二之腕矣。而又譏二之曰、用相證左、染横淋漓、乃能不レ貧於二此墨一不レ然則長爪產還之罰、噪々者何限。蹙曰有レ墨、而腕無レ墨、將焉用レ之、余是以推二服米庵一也。而米庵特レ紙、使二余一言一焉。余曰與レ腕皆無レ墨者、捫レ腹柒レ之、不レ得二一點一安能著二其意一。雖レ然、於二歷代能者之跡一、頗嘗覽觀、是其眼則猶有レ墨也。於レ是乎言。時文政丁亥仲冬十四日、寒其墨渠、可（山陽）

㉙墨時長笑王會稽。野鷺荷膠汗二刀几一。幕年却得二庾安西一。自眠二家雖一圍二六紙一。二子風流冠二當代一。顧與二兒童一爭二墨喜一。羲王十入已龍飛。嗜好晩將二蛇劍一比。我生百事不レ排レ眼。時人謾誣云工レ此。世間有二癖念雖無。傾二身際一簡光堪レ鄙。一生當二著幾綱屐一。定心可爲二微物一起。此墨足二支三十年一。但恐風雷侵二髮齒一。非二人摩一墨墨磨レ人。緋旭一頭髮可レ添秋來レ禿。（高啓）

【すみれ】菫

菫菜。菫葵。苦菫。紫菫。水菫。楚葵。獨芹。旱芹。膨根。苦菜。花すみれ。すまひぐさ。こむらさき。すみれさく野。草のゆかり。新むらさき。つぼなまじり。にほふすみれ。むらさきの野。えげみが下。袖につみ入る。

㉚すみれ、二種あり。いづれもよろし。葉の細くてながきは殊によろし。ひろくて短きは色あさし。これをつぼすみれなりといふ人もあり。さる事にや。つぼすみれ、すみれ、もと一品にて、此花のいたくひろがらざるよりいふにもあるべし。から國ぶみには、菜の部にいれたり。若葉をくふ事ならんかし。大かた花は折るとこそいへ。つねとはいはざるを、此花にしもしかいふは、菫いとみじかくて、折るとはいふべくもあらぬさまなればなり。しかるを此あたりのもの　り人、なま〳〵に菜の類なる事

改稿。落柿。落屋。浮生。疑遊。

せいする 成美 せ ノ 部

くもりすくも。
（国学丸）

の花より和にすらさん花野の旅の宿のこと

（国学丸）

上井数く和は閨にめれ。明しく森さ歩めり。波痕棒。紙のやうれ、森なり折ら。疑は五。

のつい波痕棒。紙は旅の森より折ら。疑は五。

川の蓬しづくは、旅の軒の玉水かと寒に沈

にして常夢を深し侍りけり。中略（第て耳もとろつ

ろ返涙を深し侍りけり。と深つうして時、城春

一時の蓬となる。国敗れて山河あり、城春

り。倩も家はすくる。つて此の城に籠り、功名

は利家が城をめぐり、詩箭の下にて大河

に落ら入る。麻幹が羽織は法が綿を国て

は北上川、雨部より流る、大河なり。法川

、雨部目なし国め、実な所ぐと見ゆ。

ござる。

（国学丸）

の花より和にすらさん花野の旅の宿のこと

くもりすくも。

（国学丸）

上井数く和は閨にめれ。明しく森さ歩めり。波痕棒。紙のやうれ、森なり折ら。疑は五。

のつい波痕棒。紙は旅の森より折ら。疑は五。

川の蓬しづくは、旅の軒の玉水かと寒に沈

にして常夢を深し侍りけり。中略（第て耳もとろつ

ろ返涙を深し侍りけり。と深つうして時、城春

一時の蓬となる。国敗れて山河あり、城春

り。倩も家はすくる。つて此の城に籠り、功名

は利家が城をめぐり、詩箭の下にて大河

に落ら入る。麻幹が羽織は法が綿を国て

は北上川、雨部より流る、大河なり。法川

、雨部目なし国め、実な所ぐと見ゆ。

ござる。

ゆめの雪。山河。家雁。

かしが。たち。たのまれぬ雨。未の雨。くたち

ありし。ふおもかげ。

もり。

せいする 成美 せ ノ 部

疑遊。

浮生。興し。

落屋。

落柿。

改稿。

の花なれうかよ、雪に先歌のの内に余谷の雀

て、雪の秋の川なふ松ふ。

の雁なれ風況等のしに今は風ねの磯に秋し

ゆくすくせ。

ゆめの雪。山河。家雁。

かしが。たち。たのまれぬ雨。未の雨。くたち

ありし。ふおもかげ。

もり。

せいする 成美 せ ノ 部

疑遊。

浮生。興し。

落屋。

落柿。

改稿。

の花なれうかよ、雪に先歌のの内に余谷の雀

て、雪の秋の川なふ松ふ。

の雁なれ風況等のしに今は風ねの磯に秋し

の寒しきに御心を悩さゞ時移り事去り楽みつきて悲み来る。天上の五衰、人間の一炊、只夢かとぞ覚たる。（大平記）

❷昨日は東岡のふもとに華を並べて十万余騎、今日は西海の波の上に屍を曝して七千余人、雲霧茫々として青天已にくれなんとす。孤島に夕ぎりへだて、月海上に浮べり。磯浦の波なわけ　塩に引かれて行く船は半天の雲に遇る。（平家物語）

❸昔は殿山の春の園に、共に詠めし花の色、移れば変るならひとて、今は蓬莱の秋の潤に、ひとり詠むる月影も、濡るゝ顔なる袂かな。あら恋しのいにしへやな。（謡曲、楊貴妃）

❹それ春の花の梢に栄え、秋の月の水底にしづむも、世のはかなさのありさまな、見てもあはれや重衡の、そのいにしへは雲の上、かけても知らぬ身のゆくへ、波にたゞよひ舟にうき、さらばよるべのよそならで、ありしにかへる有様かな。（謡曲、千手）

❺あはれやげにいにしへは、驕慢もつとも甚だしう、翡翠のかんざしは、朝郎とたなやかにして、馬棚の春の風になびくが如く、また落雪の嚊は、露を含める糸萩の、かことばかりにちり初むる、花よりもなほめづらしや。今は民間しづの女にさへ穢なまれ、賤人に near なさらし、うれしからぬ月日身につもつて、百年の態となりて候ふ。（謡曲、卒都婆小町）

❻いたはしやな小町は、さもいにしへは遊女にて、花のかたちやう、柱の眉攣青うして自粉を施さず、羅綾の衣多うして宮殿の間に侍りしぞかし。歌を読み詩を作り、酔をすゝむる杯は、漢月袖に静なり。まことに優なる有様の、いつその程にひきかへて、頭には雪蓬をいたゞき、嘲弄たりし雨鬢も、はだへにかけて墨みだれ　艶々たりし蛾眉も、遠山の色を失ふ、百年に二年移り変る世の盛衰、義理部を落ち給へば、落葉を拾ふ山縁も無し、智恩信の主君なれば、我とても外ならずと、何向して打過ぐる。（浄瑠璃、鎌倉実記）

❼世の中をつねなきものと今でしろならの都のうつろふ見れば。（万葉）

❽荒れにけり哀幾よの宿なれや住みけん人のおとづれもせぬ。（古今）

❾古のしづのをだまき繰しきもよきも盛はありしものなり。（同）

❿昔見し妹がかきれはあれにけりつばなまじりの菓のみして。（公実）

⓫古のおもかげかよふ雲の上の月に見し世の春をとはゞや。（時経）

⓬なれきつる八十の春も哀しれ三代の昔の花のおもかげ。（頼意）

⓭秋の夜の月は昔の光にて見る心のみありしにはにぬ。（末長）

⓮昔きくたにには宮の花ざかりあれにし後はおきつしらなみ。（契沖）

⓯鹿背山に春咲花のひとざかりうつりもゆくか恭仁の宮人。（長流）

⓰ふるさとゝあれゆくやどなたづぬれば軒のしのぶに春雨ぞふる。（通運）

⓱思ひ出るよめりの時の丸絵も今にしらがのぜとふる姿。（定満）

⓲水のたる男ざかりもありきしをかはる淵瀬や老のみづばな。（青帆）

⓳花もはや再さかぬさくらにながばたらてはいけるかひなし。（万歳）

⓴いつの間にみどりの髪もそつみて柳ごしさへかくかみぬる。（便盛）

㉑千金の思ひなし、人だにもわづか五りんにかはる世の中。（友信）

㉒朧門の威勢さんまの一盛り。（川柳）

㉓撰ばれ入りし二八の春、うつされ来ては六十の秋、空しき床に老いはて、音をのみ泣くぞあはれなる。（俗謡）

㉔芙蓉花おとろへて、露の玉ひかりなし。今は見えじなしとも、うとき人にはわらはれん。（同）

㉕驕るもの久しからず。（鶴澤）

㉖盛者必衰。

㉗洛陽城東桃李花。飛来飛去落二誰家一。洛陽女兒惜二顔色一。行逢二落花一長歎息。今年花落顔色改。明年花開復誰在。已見松柏摧為レ薪。更聞桑田変成レ海。古人無二復洛城東一。今人還対二落花風一。年々歳々花相似。歳々年々人不レ同。寄レ言全盛紅顔子。応レ憐半死白頭翁。此翁白頭真可レ憐。伊昔紅顔美少年。公子王孫芳樹下。清歌妙舞落花前。光禄池臺開二錦繍一。将軍楼閣画二神仙一。一朝臥レ病無二相識一。三春行楽在二誰辺一。宛転蛾眉能幾時。須臾鶴髪乱如レ絲。但看古来歌舞地。惟有二黄昏鳥雀悲一。（劉廷芝）

㉘玉柚傾国粉黛空、重巒青山遠二故宮一。武帝去来紅袖塞。野花黄蝶領二春風一。（王建）

㉙越王勾践破二呉帰一。義士還二家錦衣一。宮女如レ花満二春殿一。只今惟有二鷓鴣飛一。（李白）

〔せいぢ〕政治

政道。政策。政體。仁政。善政。治國。治民。治世。統治。統御。懐柔。平天下。まつりごと。しろしめす。うしはく。安國しらす。

㉚古のかしこき御代には、即、内裏に草を葺き、軒をだにも整へず。煙の乏しきを見給ふ時には、隈ある貢物をも免されき。是卽民を憐み、國を助けたまふによりてなり。楚章華の臺をたて、黎民散け、秦阿房殿を起しては天下亂るといへり。茅茨剪らず、柴椽斷らず、舟車飾らず、衣服文なかりける世もありけんものを、されば唐の太宗の驪山宮を作りて、民の貧をや悼らせ給ひけん、遂に臨幸なくして、瓦に松生ひ、壁に蔦茂りて、止みにけるには相違かなと

㉛柳塘烟起日西斜。竹浦風来雁弄沙。楊帝春游古城在。堤辺唯見緑楊花。

ぞ、人申しける。（平家物語）

●凡政道といふ事は、厚くにしるし侍れど、正直慈悲を本として決断の力あるべきなり。これ大照太神の明なる御教なり。決断といふにとりてあまたの道あり。一には其の人を撰びて官に任ず。官にその人ある時は、君は垂拱してあります。されば本朝にも異朝にも。これを治世の本とす。二には國郡を私にせず。分つ所必、その理のまゝにす。三には功あるあれば必、賞し、罪あるあれば必、罰す。これ等を動めず悪を懲す道なり。これに一もたがふを亂政とはいへり。（親房）

●日の前なる人の、悪をやめ、悪をほどこし、道をたゞしくせば、その化とほく流れんことをしらざるなり。禹のゆきて三苗を往せしも、軍をかへして、徳をしくにはしかざりき。（兼好）

●そもノ〳〵号令を以て、世を治めし始めといつは、人皇の御代始りても、御當社の御神力なり。然るに神功皇后三韓をしづめ給ひしより、同じく應神天皇の御聖運、御在位も久し。國富み民も、豊に治る天が下、今も絶えせの御代とかや、上要上の月輪より、下萬民に至る迄、榮みの聲つきもせず。（謡曲、弓八幡）

●凡政道といふ事は、厚くにしるし侍れど、正直慈悲を本として決断の力あるべきなり。これ大照太神の明なる御教なり。決断といふにとりてあまたの道あり。一には其の人を撰びて官に任ず。官にその人ある時は、君は垂拱してあります。されば本朝にも異朝にも。これを治世の本とす。二には國郡を私にせず。分つ所必、その理のまゝにす。三には功あるあれば必、賞し、罪あるあれば必、罰す。これ等を動めず悪を懲す道なり。これに一もたがふを亂政とはいへり。（親房）

●日の前なる人の、悪をやめ、悪をほどこし、道をたゞしくせば、その化とほく流れんことをしらざるなり。禹のゆきて三苗を往せしも、軍をかへして、徳をしくにはしかざりき。（兼好）

●そもノ〳〵号令を以て、世を治めし始めといつは、人皇の御代始りても、御當社の御神力なり。然るに神功皇后三韓をしづめ給ひしより、同じく應神天皇の御聖運、御在位も久し。國富み民も、豊に治る天が下、今も絶えせの御代とかや、上要上の月輪より、下萬民に至る迄、榮みの聲つきもせず。（謡曲、弓八幡）

●凡政道といふ事は、厚くにしるし侍れど、正直慈悲を本として決断の力あるべきなり。これ大照太神の明なる御教なり。決断といふにとりてあまたの道あり。一には其の人を撰びて官に任ず。官にその人ある時は、君は垂拱してあります。されば本朝にも異朝にも。これを治世の本とす。二には國郡を私にせず。分つ所必、その理のまゝにす。三には功あるあれば必、賞し、罪あるあれば必、罰す。これ等を動めず悪を懲す道なり。これに一もたがふを亂政とはいへり。（親房）

●日の前なる人の、悪をやめ、悪をほどこし、道をたゞしくせば、その化とほく流れんことをしらざるなり。禹のゆきて三苗を往せしも、軍をかへして、徳をしくにはしかざりき。（兼好）

●そもノ〳〵号令を以て、世を治めし始めといつは、人皇の御代始りても、御當社の御神力なり。然るに神功皇后三韓をしづめ給ひしより、同じく應神天皇の御聖運、御在位も久し。國富み民も、豊に治る天が下、今も絶えせの御代とかや、上要上の月輪より、

悲しみなん。民を制する事此理にひとし。されば治まる九重に、猶も非常を戒めの、水上清き堀川御所、當時鎌倉の殿命にしたがひ、秩父の庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、兼ては民の公事訴判、私のはからひなく、道にくもらぬ十寸鏡、智仁の勇士とかやけり。（浄瑠璃、兜軍記）

●天にはもいほつ綱はふ萬代に國しらさんといほつ綱はふ。（年是）

●君が世はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のさゝんかぎりは（国房）

●曇りなきみよの光はかくしこそ仰ぐ朝日ものどかなりけれ。（基良）

●君が世をそらにしりてや久方の天てる月もかげをそふらん。（後頼）

●東人の荷前のにのをたれもみな榮しかる世なあふがざらめや。（千藤）

●大御代は靜かりけり丈夫が手にまくともものおともたえつゝ。（同）

●君が代は十日の雨にうるほひ、五日の風になびく民草。（當暎）

●いにしへにありきあらずはしら露の恵にあける武蔵野の原。（正房）

●ふく風も治まれる世の限なきかずにとら

にやむさしの一茎。（貫長）

●天の下治まる御代の時なればみ山のおくしもみよかりけり。（論蓮）

●十日めの雨には道のぬかりめの少しもあらぬ御代ぞかしこき。（三笑）

●九代まで栄えな見しは世の中のやすき時にや恵み置きけん。（千種庵）

●まつすぐにはびこり増る君が代は末まで強き竹の根がらみ。（安勝）

●もろこしはかゝみやすらん萬代とふみのばしたるあし原の國。（芳志）

●君が代の春は何國のはてまでもしたからめぐむ野邊の若草。（炭方）

●世の民のなげきは捨てず髪を手に取りあげて聞く人ぞ尊き。（綾尚）

●淀君は張輦淺く出てしやべり。（川柳）

●堯舜の世には錐前直し来ず。（同）

●哀公問政。子曰、文武之政、布在方策。其人存、則其政挙、其人亡、則其政息。人道敏政、地道敏樹。夫政也者、蒲盧也。故爲政在人、取人以身、脩身以道、脩道以仁。仁者人也、親親爲大。義者宜也、尊賢爲大。親親之殺、尊賢之等、禮所生也。在下位不獲乎上、民

不可得而治矣。故君子不可以不脩身。思脩身、不可以不事親。思事親、不可以不知人。思知人、不可以不知天。天下之達道五、所以行之者三。曰、君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者、天下之達道也。知仁勇三者、天下之達德也。所以行之者一也。或生而知之、或學而知之、或困而知之。及其知之、一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之。及其成功、一也。子曰、好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。知斯三者、則知所以脩身。知所以脩身、則知所以治人。知所以治人、則知所以治天下國家矣。凡爲天下國家、有九經。曰、脩身也、尊賢也、親親也、敬大臣也、體群臣也、子庶民也、来百工也、柔遠人也、懐諸侯也。脩身則道立、尊賢則不惑、親親則諸父昆弟不怨、敬大臣則不眩、體群臣則士之報禮重、子庶民則百姓勸、来百工則財用足、柔遠人則四方歸之、懐諸侯則天下畏之。齊明盛服、非禮不動、所以脩身也。去讒遠色、賤貨而貴徳、所以勧賢也。尊其位、重其禄、同其好悪、所以勧親親也。官盛任使、所以勧大臣也。忠信重禄、所以勧士也。時使薄斂、所以勧百姓也。日省月試、既廩稱事、所以勧百工也。送往迎来、嘉善而矜不能、所以柔遠人也。繼絶世、舉廃国、治乱持危、朝聘以時、厚往而薄来、所以懐諸侯也。凡爲天下国家有九経、所以行之者一也。

●曰王如知此、則無望民之多於鄰國也、不遠霊時、穀不可勝食也。數罟不入洿池、魚鼈不可勝食也。斧斤以時入山林、材木不可勝用也。穀與魚鼈不可勝食、材木不可勝用、是使民養生喪死無憾也。養生喪死無憾、王道之始也。五畝之宅、樹之以桑、五十者、可以衣帛矣。雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者、可以食肉矣。百畝之田、勿奪其時、數口之家、可以無飢矣。謹庠序之教、申之以孝悌之義、頒白者、不負戴於道路矣。七十者、衣帛食肉、黎民不饑不寒、然而不王者、未之有也。狗彘食人食、而不知檢、塗有餓莩、而不知發、人死、則曰非我也、歲

ちに年はくれにき

いふかなきわざならんかし。（尋花）

❸かくとは白雪梅の新知顔に咲く花を、手折つて来鳴く烏の、鳴音は口口千無識、年頭蔵発の禮を来ね、一節に満ふ蔵発は、久松が親許崎の久作、ヤ、親父様、せつかし大つごもり、殊に夜に入つてお出は、何でまた川でも行つてか。イヤ〳〵いつもは年明けてから祝にくれど、今年は俺も早う咲き、蔵発の禮を来ねるに、春も異なものと、どつちも外さぬ様に　境日の大つごもり、客衙の生花、且那様く上げましてたもり。（洋雑誌、葉春の門松）

❷なき人のともにしかくる年ならば暮れゆくけふはうれしからまし。（後輯）

❸こふるまにとしのくれぬればなき人の別やいとゞ深くなりなん。（貫之）

❸寒きものゝすがにしきことし被遠きかりなん春が別に。（宣旨）

❸悲しさはいとゞまさる別れにし今年もけふをかぎりと思くば。（恵慶）

❸春たつと聞くにも物の悲しきはこしの一年になればなりけり。（同）

❸くれてゆく年のはやせのなかみはしろ

❸三十二年初忌々。（同）

陸離梳皮底非、百部田園牛芬、空。唯有風月供ゝ狗、今年又無衣被中。（底龍無川）

已知之。一笑知此於我空。（塔寺阿遮識識字。摩訶唱利薩婆識詩。（来山）

❸衣上墻埃漫欲窃。客鬢何事命飄蓬。慈母新白。遊子禁顔識。遊紅、年路山川猶勝。（故園松竹又春風。（田都来作詠来計。病在来山為木中。（祝山）

❸今夜節除誠。明朝更迭年。（梅花笑永陵。杯酒滞猶親。（儒者侑各補。詩成益有神。（獨樓膜下剣。（雑詠、在浪人）（注国）

❸久客関人百事悔。春師幾日是殘冬。長安後無来往、報国門前獨掃松。（雑遊戯）

❸洗水茶銭数聴笠、風邊沽酒幾蘇紅。可ゝ憐陌上三千門美。断ゝ送年華一是暁鐘。（汪道昆）

❸一出都国、蔵非医。悲親消息定何如。京城風雪無人伴、獨別寒燈夜読書。（山陰）

❸幾度月溢月鉄。無ゝ端花落復花開。年光未必一例改、壮士悲歳暮哀。（松陰）

❸春去新来逆旦迎。百年生死夕光陰。燈頭淡酌郷愁酔、旅館旦々歳市催。（足蔵）

❸年波のよるひるとなく油断なく打ちかけ

ノ〳〵老のくれ候。（倉来）

❸いとはやもいでふ年よくれ〳〵にお名

れど、惜きもの哉。（法益）

❸其ならで今日を限りになが行く年はく

❸大晦日すかさず主手〳〵と来。（同）

❸大三十日そくオばかり最後なり。（同）

❸此容の顔が旦度いと安房いじ。（同）

❸大晦日のがたつぺはなかりけり。（同）

❸大三十日九尺二間にめつぱり〳〵。（同）

❸道祭はなん〳〵と大晦日。（同）

❸本所に蚊がなくなれば大晦日。（同）

❸大晦日節でも取てくる気なり。（同）

❸色変だのでくなといふ大三十日（同）

❸大三十日のまつ山。（春湖）

❸風なきたゝみよせてはかくる白波のいとなく過る月日なりけり。（出道）

❸はるなまらとしな性じもーとせの心すきびのとちめなりけり。（千陵）

❸けふのみとくれのるよはの大空にいづこなはかみとのゆくらん。（土湖）

❸泥牛にあふたびもおり年の夜。（色葩）

❸年経れど炊きて雑はさながら。（同）

❸思くはや流かれ矢は年の夜。（風雪）

❸残ほしとよむ人ゆかし年の夜。（同）

❸乞迫も山く鈴るか年の夜。（定菊）

❸江戸は江戸京は京にて年くれぬ。（許六）

❸古年のつゞく命や年の夜。（野坡）

❸月守もふるき枕に年経れぬ。（杉風）

❸大晦日定めなき非の定めかな。（西鶴）

❸来年は来年はとて経にけり。（露川）

〔せうねん〕少年

総角。垂髪。垂髫。妙齢。嬢子。弱冠。髫児。紅顔。

をさな子。わくご。うなゐ。うなゐはなり。みどり子。ちご。

❶ひとり郡蒐夫が枕を高うして、わらはべの戯れ見れば、こよなう心なぐさむわざなれ。年たちかへるあしたの空、松たてわたす大路に、千歳の緑を手にむしりて、散りうせぬ葉をうちちらし、稍春ふかき垣根のうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木柿の木とよびもてゆくは、おのが二葉の生前もと粗もし。午祭の鼓は初雷に先だち、いかのぼりの糸遊は大人も心ひかれたり。郭公なくや五月のあやめうちは、幟の数のあやめもわかず。行きかふ空の天河、ほしの手向の短冊には、草紙にあらぬ硯を洗ひ、荻の上葉の風よりも、唐撫楽の音の殺に、博多撫楽の手にとりあへず。貝まにしのむちうつまなく、ふりつむ雪をまろばしては、消えぬべき頭も報もなく、砕くる氷の上を滑るも、世わたりの危きにはまさりなん。鬼つゐぼに追ひ詰められて、ひとあしかさの間逃きにとらまり、かくれん房は葉てよりし、ふし柴部屋の隅にかゞむ。草履かくし小雪の唱歌も、鳥羽院のみことはに傳はれる事の懐しければ、いでや富貴利達のまじはりにめかこうして、孩提嬰児の賞に入らんとこそ。（蜀山人）

❷さてこの處に生るゝもの〻体態を見るに、七八歳より十五六歳を一期として衣服は肩と腰をぬひあげ、守袋に迷子札をつけたるもあり。頭髪は小判形に頂の眞中を剃りて四方髪多し。また四ところ結の蜻蛉髪もあり、芥子坊主もあれど、月代な剃り髪をゆふことを嫌ふ故、多くはばんばら髪にて、天窓には白雲たな引き、鼻の下に氷柱の下りたるもあり。弱きは強きに征せられて、これを鼠鬼大将と仰ぎ、樹に登るとき猿の如く、水を泳ぐとき河童の如く、草に隠るゝとき兎の如く、浴するとき鳥に倶たり。衣裳に襲鎧をいとはず。肢体は生疾を厭はず。犬をけしかけて捧をまはし、鼠を愛して鈴を鳴らさし、春は紙鳶に仮時を忘れて隣の梅花をちらし、夏は蝉を捕り蝙蝠をたさごの瓜弾して、笑はれんも後めたけれど、ひい〳〵たれ、ひとりこち〳〵ぬゐわざになん。然はあれど、泥の裘、塵の飯もまゝごとも、韓非子が筆にのこり、ふれ〳〵小雪の唱歌も、鳥羽院のみことはに傳はれる事の懐しければ、いでや富貴利達のまじはりにめかこうして、孩提嬰児の賞に入らんとこそ。（蜀山人）

❸さてこの處に生るゝもの〻体態を見るに、七八歳より十五六歳を一期として衣服は肩と腰をぬひあげ、守袋に迷子札をつけたるもあり。頭髪は小判形に頂の眞中を剃りて四方髪多し。また四ところ結の蜻蛉髪もあり、芥子坊主もあれど、月代な剃り髪をゆふことを嫌ふ故、多くはばんばら髪にて、天窓には白雲たな引き、鼻の下に氷柱の下りたるもあり。弱きは強きに征せられて、これを鼠鬼大将と仰ぎ、樹に登るとき猿の如く、水を泳ぐとき河童の如く、草に隠るゝとき兎の如く、浴するとき鳥に倶たり。衣裳に襲鎧をいとはず。肢体は生疾を厭はず。犬をけしかけて捧をまはし、鼠を愛して鈴を鳴らさし、春は紙鳶に仮時を忘れて隣の梅花をちらし、夏は蝉を捕り蝙蝠をたゝきおとして無益の殺生をたのしみ、秋は野辺に蜻蛉をおひ、冬は背門に氷を砕き、雪を圍め、炭を集むれども、これを煖にして害なよむことを好まず。貝身の務とするところ、朝の五つより昼の八つまで、机に向ひ筆をとれども、一書一點よくも書はず、人形の首もかき抱きれば、草紙へ水をかけて勘定をあはし出もせぬ小便にたび〳〵たちて傍輩の草履をかくし、ゆきたくもない厠へいつて帰宿の桃の木に心なかけ、大小便の番札もその破つきてせんかたなければ、筆をねぶること鉄漿をつけるが如く、手を捻り面を塗ること草紙より黒く湯は釉でかみ、土間を跣足であるき人の前へ出せば指をくはへ逡巡して袋を被つたる猫の如く、われより弱きを罵るとき膝をすゝめて昼かみそりの如し。雨は好みてぬかるみへ踏みこみて、雪踏の汚るゝを厭はず、或は障子を破り行燈に穴をあけ、壁をはせりて土をくひ、持佛を捜して線香をくふものありその罪ゆるしがたければ、師匠尊者已むを得ず、机に土せ茶碗に水を入れてもたする時、そら泣なして駈なしらず、笑をするふらるゝとき四隅をうごかして、身の為を思はず。されど此地の國法は罪あつて苦るゝときはやく脱げ去れば再責めず、或は背をうつに疲のつかぬやうにする故のみ痛まず。細引にてそつと縛り、押入戸棚へ入れておくなど刑罰の第一と、して、おほくは裏の行燈に火をともし、艾を見せて懲すのみ。皆これ天矢楔の開闢より、今に至つてこの處を管領し給ふ両親尊者、慈潤愚覚の作法なれば、至つて手ぬるき佛國なり。

（馬琴）

❹はしりいでたまひて、大將こそ宮いだき奉りて、あなたへぬておはせと、自、かしこまりて、いとしどけなげにのたまへば、うち笑ひておはしませ。いかでかみすのまへなほわたり侍らん。いときやう〳〵ならんとて、いだき奉りてぬたまへば、ひとも見ず。まろかほはかくさんとて、御袖してさしかくし給へば、いとうつくしうて、ぬて奉り給ふ。この宮のわかぎみと一つにまじりて遊びたまふを、うつくしみておはしますなりけり。すみのまのほどにおろし奉り給ふを、二の宮見つけ給ひて、まろも大將にいだかれんとの給ふを、三の宮、わが大將をやとひかへ給へり。宮も御覧じて、いとゞだりがはしき御有様どもかな。公の御ちかさまもりを、わたくしの隨身に、領せんと争ひ給ふよ。三の宮こそいとさがなくおはすれ。常にこのかみにきほひ申し給ふと、いさめきこえあつかひたまふ。大將も笑ひて二の宮はこよなくこのかみ心に、ところさり聞え給ふ。御こゝろふかくなんおはしますめる。御としのほどよりは、おそろしきまで見えさせ給ふなど聞え給ふ。うつたみて、いづれをもいとうつくしと思ひきこえさせ給へり。

（紫式部）

❺塚を守る悲鳴は秋風に飛び、電光朝露猶以て眼にあり。古墳をくに少年の人、生田の名にも似ぬ命。

（謡曲、求塚）

❻頻伽は倶舎の中よりも、其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結、千歳君と聞えしは、朝家鄰の御舎弟にて、今年十二のえとの馬、手綱かいくり静々と、春の野がけの乗姿、優しやかに美しく、ぼつとりとしてしほらしく、實にも武將の嫡とは、名乗りてしるき御器量や

（浄瑠璃、鎌倉三代記）

❼壁ざはりも、枝實を乱し入来る大星力弥、

まだ十七の前髪や、二つ巴の定紋に、大小立派やかに、さすが大星由良之助が、子息と見えしその器量、徐々と座に直り、たゞ御取次頼み存ると慇懃に相述ぶる。 (淨瑠璃、忠臣藏)

●橘の寺のなかやにいがゐねしうなゐはなりはかみ上げつらんか。 (萬葉)

●うなゐ子がはなちの髪 取りたてゝまさそめ川よ淵瀬かはるな。 (後撰)

●うらやましうきよりなりてうき身ともおもはず常にゑめるみどりご。 (蘆庵)

●いわけなき心にだにもわするなよおひ先とほく契ることのは。 (同)

●うなゐごがはなりの髪をなづる哉老にあえよと思ふ心に。 (春海)

●身のなかのうきことしらぬうなゐこにふたゝびかへる物としもがな。 (千蔭)

●弓箭おひ竹がみ峯のみさきおふわく子うつくし我見にせん。 (秋成)

●なに事か遊ぶあそばぬいさかひもなくぞ限のわらべの友 (言道)

●のなさなけも早なくなりし童さへ背におはるゝや樂しかるらん。 (同)

●蘆の葉を小舟につくりうなゐ子が心ならひの水あそびせり。 (諸平)

●なのこ子の無理言ふ雛かざり見。 (楞堂)

●雛の日に生れたる子のかほ見たし。 (滄藻女)

●生れ子の雛かざりけり假事。 (貝錦)

●少年の矢數とひよる念者ぶり。 (蕪村)

●奇特なる矢數の主や美少年、 (潤水)

●御相撲や五年前見し美少年。 (几董)

●舟あり川の隅に夕涼少年歌うたふ。 (素堂)

●花ならで子供の手折る氷柱かな。 (也有)

●少年の犬走らすよ夏の月。 (召波)

●見あぐれば姿よし野のはなすぢもさし通りたるちご櫻哉。 (流水)

●雪のやうにちるを悦び花をふんでなしまぬや是少年の人。 (友知)

●花の敦盛十六歳で、玉織姫を後にして、念がせ給ふは須磨の浦。 (俗謠)

●盛年再來らず。 (俚諺)

●間仇讐其首、寶劍不須磨。鐵粹青絲勒、金鞍白玉珂。識名都下遍。結客博場多。俠就胡姬宿。擲頭不復過。 (泄固)

●五陵年少出新豐、紫轡銀鞍耀玉驄。挾彈迴翔楊柳陌。馬蹄輕逐落花風。 (吳彥貞)

●殘生傷性老耽書。年少東來復起予。各據槁梧同不寐。偶然聞雨落階除。 (王安石)

●少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。 (朱熹)

●江樓別汝々爲童。野驛逢余余已翁。花下醉吟休草草。後期知得幾春風。 (茶山)

●出身仕漢羽林郎。初隨驃騎戰漁陽。孰知不向邊庭苦。縱死猶聞俠骨香 (王維)

●五陵年少金市東。銀鞍白馬度春風。落花踏盡遊何處。笑入胡姬酒肆中。 (李白)

●章臺春日晚。楊柳繫金鞍。年少輕離別。拾盃復探丸。 (綦正宮)

●傍人不識余心樂。將謂偸閑學少年。 (程顥)

●紅顏花妬美。色衰愛亦弛。 (南梁)

〔せつけん〕 節儉

儉約。節約。至儉。躬儉。纖儉。慈儉。積儉。飭儉。

つゞまやか。つゞまし。

●相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、すゝけたるあかり障子の破ればかりを、禪尼手づから小刀して、きり廻しつゝはられければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、給はりて、なにがし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候ふと申されければ、その男尼が細工によも勝り侍らじとて、猶一間づゝはられけるを、義景皆をはりかへ候はんは、遙にたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくやと重ねて申されければ、尼も後はさは〳〵とはりかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見ならはせて、心つけんためなりと申されける。いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を、子にてもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。 (兼好)

●何国にゐても、金銀さへ持ちければ、自由のならぬといふ事なし。殊更智者の大節季、何と分別しても濟み難し。無いといふゝから、錢が一文おかぬ棚をまぶりてから出所なし。これを思へば年中儉約をすべし。日に一文づゝ煙草にて伸ばしければ、一年に三百六十文、十年に三貫六百なり。此心から算用すれば、茶、薪、味噌、鹽、萬事に何程の竹家にても、一年に三十六夕の違あり。十年に三百六十夕、是に利をもかけて見るときは、三十年に積れば、八貫目あまりの銀高なり。惣じて少しの事とて、不斷道理の事には氣をつけて見るべし。 (西鶴)

●天智天皇、世につゝしみ給ふことありて、筑前國上座郡、朝倉といふ所の山中に、黑木の屋をつくりておはしけるを、木丸殿といふ。圓木にて造るゆゑなり。今大嘗會の時、黑木の屋とて、北野の齋場所につくる、かの時の例なり。民を煩さず、宮造も儉約なるべきといふよしなり。唐堯の宮に土の階を用ゐ、萱の軒をきらざりける例なり。 (十訓抄)

●儉と云ふは、諸事を内輪にすることなり。孔子の言に、節用と宣ひ、晏子が道には、殊に肝要とせり。竹の節は制あるものなり。用度の制を思惟して、竹の節の如く、是より外には出ずことなく、堅く分限を爲して其節度の過ぎざるを節用といふなり。王制に、量入以爲出、といへるも即ち節用の道なり。 (春臺)

●人の身帶を能くすることの傳法は、高きも賤しきも、萬事心得あることなり。千石領する人ならば、九百石にてまかなひ、百石づゝ年ごとにあまし置くべし。一家百兩づゝの入用ならば、九十兩にてまかなひ、十兩をあましおくべし。その他はよろづ儉約にありて、吝嗇にすべからず。儉はなすべきを致してかゝざるが儉約なり。吝はすべきをなせずして惜むが吝嗇なり。儉約は家を起し、吝嗇は家を倒す。 (淇園)

●絹も紬も着る事ならず。木綿蒲團も榮耀の至り、荒薦引いて起き臥しの身は憚はしよ奈良茶粥、精進潔齋樂入らず。晝夜にたつた二度の節事は尻からげ、行き來の中をちよこ〳〵走り、ちよこ〳〵〳〵ぬけて、落ちてあるもの唯置くな。轉げても土を掴んで起るは七つ起き、質をとらずば金貸すな。欲しい物は買はぬが德、月夜に夜仕事はせぬが損、稼ぐに追つ付く貧はなし。芥子み子にも割り木のたき様、必ず灰を取ることなかれ。捨つるものは何んにも

ない。鍋の蓋では細眉つくり、しべのされはしびれの妙薬、水なき井戸ははしこの入れ物、鼠の尾まで雛の頭、指せ干せ傘、人に貸すな燈籠、掃り木掃り鉢、砥石石臼薬研まで、日にこゝ見えれ貸す度に、へらずに戻る例は無し。（浄瑠璃、嫖多小女郎）

❿黒わけて袖に若葉をつむぎ島奢らぬ御代の春の巣しき。（面枝）

❶後指さゝれまじとて身代にかまける嫁がいぶす蚊遣火。（古吉）

❷倹約で一つ眼の下女を置き。（川柳）

❸お姿をとつてのけての御倹約。（同）

❹ない時に辛抱、ある時に節倹。（世諺）

❺犬々三年人一代。（同）

❻爪に火ともす。（同）

❼過二節倹一、尚素樸、思二仲尼之克己一、履二老氏之常足一、將使二心不一レ亂二其所一レ往、目不レ見二其所一レ欲、瞳二顔淵一簞珠玉、藏金于山、抵二璧于谷一、智巧不レ褒、璣珣不レ珍、所二以懲一レ惡勸一レ善、（司馬遷、本紀）

❽堪忍と二生物有一大敵一、人力と成物有一大限一、取之有レ度、用之有レ節、則常足。取之無レ度、用之無レ節、則常不足。物之多少由レ人。（許衡）

❾倹者省約爲レ禮之謂也。吝嗇窮急不レ恤之謂也。如施而不レ吝、倹而不レ吝、可レ矣。（顔氏家訓）

❶萬事無二問然一矣。非二欲食一而致二孝乎鬼神一、惡衣服而致二美乎黻冕一、卑二宮室一而盡二力乎溝洫一、萬事無二問然一矣。（論語）

❷士志二於道一、而恥二惡衣惡食一者、未レ足二與議一也。（同）

❸衣二敝縕袍一與二衣二狐貉一者一立而不レ恥者、其由也與。（同）

❹清廟茅屋、大路越席、太羹不レ致、粢食不レ鹽、昭二其儉一也。（左傳）

❺國奢示レ之以レ儉、國儉示レ之以レ禮。（禮記）

❻克儉二于家一。（書經）

【ぜに】錢

千金。青銅。泉流。流通。孔方。貨泉。鵝眼。方兄。阿堵物。鼓鑄。こがね。

❶御褒うたせ給ふついでに、若き殿上人どもを召して、これかれ心のひきゝにいどみ爭はせさせ給へば、あるは小弓雙六などいふ事まで、思ひ〳〵に勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御らんじて、さまざまの興あるのり物、ものどもたうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、修明門院の御かたへ、何にてもなのこどもに賜はせぬべかんのりものと、申させ給ひたるに、とりあへず、小き唐櫃のかなものしたるが、いとおもらかなるを參らせられたり。この御使のうへ人、何ならんといとゞおかしくて、片端ほのあけて見るに錢なり。いと心えずなりて、さとおもてうちあかみてあさましと思へる氣色しるきを、院御らんじおこせて、朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。いにしへより殿上の賭弓といふ事には、これなこそかけものにはせしか。されば今かけものと聞えたるに、これなしもいだされたるなん、いにしへの事知り給へるこそいたきわざなれと、ほゝゑみてのたまふに、さは悪しく思ひけりと、心ちさわぎておぼゆべし。（増鏡）

❷設夫れ一錢二錢を捨つるものは、一切二度の遊航に乗らせん。三錢四錢を捨つるものは三藏を自得して四難もこゝに易かるし。五錢六錢を捨つるものは、方に五侵に感通して、六際を超除せん。七錢八錢を捨つるものは、七難八苦を出離して、頓生菩提の機関にあはん。九錢十錢を捨つるものは、九品の浄刹に托生して、十界唯化の菩薩とならん。（馬琴）

❸次に、錢を奴の如くして、つかひ用ふるものとしらば、ながく貧苦をまぬかるべからず。君の如く、神の如く、恐れ尊みて、したがへもちふることなかれ。（兼好）

❹そも〳〵、人は、所願を成ぜんがために、財をもとむ。錢を財とすることは、願をかなふるがゆゑなり。所願あれども、かなへず、錢あれども、用ひざらんは、全く貧者とおなじ。（同）

❺金銀ばかりは徳つきて戻れば、もとかる事のかたきにはあらねど、かへす事のかたきより、金は借る事だに、たやすからず。（也有）

●船子機取は船歌うたひて、何とも思へらず。その歌。

春の野にてぞねをばなく、わが澤にて手を切る〳〵、摘んだる菜を親やまほるらん、蛸やくふらん。かへらや。よんべのうなぎがな。錢こはん。空言をしておぎのり薬をして、錢もてこず已だにこず。（土佐日記）

❷唯世を渡る爲なれば、假の命つながんとて、蘆を取運びて、この市に出づる蘆蝦におあし添へて召されよや。（謡曲、蘆刈）

❸春の夜の一時の、千金をなすとても、たとへはあらじ住吉の、松風微なし。金銀珠玉いかばかり、千顆萬顆の玉衣の、浦ぞ津守の宮柱。（謡曲、岩船）

❹是れ〳〵疑入らぬさきに錢しませう。これ旦那衆、はて手のわるい狸ねいり、酒代早うとゆり起す。まあよいわいの。たつた今寝入りばな、今夜は歸つて、あすでも取つたがよいわいのと、いへば又六腹を立て、ム、扨はあひぢやの、サアそなたから錢せうと、ぬだれかゝるその間に、塀の破れに月影の、白犬一匹見をふつて、笛の鮮をねらひ付け、くわへる所を又六どつこいと首玉おさへ、犬も人も此の屋敷は食ひ逃げの大よせ、罹りならぬともぎはなす。（浄瑠璃、女楠）

❺ぬらりこゝろりは鰻の蒲焼山椒味噌、筆平とは木曾殿の御内に今井すし、酒盛にかくれなき一騎當千の御着、磯うつ波のまくりのみ蜘手かくなは十文ぎりの、茶碗に一杯酒でも餅でもうまいものゝせい揃ひ、錢次第とぞ賞りにける。（同）

❻あすか川ふちせにあらわわがやどもせにかはりゆくしのにごりけり。（伊勢）

❼天地にあふるばかりのこがねもが世の人皆なあきたらはさん。（幸文）

❽帷子の願はやすし錢五百。（支考）

❾夏の葉やほたる抓めば錢のかず。（同）

❿香一爐蓮に錢を包みけり。（其角）

❶傳へ來て雛の貰や延喜錢。（同）

❷名月や十歩に錢を握りけり。（同）

❸葬や傾城買ひの溜る金。（越人）

❹財布から小判の耳や菊合。（支考）

❺古き世の錢拾ひけり桃のかげ。（侯吉）

❻初午や和銅の錢のまれに今。（存義）

❼さむしろに錢置く花の別かな。（几董）

❽金錢は泉の如く湧き出でよさあらば人にやりてくれ水。（赤眞）

❾金はありかけもほらうて置火燵とろ〳〵ねいりつかんとしの夜。（同）

❿流れ行く螢燭の金ほしいなあ一夜三百兩

幣帛、銭米。上假作銭貨通之、乃採銅山、銭親卿創、鋳而為銭、故使二四方気一地外国象一矣。銭之為レ物、有レ数有レ地、非積如レ山、流如レ川、動静有レ時、形体有レ常、市非レ便乏、不レ患二耗折一、雖レ朽衆鋳、不レ匱貨道、故能長久、為二事利一之用一、親愛如レ兄、字曰二孔方一、夫之則貧窮、得レ之則富饒、窓無レ窒而来、無レ足而走、解二廉鄙之囲一、銭多来処、銭少居レ後。諺云、銭是貧人。実此貨幣之謂乎。銭之為レ言泉也。百性日用、其源不レ匱、無レ遠不レ往、無レ深不レ至、真色実冠、変態百端、皆能順レ情、従レ欲、之唯銭、見レ我家兄、実不二敢親一、銭之所レ在、吉無不レ利、何必謝レ客、然後信矣。由レ是論レ之、可レ謂二神物一、無レ位而尊、無レ勢而熱、非二来門入一、豁如二銭之所一レ在、危可レ使レ安、死可レ使レ活、銭之所レ去、其可レ使レ廃、生可レ使レ殺。是故、金幣雑説、非レ銭不レ救、器仇鏃銀、非レ銭不レ解、今国実談、非レ銭不レ救。諺云、銭無二耳可一レ聞使二鬼成一レ也哉。（徐後）

●俗性人為二貨物之銭一、貨物共其所レ在、皆使二而独見一、役於二物一、一物若レ何。銭是也。

●銭もうけ有かないかときいふに。（同）

●なかんづく浮屠時分銭がなし。（同）

●手なぎつた金いつまでもやうにきえ。（同）

●ゑゝはきやう思へば此金うらめしい。（同）

●居候銭を拾ふて食ふし。（同）

●さるた産さながら銭しらはず。（同）

●御供料つまる所は銭の事。（同）

●猿の河原や小石を拾ふて、紙に包んで紙捻で締めて、姥が欲くさうりと人にて、姫心で銭らやと思うた、銭らやこさらぬ共小石。（俗諺）

●いけた井の上うら白も、銭がなければ見て通る。（同）

●安物買の銭失ひ。（俚諺）

●悪銭身に付かず。（同）

●銭ちる時は鬼をも使ふ。（同）

●銭金は他人。（同）

●銭は耳無くして聞く。（同）

●銭金に泊き物。（同）

●非銭氏銭、貧金惑衆、教其愛銭、以二一物一者何。銭是也。

●銭金は、天下の通宝なり。（同作）

●ぐん〳〵と川を銭舟のすゝむやうで気もち。

●銭かねはもたれぬ者が手の裏にたまれば落る露の玉銭。（田丸）

●むねあけいの花に昔し情子の花はこゝがねの銭からぢ見る。（来生）

●千金の思ひをなし、人だにもうか元りんにかはる世の中。（左信）

●金持はもう程かねにつかはれて利足にあしの休む間もなし。（我綱）

●金銭はうちのでしても身代のこびりはくやがせはをやき時。（すは子）

●持たる故くらす口とは思くとも金がある。

ならん人にやりたき。（夏阿）

●銭金のとりやりきかんしはすにはめがねばかりそ耳にかゝれる。（也有）

●代物のうらみわたせば一もんの新生納言

波にたゝよふ。（詠人不知）

●非渡りの道にふたつの迫分やたからの山に借銭の山。（めしもり）

●百の銭新化の泣いたてゝる。（川柳）

●我からも出らと成銭も金に成り。（同）

●実でかさの金なし実でかし。（同）

（列其類）

〔蝉〕せみ

雨後。痩消。断続。吸レ風。飲レ露。喫レ晩。喫レ柳。吟レ秋。鳴レ桃。脱レ殻。

聲しきる。もうこる。夕日かげ。うつせみ。せみの羽衣。指のせみ。聲もすゝしき。聲のしぐれ。せみのむら聲。秋せみのこゑ。

●さるほどに、小法師の黒がしらに、かきふたつみつ出来たる、茶くだものなどもちて出でたらが、近き木になくせみを、つとおよびかゝりてとらくたれば、おなりたて、法師は物の命たすくることをこそすれ、さるさがなきわざする物かはといへば、いな、何ぞ、手ならひのきうしひきには、ふたつに物し侍りて、きのふけふに四十五十もやとり侍りつらん。あさてばかりには、百は物にも侍らずなどいふに、あさましくなりて、あはれ今におそろしきむくいみんやう小ぼうしにこそ。かしこの梢に、こゑおしくて鳴くせみのなれば、何とかいふといへば、かれは、こう〳〵ぼうしなりといふ。しかるうきたるゆゑんはしらやといへば、こたへはせで、かしら打ふりりやいでさはのれ経若となりて読きかせて、ん。いまはむかし、学あるのみかど、出すゝいまそがりけり。其おほん代に、筑紫ほうしといふる歌よみのひじりありけり。年いたくおいて、みつはくめるさまのいと、やしげなるをみて、女どものこう〳〵と笑ひたりければ法師とりおくず、

形こそみ山がくれの朽木なれ心はなにになさばなりなん

とそいひける。さばかりのひじりなれば、わらひたるにくむ執ふかき心はあらざりけれど、さるひじりをわらひたるもむくいにより、北女どもはかゝる出とうまれ出で、いましのこゝろそもの一手にさいなまる、物にうせるほうしの後の世にそ、思ひやるにも過ぎためれ。こう〳〵ぼうしのすゝせがたり、まうかくなんど、をかしきをねんじていひつゞくれば、人々えたへずこう〳〵とわらひぬ。（拾文）

●はしつ方に人々と物がたりし給ふに、御

さむき松かぜふく。（蕪村）

❸蟲のなく枠にうゆるもふにはやーぐるゝ（寛洲）

落のそもろなるらんの（寛洲）

の松がねの・はまにもせぶまし水に・すふ（千隣）

のせふの深・ゐらそふ。（千隣）

❸吹さおろす松のおらしにたゞひ来て秋お（春湖）

もはゆる蟲のもろこゑ。（春湖）

❸なくせんの翅もっすきくもりの夕かげ（良流）

山はかどそです・しき。（良流）

❸折釘にかつらや殘る秋のせみ。（其角）

❸鬼灯のからをみつーや蟲の笠。（同）

❸のけがらに並びて死る秋の蟲。（史邦）

❸蟲なくや山からみゆる大座敷。（同）

❸なつかしや床しや蟲の捨表。（同）

❸蟲で死るのけしきは見たや蟲の聲（曾稚）

❸長閑さや岩にしみ入る蟲の聲。（同）

❸蟲なくや行人絶ゆる臨柱。（蕉村）

❸蟲なくや行者の過ぐる午の刻。（同）

❸蟲なくや僧正坊の淀み時。（同）

のいつたりと拘しめつ一鳴く蟲はロ々に

かまくるさもすものの元。（つがね）

❸ふくろやうに啼さロ中をにりくと油蟲な

ん蟲天の巻。（且平）

❸松風の蔵蟲の聲に聞しはつくくとはふ

風の手枕和ふれて、月のさもしろ風の手枕

の、那はさめてそおりにけろ。（同）

❸玉兎住ける雲井の地、金殿光落て不語の

柱、笑蟲古木を抱さて、鳴き涙して頭をめ

ぐらさず。（諸曲、俊寛）

❸生れし我子と思くよりも、性からうか可

愛かろまいが、其様に泣くを見て、丈助夫

婦の居やらすば、と泣くより泣かる苦か

に、ナコヲヤ鳴く蟲よりもなか〳〵に、鳴

かぬ蛍が身を焦がす、小誠も我身に知られ

たり。（浮雲亭、御所櫻）

❸下もみち、葵つ、敗る木の木に秋とおぼ

ゆる蟲の聲哉。（利根）

❸啼くせみの聲も涼しき谷に秋をかけた

る森の下露。（誹枝）

❸思ふこと笹しきっちにうつせみのこがく

れはつる身こそつらけれ。（忠定）

❸なく蟲のやどりの松の木の木にもぬけの

衣の風にふかるゝ。（秋波）

❸のやまかげの大和撰手つゆちりて秋としや

ろ、蟲のもろこゑ。（有功）

❸なくせみの淀いしぶたはふらりとも衣手

流る、神かなと詠じけん。此所にての事

なるべし。（謡曲、笠蟲）

❸注の淀も、國になき新蟲の代の、啼うら

やまし。

蟲たて、なかばかりや物思ふ身は空

蟲に劣りやはする

などいすきびにいひまぎらはして、蟲流聲

に聞いて法文ありと、忍びやかに打通じ

給ふ御聲、めづらしげなきことなれど、若

き人々は、しにかくりめでたしと思ひた

る、ことわりなり。（大成三位）

●蟲は只五月晴に、四さきめたる程がよき

也。やーロさかりに啼く、さる比は、人の

汗しぼる心地す。さには利鎌とも利鎌とも

いふことを聞かず。此のしのばふり、利蟲

と百はあれ共大きなる手柄なれ。やがて

一死の姿色は見えずと、此もの、上は、爺の

一句に盡きたりといふべし。（也有）

●田舎家だつ茅垣して、そこはかとなき山

の裾、柿の蟲の啼々まで、風にあはれなる

秋色かな。古人の思ひ出でらたるぞや。

淀蟲の裳におく露の木隠れて、忍び〳〵に

流る、神かなと詠じけん。此所にての事

なるべし。（謡曲、笠蟲）

●注の淀も、國になき新蟲の代の、啼うら

回有、衆、而能歌又何求今。其盛大小盛哀、

不、可、悉名、各有、類類、聞、其物形、不、

知、自、止、有若爭能。忽時變以物哉、成淀

然而無、聲。嗚呼造士所、養、當物一類。人

於、其間、所、以爲、哉。蓋已巧、其語言、又

能傳、於文字、是以貽、彼思慮、耗、其血氣、

或吟、或其歌慨、或笑、或其悲愁、雖、其盛、

於當物、乃長鳴、於百世、予亦安知、其終、

哉。聊爲、蟋以自遣、方將、考、得失、談、同

異、俾而厥聲復興、雷能借聽、大雨既作、

蟲蟋遂息。（歐陽脩）

●今朝蟲忽鳴。驚若爲、怖。便覚、一年

老、能令、感歳生。微風方淅、瀝。落日稍沈

埃。欲、回、閑、夜、凄凉聞、蟋蟀。（司空曙）

●落日山蟲鳴、林。有客相留步、鳴琴、

莫、愁、窓底、趣、彼琴、銀箏試、兼、相、和。

（星波）

●蟲正鳴時客正愁。夕陽黄葉滿山秋。一聲

已白殘蟬発。不、自、知、頭不、省、休。（同）

●新教二一聲最上枝、莫、言、泥、依、窓、時。

今年異例腸先斷。不、上、聞、悲、客、遠、悲。

（道眞）

●蟲蟋蟀行、蛩流行。在、牆壁、間、露、生。

稍覚、凌、風来、到。不、絶二日白無、淚。

（同　）

❸遥々兮春日。玉簫鼓兮温泉邊。嬋々兮秋風。山蟬鳴兮宮樹紅。（白居易）

〔ぜん〕善

積善。勧善。善隣。遷善。善良。善美。聖善。善根。順善。至善。仁善。善緣。

よけく。よしあし。

❶地下など思し憚らせ給ふまじ。行末にもおほやけに、何事にも仕う奉らんに堪えたるものになん。かくようなる人を御覧じわかねは、世のためあしき事に侍り。善悪を辨へおはしませばこそ、人も心づかひは仕うまつれ。このさはにもなさせ給はゞらんは、いとほしきことにこそさふらはめと申させ給ひければ、道理の事といひながら、なり給ひにしぞかし。（為業）

❷人、善に動かざるものは、悪にも動かず。この念ゝに生ぜざれば、彼念かしこに生じ、轉變して、しばらくの間も止事なきものは、心なり。此出づるところをよく知らざれば、悪を退けて、善を行ふことあり

りがたかるべし。善は人の本心にして、當の持つところのものなり。悪は念より起して、他より入り來るものなり。耳目鼻口の取次、心の善なるあるじに告げて、萬の事をなすは召し仕ふ人と同じ。その召し使ふものに、善をこのむあり。悪をすくあり。此二つを差別すれば、五常みなその中にたつべし。（淮圖）

❸善悪は莊子と胡蝶の如し。善の善たる、我が我たる、悪の悪たる、我が我たる、皆夢の夢に形を見ず。醒めて後なほ疑ふ。醒者の夢に解をきかず。善をなすもわが心にあり。悪をなすも我心にあり。わが眼のいまだ見ざるところ、心のいまだ至らざるところ孰かよくそれをゆめみん。性の善たる、悪たる、化して悪となり、性の悪たる、化して善となる。皆これ心の赴く所、影の形に從ふに異ならず。（馬琴）

❹人は夢幻のやうなる世に、誰かとまりて悪しきことをも見、善きをも見思ふべきの給へば言ふかひなくて、若き人々、おのがじゝ心愛がりあへり。（堤中納言物語）

❺唯心一つが、おのづから思ふことをはぶれにかきつけたれば、物にたちまじり、人なみ〳〵なるべき耳をも、聞くべきものかほと思ひしに、はづかしきなどを見る人はのたまふなれば、いとめやすくぞある。實にそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、褒むるをも悪しといふは、心のほどこそおしはからるれ。（清少納言）

❻二十日ばかり行ひたる夢に、我頭をとりおろして、額を分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、我腹の中なる蛇、ありきて肝を食む。これを治せんやうは、面に水なん入るべきと見る。これも悪し善しも知られど、かく記し置くやうは、かゝる身の果を、見聞かん人、夢をも佛をも、用ゐるべしや、用ゐるまじやと定めよとなり。（道綱母）

❼夫れ春の花の樹頭に上るは、上來菩提の樣をすゝめ。秋の月の水底に沈むは、下化衆生の形を見す。然るに一門かどをならべ、累葉枝を連ねし粧ひ、誠に槿花一日の榮に同じ。善をすゝむる教には、逢ひがたき石の火の、光りの間ぞと思はざりし、身のならはしこそ、はかなけれ。（謡曲、弱盛）

❽實に雲中に山路なし。扱車輪は如何に

車價、我程貴きものゝおらじと、慢心の心路跡なからずや。然らば無着法慳心に、引くか移るか車價。電道にも心を寄せよ車價、善悪二つは兩輪の如し。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生もあり。車價あれば太郎坊の行者も有り。所らば所るべし。行せば行儘も劣るまじとよ。いざ車價行きくらべせん。（謡曲、車價）

●いづれもさらばと夕べへの、駒の善悪白綾も、雲に色ます緋の袴、かいげて移る乘物を、早かき出す仕丁共、列を揃へて出て行く。（淨瑠璃、朝顔話）

❷切めて世御の御最期に、善心に立歸ると、僅た一言聞してたべ。拜むわいのと掌な合し、涙つ泣いつ一筋に、夫を思ふ怨泣き、操の鏡無き、涙に誠現はせり。（淨瑠璃、太功記）

❸善悪を心にだにも留てねれば同じ浮世も住みよかりけん。（基久）

●よしあしは一つ入江の浮標ふかき御法のしるしなりけり。（公澄）

❹善悪はわかぬ身なれど世にすめば難波ごとよみてぞ久しき。（貞徳）

❺善悪と人にかゝるな難波潟こと浦にすむ海士の所爲な。（玄圃）

❻津の國や難波に生ふるよしあしはいふ人がらの言の葉ぞかし。（八條院高倉）

❼よしあしの思をやめて悟り入る心のおくも心なりけり。（顯通）

❽よしあしの人をわかじと蓮ばな九品までさきかはるなり。（兼宣）

❾よしあしをいにしへ今とたどるにはいぬおもひもあの世なりけり。（春海）

❿よしあしにうつるならひをおもふにもやふきものは心なりけり。（枝直）

●野べにおふるいさゝむらたけいさゝめも人の爲よき事ばかりせよ。（湖鯉鮒）

❶よしあしも有るはずなれや友鶴の長非の浦の長いうちには。（徂徠）

❷善は急げ。

●上善若レ水。水善利二萬物一而不レ爭。處二衆人之所一レ惡、故幾二于道一。居善地、心善淵、與善仁、言善信、政善治、事善能、動善時。夫惟不レ爭、故無レ尤。（老子）

●善行無二轍迹一、善言無二瑕讁一、善計不二籌策一。善閉無二關鍵一而不レ可レ開、善結無二繩約一而不レ可レ解。（同　）

❸大學之道、在レ明二明德一、在レ親レ民、在レ止二至善一。（大學）

❹楚國無レ以爲レ寶、惟善以爲レ寶。（同　）

❺格物是止二至善一之功。既知二至善一、即知二格物一矣。（王陽明）

❻至善、只是此心、純二乎天理之極一。（同　）

❼積善之家、必有二餘慶一。（易經）

❽作レ善降二之百祥一。（書經）

❾父子之間不レ責レ善。（孟子）

❿貴二善朋友之道也一。（同　）

〔ぜん〕禪

見性。虚心。心印。无生。丁性。悟空。禪寂。禪窟。坐禪。禪榻。迦葉微笑。面壁九年。傳衣眞印。不二法門。不立文字。

●抑座禪とは、いかなる觀法ぞや。萬境をすてゝ、心に心を點じ歸して心を捨つべきにや。又泥牛水をはしり、木馬天にいばふなんどいふ公案をむねにもつべきにや。もちては又いかゞあらん。たゞよきりなく守るべきにや。詮は實の道心侍らば、修行は何にても侍りけん。念は老鼠の如し。禪は

猫似に似たりといふ古人の詞あり。よくよく心をとめて座禅し給はゞ、これぞ三業の中の意業の行に侍れば、百年無量の佛塔を造らんにもまさりやし侍らん。何なる善も、其心よろべきとぞ覚え侍りぬる。

（西行）

❷さてかの僧を座らしめたる蓆子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の、俗ともわからぬまでに髭もみだれしに、猶むすぼふれ、屠花おしなみたるなかに、蚊のなくばかりの細き聲して物とも聞えぬやうに、まきれぬ唱ふるをきけば、

江月照松風吹。永夜清宵何所ノ為。

禅師見給ひて、やがて禅杖を拿りなほし、生医生何所為ぞと、一喝して彼が頭をうちたまへば、忽、氷の朝日にあふが如くきえうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。げにも久しき念のこゝに消しつきたるにやあらん。たゞときことわりあるにこそ。されば禅師の大徳、聖の裏、海の外にもきこえて、初祖の肉いまだ乾かずとぞ感歎しけるとなり。

（秋成）

❸其後は山門いよ〳〵荒れはてゝ、十二禅衆の外は止住の僧侶稀なり。谷々のかう点の馬に法の水、三界流轉の濁江は、何時か汲み盡さん。底濁む水を汲ふよ。だんぶだんぶと汲めば、雫に影落ちて、月も秋を上り坂、たどろ〳〵の御薙行、涙に桶の水増して、肩重げにも悼はしゝ。師の仙人跳り出で、見よ〳〵、青山は青く、白雲は白し。汝が水は水にあらず。古郷の妻子の影を映せし愛着の洗ひ汁。月宿れば月を汲むで、山映れば山を汲む。山月を偸む偸盗罪、六十棒を與へんと、続け打ちに丁々、柱杖も折れよと打つ音は、谷にも響くばかりなり。打たれながらやゝ暫し、禅定三昧に入り給ひ、起上つて桶の水、大地にかばと打ちあけ、窟の内に入りかはり、定印正しく座し給ひ、諸法従本来、生死寂滅相十方佛土中、唯有一乗法無二亦無三と高らかに、成道成仏の悦りの金言、窟戸をはたと鎖し給ふ。

（浄瑠璃、釋迦如来誕生會）

❹胸の月心の水もよな〳〵の靜なるにぞ澄み初めける。

（土御門院）

❺目をとぢていきをかぞふる心にはみのりばかりの殘るなりけり。

（讀人不知）

●苔ふかき杉のとぼそに跡たえて心のともにすみぞめのそで。

（季保）

んまめつして、堂々の行法もたいてんす。朱閣の窓を閉ぢ、坐禅の床を空しくせり。四教五時の香の花もにほはず、三諦即是の秋の月も曇れり。三百餘歳の法燈なかゝぐる心もなく、六時不断の香の煙も絶えやしにけん。

❷さて座禅の公案何と心得候ふべき。入つては幽玄の底に動し、出ては三昧の門に遊ぶ。自身自佛は扱いかに。白雲深谷所全龍躍る〳〵生死に住せば、輪廻の苦、生死を離れば、断見の科、さて向上の一路はいかに。切つて三段となす。暫く切つて三段となすとは、禅法の言葉なるを、御さわぎあるこそ愚なれ。

❸かくて流を統とし、岩に口を喫ぎて、行住座臥の行に、座禅の床を洩る月も、西に傾くなりふしは、洞煙黒雲の内よりも、瀑布の滝の白妙に、あはぼの〳〵山の姿、たとへん方ぞなかりける。

❹柴摘み水汲む雑行は、衆生に代る難行苦行、打たるゝ杖の心は何と、打たるゝ杖は打たれて知る。鞭の影に驚く馬、皮を打たれて駭く馬、肉を打たれ、骨を打たれ、始めて覚く馬あり。無常に覚く賢にて、四つ

❷心とてげには心のなきものを悟るは何のさとりならん。

（實伊）

❸むなしともありともいはじ今更に實の道の二なければ。

（道我）

❹浦山し草の庵をしき忍びうき世にいでぬ聖の山人。

（光俊）

つながむれば心のあともなかりけりありかつき月い影しらむ空。

（蘆庵）

❺雲なおこしなみなたてゝは見すれどもともとより風の姿やはある。

（同　〃）

❻禅門の皮袋おろす十夜哉。

（許六）

❼資發は唐の禅似して月見かな。

（同　〃）

❽味はそもいかならん禅律の木魚も肉を叩く音して。

（筆成）

❾九年酒のつまり香は座禅豆外に本來一物もなし。

（赤良）

❿禅寺はしらふの石碑出しておき。

（川柳）

❶よんだから來たと禅僧いつたやう。

（同　〃）

❷禅寺も隣におかれぬ紅葉なり。

（同　〃）

❸禅僧の紫麺くふやう。

（俚諺）

❹現有三漏境階級殊等　粘　澄業計　欣上厭下而修者、是外道禅。正信因果　亦以欣厭二而修者、是凡夫禅。悟二我空偏眞之理一而修者、是小乘禅。悟二法二空所顯眞理一而修者、是大乘禅。若頓悟自心本來、清淨元無二煩惱一無二漏智一、性本自具足、此心即佛。依二此而修者一、是最上乘禅、亦名二如來清淨禅一。

（傳燈錄）

❺雲鉢濕レ經龍。流水千溪月。寒岩一樹松。無因淨流澤。來共上二堂鐘一。

（張遠）

❻菩薩二坐處一石頭青。滿庭春雪不レ用レ掃。入定幡來香印冷。一簇花雨濕二殘經一。

（王錫芳）

❼春風三十八年過。一醉曾々滿眼華。今日方知禅味別。雲門胡餅趙州茶。

（星巖）

❽虚空不レ離レ禅。

（杜甫）

〔せんにん〕仙人

❶仙宮。仙洞。烟霞。雲水。壺天。蓬海。殽霞。換レ骨。羣レ仙。穿レ雲。

やまびと。洞のうち。みつのしま。よろづ世。三ちとせ。老せぬ。しらぬよはひ。老いすしなす。をのゝえのくちし所。あしたづにのりてかよふ。

❷一昨年の秋、葛城にてこそあさましき事に逢ひ侍りたりしが。常よりも心すみて、哀におぼえて經を誦じ奉りしに、谷の方より人のけしきのしてまうでこしかば、いと物恐ろしくおぼえながら、經を誦し奉りしに、九月上の十日ころの事にて、月の入方になり侍りしほどに、ほのかにそのかたちを見れば、紺のすがたしたるもの〳〵、あさましげに痩せ神さびたるが、藤の皮をあみて衣とし、竹の杖をつきたるが來れるなりけり。やう〳〵傍へ來寄りていふやう、御經のいとたふとく聞えつれば、まうできたるといふ。物恐ろしくおぼえ侍りしかども、鬼魅などの姿にもあらざりしかば、仙人と

いふものにやと思ひて、かく申すほどに、八の巻のすゑつかたなりしかば、又一部を誦じて聞かせ侍りしかば、この仙人よろこびて、修行し給ふ人おほくおはせども、まことしく佛道を心にかけ給ふやらんと見奉るが尊くおぼえ侍るなり。いかなる事にて心を起しそめ給へりしぞと問ひしかば、先に申しつるやうに申しゝを、仙人きゝて、いとかしこきことなり。大方は今の世をはかなく見棄みたまひて、いにしへはかくしもあらざりけんと、あさくおぼすまじ。すべて三界は厭ふべき事なりとぞおぼすべき。このめの前の世のありさまは、なりに随ひてともかくもなりまかるなり。いにしへをほめ今をそしろべきにあらず。神代よりこの葛城、吉野山などをすみかとして、時々はかたちを隠して、都のありさまも、諸國に至るまで見聞きてすぎ侍りき。よしなき事どもに侍れども、御経を承りぬるよろこびに、偏に目の前のことばかりなのみそしる心おはして、古はかくしもなかりけんなどおぼす、一すぢなる心のおはする方をも申し聞かせば、一分の執心をもつしなひ棄りなば、佛道にすゝみ給ふ方ともなどかならざらん。神の世より見侍りし事、おろ〳〵申し侍らんといへば。（思親）

㉓昔、山の西塔千手院に住み給うける、静々に、立ちまふや袖の羽風、天つ空の衣ならん、天の衣なるらん。いろ〳〵の捧げ物の、中に妙に見にたるは、西王母のその姿、ひかり庭宇をかゞやかし、黄錦の御衣を着し、剣を腰に提げ、剣を腰に提げ、眞縄の冠を着、玉觸に盛れる桃を、侍女が手より取りかはし、君に捧ぐる桃の實の、花の杯とりあへず、花も醉へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや、みかはの水に、戯むれ戯むる、手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく。盛の花鳥春風に和しつゝ、雲路に移れば王母も伴ひよぢ上る、王母も伴ひ上るや天路の、ゆくへも知らずぞなりにける。（謡曲、西王母）

㉔不思議や西の空よりも、白雲一村下ると見えしが、三足の青鳥翅をならべて飛び廻り、姿も妙なる王母が出で立ち、光りもかゞやく衣冠を着し、白龍に乗じ顯はれ給ふ。（謡曲、東方朔）

㉕いや仙境には松の葉をすき、苔を身に着て柱の露を飲め、年經れども不老不死のこ

の身なり。酒を用うる事あるまじ。（謡曲、一角仙人）

●くどん沙彌は、仙人の窟の前に頭を下げ、法性無漏の智慧の火は、石にあるか燧にあるか。何を以てか焚く薪、師匠如何と宣へば、寂寞の扃を押開き、顯はれ出でし阿羅々仙人、木葉衣に肌疵れて、ばつと亂れし髪髭は、金銀の針線をわぐため亂せしが如くなり。臉の骨立つて、眼に鏡かけたる如き兩眼にて、はつたと睨み、本覺大悟の智慧の火は、一切の煩惱を燒盡す。汝沙彌迷うたり。古郷の妻子の縁によりて、一念愛欲起りしゆゑ、修行却て罪障り。（淨瑠璃、釋迦如來誕生會）

●此いやしい蟲の身で、緋の袴とはおやばちかぶる事、都人に縁を結ぶが身の大慶、七百年生きる仙人の、薬の酒とは菊水の流れ、それをかたどり、筒につめたも此島の山水、酒ぞと思ふ心が酒、この魚貝のお盃いたゞき、けふからいよ〳〵親よ子よ。（淨瑠璃、平家女護島）

●力石〳〵と仰山にぬかせども、手毬程なこの小石、まつて居つたら上げるのを見せうにと、兩手にひんだき輕々とぐつと、上げたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白髪交りの有髪の老人、身には蓑簑異相の姉、さしもの横綱ざよつとして、下界の人か仙人かと、頗なながむる計りなり。（淨瑠璃、二十四孝）

●此いやしい蟲の身で、緋の袴とはおやばちかぶる事、都人に縁を結ぶが身の大慶、七百年生きる仙人の、薬の酒とは菊水の流れ、それをかたどり、筒につめたも此島の山水、酒ぞと思ふ心が酒、この魚貝のお盃いたゞき、けふからいよ〳〵親よ子よ。（淨瑠璃、平家女護島）

●力石〳〵と仰山にぬかせども、手毬程なこの小石、まつて居つたら上げるのを見せうにと、兩手にひんだき輕々とぐつと、上げたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白髪交りの有髪の老人、身には蓑簑異相の姉、さしもの横綱ざよつとして、下界の人か仙人かと、頗なながむる計りなり。（淨瑠璃、二十四孝）

●くどん沙彌は、仙人の窟の前に頭を下げ、法性無漏の智慧の火は、石にあるか燧にあるか。何を以てか焚く薪、師匠如何と宣へば、寂寞の扃を押開き、顯はれ出でし阿羅々仙人、木葉衣に肌疵れて、ばつと亂れし髪髭は、金銀の針線をわぐため亂せしが如くなり。臉の骨立つて、眼に鏡かけたる如き兩眼にて、はつたと睨み、本覺大悟の智慧の火は、一切の煩惱を燒盡す。汝沙彌迷うたり。古郷の妻子の縁によりて、一念愛欲起りしゆゑ、修行却て罪障り。（淨瑠璃、釋迦如來誕生會）

●此いやしい蟲の身で、緋の袴とはおやばちかぶる事、都人に縁を結ぶが身の大慶、七百年生きる仙人の、薬の酒とは菊水の流れ、それをかたどり、筒につめたも此島の山水、酒ぞと思ふ心が酒、この魚貝のお盃いたゞき、けふからいよ〳〵親よ子よ。（淨瑠璃、平家女護島）

●力石〳〵と仰山にぬかせども、手毬程なこの小石、まつて居つたら上げるのを見せうにと、兩手にひんだき輕々とぐつと、上

げたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白髪交りの有髪の老人、身には蓑簑異相の姉、さしもの横綱ざよつとして、下界の人か仙人かと、頗なながむる計りなり。（淨瑠璃、二十四孝）

❷雲解くる仙家のさまや梨花の雨。（野坡）

❸仙人は日本にもありけふの月。（李由）

❹風の手に庭の飛石たゝけるは仙人めさし青柳の糸。（乗安）

❺西王母見方朔に油斷すなみんな見に來た桃の花時。（巴扇堂）

❻つみとりて給のけんに仙人の八人前も長いきの薬。（仮盛）

❼吹きまくる嵐野の風に仙人もおつるばかりの白萩の花。（仲塗）

❽もゝ草の中なる萩に見とれつゝいくせん人も通を失ふ。（多他見）

❾山里はゆたかな梅のりんな靖人も仙人鶴も千年。（梅旭）

❿鶴に乗り又風に乗るあやふさは命しらずといはん仙人。（岩禮）

●一つるべくめの仙人また落ちん氷に下女のすべる井のもと。（眉住）

❷圖みたる圖巻の石さへ死なぬなりこうを積みたる仙人の術。（眞盛）

❸山人は五日の風に舞ひ遊び十日の雨に巻や圖むらん。（茂樹）

●仙人を素人にする美しさ。（川柳）

❶その昔洗濯の場へ人が降り。　同　）
❷仙人を生捕にする洗濯師。　（同　）
❸仙人さまアと濡手で抱き起し。　（同　）
❹仙人も濡俗をしてのりをうり。　（同　）
❺仙人の場へ水汲が來てくどき。　（同　）
❻仙人の目にちら〳〵と雲の肌。　（同　）
❼通に乘りし山人の、心にまかせ行きかよふ、蓬が島と聞えしは、いつも老いせぬところとや。　（俗謠）
❽仙人の千年蟠蟠の一時。　（俚諺）
❾人有二夢レ仙者一。夢身升二上清一。集來二白鶴一。前引二雙紅旌一。羽衣忽飄々。玉冪俄鉾々。坐空直下視。人世塵冥々。漸失二鄉國處一。機分二山水形一。東海一片白。列岳五點青。須臾群仙來。相引朝二玉京一。安期談二門業一。列侍如二公卿一。仰謁二玉皇帝一。精首前致レ誠。帝言汝仙才。努力勿二自輕一。却後十五年。不レ汝不死庭。再拜受二斯言一。既覺喜且驚。秘レ之不二敢泄一。誓志居二嚴扃一。黒髮捨二骨肉一。飲食斷二葷腥一。朝雖二雲母散一。夜吸二流霞精一。空山三十載。日望二蓬萊迎一。前期過已久。縹緲無二來聲一。商髮日衰白。耳目減二聰明一。一朝同レ物化。身與二蟬蛻一并。神仙信有レ之。俗力非レ可レ整。菊無二金骨相一。燒丹經一。只自取二勤苦一。百年終不レ成。悲哉夢仙人。一夢誤二一生一。　（白居易）
❿昔有二道士求二神仙一。驪眞下試心確然。千鈞巨石一擧懸。臥レ之石上一十三年。存道忘レ身一試過。名參二玉皇一乃升レ天。雲氣世々漸不レ見。留二語弟子一但精堅。　（韋應物）
⓫弾レ琴石壁上。嘯々一仙人。手持二白鷺尾一。衣掃二南山雲一。鹿飲二寒澗下一。魚歸二青海濱一。當時漢武帝。書報桃花巻。　（李賀）
⓬鶺鴒射之山。有二神人一。居焉。肌膚如二氷雪一。綽約若二處子一。不レ食二五穀一。吸レ風飲露。乘二雲氣一。駕二飛龍一。遊二于四海之外一。　（莊子）
⓭形動不レ生レ形。面生レ影。聲動不レ生レ聲而生レ響。無レ動不レ生レ無而生レ有。　（沖虛子）
⓮腰帶二筠籠一。入二紫烟一。靈香滿地草芊芊。誰家日月轉堪レ悲。誰識二仙家日月遲一。仙家日月轉堪レ悲。誰識二仙家日月遲一。只換二山中一局棊一。　（張以寧）
⓯海濱。當時漢武帝。書報桃花巻。　（李賀）
⓰鶺鴒射之山。有二神人一。居焉。肌膚如二氷雪一。綽約若二處子一。不レ食二五穀一。吸レ風飲露。乘二雲氣一。駕二飛龍一。遊二于四海之外一。　（莊子）
⓱形動不レ生レ形。面生レ影。聲動不レ生レ聲而生レ響。無レ動不レ生レ無而生レ有。　（沖虛子）
⓲腰帶二筠籠一。入二紫烟一。靈香滿地草芊芊。誰家日月轉堪レ悲。誰識二仙家日月遲一。只換二山中一局棊一。　（張以寧）
⓳海濱。當時漢武帝。書報桃花巻。　（李賀）
⓴鶺鴒射之山。有二神人一。居焉。肌膚如二氷雪一。綽約若二處子一。不レ食二五穀一。吸レ風飲露。乘二雲氣一。駕二飛龍一。遊二于四海之外一。　（莊子）

そノ部

〔そう〕僧

僧徒。法師。淨侶。縕衣。剃髪。空門。桑門。飛錫。洗鉢。染衣。超俗。出家。清淨。のりの師。墨染のそで。

❶思はん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ。さるはいと賴もしき業を、只水の端のやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。精進物のあしきを食ひ、いぬるなも、若きは物ゆかしからん。女などのある所なも、などか忌みたるやうに、差しのぞかずもあらん。それも安からずいふ。況して驗者などの方は、いと苦しげなり。御獄熊野かよらぬ山なくありく裡に、恐しき目も見、しるしある聞え出できぬれば、こゝかしこに呼ばれて、時めくにつけて安氣なし。　（清少納言）

❷ところがらに、いとゞ世の中のつねなさをおぼしあかしても、なほうさひとしもぞ

とおぼし出でらるゝ。おし明けがたの月かげに、ほうしばらの、あかたてまつるとて、から〳〵とならしつゝ、きくの花ごきうすき紅葉など、をりちらしたるもはかなけれど、このかたのいとなみは、この世もつれ〳〵ならず。後の世はた、たのもしげなり。さもあぢきなき身なもてなやむかなと、おぼしつゞけたまふ。律師のいとたふときこゑにて、念佛衆生攝取不捨とうちのべて、おこなひたまへるが、いとうらやましければ、なぞやとおぼしなるに、まづ姫君のこゝろにかゝりて、おもひいでられたまふぞ、いとわりなき御心なりや。（紫式部）

❸法師ばかり淺しからめものはあらじ。人には木のはしのやうに思はるゝよと清少納言がかけるも、實にさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。附屬嘱のいいけんやうに、名聞苦しく、佛の御教に遂ふらんとぞ見ゆる。　（兼好）

❹似あはぬ僧の腕だて、さこそをかしと思すらめ。さりながら佛も、彌陀の利劍や愛染は、方便の弓に矢をはげ、多門は鉾を横たへて、悪魔を降伏し、災難を拂ひ給へり。　（謡曲、熊坂）

❺およそ沙門の形と謂つぱ、十方の數珠を手に纏ひ、忍辱二諦の衣を着、胆障慨慢の袈裟をかけてこそは、僧とは申すべけれ。　（謡曲、放下僧）

❻されば世にこざる、坊太郎に誤りが有れば識むるは愚僧が了簡、試上の名物なれども、武家に憑物に人の命、よもや取らうと御意もあるまじ。よし又左様の義もあらば、人を助けるは出家の役、どこ迄も坊太郎が命乞をする。ムヤして又試上の申譯は、ハヤお聞き入れなき時は是非に及ばぬ、傘一本、餘上帶を引きほどき、鏡を脱げば袈裟白無垢。相摸是はと取り付くを、ヤア何ぢく女房、大將の御情にて軍半ばに、願ひの通り御暇を賜りしは我本懐。熊谷が向ふは西方彌陀の國、悼小次郎が抜けがけしたる九品蓮臺、一ツ蓮の緣を結び、今より我名も蓮生と改めん。一念彌陀佛、即滅無量罪、十六年も一昔、ア、夢であつたナア。　（浄瑠璃、嫩軍記）

❼たらちねはかゝれとてしもぬば玉の我黒かみをなでずやありけん。　（遍照）

❽さゝなみやしがの浦風いかばかり心のうちにすゞしかるらん。　（公任）

❾世をそむき草の庵にすみぞめの衣のいろはかへるものかは。　（覺後）

❿松の下岩ねのこけにすみ染の袖のあられやかけし白玉。　（高辨）

⓫ます鏡ふたゝび世にやくもるとてちりないでぬと聞くは誠か。　（元輔）

⓬菅衣うらなる玉に心をやかけていとはぬ野ふし山ぶし。　（蔦庵）

⓭松のこゑ谷の清水のおとゝして小川のほかにとしぞへにける。　（千陰）

⓮むらさきもあけもなにせん法の師ののり

の心をふかくそめなば。　（語路）
㉘雲水をおのが心とおもへばや木のもとにだにわとをとゝめぬ。　（春海）
●雲のゆくあなし山にやかへるらんゆふべの空もすみぞめの袖。　（契沖）
●寒月や衆徒の評議のすぎぐち。　（蕪村）
●肘白き僧のかりねや宵の春。　（同）
●頭巾きて聲こもりくの初瀬法師。　（同）
㉙沙彌律師ころり〳〵と金剛。　（同）
㉚娘子者ていろは教へる御僧哉。　（几董）
●老僧の筍なかむなみだ哉。　（其角）
㉛馴とめて雪見る僧に露のたう。　（同）
●茶僧月を見るに梅十の影の如くに來り。　（杉風）
㉜信濃路や蝿に咬はる〻痩法師。　（許六）
㉝僧遠の袂を染る新茶かな。　（支考）
㉞そりたて〻よそめも涼し橋の月亜ぶ法師にざぼし彫法師。　（東作）
●東風吹けば今年も首をふる法師はりこの虎の巻なむかへて。　（同）
㉟ほとけもと慧の山より出し故か今の法師の爪の長さよ。　（橘洲）
㊱なみだへし日もさが野にたつた今僧正さノが落ちなさんした。　（赤良）

㊲坊主が憎くけりや袈裟まで憎い。　同）
㊳坊主の鉢巻ア締りが無い。　（同）
●杖鉢從二歸與一。故山桂水西。數峰青靄合。一徑白雲迷。閉レ室禪心寂。乖レ惟孤影棲。老夫甚窮レ別。多病怯二聲蹄一。　（淇園）
㊴貌與レ松俱瘦。心將レ絮共沾。一庵空寂地。香火謝二栂殿一。　（李俊民）
●舘娃宮畔千年寺。水洞雲多客到稀。閑就春來偏惱恨。百花深處一僧歸。　（趙蝦）
㊵一床安置似二僧居一。白髮忘レ梳動月餘。蠅性慵成慈把筆。小詩常擬代レ人書。（周昂）
●無レ花無レ酒過二清明一。興味都來似二野僧一。昨夜鄰家乞二新火一。曉聽分與讀書燈。　（魏野）
㊶略句橋頭逢二一僧一。殷勤向レ客指二荒陵一。數弓閑地禁二苔笈一。片石孤松是帝陵。　（陶所）
㊷巻簾古寺遊漾々。野鳥如レ哀絲綺空。一瓜芳魂哭不レ返。老僧閑掃落花紅。　（江城）
㊸蒼法霧雨之秦初、寒汀獨立。重巒煙嵐之斷處、晩寺僧歸。　（張謂）
㊹野寺訪レ僧歸帶レ月。芳林攜レ客醉眠レ花。　（鮑溶）

●紅雨滴身僧折レ花。　（隨園）

〔そで〕袖

長袖。修袖。領袖。廣袖。羅袖。綺袖。縮袖。素袖。張袖。袞袖。まそで。はたそで。かたそで。そでぐち。せばき袖。ぬるゝそで。山あゐの袖。をとめの袖。

●舞人陪從は皆來りてわたるに、時中源大納言のいまだ大藏卿と申しゝをりぞ、使にておはせし。御車の前近くたちとゝまりて、もとめ手を、袖のけしきばかり仕う奉りたまひて、ついゐたまひしまゝに、御片袖なかほにおしあてゝ候ひ給ひしかば、かゝりなる扇さし出させ給ひて、はやうとかゝせ給ひしかば、少しおし拭ひて立ち給ひしが、すべてさばかり優なる事、又候ひなんや。　（榮華）
●紅の御衣のいふもつねなる、褂、又はりたるも數多奉りて、いと黑くつや〳〵かなる御直衣に、御衣の袖をうちかけて、袖へさせ給へるめでたきに、彼より御額のほど、白くけざやかにて、筆に見たさせ給へるは、たとふべき方なくめでたし。　（清少納言）
●船の楫取りたる男ども、船をまつ人の數知らぬに、心おごりしたる氣色にて、袖をかいまくりて、顏にあてゝ、竿に押しかゝりて頓に船もよせず、うそぶいて見まはし、いといみじうすみたるさまなり。　（孝標女）
●ねしはこの世に渚の鳥の、迹もあだなるかたみの袖を、わが身にそへて乾しあへず、あはれとは見よ島人と、かき口說きつゝ皆袖を、取り出すを見て後覺は、沈かじとおもひしかども、忍びかたみの袖の、内に秘めたる鶴の前の、なき玉章と俊成、晴れ間は絶えてなかりける。　（馬琴）
●船の明の五節の舞姫の、袖を、そ五たび返しゝか。是は又七夕の手向の袖ならば、七返しにてやあるべき。狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて、狂人こそ走り候へ。百年は、花に宿りし胡蝶の舞、あはれなり〳〵。老木の花の枝さす、袖も手忘れ、もすそも足弱く、たゞよふ波の立ち舞ふ袂は、ひるがへせども、昔に返す袖はあらばこそ。あら戀しの古へやな。
（謠曲、關寺小町）
●秋も更けゆく山の住居は、袖も一ツの時雨のみ峰の嵐やこと問ふらん。（中務內侍）
●あら面白の唯今の舞の袖やな。むかし豐の明の五節の舞姫の、袖を、そ五たび返しゝか。是は又七夕の手向の袖ならば、七返しにてやあるべき。狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて、狂人こそ走り候へ。百年は、花に宿りし胡蝶の舞、あはれなり〳〵。老木の花の枝さす、袖も手忘れ、もすそも足弱く、たゞよふ波の立ち舞ふ袂は、ひるがへせども、昔に返す袖はあらばこそ。あら戀しの古へやな。
（謠曲、關寺小町）
●その古への白拍子、今一節とありしかば、昔の花の袖、今更色も麻ごろも、短き袖を返し得ぬ、心ぞつらき陸奥の、希婦の細布胸合はず、何とか白拍子、その面影のあるべき。
（謠曲、檜垣）
●なにとか返す舞の袖、思ひの色にや出ぬらん。涙をそへてめぐらすも、雪の古枝の枯れてだに、花さく千手の袖ならば、かさねていざや返さん。　（謠曲、千手）
●これにつけても親の恩、今取り分けて思ひ知る、唐土の樊噲が捉の小袖を、世衣と

命け、戰場まで持ちたりといふ。それを學よにあられねども、この下衣は母の手づから下されしを、汝に片袖取られたれども、亡き母に添ふ心地して、縫も直さず振袖のこの儘、四國九國一の谷へも、押立て〳〵、危き難の遁れしも、これぞ誠に親の陰、年月重れど、肌身放さず持ちし故、名も知れず顔も知らぬ親と子の、印となつて十七年目にめぐり逢ひ、主君の絶體絶命の、大事のお役立てたる事、偏に亡き母の賜はりしこの小袖に手を通し、親子一所に引合せ給ふとは、ハヽヽヽヽ、廣大無邊の親の慈悲。（淨瑠璃、御所櫻）

❶上の一重をおしぬげば、右ほかはらぬ詰袖に、左前りがふり袖の、濃いくれなゐの染もやう、橘ならぬ袖の香の、昔床しく忍ばしく。（同）

❷なき人のことのはうつす水ぐきのかきもやられず袖ぞぬれける。（中務）

❸うれしさもつゝみなれにし袖にまたはてはあまりの身をぞ怨むる。（雅經）

❹何事を思ふ人ぞと人とはゞこたへん先に袖ぞぬるべき。（慈圓）

❺忘れめや露の通路たちかへりなとめの袖。（後鳥羽院）

❻振り袖の大和に長し日のはじめ。（曉臺）

❼山あゐの袖ふりはへていく春の雲井の櫻われかざしけん。（伊成）

❽露わけてけさの別の袖の上を思ひも出でよまの〳〵はら原。（枝直）

❾引むすぶ草葉も露のおきふしに馴れていくよの袖ぬらすらん。（實長）

❿ながそでもつゆけかりけり大方のうき世をあきの心ならひに。（たみ子）

⓫むらさきもあけの衣もはえはあれど濱の小袖に手を通し、親子一所に引合せ給ふとは、ハヽヽヽヽ、廣大無邊の親の慈悲。（浄瑠璃、御所櫻）

⓬上の一重をおしぬげば、右ほかはらぬ詰袖に、左前りがふり袖の、濃いくれなゐの染もやう、橘ならぬ袖の香の、昔床しく忍ばしく。（同）

⓭なき人のことのはうつす水ぐきのかきもやられず袖ぞぬれける。（中務）

⓮うれしさもつゝみなれにし袖にまたはてはあまりの身をぞ怨むる。（雅經）

⓯何事を思ふ人ぞと人とはゞこたへん先に袖ぞぬるべき。（慈圓）

⓰忘れめや露の通路たちかへりなとめの袖。（後鳥羽院）

神路の山あゐの袖。（赤人）

⓱うき身には思ひありともみえじとてつゝむほどだにせばき袖哉。（成章）

⓲雛やその佐野の渡りの雪の袖。（其角）

⓳闇の夜のをりないかとは梅の袖。（同）

⓴涙かな先まなはした袖で拭く。（同）

㉑袖におくおけるの小法師も花見かな。（野坡）

㉒商人のみせは現金世界にて誰もはらうて袖の雪。（飯盛）

㉓ほこりびし尾花の袖はあちらでもこちらでもふる野邊の朝霜。（卯雪）

㉔日に袖あて〳〵萬歳のぞかれる。（川柳）

㉕振袖にいひぞこなひの森になり。（同）

㉖吉内ともに振袖を顔へあて。（同）

㉗振り袖の大和に長し日のはじめ。（曉臺）

㉘山あゐの袖ふりはへていく春の雲井の櫻われかざしけん。（伊成）

㉙夜の梅見て戻りしと女房に言譯くらき袖の香り香。（倭滿）

㉚露わけてけさの別の袖の上を思ひも出でよまの〳〵はら原。（枝直）

㉛引むすぶ草葉も露のおきふしに馴れていくよの袖ぬらすらん。（實長）

㉜霧の初音は耳に花に目に香は袖にとまる梅が香。（物成）

㉝ふりもぎりにげ行く春のこれよりはすがらん袖も夏衣かな。（竹葭）

㉞袖ぬらすおのればかりか烏さへ月がなかする秋のあはれさ。（雪丸）

㉟よりさはる袖に秋にうち靡く柳はみちの〳〵ものにぞありける。（金埒）

㊱名に高き隅田櫻の花の香はつゝみにあまる袖秋かな。（馬場）

㊲商人のみせは現金世界にて誰もはらうて袖の雪。（飯盛）

㊳ほこりびし尾花の袖はあちらでもこちらでもふる野邊の朝霜。（卯雪）

㊴日に袖あて〳〵萬歳のぞかれる。（川柳）

㊵振袖にいひぞこなひの森になり。（同）

㊶吉内ともに振袖を顔へあて。（同）

❶振袖が立つゝ蠟燭ひいらひら。（同）

❷うき中の、ならひと知らばかくばかり、花のゆふべのちぎりとなるも、はじめのなさけ今のあだ、いつそあはねばかうしたことも、ほんにあるまいよしなやつらや、あだにくらせし月日のほども、いはでおもひの涙の雨に、いとゞくちなん四つの袖。（俗謠）

❸ほんに筈も空吹く風の、風にみだれも玉くしげ、はらげがみしてあふ夜もありし、うつりなつかしゆかしや袖に、袖にひまなき閨のつゆ。（同）

❹よそになしても問へかし人の、月は誰ゆゑ袖にすむ。（同）

❺涙ならでは裏なとはじ深き思ひのそでのいろ。（同）

❻あはで寢る夜はそでひちまさる、夢に枕のいとまなや。（同）

❼宇治の橋守哀と人は、いはで年ふる袖の色。（同）

❽袖ふり合ふも他生の緣。（俚諺）

❾無い袖は振れぬ。（同）

❿荊軻曰、願得二將軍之首一、以獻二秦王一。秦王必喜而見レ臣、臣左手把二其袖一、右手揕二其胸一。然則將軍之仇報矣。（司馬遷）

⓫秦王負レ劒。〻遶レ柱而走。群臣皆愕。卒惶不レ及レ施二其兵一。而以手共搏二秦王一。秦王之袖絶。（同）

⓬秦王環レ柱而走。卒惶不レ知レ所レ爲。左手把二秦王之袖一。而右手持レ匕首一以擿レ之。未レ至レ身。（同）

⓭玲瓏雲將生花機。飄颻風袖蕊香。（白居易）

⓮飄颻袖。舞二長袖一。紛白繚繞者。列二屋面閣一。（韓愈）

⓯摘レ蕊紅袖溫。（杜牧）

⓰舞彩鸞二迴袖一。歌扇掩二國紗一。（張正見）

⓱纖腰間二長袖一。玉珮雜二繁纓一。（杜甫）

⓲長袖善舞。多錢善賈。（司馬遷）

⓳黑裘狐袂裘。（詩經）

「そんけい」尊敬

畏敬。恭敬。謹敬。肅敬。愛敬。祇敬。親敬。崇敬。禁敬。崇拜。尊崇。

❶うやまふ。たふとむ。あがむ。あやまる。あやまつか。あがむ。

❷羅尊の御遺跡拜み來らんとて、弟子十餘人を相具して、天竺へわたり侍らんと思はれける比、春日大明神にいとま申さんとて、かの御社へ參られけるに、鹿六十頭膝を折りて、地に伏して上人を敬ひけり。その後、生所紀伊の國、湯淺郡へ向はれたりけるに、上人の伯母なりける女房につきて、春日明神御託宣ありけるとて、我佛法を守護せんが爲に、この國に跡をたれり。上人我國をすてゝいづくへか行かんとするとの給ひければ、上人申し給ひけるは、この事信ぜられず、まことならばその驗を示し給ふべしと申し給へば、汝我を疑ふことなかれ、我此山に來りし時、六十頭の鹿膝を折りて敬ひしは、我汝が上に、六尺あがりて翔り離れざりしゆゑに、我を敬ひしによりて、上人に向ひてひざを折りしなり。上人又申すやう、これはまことにさりさりながら猶疑あり。速に凡夫のふるまひに離れたらん事をしめし給へと申されければ、この女房とびあがりて、菅屋の棟に尻をかけて坐せり。其かたの色瑠璃の如くに青く透き通り、日より白き泡をたらす。その泡かうばしき事かぎりなし。（成季）

❸この宇治山に、ひじりだちたるあざり住みけり。才いとかしこくて、世のおぼえもかるからねど、をさ〳〵おほやけごとにも出でつかへず、こもりゐるに、この宮のか

碧空。層空。青空。晴空。遠空。長空。煙空。横ノ空。凌ノ空。排ノ空。排ノ空。

みそら。天つそら。おほぞら。はれわたる。くもおほよ。はてしなき。みどりのそら。

●正の年おほかた世の中さわがしくて、公ざまに、物わびしげく見聞ならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光り見え、雲のたゝずまひありとのみ、世の人数、歩々くて、過なべてならぬほども知りたり。（紫式部）

●月は有明にて光残れるものから、彩やかに見えて、中々おかしきあけ方なり。何心なき空の景色も、只見る人から、譬にもすべきも見ゆるなりけり。（同）

●かくてのみ明さんよりはとて、装束おしあけたれば、大空に西に傾きたる月のかげ、遣水すみわたりて見ゆるに、霧わたりたる空のけしき、鏡のね、虫の声、ひとつに染まりいでて、更にすさにし方、今行末のことども、かゝる折はあらじと、和のいろさへ、あはれにうらがなしう。（和泉式部）

●大磯のうら小磯のうらなき遠々とすだれ

の実加に染て出せう。靫猟の世には武士も顕れず。へェ、惜い哉悔い哉。亡君御存生の折ならば一方の旗大将、一国の政道お預け申した迚、惜からぬ御器量。是に並ぶ大鷲文吾、矢間重太郎を始め、小幸荒松猪尾板倉片山等、強れし眼を開かすろ、三拝、人々も無骨の段皆平と、座に頭を指仕ろ。（浄瑠璃、忠臣蔵）

●魂の間には由貫之助、早刻死の刻限と、君の位牌を仏前に、恭しく掛え奉り、御坐の左は御簾所、こしもとお末に至る迄、露なき花のしをれ咲、諸士も左右に列座して、生ろが如き躰致に、線香も伽羅の香の、薫る田舎なき手向かや。

（浄瑠璃、曽の浜合）

●春草はのちはうつろふいはほなすときはにいませ我きわぎみ。（市原王）

●ますらをの心おもほゆ大君のみことのききをきけばたふとみ。（家持）

●みさゝだにうやまふいそをうちさらしほなながかかねつる。（讃人不知）

●たらちねの親のつくれる三労野のよし野の神はみるし尊し。（伸滋）

●位おりさせ給ひし後は、年をへて、春の中に必ず石清水に七日御こもり、その中に五部の大乗経供養ぜさせ給ふ。御下向の後はやがて賀茂に御幸、平野北野などもさだまれる事なり。寺には蝶蜆の清涼等、法輪、太秦などに御幸ありて、寺司に賞おこなはれ、法師原に物かづけ、すべて神を敬ひ、仏を尊びさせ給ふ事、来しかた行末もたのしからんとぞ、世の人申しあひける。（増鏡）

●建長四年に十一にて御下ありし後、今まで十五年がほどにぎはゝしくいみじうて過ぬれさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住居にひきかへ、物淋しく心細うなど思さるゝなりけりもありけるにや。（同）

●花は櫻木、人は武士と申せ共、いつかなう〳〵武士も及ばぬ御所存、百万騎の強敵を一心を指り受け我々が手本とし、敵師直を助け共、左程、性根は非らぬもの、貴公の有る中にも人なしと申せ共、町家の中にあれば有る中にも氏神と斯かたらずんば、御恩忘却とも氏神とも斯かたらずんば、御恩に隠るゝとも、やはか仕損じ申すべき。人うつつならば、蜻蛉石の中に籠り、鍾洞の中に入るとも、一味徒誅の各共の為には、必ず一命を捨て、君の御為に忠義を尽すべき事、勿論なり。（同）

●ゆかしき御さまにたふとさわぎをせさせ給ひつゝ、法文などをよみならひ給へば、たふとびきこえつゝはにまゐる。年比まなび知り給へるこゝろざし深き心をさゝ田かせ来り、いよ〳〵此世のかりそめにちぎりなきことを申し知らすれば、心ばかりはちすの上に思ひ上り、にごりなき池にもすみぬべきを、いとかくをさなき人々をみすてんうしろめたさばかりになん、えいたみちにかたちをもかへなどゝてなく物語し給ふ。（紫式部）

●やまにおはしまして仰せさせ給ふやうに、経仏など供養ぜさせ給ふ。またの日は桂川におはしたれば、俗部おどろきかしこまり囲えたまふ。年頃も御所などにつけ、かたらひ給ひけれど、ことにいと親しきことはなかりけるを、一のたび一品宮の御心地のほどにさふらひ給へるにすべれ給へるけ人物し給ひけりとみ給ひより、こよなう尊び給ひて、今すこし深きちぎり加へ給ひてけれど、おもく〳〵しうおはするまゝのかくりごとおはしたらんこと、もてさわぎきこえたまふ。（同）

ば、雲のかけはし波の上にうかみて、かさゝぎのわたしもり、あまつ空にあそぶ。あはれさびしき旅の空哉。ながめなれてや人はゆくらん。（光行）

㊵夕月夜の頃なれば、更けゆくまゝの空は、星の光ばかりなるに、静りたる夜のけしき、最閑におもしろし。（中務内侍）

㊶猶立ちかへり、あくる方を御覧ぜらるれば、すこし晴れつる空も、又かきくらし風も励しく、消えたるに、寒鳥の一聲も、あはれをそへて覚ゆる。（同）

㊷白妙に、雲も霞もうつもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重ひとへ、げに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆる紅色かな。（謡曲、田村）

㊸神風に、心安くぞ任せつる、櫻の宮の花盛、花の白雲立ち迷ひ、空さへ匂ふ月讀の、洩りくる影も長閑にて、知るも知らぬも道の邊の、行きかふ袖の花の香に、春一しほの景色かな。（謡曲、第六天）

㊹波は白ら、吸うつ波の聲、松風は琴の調べ、心耳を澄す折柄に、天つみ空の雲井かゝやき渡り、湖水の面鳴動するは、天龍竜燈の来現かや。（謡曲、白髭）

㊺既に夕陽西にうつり、山峡の影すさまじくして、鳥の聲幽かに物凄き、夕べの空もほのん〳〵と、月になりゆく山陰の、寂寞と、ある柴の戸に、此御経を讀誦する。（謡曲、芭蕉）

㊻傾く空をしるべにて、空をながめばなち方に、暮ろ〳〵と遠くなるなの海かと聞けば、あれ〳〵よそに靡くかみなりの、落ちかゝるとも我妻を、避けて涙の袖おほふ。

㊼十六夜やたしかにくるゝ空の色。（去来）

㊽空も地も一つになりぬ五月雨。（杉風）

㊾さくら散る空や越後の鳥屋。（許六）

㊿憑出の泡だつ空や雲の峰。（支考）

(51)利神や鯛うき上る沖の空。（雲五）

(52)大空も花によへりや吉野山。（琴詩）

(53)島原に田舎の空やタ雲雀。（召波）

(54)八郎の空のかすみや御忌詣。（同）

(55)兵遊に二日保ちぬ雨の空。（蓬宇）

(56)吹きにけて又降る空や春の雪。（太祇）

(57)水ならぬ夜かゝれる大空を雁はかへるのつらなりて行く。（蕪風）

(58)桃の花盛りなる頃大空も酔ひて暮るゝを忘れ果てしか。（蒲丸）

(59)大空の天井板は松の木のひでよりあかきふし待の月。（朝風）

(60)老が身は鳥がねよりもさめやすき夢の世なしる暁の空。（春湖）

(61)やどりして我も一夜の松がねなわかるゝ岸のよこぐものそら。（雪堤）

(62)いづかたとながめもやらん雲とぢて雨さへけふはふるさとのそら。（同）

(63)あしがらのせきの山路北ゆけば空もをぐらき心地こそすれ。（鼠淵）

(64)空も地も一つになりぬ五月雨。（杉風）

(65)さくら散る空や越後の鳥屋。（許六）

(66)憑出の泡だつ空や雲の峰。（支考）

(67)利神や鯛うき上る沖の空。（雲五）

(68)大空も花によへりや吉野山。（琴詩）

(69)島原に田舎の空やタ雲雀。（召波）

(70)八郎の空のかすみや御忌詣。（同）

(71)兵遊に二日保ちぬ雨の空。（蓬宇）

(72)吹きにけて又降る空や春の雪。（太祇）

(73)水ならぬ夜かゝれる大空を雁はかへるのつらなりて行く。（蕪風）

(74)桃の花盛りなる頃大空も酔ひて暮るゝを忘れ果てしか。（蒲丸）

(75)大空の天井板は松の木のひでよりあかきふし待の月。（朝風）

(76)まさらはす浮世のわざのいろどりもありとや月に源氏の空。（一蝶）

(77)うそばかり月夜鳥と思ふうらしらけて見ゆる梢雲の空。（行就）

(78)軒にたる柳の絲と絲水とこぐらかりけり春雨の空。（巣多）

(79)明行くや燕の音に星消えて月日分るゝ横雲の空。（田鶴丸）

●さのみ戸をたてる程には降らぬなり横に寝てみる春雨の空。（鼻也）

(80)見渡せばすみだ川原の薄煙たつる今戸を明けがたの空。（梁圃）

(81)櫻ちる木の下陰で笠ぬげば空に知られぬつらゆきとなる。（是急）

●さるにても我妻の、秋よりさきに必と、あだし言葉の人心、そなたの空よと詠むれば、それぞととひし人もなし。（俗謡）

●同じ空なる影かとおもて、見ればあやしや月さへ様と、共に見ぬ日でかはるげな。（同）

●月は人目の關路もなしや、西を流るゝ夜半の空。（同）

(82)空なかけるつばさ地を走る鹿。（俚諺）

(83)運の矢が空から落ちる。（同）

(84)海水粘り雲ゝ破空。名區一々入二漂艫一。（蘇軾）

金風不レ到愁臨レ暁。三保九能檀雨中。船出）

(85)江上悲心千疊出。浮空積翠如二雲煙一。

(86)回溪十六度。碧嶂盡二晴空一。（李白）

(87)落葉轆疎雨。晴雲散二遠空一。（同）

(88)九州何處遠。萬里若レ乗レ空。（王維）

(89)向二浦低行雁。排レ空轉梁鳥。（劉逖）

(90)三千初撃レ浪。九萬欲レ搏レ空。（唐明皇）

(91)錦蠶文二碧浪一。綉羽絢二春空一。（許敬宗）

(92)衣輪懸二落鵄一。朝光蕩二碧空一。（樊紹文）

(93)仰見突兀撑二青空一。（韓愈）

(94)月色浜白潮二春空一。（温庭筠）

【た】田ノ部

井田。公田。屯田。籍田。瓊田。水田。桑田。萬頃。黄雲。耕耘。田づら。田のも。わさ田。みなど田。ひつち田。むしろ田。かど田。小山田。千町田。苗代小田。五百代小田。川ぞひ小田。

(95)八月つごもりがたに、太秦に詣づとて見れば、穂に出でたる田に、人多くて騒ぐ。稲かるなりけり。早苗とりしかいつのまにとはまこと、げにさいつ頃、賀茂に詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかな。是は女もまじらず、男の片手にいとあかき稲の、もとに青きを刈りもちて、刀か何にかあらん、もとを切るさまの、やすげに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかで、さすらん態を生にて並みたる、いとなかしう見ゆ。（清少納言）

(96)秋の山田は、夜こそことにさびしき物の、さすがになかしくはあれ。あやしの小屋に、暁の男が起き居て、引板引鳴しつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、取集めて、あはれなる事ども多かり。かく心を遣してもとはすれど、暁遠う成りては、打まどろむ

にやわらん、物の音なひも絶々なれば、小屋近く鹿のよりきつゝ、何のかひよと打なきたるは、いぎたなさた、いさめ顔なりや。（高尙）

●かくて邑里にいで、田中のほとりを過れば、左に見右に見、立田眇々たり。或は耕し已がひき〳〵に論じ、畦畔あぜを並べて苗を我とり〳〵にうゑたり。民烟のけぶりは父君心鉢の恩火よりにぎはひ、王道の德は子民耕稼の土器より開けたり。水龍は本より稲穀をまもりて、夏の雨をくだし、電光はかれてより九穂をはらみて三秋をまつ。東作の業力をはげます、西收の税たのもしく見ゆ。劉寛が刑をわすれたり。蒲鞭定りて災と成りぬらん。（光行）

●我きけり、此亭は西南に窓をひらき、其まゝに月もたのまじと、翁の吟を殘されける伊吹の嶽は、殊にしろし。南北の山づらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田かぎりなく、村落よきほどにへだゝれば。（也有）

●庭は僅の間地ながら、北に一重の窓をひらけば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす。（同　）

●おもしろや昨日の早苗いつの間に、稲葉もそよぐ秋風に、田面の鳥を追ふとかや。我等は心浮鳥の、下やすからぬ思の數、群れゐる鳥を立てんとて、身を捨舟に鳴鼓を打ち、或は水田に庵を作り、又は小舟に鳴子をかけ、引きつるゝ汐の舟の落汐に、浮きたつ鳥やさわぐらん、鳥も驚く夢の世に、我等が業こそ現なき、實にや夢の世の、何かたとへにならざらん。身はうたかたの水鳥の、浮寢定めぬ波枕、うちなびく秋の田の、穂波につれて浮き沈み、おもしろの鳥の風情や。（謡曲　鳥追船）

●晩稲の小田も刈りしほに、色づく秋の村鳥を、苧生の浦舟漕ぎ連れて、思ひ〳〵の鳴子物、あれ〳〵見よや、よその舟にも打つ鼓、空に鳴子の村雀、追ふ聲を立て添へ、さていつも太鼓はとう〳〵と、風の打つや夕波の、花若よ悲しくとも、追へや追へや水鳥、いとせめて、戀しき時はうば玉の、夜の衣かうちかへし、夢にも見るやとて、まどろめばよしなや、夜寒の砧うつとかや。（同　）

●私は御領分御笠村の百姓助八と申す者、博奕はうたず喧嘩嫌ひ、成敗に遇ふ咎は無い。時分柄稲のこなし時、山田の早稲を苅らんと、鎌を磨いで居る所。アノ侍がによつと來て、済の手の新開、百石餘りの新田、水懸を見て呉れ、此方、爲にも成る事と、篤つくりと合點もさせず、無理に駕籠につき込まれ、浮々と來ての後に。（浄瑠璃　大友眞鳥）

●我君常の御戯にも、土を敬ひ下を憐む御心より、北のお庭に方一町の田をひらかせ、毎年御領内の土民を召され、耕やし植うる賤の手のわざ、民の辛苦を御覽ある。今年もみら田はすきかへし候へ共、御所勞によつていまだ田植の御沙汰なし。折しも此頃の雨に濡ふ早乙女の、田植を御覽に入れられば、御心にも叶ふべしと言上すれば。（浄瑠璃、平家女護島）

●秋田かるかりの庵に時雨ふり我袖ぬれぬほす人なしに。（萬葉）

●足引の山田を植ゑていなづまのともに秋にはおはんとぞ思ふ。（貫之）

●さても猶しづの小山田打かへし思ひさだめぬ身の行方かな。（有家）

●我門のおくてのひたに驚きてむろのかり田に鳴ぞたつなる。（兼昌）

●小山田の庵にたく火の行なしに立つ烟もや雲となるらん。（盛長）

●ふる雨とてる日のめぐみまち〳〵に高田くぼ田も神のまに〳〵。（春海）

●夕まぐれ山田のほなみ風たちていほもる袖に露こぼれつゝ。（成章）

●筑波ねのしげきめぐみはしろきかなすそわの田ゐに立つけぶりにも。（千蔭）

●植つ田のそしろのなしねかりつみてうしろやすげに見ゆる賤哉。（同　）

●うちつけにおりたゝんとも思ふ哉たづのむれゐる春の櫻田。（有功）

●朝田夕田晝田又田やほとゝぎす。（許六）

●ぬり畔の光る山田や夕つく日。（芦水）

●犬蓼の枝折りふせる冬田哉。（一草）

●水澄んで籾の芽青し苗代田。（支考）

●植付けし夜を三日月の門田かな。（青蘿）

●今日はとて嫁も出立つ田植かな。（蕪村）

●去程にうちひらきたる刈田かな。（鬼貫）

●晴からも田からも祝ふ田面哉。（山只）

●杉風を中に青田の賑ぎ哉。（丈丘）

●浮雨亭に坐して青田の夕眺。（香瓢）

○賢くも蛙に詠を詠まれてはいかゞかへさん春のあら小田。（下陸）

●まはり道せよと田面に此頃ははりて通さぬ苗代の水。（秀成）

●鍬のはのきたへと雁の歸る頃かへすあら田の水もほどよし。（山彦）

●百姓の外は通さぬつくり道行過ぐる人もかへすあら小田。（廣住）

●すき間なくみな秋の田は朝露をもちとうるとのみいりさへよし。（則季）

●耕作のたがねすきがねうなゐこの株きりみゆる春のあら小田。（佐十）

●田になさば何萬石は汐干潟鋤鍬もてる鬪もとらまし。（清澄）

●秋のうち稲はかりても雁がねのはむべきかぶはのこす冬の田。（樂々庵）

●いねも今孤いろとて賤の男のかぎの手にかゝる秋の實用。（拔戸門）

●田の面は殘らず鎌のほに出でゝ入るみのよさは七八分なり。（菊穂）

●七種を田の中で聞く首尾が出來。（川柳）

●田圃からむかふにあたる鬼が城。（同　）

●田樂は田でたのしむのよみがあり。（同　）

●田へ植ゑる嫁でいゝうのはちすなり。（同　）

●ふりうりの田地に一羽さぎがおり。（同　）

●こゝいらに門がほしいと田をめぐり。（同　）

●君が田が、わが田に並ぶうれしさよ、さうよの、我田へかゝれ君が田の水。（俗謡）

●五月田の水のほどまでこひ忍ばれて、やがて秋田の落し水。（同　）

●泥田を棒で打つ。（俚諺）

●田を行くも畦を行くも同じ道。（同　）

●我が田へ水を引く。（同　）

●詩を作るより田を作れ。（同　）

●恩田百姓作り取り。（同　）

●大田多稼。既種既戒。既備乃事。以我覃耜。俶載南畝。播厥百穀。既庭且碩。曾孫是若。既方既皁。既堅既好。不稂不莠。去其螟螣。及其蟊賊。無害我田穉。田祖有神。秉畀炎火。有渰萋萋。興雨祁祁。雨我公田。遂及我私。彼有不穫穉。此有不斂穧。彼有遺秉。此有滯穗。伊寡婦之利。曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田畯至喜。來方禋祀。以其騂黑。與其黍稷。以

享以祀。以介二景福一。（詩經）
●草茫々水泪々。上田無下田没。中田有ノ禾穂不ノ長。狼藉只供兒雁糧。雨中摘歸半生濕。新婦舂炊兒夜泣。（高啓）
●威揚二海外一載二西歸一。讌二察奇表一薦二玉扆一。今日勿々也戊辻。春田何處古關門。（藤森）
●我生無二田食一。破硯注二唐人一。以ノ硯爲二耳田一。舌耕而筆采。（蘇軾）
●有ノ水可ノ溫田可ノ稼。即松而徑竹而門。（葉茵）
●二頃田猶在。兒爲二六國蘇一。（南塘）
◎陶令獲二田僅二頃一。（潘逍）
◎新秋放ノ鵝野田肯。（劉禹錫）
●遠ノ千有ノ田。（李之儀）

〔たき〕瀧

千丈。一條。飛沫。飛烟。銀箭。瓊珠。飛ノ空。掛ノ壁。挂ノ岩。擘ノ石

瀧つせ。落ちたぎつ。岩こす。瀧の岩波。瀧の水上。峰の瀧つせ。瀧のみなわ。八十瀬の瀧。

木がくれおつる。たぎちながるゝ。

●余年久しく、那智山の瀧を見まほしく心がけ居たりしが漸々近き頃彼地に遊びて、心よく一見せり。誠に天下無双、目を驚かす瀧なり。其瀧のあたり、山のたゝずまひより、堂宇の設、樹木の生ひやうまで、他山には勝れて、神仙の境界といふべし。此瀧の事は、幼き時より聞き居て、かやうにもあるべしと思ひしには似もよらず、格別に異なり。初に思ひ居しは、ふところのやうに山の抱へたる所に、巖石峨々とそびえ、其中に大河を切落したるやうに、水煙一二町にもとびちり、雨の降るごとく一山鳴響き、其音遠く卅町、五十町の所までも、聞ゆべし。其瀧の全體の趣なたとへいはゞ、力士のあれたるが如くて、目留て久數は見る事もなるまじ。余が如き盧弱の者は神氣も遠々數なるべしと思ひ居しに、左はなくて、瀧の全體の趣なたとへいはゞ、美人の薄衣をきて立たるごときものなり。瀧のおつる所は、一枚の岩にて壁を作りたるが如き所なり。其石壁の横の廣さ、五町も十町もあり。但し遠方よりは此石壁、樹木の梢に出で、全く見ゆれども、近くよりて瀧みるあたりにては、兩方に程よく大木の影多くありて、石壁の横廣くはみえず。空はまことに天より落つる心地すれども、水の幅は殊の外に狹く、大抵幅一間ばかりに見ゆれども、廣く高き所なれば、實には二三間もあるべし。高さは直下五六十間と見ゆ。上の方皆は水筋通りてみゆれども、それより下にては石面に水碎け、色白く霧のごとくに散りて、其見事いひつくすべからず。下には大石多くありて、瀧壺といふべき淵はなし。其音も格別甚しからず。瀧近くよりても、神氣の遠々しくなるやうにはおらず。文覺上人の荒行も空言にはあらじと見ゆ。（南豁）
◎大和に三月ばかりすみけるに、さうくしく、寺めぐりせんと思ひて、龍門といふ寺に詣づ。正月十日あまりになんありける。みれば其寺のありさま、瀧は雲の中よりおちくるやうに見ゆ。仙人の岩やといふ所は、いたく年つもりて、岩の上の苔八重にもむしたり。あはれに尊くおぼえて、泪おつる瀧におとらず。見知らぬ心地に、頻なり。

こめでたくみて、物がなしく、都思ひやられて、しばしながむるに、いとくらうなりぬ。雨やふらんとすらんと、ともにある人々いそぎければ、雨はふらじ、雲などいふ程に、雲かきくらしふる。ある人いざ歌よまんといひければ、

たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん。

とよみたりければ、こと人よまずなりにけり。（伊勢）
●頃は十二月廿日餘のことなれば、雪ふりつもりつゝぬて、谷の小河も音もせず、峰の嵐吹き氷り、瀧の白糸垂氷となりて、皆白妙におしなべて、四方の梢も見えわかず。然るに文覺、瀧壺におりひたる。首際つかりて、しくの呪を見てけるが、二三日こもりけれ、四五日にもなりしかば、文覺堪へずして揚り上りぬ。數千丈懸りおつる瀧なれば、なじかはたまるべき、颯とおち落され、刀の刃の如くに、さしも殿しき岩かどの中を、浮きぬ沈みぬ五六町こそ流れけれ。（平家物語）
●つゞけるる石の橋なれば、石橋と名な名付けたり。其面わづかに、尺よりは狹うして、苔甚だ滑かなり。其長さ三丈餘　谷のそくばく深き事、千丈餘に及べり。上には瀧の糸、雲より懸けて、下は泥梨も白波の、音は嵐にひゞき合ひて、山河震動し、雲井よりつらぬきかへる白玉を誰布引の瀧といひけん。（謡曲、石橋）
●御覽候へ、この瀧波の、雲より落ちて數千丈、瀧壺までは霧深うして、身の毛もよだつ谷深み、巖峨々たる岩石に、わづかにかゝる石の橋。（同）
●音にきくより、鼓の瀧を打見れば、唯山河の中にぞありける。
●頃は十二月廿日餘のことなれば、雪ふりつもりつゝぬて、谷の小河も音もせず、峰の嵐吹き氷り、瀧の白糸垂氷となりて、皆白妙におしなべて、四方の梢も見えわかず。然るに文覺、瀧壺におりひたる。首際つかりて、しくの呪を見てけるが、二三日こもりけれ、四五日にもなりしかば、文覺堪へずして揚り上りぬ。數千丈懸りおつる瀧なれば、なじかはたまるべき、颯とおち落され、刀の刃の如くに、さしも殿しき岩かどの中を、浮きぬ沈みぬ五六町こそ流れけれ。（平家物語）
●つゞけるる石の橋なれば、石橋と名な名付けたり。其面わづかに、尺よりは狹うして、苔甚だ滑かなり。其長さ三丈餘　谷のそくばく深き事、千丈餘に及べり。上には瀧の糸、雲より懸けて、下は泥梨も白波の、音は嵐にひゞき合ひて、山河震動し、雲井よりつらぬきかへる白玉を誰布引の瀧といひけん。（謡曲、石橋）
●御覽候へ、この瀧波の、雲より落ちて數千丈、瀧壺までは霧深うして、身の毛もよだつ谷深み、巖峨々たる岩石に、わづかにかゝる石の橋。（同）
●音にきくより、鼓の瀧を打見れば、唯山河の中にぞありける。
●武士の嵐程ある嫗、草村に生ひ立てもおつる水にぞありける。
●伴れて歸れど歸らぬは、水の流れと人の身の、前非を悔いて詮方も、千手の誓影頼む、國行が一手來太郎國俊は、父の勘氣をゆるされんと、心に願の瀧詣で、糸被觀音の御名を唱へ、手には樒の一枝に、受くるやと、坂を折節風後が、爰にありとも白糸の、瀧の下に寄つて、思はずも見かはす我子の顔、無事なかやいといはんとせしが押鎮め、ハア雨無三宵此瀧に破れた瀧を見るは暫も目の穢れ。（淨瑠璃、新清宵物語）
●武士の嵐程ある嫗、草村に生ひ立てても、調達へず來りしは、義秀が女房恥しからず。汝が其眞心を妻と定め、一生無妻で暮すぞと、心の千倍胸一盃、鬼を欺く兩眼に、流す涙は布引の、女瀧男瀧もかくやらん。（淨瑠璃、岸姫松寧鑑）
●山高み白ゆふ花におちたぎつ瀧の河内はみれどあかぬかも。（金村）
●風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける。（躬恒）
●雲井よりつらぬきかへる白玉を誰布引の瀧といひけん。（降季）
●白くもとよそにみつれば足引の山もとゞろにおつる瀧つせ。（經信）
●雲深きあたりの山につゝまれて音のみ出づる瀧の白波。（定家）
●あめなるやおとたなばたのおるはたの手玉みだるゝ山の瀧つせ。（眞淵）
●ぬしなくてさらすとみえし山姫の布は岩ににさするなりけり。（長流）
●すみまさる心ゝ友と朝夕にきけばさわが

ゐ瀧つせのおと。　（瀧蓮）
⑭白くものたなびく山のたかねよりおちくる瀧や天の川水。　（蓮庵）
⑮山深く雲霧つゝむ瀧つせはたゞ石はしる音ばかりして。　（春湖）
⑯時鳥うらみの瀧のうらおもて。　（芭蕉）
⑰山鳥の尾上に瀧の女夫哉。　（几董）
⑱大瀧や小瀧のさまゝ雛の聲。　（狩虫）
⑲瀧潤れて木葉な叩く雫哉。　（嵐風）
⑳風や瀧吹き分けて岩の屑。　（召波）
㉑瀧殿や葉の滴らぬ樹々もなし。　（嶺山）
㉒瀧半ば重なる菅葉若葉哉。　（閑史）
㉓子規瀧より上のわたり哉。　（丈草）
㉔點の子の心すさまし瀧の音。　（土方）
㉕鳴瀧の名にやせりあふ郭公。　（蓼本）
㉖遠近に瀧の音聞く若葉哉。　（無村）
㉗たう〳〵ト瀧の落ち込む若葉哉。乙二
㉘五月雨や雲井の水をかへほしてふちも平らになる瀧の音。　（有司）
㉙山手よりさつと白波一ながれ落すとみしは瀧のみなもと。　（左段）
㉚順礼の札うつ時にみくま野の瀧も第一番とこそきけ。　（宿屋）
㉛仙人のさけ甚とみえ、しら玉に打ひしがるゝ瀧の那智景。
㉜しら雲な山にこめてや白糸にさらし落せる布引の瀧。　（登　）
㉝月ほしとしかとわからぬ春の夜に霞こめたるうぐひすの瀧。　（元安）
㉞きやうかよむほどだぶ〳〵と聞ゆるはその名にしおふ鶯の瀧。　（好秋）
㉟山姫のはたにおるかはしらねどもよをへておつる瀧の白糸。　（來福）
㊱しら糸の瀧をたづねてきてみれば山よりみづのわく斗也。　（俗諺）
㊲山のせをわけて落つれば笈ずりのひとへにみゆる那智の瀧つせ。　（樫園）
㊳世の垢によごれし雲の衣手をあらへば清きなちの瀧つせ。　（徑　）
㊴蚤老の瀧まで下に下になり。　（川柳）
㊵燒酎をとる蚤老の瀧の霧。　（同　）
㊶おとにきく、よしの、瀧のその末は、いもせの山の中にはやたつ龍門の、ながれも那智のまさなぎに、しのぶ千鳥のおとなしや、花のかゞみの音羽山、みだるゝ瀧の白糸をくりかへしつゝ青柳に、さくらまじへし都のにしき、吳服漢服の纖姫や、あまつなとめが冥衣、雲井にさらす布引の、瀧津瀬も　すさみだれに、いづれ菖蒲がかほよ花、ひく手あまたの身なれども、いなにはあらぬ有馬山、にしにも名のみあげまきや、鼓の瀧のその音は、たえずとうたり翁が瀧の、おもてや箕面うらみなる、それはあづまぢ日の光、月に玉しく嶸峨野の露や、戸無瀬におつる大井川、くだす筏にふるゆきは、ちりかふ花と見まがひて、山しづかなる峰のゆき、ゆたかにつもる蚤老の、なにも飴をますいづみ。　（俚諺）
㊷鯉の瀧のぼり。
㊸壬寅歳余遊二天台石梁一、四面皐者靡レ不二顚隕一、皆瑳レ梁遮逝。梁長二二丈一、寬三尺許一、若二激箭一跨二山腹一、其下懸空。水來レ自二華頂一、平瀉四層、至レ此會合、如二萬馬結レ隊、穿レ梁狂奔。凡水被二石撓一必怒、怒必叫號以崩落。千尺之勢爲二雄磔砰所一レ擊挖二、自然拗怒彎勁、噴レ雷震レ霆、人相對不レ聞二言語一。余坐二石梁一、俯若二身騎一瀑布上一、走二山脚一仰觀、則飛沫濺レ頂、日光炫亂、坐立俱不レ能レ牢、疑此身將二與レ水俱去一矣。　（袁子才）
㊹浴罷乘レ車、登二山觀一瀑布一。土人謂二之布引一、亦呼曰二瀧一。有二高下兩處一、高者爲二雄瀧一、下者爲レ雌、瀑聲尤宏壯。近レ瀑處多二茶茹酒樓一、有二觀音小廟一、結構尤雅。司者皆祠鮹玉説女子。靜坐對二瀑聽一、澒湲訇激之聲、頓覺二萬念俱空一、一塵不レ著、眞妙境也。　（玉紫詮）
㊺淳上飛瀑可二二十丈一。瀑怒參倒擊レ崖、窾中若レ運二萬斛雪一、從レ天瀉下、白光閃々奪二人目睛一。至二潭底一、輒復逆上、有レ聲如二靦雷一、人笑語咫尺不レ能レ辨、猶レ隔二褒中壁一。居人云、每二天風一號、四山林木震撼、欲レ折、霏雲下覆、杳不レ知二昏曉一。　（宗泉漱）
㊻見二月影在一レ窓、竹樹交映。余心動不レ能二復寐一。遂起行至二瀑下一。月光與二瀑布一相輝發、白銀動盪、光彩不レ定。時夜參半、烟鳥皆定、覺二水聲怒吼倍大一。蓋靜極故耳。
㊼日照香爐生二紫烟一。遙看瀑布挂二長川一。飛流直下三千尺。疑是銀河落二九天一。　（李白）　（旭山）

〔たけ〕竹

勁直。扶疎。虛心。貞節。繁陰。翠色。風梳。雨洗。停レ雪。冒レ霜。
わかたけ。さゝたけ。なよ竹。

下者爲レ雌、瀑聲尤宏壯。近レ瀑處多二茶茹酒樓一、有二觀音小廟一、結構尤雅。司者皆祠鮹玉説女子。靜坐對二瀑聽一、澒湲訇激之聲、頓覺二萬念俱空一、一塵不レ著、眞妙境也。　（玉紫詮）
㊺淳上飛瀑可二二十丈一。瀑怒參倒擊レ崖、窾中若レ運二萬斛雪一、從レ天瀉下、白光閃々奪二人目睛一。至二潭底一、輒復逆上、有レ聲如二靦雷一、人笑語咫尺不レ能レ辨、猶レ隔二褒中壁一。居人云、每二天風一號、四山林木震撼、欲レ折、霏雲下覆、杳不レ知二昏曉一。　（宗泉漱）
㊻見二月影在一レ窓、竹樹交映。余心動不レ能二復寐一。遂起行至二瀑下一。月光與二瀑布一相輝發、白銀動盪、光彩不レ定。時夜參半、烟鳥皆定、覺二水聲怒吼倍大一。蓋靜極故耳。
㊼日照香爐生二紫烟一。遙看瀑布挂二長川一。飛流直下三千尺。疑是銀河落二九天一。　（李白）　（旭山）

〔たけ〕竹

勁直。扶疎。虛心。貞節。繁陰。翠色。風梳。雨洗。停レ雪。冒レ霜。
わかたけ。さゝたけ。なよ竹。

吳竹。かはたけ。竹のしげみ。ちひろのかげ。葉分の風。竹の葉音。ひとむら竹。心むなしき。代の色そふ。世をへて直き。
㊽五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさふらひ給ふと、こゑ〴〵していへば、出でゝ見よ。例ならずいふは誰ぞと仰せらるれば、出でゝこは誰ぞ、おどろ〳〵しうきはやかなるほどといふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るゝは、竹竹の枝なりけり。おい、このきみにこそといひたるをきゝて、いざや、これ殿上にゆきて語らんとて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭辨はとまりぬるものどもかな。御前の竹を折りて、歌よまんとしつるを、職には、女房など呼び出でゝをといひてきつるを、竹竹の名を、いと疾くいはれていぬるこそをかしけれ。誰が教へばぞ。ことぞえ知じなどのたまふ。まめごとなどいひ合せて居給へるに、この君と稱すといふ詩を誦して、又巢り來れば、殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ぶぬるぞ。いとあやしくこそありつれとの給へば、さる事には何の答をかせん。いとなか〳〵ならん。殿上にてもいひのゝしりつれば、うへもきこしめして、興ぜさせ給ひつるとかたる。誹もろともに、かへすゞ〳〵同じ事をすんじて、いとをかしがれば、人々出でゝ見る。とりゞ〳〵に物どもいひかはしてかへるとて、猶同じ事を諸聲にずんじて左衛門の陣に入るまできゝゆ。　（清少納言）
㊾亭に名づくるに千竿を以てする、君さらふ事なかれ。竹は古人のとりゞ〳〵に愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年々にふりゆき、姿は日々にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはく、旬は此君の空心にもとむべく、てにはにはふしゞ〳〵のほどよからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折々の風になびきて、竝に東坡も七賢もいさしらぬ趣ありといふべし。身はよし鍛冠の仕途におさて、理屈の

●絲に引かれて知行取つては、末代迄の名も共元は竹に花と咲れぬ中、今面さし笠と折れ、親子の縁をさつぱりと切つてしまへば、情文に思もなく義理もなし。これ此竹の風流なる時は、鳥の爲にはあだ敵、事によつたら親子兄弟、敵味方となるも武士道、お返事は此通り、飛手違れて早歸られよと、謂ひ送に言ひはなす。（同）

●我宿のいさゝむらたけ吹風の音のかぜけき此ゆふべかも。（家持）

●ちよもしる竹のおひたる宿なれば千ざきの花はつねならなくに。（貫之）

●笑竹のうきふしげく成りにけりきのふけふとはよもと思ひしものを。（後撰）

●我もとも君がら垣のくれ竹は千世に幾世のかげをそふらん。（後成）

●なよ竹の音にぞ祖たかうきつゝぬれぬにこそは風とりぬれ。（基俊）

●心だにすなほなりせばくれ竹のよのうきふしはなにゝしげらん。（源慶）

●かりそめにうゑしもうき竹いつしかもかきこもるべくなりにけるかな。（千載）

●竹有二君子之道一四、焉。中虛而靜、通而有レ間、有二君子之德一外節而直、貫四時一而柯葉無レ所レ改、有二君子之操一、懇懇而出、遇レ伏而隱、雨雪晦明、無レ所レ不レ立、有二君子之時一清風時至、玉振珊然、中采察而悠揚、鼓レ而節レ之、若二洪鐘泰鼓之交作一、風止籟靜、提綫特立、不レ撓不レ屈、若二岱嶽巍峩一、立二於堂陛之側一、有二君子之容一。（王守仁）

●筇漆南竹竹。日月皮、洛陽、緣節已儘レ霜。黃花猶於、衆。出、關抽二五六一莖一、戸羅二三四一高潔淡、秋巖、眞色事二孤絕一。稀生巧和、林。作出疑、爭、地。縱橫乍依、行。嫋煜忽無レ次。風枝來二風吹一、露綃先濕、淚。何人可二我憐一。洛陽空腸說。（蘇軾）

●今日南風來。吹風庭前竹。低昂中二音會一。甲叉紛相觸。檐檻風聲遠。可レ折不レ可レ辱。風淒竹已凋。窓々散二音玉一。故山今何有。秋雨流二離菊一。此君知健否。蕭瑟莽蒼間。（蘇東坡）

●敬簟留二玉色一、曉夕發二烟分一。漆破驚二盛夢一。想象二就藤紋一。海龍宮、盛日。欲レ疑二入廣寒一。不二是山陰客一、何人愛二此君一。（杜牧）

●劇二破其昔也一。因裁二十數莖一、盛風從レ此

●柳ならん人にもせねど蔵の内とうそぶれすにくれ竹の雪。（俳諧）

●まつすぐにはびこり增る君が代は末迄つよき竹の根がらみ。（安勝）

●おさふしもむつかしげなるほてい竹非根からす子のいかにふえけん。（左段）

●此君とらんとぞねぶしのさゝめ言思のたけもわりていはゝや。（武鄰）

●もろ人の聯想なせしもかぐや姫ふやびやかなる岡の若竹。（酒盛）

●定家と人やみるらん花すゝきに羽なの下軒の笹竹。（新撰）

●四たびめの竹はめでたく黑くなり。（川柳）

●去年の竹とよ、今年の竹とよ、しどろでもどろで、のうさて筍がそろはぬ、なよさてまことにふしがそろはぬ。（俗謠）

●移り植えてし庭の面に、生ひそふ竹の枝しげみ、繁くも見ゆる千代のかげに、馴るゝ鶯やいつまでも。（同）

●木七竹八雛十郎。（雜談）

●竹八月に木六月。（同）

●竹の子親ざまり。（同）

●貧乏竹が福竹か。（同）

●人しれぬよのかくれがとしげれた、身のうきふしのまどのくれ竹。（滑稽）

●おけくれにかはらぬ次とおしみけば竹のこゝろも千代にならびかん。（春洛）

●よゝをへてたれかすむらん世尿やふしみのさとの竹のむらだち。（七湖）

●若竹や縁にわかるゝ和尚山。（其角）

●淡竹の裏よ美よ風の月。（徐瓜）

●若竹や夕日の蜻蛉とりにけり。（蕪村）

●己が葉に月おぼろなり竹の春。（同）

●竹の子の力を誰に譬ふべき。（凡兆）

●笋の穴明の山寒し。（支考）

●筍や鳥羽りに惡太郎。（去來）

●竹の葉や岐王寺の鐘に散やする。（素柳）

●竹の秋狩以ふを知られたり。（仁柱）

●朝日や竹の皮なる小蜆。（越叫）

●竹林にやぶ蚊の多き所とも知らでうかうかあそぶ生酔。（蜀山人）

●ふしごとに千代を籠めてやいとせたけ口に〳〵のぶる竹の千株ら。（文道）

●竹の子はだしやお汁のかはりにすつかりときる蚊の仲光。（如竹）

●庭の雪の一重につもる若竹もやがて二重にこしやまがらん。（風淀）

冷。詩思當レ時清。酒入杯中影。碁添局上聲。不レ同桃與レ李。滿洲作二書生一（杜荀鶴）

●悲聚精雲貫。垂彩映二清池一波泛二含レ風影一。流指防レ露枝一。龍鱗漾二幽谷一。風超拂二建溝一。欲レ識二凌冬性一。惟有二歲寒知一

（虞世南）

●一陣風來一陣鳴。虛檐夜靜見二秋生一。萬竿脩竹非二吾有一。只領萬竿脩竹聲。（竹外）

●風枝露葉無二塵垢一。直節虛心耐二雪霜一。晉代七賢唐六逸。宜情趣爲二此君一忘。（旭窓）

●露洗二新條一光不レ乾。曉風交奏碧琅玕。依稀夢得仲姬筆。个分滿窓殘月寒。（紅則）

〔たこ〕凧

紙鳶。紙老鳴。いかのぼり。すがだこ。からすだこ。

●夢想兵衛は浦島が堪けたる釣竿をもてかへり、これを削りて骨となし、大なる紙たこを張りたて、ちと絖けれど敎へに任して釣の糸をつけたれば、その具合えもいはれず魚というても鳥賊というても釣氣には嫁もあり。牛と牙子は願ひから魚を通すといふ諺にもれず。はや仙人になりすましたなぎ、終に大綱二筋にて引かせ、この大綱の本室の棟を跨るとき、前後四方に丈夫なる杭をうち、かうばいよき程につけて、大綱を引堅め、これを柿子の親として柿子の子をいくつもこしらへおき、これに結び付け、段々に上りながらにこれをこしらへゆき、暫時に丈夫なる繩柿子出來せり。此の如くして僧の人夫に瓦をもたせ登せて、速に破れたる瓦をとりかへたるなり。（眞幹）

●折からいかのぼり世上にはやり、さまざま趣をつくしたるおもひ付、三井富山をさわがし、きれんをあつめ、石たゝみは上町の屋敷、かたびりめんの達磨は中島の共なし細間　もみの直垂は、天滿の鮑組、白綸子のたが袖は新地の色茶屋、鬼のかいなは渡邊祐、鳥いかは阿波座ぼり、封じ文は新町の情盛りか、紙鳶白羽雀は竹田、さゝいがらは嵐三郎四郎、おやまいかは上村吉彌、大黒はいづくの寺のいかなるべき、龜やが方し客かたよりあづかり置きし孔雀いか、御馳走にと上手をえらみ、町代の半兵衛にのぼせさせける。（入子枕）

●我は君ゆゑ雪井の紙鳶よ、登り〳〵て今は只、互の契り變らぬは、いとしからうで

あるまいか。爪音高き調の糸、人目も耻も思はくも、袖には熱き涙雪姫、人待つ春のお氣晴しと、裏は往來も正親町、物見の亭の屋の陰、お腰元衆立ならび、姫君樣も薙殿も、あれ見さしやんせ。町々から上す紙鳶で、空は彌生の花くらべ、五色に染める雲の色、たまつたものじやござんせぬ。あれ〳〵、夕日に連れて人顏も、臙染の雛形紙鳶、もうそろ〳〵引くわいな。今宵殿御のお忍びに、よう登つた雛形の、衣紋を引くとは氣掛り、そこへ引いたは思はくの、男にあをひの下腹、御所車の紙鳶、糸によるものならなくにと詠みたる歌のだい笠かいか、お前の樣に美しい姫君樣、思ひ染めて生きながら、角の生へは坊主かか、空にも魔があればこそ、思ひまゐらせ候べく候と、書いて上げたる娘無情紙鳶、鶴の巢籠り二段獅子、牡丹の花房咲亂れ、尾を掉る軸を振る鈴に、神を勇めの太鼓かか、子供をだしに餘念なく、親の慰む布袋かか、是見よがしにふら〳〵と、いつ返誰を松茸いか、其外二ツ三ツつなぎ、五ツ雁金一羽鳶、思ひ〳〵の物好かか、次第〳〵に引きおろすは、錦をほつぐが如くにて、暫く興に

（淨瑠璃、花競雪物語）

●空も涼しき夕風に、流行る今年のいかのぼり、雲に舞ひ鶴とんびいか、から風引くし上るなり。

（浪頼）

●きりにさへきはらぬ御代の春風やいともかしこき鳳凰の凧。

（升叟）

●春雨を催す空の南風ふつてくれるな奴凧でも。

（洞佳）

●咄しほどなく子を乳世がすかし凧尾に尾を付けし春の北風。

（卯波澄）

●蔦凧のいとのわくせくかせげどもとかく尻尾のみゆる春風。

（袖廣）

●凧昨日の空のあり所。

●君があたり見つゝ尾ふゝん凧。

●凧上てゆるりとしたる小村哉。

●御所へ落ちて叱られにけり凧。

●紙鳶見るやわれも昔は男の子。

●夕暮の物うき雲やいかのぼり。

●紙鳶きれく白根が獅を行方哉。

●切凧の夕越え行くや待乳山。

●舞ひ遊ぶ雲雀も凧のいとがすみ引けばこくうにのしあがりぬる〳〵

●けさ春の空にあぐるいかのぼり遊べる絲のはじめなるらむ。

（於古足）

●物もうの度に凧からかけ付ける。

●鎌倉河岸へ飛んでくる鶴の凧。

●日和片棒でゆく蜘蛛の糸、小紙鳶、憩か

（六朶園）

（浮瑠璃、心中刃

（其角）

（風雪）

（無村）

（許六）

（一茶

（也有）

（太祇）

（才麿）

（桃妖）

（蓑太）

●一竹のよういやといへば凧鳶よりも高に春めく

（馬琴）

●千金の春の空ともはゝからず一文凧のし上るなり。

（浪頼）

●きりにさへきはらぬ御代の春風やいともかしこき鳳凰の凧。

（升叟）

●春雨を催す空の南風ふつてくれるな奴凧でも。

（洞佳）

●咄しほどなく子を乳世がすかし凧尾に尾を付けし春の北風。

（卯波澄）

●蔦凧のいとのわくせくかせげどもとかく尻尾のみゆる春風。

（袖廣）

●凧よいほど風もふけせんしこくうに竹のうなりきこゆる。

（待人）

●春霞たつの都のくらげ凧さるをやるのは遠慮なるべし。

（里住）

●朝午に凧をあげるはすねたやつ。

（川柳）

●やり梅に突きかゝつてる奴凧。

（同）

●子の撰で買ふを見て居る凧の糸。

（同）

●神木に人身御供の奴凧。

（同）

●糸切れて主にひまやる奴凧。

（同）

●物もうの度に凧からかけ付ける。

（同）

●鎌倉河岸へ飛んでくる鶴の凧。

（同）

●日和片棒でゆく蜘蛛の糸、小紙鳶、憩か

とのぼされて、中にもにいとはじき猿。（俗諺）

❶引ツばり凧にされる。（俚諺）

❷一文凧のきれたやう。（同）

❸紙鳶非鳶也、而及レ依レ人手一乗二諸順風一也、随而騰、随而高、愉飛戻天、震雄聲於二雲間一、方此時、其鳶亦不レ能レ過レ之也。漢風忽起、則細線中断、骨折肉飛、傾覆流離而下、或落二于泥沙一、或困二于蓁蔦一、于レ茲歳逕、忽而塋骨、忽而蓑土、其不レ可レ測者如レ此。夫順逆無レ定者、天上之風也。因二其無一レ定之風一、為二其身之安危一、為二紙鳶一不二亦雖一乎。（笛浦）

❹孤鳶始覩剣渓雲。多少兒童仰淡頂。牛紙飛底元在已。一絲高下豈随レ人。（聴松空誉）

❺一角天四紅来了。村童仍放二晴鳶一飛。（星巌）

「たゝかひ」戦

戦聲。戦闘。鏖戦。奮戦。魚鱗。鶴翼。干戈。熊勇。虎擬。驍勇。旌旗。兩虎。皆裂。伏弩。矢さけび。弓箭。太刀風。遠せめ。遠寄。もみあふ。陣だつ。かけちらす。

❶師直師泰は、淀八幡に越年して、猶謀國の勢なまち調へて、河内へは向ふべしと議して、其勢五千餘騎、仮粧山 打上りて、南の尾崎に控へたり。大旗一揆の衆には、河津高橋二人を旗頭とし、其勢三千餘騎 秋篠や外山の峰に打上りて、南の尾崎に控へたり。武田伊豆守は千餘騎にて、四條縄手の田中に、馬の懸場を前に残して控へたり。佐々木佐渡判官入道は、二千餘騎にて、伊駒の南の山に打上り、面に盤楯五百帖突き並べ、星輪の射手八百人馬よりおろして、討ちてあがる敵あらば、馬の太腹射させて、猶隙する處あらば、直倒に懸落さんと、後に馬勢控へたり。大将武蔵守師直は、二十餘町引きおくれて、将軍の御旗下に輪違の旗打ちたて、前後左右に騎馬の兵二萬餘騎、馬回に縦立の射手五百人、四方十餘町を相支へて、稲麻の如く打圍みたり。手分の一揆互に勇み争ひて、陣の張様厳ければ、項羽が山をぬく力、曹陽が日を返す勢ありとも、此堅陣にかけ入りて戦ふべしとは見えざりけり。去程に正月五日の早旦に、先、四條中納言隆資卿大将として、和泉紀伊國の野伏二萬餘人引具して、色々の旗を手にさし上げ、仮盛山にそ向ひ合ふ。是は大旗小旗両一揆を蹈へおろさで、捕を四條縄手へ寄させんための謀なり。案の如く大旗小旗の両一揆、是を忻り勢とは知らず。是ぞ寄手なるやらんと心得て、射手を分けて旗を進めて、坂中までおり下りて、喚叫に待ちて戦はんと見構ふ處に、楠帯刀正行、舎弟正時、和田新兵衛高家、舎弟新発意賢秀、究竟の兵三千餘騎を率して、霞隠より繰直に、四條縄手へ押し寄せ、先斥候の敵を懸散らさば、大将師直に寄合ひて、勝負を決せんと少しも擬議せず進みたり。懸下野守は白旗一揆の旗頭にて、道の峰にひかへたりけるが、菊水の旗只一流、是非なく武蔵守の陣へ懸入らんとするを見て、北の岡より馳せ下り、馬よりひたゝと飛び下りて、只今敵のましぐらに懸入らんとする道の末を、一文字に進りて、市西に颯と立わたり、徒立になりてぞ待ちかけたる。勇気盛なる楠が勢、僅に徒立なる敵を見て、何故か些ともやすらふべき。三手に分けたる前陣の勢五百餘騎、閑々とうちてかゝる。京勢の中 秋山彌次郎、大草三郎左衛門二人、真前に進みて射落さる。屋野七郎進を見て、敵に気をつけじと、秋山が代したる上をつと飛び越えて、爰を遊ばせと、射向の袖を敲きて、小跳して進みたり。敵東西より差合せて、雨の降る如に射る矢に、是も内甲草摺のはづれ二所、篦深に射られ、太刀を倒につき、其矢を抜かんとすゝみて立ちたる所を、和田新発意つと寄せて、甲の鉢をしたゝかに打れて犬居に倒れければ、和田が中間走り寄せて、首掻き切りて差上げたり。是を軍の始として、楠が騎馬の兵五百餘騎と、懸が徒立の兵三百餘人と、喚き叫びて相戦ふに、田野ひらけ平にして、馬の懸引自在なれば、徒立の兵汗馬に懸憑され、白旗一揆の兵三百餘騎、大略討れにければ、懸下野守も深手五所まで被りて、叶はじとや思ひけん、討ち殺されたる兵と、手負とを引きて去る。二番に戦ひ屈したる楠が勢を、弊にのりて討たんとて、武田伊豆守、七百餘騎にて進みたり。楠が二陣の勢、千餘騎にてかゝりあひ、二手に颯と分れて、一人も餘さじと取籠むる。汗馬東西に馳せ違ひ、追ひつ返しつ、旌旗南北に開き分けて、巻りつ巻られつ、互に命を惜まで、七八度まで揉み合ひたるに、武田が七百餘騎、殘りすくなに討たれば、楠が二陣の勢も、大半疵を蒙りて、朱になりてぞ控へたる。

❷さる程に、大塚信乃は侮りがたき見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇気彌倍して、きつさきより火出づるまで、寄せては返す太刀音かけごゑ、両虎深山に挑むとき、鉾然として風發り、二龍青潭に戦ふとき、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高きやの棟にして、死を争ひし爲躰、よに未曾有の晴楽なれば、見八はきこみの鎧、こてのはづれを、裏かくまでに、切裂かれしかど太刀をぬかず。信乃は刀の双もつゝかで、初に浅手を負ひしより漸々にいたみを覚ゆれども、足場をはかりて挽まず去らず、畳みかけてうつ太刀を、見八右手にうけながして、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望んではたとうつ、十手を丁と受け留むる、信乃が双は鍔際より、折れて遥にとび失せつゝ見入えたりとむづと組むを、そがまゝ左手に引きつけて、逸に利腕しかととり、ねぢたふさんと鬼聲あはして、もみつもまるゝ力足、此彼ひとしく踏ひらして、河邊の方へころ〳〵と、身を傳

（太平記）

ばせし戦車の米俵、坂より落すに異ならず。高低険しき棲作に、削りなしたる甍の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとりし拳をゆるめず、幾十部なる屋の上より、末遠なる河水の底には入らで程もよし、水際につなげる小舟の下へ、うち累りつゝ撲とおつれば、傾く舷と立浪に、ざんぶと音す水烟、轡丁とはりきりて、射る矢の如き早河の、たゞ中へはき出されつ。爾も追風と引潮に、誘ふ水なる下り舟、往方もしらずなりにけり。（馬琴）

●義貫は些とも疑慮せず、あながまや雑兵ばら、敵をおされて走るにあらねば返すにかたき事あらんやとて、馬をきりゝとたてなほし、太刀抜きかざしてすゝみたまふ。大将をうたせじとて、杉倉堀内推ならんで、敵の矢面に立ちふさがり、館を捻つつきくづす。義貫は赤地錦をうたせじとて馬をはせよせ、前後を守ふ主従三騎、大勢の真中へ十文字にかけ通つて、やがて巴字にとつて返し、鶴翼に連つて、更に魚鱗にうちめぐり、西にあたり東になびけ、北をうてば南に走せ、馬の足なたてさせず、三略の傳、八陣の法、共に知つたる道なれば、只今前にあるかとすれば忽然として後にあり。審撃突戦秘術をつくす、千変万化て、馬より飛び下り太刀さしかざし、たちの太刀風に、さしもの大勢乱れさわぎて、むら〳〵ばつと引退く。敵退けば杉倉等は主を諫めて徐々と、落つるを更につけて来る、端武者は遠箭に射て落し、追ひつかへしつしもとばら、三里が程を送られて、終には落つる夕日の迹に、十六日の月まどかなり。（同）

●さても義平は、陽明門を固めたりしに、逢智門におはします、奔朝の方より使者を立て、悪源太一合戦仕れとありしかば、畏つて候ふとて、例の十七騎、敵五百余騎が中に割つて入り、散々に切つてまはる。敵五百余騎は、味方十七騎に切り立てられ、大庭の梢の木のもとまで追つ散らさる、其時鎌田申すやう、重盛の召されたる御鎧は、唐革と申して、射るとも切るとも、裏かく事あるまじ、唯御馬をあそばし候へ。跳ね落さんとする処を、寄つて組ませ我君と申す。実にもと思ひ、十三束の中ざしよつぴいて放つ。何かはすこしはづすべき。馬の三つよりむながひかけず、つゝと射通す。名馬なれどもこらへずして、頻りに跳ぬれば、重盛は一條堀川、材木の上におり立つて、小烏ぬいて待つ処を、政清是を見て、馬より飛び下り太刀さしかざし、たちばなの政清と、名乗りかけ〳〵、重盛に切つてぞかゝりける。重盛が郎等に、興三左衛門かげやすも、馬より飛び下り大太刀抜いて、重盛がおもてに立つて、鎌田兵衛と戦ひけるが、いざや組まんと太刀投げ捨てゝ、所は二條堀川の、筏の上にてむづと組んで、上や下へところび居たり。さる程に義平は、重盛をうたんとかゝりしに、政清組み負けて下にあり。義平心に思ふやう、重盛をうつならば、其隙に鎌田うたるべし。重盛は後にても逢ふべし。鎌田をうたでかなふまじと、上なる興三左衛門が甲を取つてかなぐり捨て、乱髪をかいつまんで首かき落す。其隙に乗替に乗つて重盛は、跡も遮に逃げのびたり。あらをしの敵や、思へば悔しや。手ごめたる敵を打ちもらし、遂にいくさに打ち負けて、落人の身となる、運の極ぞ悲しき。（謡曲、源義太）

●いざこい勝負と打寄する、駒の足並かつし〳〵、かし〳〵〳〵、片手手綱に打物駈し、うつや白刃のきい〳〵聲、ヤアエイ、

しつていすくちやうと、受けてはねつしと押ふ、鏡の鞘もひら〳〵〳〵、風のうら吹く荒磯に、どうと打つ波岩角に、砕けたばしる如くにて、打寄せかけよせつけまはす、馬も達者乗手も達者。手綱にめぐる駿足の、碧の音はから〳〵〳〵、篠原野路の草揃に、すむかすだくか虫の音か、いつも松虫ものゝふの、かうろぎ鈴虫りん〳〵りん、ちりりんからめく兵具の金物、鉾々として金鉄皆鳴り、あをりの音はぼんばかぼんばか、はねかへさんとかつしと當てる、鐙のはなを乗りすかし、右手へ廻れば弓手に進み、共に離れすくる〳〵〳〵、くるりくる〳〵追廻り、ゑい〳〵さけびし其勢、馬のさんすも今ここに、修羅の巻と切り結ぶ、血気の若武者修練の老武者、甲乙見えざる二人が働き、半時斗の戦に、更に勝負も付かざれば、相引にさつと引き、しばらく息をぞ休めぬる。（浄瑠璃、篠原合戦）

❶かしこきに合戦なしに飛ぶ蝶。（許六）
❷戦場にむかしかたりや木瓜の花。（也有）
❸戦ひけり追くる嵐を追ふ木の葉。（越人）
❹陣中の飛脚もなくや雁の聲。（北鬼）
❺戦はす草や百草余も見ゆる。（仙月）

❻戦の身か夏の夜の巷一番。（乙州）
❼楠はしかけとほめる軍なし。（川柳）
❽小便の時は巴は陣をひき。（同）
❾かちいくさむかうでたいた彼を喰ひ。（同）
❿降参がすむと一度にひだるがり。（同）
⓫苦戦がかうじ三下り書いて居る。（同）
⓬言葉戦こと終り火吹竹。（同）
⓭大一座元がとぶらひいくさなり。（同）
⓮されども武識が智恵の程、百千萬に砕きなば、やはか通らでおくべきか。それにも運命つき弓の、巧みし智略もあらはれて、さしもの大勢、前後左右よりとりまかば、かげろふ稲妻水の月、すでにはいかで取らるべき。かしこにおつぷせ引きくんで、打つ取るべし。或はうづまきせんぎが中、かけやぶり、さしとほし、十方むじんの捨刀、さつとひいては、互に言葉をかけかはし、是ぞ軍の花盛、吉野龍田の花紅葉、嵐につるゝ雪侍。にぐるやつばらおつさま捨斬り。むかうてかゝるは唐竹割、らんびらんぐわいとうばしり。まくのそうだてそうのこて、蜻蛉がへしに水車、磯打つ浪のまくりぎり。つらぬき捻首人つぶて、死人

の山をつかん事、たゞとる山の時鳥と、勇みに勇みし有様は、めいぼくたいしほくた王、我朝にては將門純友、入鹿のあれしもかくやらんと、おそれぬものこそなかりけれ。
（俗諺）

●軍を見て矢を矧ぐ。
（俚諺）

●勝て冑の緒を締めよ。
（同）

●好ノ兵猶ノ好ノ色也。傷ノ生之事非ノ一、而好ノ兵者好ノ色者必死。賊民之事非ノ一、而好ノ兵者必亡。此理之必然者也。夫惟聖人之兵、皆出二於不一レ得レ已。故ニ勝也享二安全之福一、其不レ勝也必無二意外之患一。後世用レ兵、皆得レ已而不レ已。故其勝也、則變遷而禍大。其不レ勝也、則變遷而禍小。是以聖人不レ計二勝負之功一、而深戒二用兵之禍一。
（蘇東坡）

●當時國賊擅二恣張一、七道望レ風助二財糓一、勤王諸將前後殁。四陲僅存臣民光。道詔哀痛猶在レ耳。擁二護龍輦一同生死一、大擧來犯被何人。晉前漢之二報二天子一、河陽二軍聲一代レ衛。攻。刀戟相摩八千師、馬傷胃破氣益奮。斬レ敵取レ胄奪レ馬騎。被レ箭如レ蝟目皆裂。六萬賊軍終摧折。歸來河水笑洗レ刀。血迸二奔湍一噴二紅雪一。
（山陽）

●悃主入レ閤自墜跋。楚人甚拙秦人虎。殺レ人八萬取二漢中一、江邊鬼哭酸二風雨一。項羽提レ戈來救レ趙。暴書檄電連レ天掃。臣報二君讐一子報レ父。殺二盡秦兵一如レ殺レ草。戰酣氣盛聲喧呼。諸侯壁上觀魂逋。項王何必爲二天子一。只此快戰于古無。千載當點藏二兒戲一。
（俚諺）

曹操朱溫盜稱レ帝。何似英雄駿馬與二美人一。
（鄭板橋）

烏江過者皆流涕。

●朝進二東門營一、暮上二河陽橋一。落日照二大旗一。馬鳴風蕭々。平沙列二萬帳一。部伍各見レ招。中天懸二明月一。令嚴夜寂寥。悲笳數擊レ動。壯士慷不レ驕。借問大將誰。恐是霍嫖姚。
（杜甫）

●王者之厥武。如レ震如レ怒。進二厥虎臣一。闞如二虓虎一。鋪二敦淮濆一。仍執二醜虜一。截彼淮浦。王師之所。
（詩經）

王旅嘽々。如レ飛如レ翰。如二山之苞一。如二川之流一。綿々翼々。不レ測不レ克。濯征徐國。

●青海長雲暗二雪山一。孤城遙望玉門關。黃沙百戰穿二金甲一。不レ破二樓蘭一終不レ還。
（王昌齡）

●朝進二東門營一、暮上二河陽橋一。落日照二大旗一。馬鳴風蕭々。平沙列二萬帳一。部伍各見レ招。中天懸二明月一。令嚴夜寂寥。悲笳數擊レ動。壯士慷不レ驕。借問大將誰。恐是霍嫖姚。
（杜甫）

●百戰沙場碎二鍛袞一、城南已合數重圍。突レ營射殺呼延將、獨領二殘兵千騎一歸。
（李白）

●鞭聲隱々夜過レ河。曉見千兵擁二大牙一。遺恨十年磨二一劍一、流星光底逸二長蛇一。
（山陽）

●街レ枚夜度五千兵。密領二軍符一號令明。狹巷短兵相接處。殺レ人如レ草不レ聞レ聲。
（溱洧）

〔たちばな〕橘

朱實。白花。美味。清香。葉亜。磊落。垂珠。懸金。國香。黃熟。おひかせ。袖の香。さやけき匂。こがねの鈴。ぬし知らぬ香。橘のかげふむ路。橘の下ふく風。橘の花ふく風。常世よりうつしうゑし。花さき實なる。

●四月の晦日、五月の朔日などのころほひ、橘の濃くおもきに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたる翌朝などは、世になく心おもさまにをかし。花の中より實のこがねの玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にも劣らず。杜鵑のよすがとさへおもへばにや、猶更にいふべきにもあらず。
（清少納言）

●橘は、何となく庭の面に殊ごとしふしたるは、殊なる見所もなきさまなれど、杜字の宿とすらんは、あるやうこそあらめと思ひて、よりてよく見れば、深緑なる中に、いと白うさきて、花さへ葉さへをかしく見ゆかし。此木の橘にしも、いにしへ田道間守が遂なるせかいに行きて、取得たるかぐの實なれば、其匂なん殊になをかしかりける。村雨降りて名殘涼しき夕暮に、打ちる花の香の、風につれてなつかしう薫りくるなど。
（高尚）

●この宮はいとあてに、けちかうおはしますなるは、昔のやうにはえしもあらじなどいへば、しかおはしませどいとけちかうおはしまして、常に參るやと問はせ給ふ。參り侍りと申せば、これして參りて、いかに見給ふとて奉らせよとて、橘の花を取りいでたれば、むかしの人のといはれて參りなんとて、いかに聞えさせんといへば、詞に聞えさせんも片腹いたうて、何かはあだんへしくも聞えさせ給はざるを、はかなきことをもと思ひて、

かをる香をよそふるよりは郭公聞かばやおなじ聲やしたると、

さし出でたり。
（和泉式部）

●主人の庵に橘あり。奈其の帝の萬葉集には、實さへ花さへと褒詞なのこし、唐人の三體詩には、嵐橘花開と寫ないへり。陸績がはづし物、親孝行の部に入り、司馬相如が筆でんごう、夏熟すとかきちらせり。むかしの人の袖の香は、皐月待つはなの先に匂ひ、一にたち花、二にし、牡丹とは、みつ子もよく唄ふ。
（蜀山人）

●色々の。人の心は白露の、枝に霜は置くとも、猶常盤なれや橘の、日蔭草の蔵、其方の身には何事も、包む事はなくとも、來し方なれやいにしへをも、忍草を召されよや。あさもよい、紀の關守が手束弓、入るさか歸るさか。何れにてもましませ、などや花は召されねど、あら花すかずの人々や。
（謡曲、雲雀山）

●五月まつ、花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする。實にや昔も君のため、故ある木の實を集めつゝ、常世の國までゆきぞかし。我も主君の御爲に、色ある花を手折りつゝ、葉末に結ぶ露の御身を、殘しやすると思草、いろ〳〵の頃を得て、咲く卯の花の杜若、紫そむる山草の、色香にめでて花めされ候へ。
（同）

●花立花の香を留めて、昔の人を尋ぬれば、親疎幾何か去りぬ。かゝる思ひの深見草、妹と我ぬる床夏の、花一時の夏の夜と、知らでや人の迷ふらん。
（謡曲、夏科）

●江南の橘、江北に植うれば枳となるとかや。所をかへて育て給はゞ、大智惠者とも成り給はん。昔より智ある者は貧にて、愚痴なるものは富貴なり。此人相、察揚にしてのつとりとした果報の相、追付け果報の親達にあやかりもの。
（淨瑠璃、釋迦如來）

●袖の昔に橘は、實さへ花さへ其葉さへ、枝に霜おけどいやときにと召されたる、帝の御製やごとなき、同じゆかりと頼もしき、蜜柑金柑小かんに、おとながましき橙の、おつこえたるは憎けれど、賑ふ宿の福引に、とやあがりして君か手に、なつけば可愛ころ〳〵と。
（淨瑠璃、都年玉）

●さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする。
（古今）

●とこよものこのたちばなのいやてりにわが大君は今もみるごと。
（家持）

●五月雨の空なつかしく匂ふ哉花橘に風やふくらん。
（相模）

●風にちる花橘に袖しめてわが思ふいもが手枕にせん。
（基俊）

㉜誰かまた花橘に思ひいでんわれもむかしの人となりなば。（後成）
㉝橘の袖のかばかりむかしにてうつりにけりなふるき都は。（定家）
㉞常世より珠城の宮にかをりこしかくのこの實ぞ花さきにける。（筆底）
●そことなくかをるもうれし橘の花ちるさとのあけぼの、空。（春海）
㉟しの、めのあけゆくその、朝じめりこはるゝ露もかをるたち花。（千蔭）
㊱ゆふ風にわれながらわが袖のかもなつかしきまでにほふたちばな。（宣長）
㊲駿河路や花橘も茶の匂ひ。（芭蕉）
㊳人々の心たちばなの匂哉。（椰其一）
㊴ものゝ懸や橘匂ふ廂の内。（鬼貫）
㊵橘のかほたれ時や古館。（蕪村）
㊶逢來のたちばな匂ふ一間哉。（杉風）
●橘にうつりこゝろや杜宇。（陶々）
㊷花橘太く立ちけり魚柱。（支考）
㊸橘や螻か鳴いても昔めく。（盲水）
㊹橘や奈良の都の古手買。（道彦）
㊺色よかよ味までそろふ橘は日さへ鼻さへ尚さへたのしむ。（大江丸）
㊻治れる世にさくもの、高名は今に匂ひをぬかぬ橘。（太刀持）
㊼御所車牛引すゑし大庭の香は鼻を通す橘。（俗謡）
㊽みかけからいぶせき賤が中よりも外に香のある庭の橘。（潜丸）
●橘はへひりそそまる老ぼけの昔の人の袖の香に似ず。（筆底）
㊾たちばなのふりにしことも思ひ出でゝかなとめ袖の今はなつかし。（飯盛）
㊿なりひらのひしと花さく橘はむかし男の袖の香ぞする。（湖鯉鮒）
(1)小夜すがら鶯へはいりし橘のかにくらはれてねられざりけり。（伊志丸）
(2)山里に梅の後咲くたちばなは花の匂ひつき合もよし。（鈴成）
(3)是もまたとこよものとて薦のすの後軒にかなる立花。（古ト）
(4)橘にむかし思へばわれもまた匂袋の袖のかにする。（世幕氣）
(5)からたちに成らず橘返り咲き。（同）
(6)憎いかあいの睦言を、誰に洩して名は橘の、薫ほのめくうす衣。（俗謡）
(7)江南の橘江北に植うれば枳となる。（俚諺）
(8)一雙雛帖末ノ分ノ珍。林下先輩愧ニ逐臣一。露葉霜枝剪ニ寒碧一。金盤玉指破ニ芳辛一。清泉漱々先流ノ齒。香霧霏々欲ノ噀ノ人。坐客慇懃爲ノ求ノ予。千奴一掬爲ノ香貨。（蘇東坡）
(9)滄州朱橘變州柚。乍解ニ筠籠一香一船。口腹累ノ人應ニ過客一。山川迎ノ我笑ニ前緣一。文章頗擬ニ爭ニ千古一。飲食何須ニ萬錢一。曾簇ニ冰盤ノ開ニ宮酒一。銜ノ杯清絶故鄉天。（張船山）
(10)嘉樹出ニ巫陰一。分ノ根移ニ上林一。白華如ノ霰雪。朱實似ノ懸金一。布影臨ニ丹池一。飛香度ニ玉琴一。自存ニ凌冬實一。能守ニ歲寒心一。（李元操）
(11)新霜徹ノ曉報ニ秋深一。染ニ盡青林一作ニ錦林一。惟有ニ橘園風景異一。碧叢々裏萬黃金。（范成大）
(12)憐君臥病思ニ新橘一。試摘猶酸亦未黃。書後欲ノ題ニ三百顆一。洞庭須待滿林霜。（韋應物）
(13)廬橘花開楓葉衰。出ノ門何處望ニ京師一。沅湘日夜東流去。不ノ爲ニ愁人一住ノ少時一。（戴叔倫）

（丹實隱々間ニ碧林一。千頭聲復重ニ南金一。論ノ進若改ニ平生質一。孤貞當平作ノ頌心。（錢錦城）
●越橘如ニ金彈一。纍然已盈ノ牕。誰傳ニ嶺外信一。尚帶ニ霜前華一。（梅聖俞）
●橘生ニ湘水側一。乖隔人莫ノ傳。遂ニ君金華宴一。得ノ在ニ玉几前一。（張華）
●果壁洞庭橘。驗切大池蓮。（白居易）

「たなばた」七夕

乞巧。佳期。良夜。織女。牽牛。羽車。雲旌。鵲橋。天上佳期。人間令節。牛渚聯ノ星。鵲橋橫ノ漢。
星まつる。八十瀬。からわたる。澄瀨ふむ。ひこぼし。織ひめ。天の玉床。天の川戸。妻むかへ舟。かさゝぎの橋。星合のそら。梶の七葉。七の緒琴。まれのちぎり。妻こひ衣。雲のとばり。行合のそら。
●文月七日の夜、ある人の家に人々集りて、宵より歌よみ笛ふきなどしつゝ、星を祭りがてら、心ゆくまであそびをるほどに、さゝやかなるわらは、なげしのきもについねて、なにがしどのゝくれがしどの、おはしましたりといへば、皆あそびをやめて、そこら取りちらしたるくだ物や何や、かたへにおしやりてまつに、程なく入り來りぬ。かゝる事もやと心づかひしたりけん。さうの笛もたせたるを見て、あるじいたうよろこびて、さうの琴とり出でゝ、今ひとりのまらうどにそゝのかせば、引よせて、けにくからず、かきならすにあはせて、笛吹きいでつゝ、ひときはおもしろう遊ぶ。月はとく入りて、物のねもてはやす軒の松風の音も、やゝすみて聞ゆるは、夜のふけぬるしるしなめりかし。棚機のおかぬ別の、ちかづくらん程、思ひやりて、そゝろに物すごくなん。（高尚）
●かくいふ程に七月にもなりぬ。七日に好色事どもする人々のもとより、七夕彦星なるべし。
●今宵は星の逢夜なりとて、小娘どもの暮おもひゝや七夕つめに身をなして天の河原をながむべしとは（和泉式部）
㊀七夕の御祭はさせる事なからねど、京家の女の童のこしらへものする事なり。今は上にも見そなはせ給ひぬ。されど相撲の節にいひ入れ、たゞやまんよりは、つきなくもあらぬ事にや。廣き御庭に何くれの机物奉り、いろ〳〵の願の糸奉るに、若き女の童など、後れ先だちて騒ぎ集ふに、或は高柵にて裳裾をひき破り、或は人の簪にかゝりて、袂など絞ばせなど、衣の行方も亂るゝかし。願の糸よりは、まづこの衣の願をと、糸の亂覺束なし。姫蜘蛛とてさやかなりし物、その机物、あるは願の糸に、いをひきぬるを圖として、私の願かなへりとすることなるべし。大方ははかなき心ばへにや、七夕といへども、身の上の願かなはぬ例は、一年に唯一夜の逢瀨さへ、雨降き雲施し、或は川くらうて、逢ふ事稀に傳へ物せしに、今宵の星の御心づかひ、人の願はよほどに、その御文ある、見ればたゞ、
●今宵は星の逢夜なりとて、小娘どもの暮待ちかねて、帶雛子も常ならずそうざきつ

れて、硯洗ひ、梶の葉求め、筆に短冊し、筆に糸懸くるなど、此の節句斗り殊になかしきを、いかで清少納言はあやめにしかずとは定めけん。人間のさゝやきは天の聞くこと雷の如しとか。星のむつごとは二階の耳へも洩らさず。天上天下界のたがひめこそ殊にれたましけれ。（也有）

●然れば唐土にけいと云ふ國あり。彼國に遊子伯陽とて、夫妻の田夫ありしが、唯晩月に嘯き、高山に登つては、月の入るを惜しみ、秋の夜すがら小庭の、眠を覚ますばかりなり。遊子とは彦星なり、伯陽とは織女なり。先の世の其妄執の故なれや、月を望めば天に生れ、牽牛織女の、二つの星となるとかや。然れば前生の、農作の跡を殘して牛を引く。織女も其まゝに、猶玉首機な織る布の、秋さり衣誰が爲ぞ。待ちえたり彦星の、妻も袖をつく夜なり。今日の日の遅さよ。日の暮るゝかげの遅さよ。（謡曲、七夕）

❶七夕の、織る糸竹の手向草、幾年經てかかげろふの、小野の小町の百年に、及ぶや天つ星合の、空の上人に馴れ〳〵し。袖も今は庶衣の、あさましや痛はしや、日もあてられぬ有樣。とても今宵は七夕の、手向の數も色々の、或は糸竹に、聽けて廻らすき。星祭るなり吳竹の、世々を經て住む行く末の、いく久しさぞ萬歳樂。（謡曲、關寺小町）

●時しも今日は織女の、逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。秋來ぬと、目に見ぬ空はおのづから、音かへて吹く風の、袖も涼しき夕ぐれ、庭く稻葉の色までも、千年の秋の始かな。（謡曲　東方朔）

●頃は保安元年文月の、けふ七夕の宵に、飾りよそひし花車、五尺の竹をたてつゞけ、願の糸の色五つ、清涼殿は星合の祭所と定められ、四つの机に丸つの、花の燈籠たてならべ、しやうへいがふり周子がれん、芋の葉の露卿硯、和漢の文に風すさび、こゝとちに水の響あり。簷の下には雲かよふ、追風やうの蓮き物は、烟りて空に斜なり。（淨瑠璃、殺生石）

●年毎に逢ふとはすれどたなばたのぬるよの數ぞすくなかりける。（みつね）

❸年毎にまつもすごすも佗しきは秋のはじめの七日なりけり。（相泉式部）

❹逢ふことを稀にちぎりてたなばたの我心から身をこがすらん。（顯家）

❺天つ風雲ふきはらへたなばたのよとでの姿よそにてもみん。（顯昭）

❻袖ひちてわが手に結ぶ水の面に天つ星合の空を見るかな。（長能）

❼七夕のあまついもせのことなだにこちたくだれかいひつたへけん。（貫之）

❽秋といへどうつるならひのことのはにかけぬは星の契なりけり。（土滿）

❾いつしかときく七草の花かぜをよみてや星の逢ふ夜しのばん。（淨海）

❿入日さすとよはた雲に棚機の心のうらやあふをまつらん。（契沖）

⓫たなばたのかざしやちらふ夕涙に白玉よするほしあひの濱。（千隆）

⓬七夕や秋を定むるはじめの夜。（萬葉）

⓭七夕をいかなる神に祝ふべき。（沾圓）

⓮縫殿の陣のきよめや星祭。（許六）

⓯涼しさや七夕竹の夜露哉。（一茶）

⓰七夕や加茂川わたる牛車。（風雪）

⓱星合や双林塔の鈴の音。（其角）

⓲七夕や涼しいさへも嬉しきに。（成美）

⓳梶の葉にくばり餘るや女文字。（几董）

❶七夕や先づ寄り合うて頭初。（惟然）

❷轉びあふ小笹の露や二つ星。（美雅女）

❸別路の天のかはらにひれふりて今朝こそ星の石となるらめ。（鶏告）

❹星合の夜半もふくればつま琴のひきすてられて牛はひとりね。（ひまのないし）

❺星合の空に手向る瓜ふたつ今宵ちぎりの枕ともなれ。（折風）

❻七夕の手水の折や手向けまし米ふみ月のけふのなぬかを。（及之）

❼七夕は天の川にやはまろらんその身もほしに出でらるゝなり。（正成）

❽天の川ながれて過ぐるよはもうし今宵ぞまれにあひづらふそく。（東作）

❾ひと夜をば百夜とちぎる織姫になぜお子だちは出來はなされぬ。（楚泉）

❿鵲の橋は靈井のてうしよくかけわたしたる琴のかよひ路。（湖鯉鮒）

⓫七夕のひとよねまきのあかつきをうらみてかへすかし小袖かな。（遅阿）

⓬年々にほしへ手向くることの葉も同じことのみかきならすなり。（折芳）

⓭七夕をながす竹にてしかたをし。（川柳）

⓮素麺の邪覚して洗ふ硯石。（同　）

⓯翌日は機に居眠る女七夕。（同　）

⓰身あかりの坳へ七夕の影がさし。（同　）

⓱畑の出合七夕が元祖也。（同　）

⓲夏はつる、扇と秋の白露は、いづれか先におきぬらん、年毎に逢ふ夜まちえしたなばたの、逢はでぬる夜は袖のみぬれて、ふるは涙か身なしる雨か、かけし情はかさゝぎの、渡せる橋におく霜の、げにおもしろやこよひしも、月はさえゆく秋の夜の、千夜を一夜になせりとも、名殘はつきじ今更に、言葉のこりて、鏡がなる鳥もなき候。（俗謡）

❶天の川ながれて過ぐるよはもうし今宵ぞまれにあひづらふそく。（東作）

❷ひと夜をば百夜とちぎる織姫になぜお子だちは出來はなされぬ。（楚泉）

❸鵲の橋は靈井のてうしよくかけわたしたる琴のかよひ路。（湖鯉鮒）

❹七夕のひとよねまきのあかつきをうらみてかへすかし小袖かな。（遅阿）

❺年々にほしへ手向くることの葉も同じことのみかきならすなり。（折芳）

❻七夕をながす竹にてしかたをし。（川柳）

❼素麺の邪覚して洗ふ硯石。（同　）

❽火逝宀秋節。新明弦月夕。月弦光照戸。秋首風入牖。凌峰步晉崖。遨雲肆遊眺。徒倚西北庭。詠踊東南覩。紈綺無二雜章一。河漢有二駿驄一。（謝靈運）

❾別浦今朝晴。羅幃午夜愁。鵲辭穿レ線月。花入曝衣樓。天上分二金鏡一。人間望二玉鈎一。錢塘蘇小々。更值一年秋。（李長吉）

❿烏鵲橋頭雙扇開。年々一度渡河來。莫レ嫌天上稀二相見一。猶勝人間去不レ回。（李郢）

❶乞巧莚開玉露秋。一鉤涼月桂西樓。人間百巧方無レ奈。寄レ語天孫好罷休。（初仔）

❷曉露啼殘叉一秋。也應二雲鬢織一離愁。若教二罪婦一舞二牛渚一。能學二人間憨子一不。（星巖）

❸百尺菅竿半二染成一。彩機剪取五雲餘。天機元設二七襄妙一。枉被二人間乞巧書一。（寛齋）

❹天上銀塘曲似レ鈎。萬家簫鼓響二新秋一。從來世事皆兒戲。不レ獨人間乞巧樓。（戴復古）

❺銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲二流螢一。天階夜色二涼如一レ水。臥看二牽牛織女星一。

●二星適逢、未叙別緒依々之恨、五夜將ノ明、頻驚三涼風遞々之聲、（杜牧）

（美材）

〔たに〕谷

幽谷。幽澗。溪流。雲藏。樵徑。濕潤。密林。千仞。蔽レ日。與レ雨。出レ雲。

谷あひ。谷つゞき。淺き谷。谷の戸。谷水。くづるゝ谷。雲ある谷。苔むす谷。谷の細道。谷のとぼそ。谷の埋木。谷ふところ。

●さて左の方は萬仞の谷にて、底は雲にて眼及ばず。右の谷は深さ三四丁、あるひは五六丁にて、谷にみちて猛火もえ上る。此焔が半越にかゝりて後は、唯何となく震動して、地軸唯今くだけなれて、此山微塵になるやうに覺ゆ。また腥きえもいはれぬ氣ふき來り、あるひは燻の如くなる雲うづまき來り、同行のものさへも一向にかくるゝ事もあり。あるひは前後左右に異形の雲烟あらはれ、鬼神の如く佛神のごとき事もあり。或は星下より虹たちのぼり、たてよこにたなびきて、おりなせるが如くなる事もあり。又天地ともに金色になる事もあり。其外奇怪ふしぎ、なか〳〵いふもおろかなり。靜にこれを考ふるに、是皆谷一面の猛火によりて、又陰氣もあつまり來り、火の上に雨そゝぎ、雲霧おほふが故に、水火相激して震動雷電し、又水火蒸蒸によりて種々の形見ゆるなり。（南谿）

●獨吉野のおくにたどりけるに、誠に山深く白雲峰にかさなり、畑雨谷を埋んで、山賤の家處々にちひさく、西に水を伐る音東に響き、院々の鐘の聲、心の底に答ふ。昔よりこの山に入りて、世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の盧山といはんも、亦むべならずや。或坊に一夜をかりて、

砧打つて我にきかせよや坊が妻。

西上人の草の庵のあとは、奥の院より右の方、二丁ばかり分け入る程、柴人の通ふ道のみ僅に有りて、さがしき谷を隔てたる、（芭蕉）

●一洞空しき谷の聲、枯にひゞく山彦の、無聲音なきく便となり、聲にひゞかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。（謡曲、山姥）

●眷立つ空の旋表、日も長閑なる山路かな。甲賀の三郎眷家、勅に從ひ若狹なる、甲掛山に分け入つて、見ればおぼろの春霞、峰も尾上も白雪と、紛ふ櫻の盛りをも、見捨て、歸る雁金は、花なき里に棲みや憤へる、心空なる疑も、嵐の音か山彦の、音もするどき谷川に、架けし丸木の橋だにも、渡り比べんむさゝびや、木傳ふ猿も聲たえて、心細さも限りなき、幾重の峰を越え行けば、雲又跡を立ち隔て、道とも谷とも知れざれば、とある木の根に腰打かけ、暫く休らひ給ひける。（淨瑠璃、寶物語）

●げにたぐひなや面白や、川音きこえて里つゞき、奥ものふかき谷の戸に、つらなる軒を絶えんくの、霧間に殘る夕かな。（謡曲、玉葛）

●頃は九月、時は重陽、所は山路、谷水の、彭祖が七百歳を經しも、心を汲みえし深谷の水。（謡曲、後覧）

●一洞空しき谷の聲、格にひゞく山彦の、無聲音なきく便となり、聲にひゞかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。（謡曲、山姥）

●光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし。（深養父）

●世の中にしられぬ山に身なくとも谷のこゝろやいはで思はん。（後撰）

●淺香山霞の谷のふかければ我物思ひに晴るゝよもなし。（讀人不知）

●出で、世の春しる鳥も住む谷にかくれ家しむる人やいかなる。（春滿）

●山ざとは今もむかしのそれながら谷の心はしるひともなし。（契沖）

●山彦はいがよぶこだのひゞきにて谷の心は常にむなしき。（廣庵）

●水むすぶ岩のかけぢのおりのぼり我をなからはす谷の白雲。（長流）

●きその山夕こえくれば谷せばみ心ぼそくも行水の音。（枝直）

●谷かげや年ふる松のねをしげみたえ〳〵もるゝましみづの音。（千陰）

●若鮎や谷の小筧も一葉ゆく。（蘇村）

●うへの大路にめぐり出でゝ、谷陰をかへり見れば、やどりつる湯本のさと川づらに見えて、とかくたてたる家々のむねより、烟など立ちなびく、あれやかの家などいふに、名殘少なからず。（景樹）

●げにたぐひなや面白や、川音きこえて里つゞき、奥ものふかき谷の戸に、つらなる軒を絶えんくの、霧間に殘る夕かな。（謡曲、玉葛）

●頃は九月、時は重陽、所は山路、谷水の、彭祖が七百歳を經しも、心を汲みえし深谷の水。（謡曲、後覧）

●一洞空しき谷の聲、格にひゞく山彦の、無聲音なきく便となり、聲にひゞかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。（謡曲、山姥）

●眷立つ空の旋表、日も長閑なる山路かな。甲賀の三郎眷家、勅に從ひ若狹なる、甲掛山に分け入つて、見ればおぼろの春霞、峰も尾上も白雪と、紛ふ櫻の盛りをも、見捨て、歸る雁金は、花なき里に棲みや憤へる、心空なる疑も、嵐の音か山彦の、音もするどき谷川に、架けし丸木の橋だにも、渡り比べんむさゝびや、木傳ふ猿

●光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし。（深養父）

●世の中にしられぬ山に身なくとも谷のこゝろやいはで思はん。（後撰）

●淺香山霞の谷のふかければ我物思ひに晴るゝよもなし。（讀人不知）

●出で、世の春しる鳥も住む谷にかくれ家しむる人やいかなる。（春滿）

●山ざとは今もむかしのそれながら谷の心はしるひともなし。（契沖）

●山彦はいがよぶこだのひゞきにて谷の心は常にむなしき。（廣庵）

●水むすぶ岩のかけぢのおりのぼり我をなからはす谷の白雲。（長流）

●きその山夕こえくれば谷せばみ心ぼそくも行水の音。（枝直）

●谷かげや年ふる松のねをしげみたえ〳〵もるゝましみづの音。（千陰）

●若鮎や谷の小筧も一葉ゆく。（蘇村）

●松が香や砂利しき流す谷の奥。（士芳）

●谷々の春經寒し比叡山。（許六）

●谷河の幅ひろ〳〵と夕がすみ。（蕉風）

●川苧の香に流るゝや谷の水。（其角）

●僧正が谷をすべれば餘寒かな。（野童）

●鶯の朝日まつ音や谷の底。（去來）

●田や返すべたら〳〵と谷の底、（巢兆）

●哀さもましらの鹿かそこ深くきく谷水の聲のさびしき。（下道）

●からかみの引手の山に風立てば谷の水のうはばりやする。（浦風）

●蜂にさくこゝめざくらもちとづゝはまじりて落つる谷のぬか雨。（一元）

●奥竹のよに朝ねするうぐひすも谷のそこらはふしよかるらし。（二十葩）

●分け入りてなづむ高野の初登山かすもいろはの四十八谷。（橘洲）

●のぞきては見にくゝ思ふかつらぎや久米路の谷の花の盛を。（古正）

●鶯の里は谷より深くして山より高く鳴く郭公。（讀人不知）

●なち方の親類よりも山住は近くの谷の鶯ぞよき。（光　）

●戀よりも花のいろかにまよふなり深くも

ほれし谷を尋ねて。（歌集）

●みをかうく谷やわたらん其爲に酢になる梅をこのむうぐひす。（古道）

●咲きにほふかさもしれずよしの山谷をうづめる花の白雪。（一村）

●氷さへ深き谷間のそらにみてさてなりにくき花の一枝。（山主）

●平癒に來て泣きごとの谷渡り。（川柳）

●飛車角のみんなとりこむ一の谷。（同）

●御物入金なば谷へ捨るやう。（同）

●馬の屁のさかさにひゞく一の谷。（同）

●一の谷がく屋新道からまはり。（同）

●みやまづたひも厭はねど、瀬にせかれつゝ谷川の、年のうちにもちよつきりこつきりと、合圖の文や玉ゆかし。（俗謡）

●高い山から谷そこ見れば、瓜やなすびの花ざかり。（同）

●八島山には大谷小谷、なぜにこなたに子は無いぞ。（同）

●落つれば同じ谷河の水。（俚諺）

●谷の植木は高しといへども、峰の小松に影さゝず。（同）

●循ノ山西北荒。崎嶇幾經丘。前行若蹊斷。碧見清漢流。一涉霽殿吉。再涉三川原幽。桑紆復壓渡。乃得寒巖陬。飛泉天上來。一落散不收。披ノ崖日璀璨。噴ノ壑風颼颼。道ノ薪霽二絶品一。淪ノ茗洗二窮愁一。敬酔古陸子。何年復來遊。（朱熹）

●太行之陽、有二盤谷一。盤谷之間、泉甘而土肥、草木叢茂、居民鮮少。或曰謂二其環一之間一、故曰レ盤。或曰是谷也。宅幽而勢阻、隱者之所二盤旋一。友人李愿居レ之。（韓愈）

●碧雨落二經牀一。林鳩午鳴後。算出愁二人來一。（高啓）

●吾聞下出二於幽谷一遷上于喬木一者上。未レ聞下下二於喬木一而入二於幽谷一者上。（孟子）

●溪冷泉聲苦。（高適）

●杏々深谷僊二青楓一。（李白）

●留者呀然成レ谷。（韓愈）

「たのしみ」樂

樂土。樂歲。安樂。極樂。心樂。歡樂。快樂。逸樂。樂レ天。樂レ水。樂レ山。

たぬし。

●人の心の中にもとより此樂あり。私慾行はれざれば、時となく所として樂しからずといふ事なし。是本性より流れ出づる樂なり。外に求むるにあらず。又わが耳目口鼻形の五官、外物にまじはりて、色を見、こゑをきゝ、物くひ、香をかぎ、うごき、しづかなる五のわざ、欲すくなく、よきほどに過ざれば、あふさきるさ、事毎に樂しからざる事なし。是外物を以て樂の本とするにあらず。又外物にふれて、其よろこばしきからを得て、樂はじめていで來るにもあらず。もとより人の心の内に生れ付きたる樂あるゆゑ、外物にふれて其動をえて、内なる樂さかんになれるなり。たとへば人にもとより生れつきたる元氣あり。是生命の本なり。されど飲食衣服などの外よりの養なければ、うゑこゞえて元氣をたもちがたきが如し。外物の養を以て、内の樂を助くるは、外にある飲食衣服の養を以て、内なる元氣を助くるが如し。又心の内に此樂あれば、飲食などの外のやしなひも皆樂の助となる。しかのみならず、あしたゆふべ、目の前にみちたる天地の大なるわざ、月日の明らけき光、四時のめぐりゆく序に從がへる、折々の景色のうるはしきありさま、雲烟のたなびける、朝夕の靄靄、山のたゝずまひ、川のながれ、風のそよぎ、雨露のうるほひ、霜のさよき、花のよそほひ、草草のさかえ、紫木のしげれる、鳥獸虫魚のしわざまで、すべて萬物の生意のやまざる、是をもてあそべばはまりなき樂なり。是に對すれば、其心を開き、其情を清くし、道心を感じおこし、節客をあらひ盡すべし。是を天機に觸發するといふ。觸發とは外物にふれて、善心をおこすをいへり。是外物の養をかりて内の樂をたすくるなり。（益軒）

●又曰く、されば人死を惡まば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらんや。愚なる人この樂を忘れて、いたづがはしく外の樂を求め、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志みつ事なし。いける間生を樂まずして、死に臨んで死を恐れざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近きことを忘るゝなり。もし又、生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべしといふに、入いよ〳〵あざける。（葉好）

●循ノ山西北荒。崎嶇幾經丘。前行若蹊斷。碧見清漢流。一涉霽殿吉。再涉三川原

内なる元氣を助くるが如し。又心の内に此樂あれば、飲食などの外のやしなひも皆樂の助となる。しかのみならず、あしたゆふべ、目の前にみちたる天地の大なるわざ、月日の明らけき光、四時のめぐりゆく序に從がへる、折々の景色のうるはしきありさま、雲烟のたなびける、朝夕の靄靄、山のたゝずまひ、川のながれ、風のそよぎ、雨露のうるほひ、霜のさよき、花のよそほひ、草草のさかえ、紫木のしげれる、鳥獸虫魚のしわざまで、すべて萬物の生意のやまざる、是をもてあそべばはまりなき樂なり。是に對すれば、其心を開き、其情を清くし、道心を感じおこし、節客をあらひ盡すべし。是を天機に觸發するといふ。觸發とは外物にふれて、善心をおこすをいへり。是外物の養をかりて内の樂をたすくるなり。（益軒）

●又曰く、されば人死を惡まば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらんや。愚なる人この樂を忘れて、いたづがはしく外の樂を求め、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志みつ事なし。いける間生を樂まずして、死に臨んで死を恐れざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近きことを忘るゝなり。もし又、生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべしといふに、入いよ〳〵あざける。（葉好）

●庭には金銀の砂をしき、四方の門邊の玉の戸を、出で入る人までも、光を飾るよそほひは、誠や名にきゝし、寂光の都喜見城の、たのしみもかくやと、思ふばかりの氣色かな。（謡曲、邯鄲）

●されば天上の樂みも、身に白露の玉かづら、ながらへはてぬ年月も、終に五衰のおとろへの、消えもやられぬ命の中に、六道のちまたに迷ひしなり。（謡曲、大原御幸）

●討死するも武士のならひといへど情無い。十八年の春秋を、刃の中に人となり、何時樂の隙も無く、弓矢の道に身を委ね、今朝の門出の其時にも、母樣今日の初陣に、あつばれ功名手柄して、父上や頑母樣に、褒めらるゝのが樂みと、につと笑うた其顔が、わしや幻にちらついて得忘れぬ。（淨瑠璃、太功記）

●ほんに脊からの氣扱ひ、せいが盡きたも無理ではない。殊に今夜のつめたさ、さつ

きにからちら〳〵と、ふり出した今年の初雪。客人への馳走の殘り、寒酒にかんした飲ましやんせと、ちろりと取出すうさはらし。猫の額の釜の前、夫婦が心の千疊敷、女房の膝を足もたせ、ぶん相應の樂なる。（淨瑠璃、篠原合戰）

●壁たかく三かさの山ぞよばふなる天のしたこそ樂しかるらし。（仲算）

●さゞなみのながらの山のながらへて樂しかるべき君がみよ哉。（能宣）

●君を祈るけふの貴さかくしこそ治まれる代は樂しきをつめ。（定家）

●長きよの秋のなかにはいとゞしくくるればいづる月ぞたのしき。（眞淵）

●ことぶきをよしだの里にかるいねのちゞの年ある人ぞたのしき。（同）

●からとりのまれにきてすむ竹の實のひじりの御代になるがたのしさ。（長流）

●今の世は重荷おろして山人のやすきにならふほどや樂しき。（滿月）

●世の中はくるしと思へばくるしきにいでや樂しと思ひくらさん。（幸文）

●いづくかは思の家にあらざゝんよその樂しき世にこそありけれ。（貞樹）

●野邊寒きかへさも樂し我宿にかみたる酒ものこりありやと。（言道）

●幼げも早なくなれる童さへ背におはるゝや樂しかるらん。（同）

●花ちらす晴嵐の鉾や夜の樂。（升六）

●ひとり庭の太平樂か紙帳かな。（一茶）

●蚊帳の中に螢放してアゝ樂や。（無村）

●雪わけて袖に若菜をつむぎ鳥者らぬ御代の春の樂しき。（頭枝）

●彼岸櫻咲ぬる花を目の佛見てたのしむも淨土なるべし。（蘭永）

●早乙女のあくせくと田をうゑうちの苦は又樂の種にぞありける。（衣太）

●たのしみは春の櫻に秋の月夫婦中よく三度くふめし。（つらね）

●麗夜の梅の花かさ月のかさ二かいながらの春のたのしさ。（成丈）

●子に家督譲り渡して世のせ話もはなれ坐敷にすむぞ樂しき。（敏行）

●樂は苦の種、苦は樂の種。（惟澄）

●樂あれば苦あり。（同）

●樂な人は若く見える。（同）

●樂あらんより憂なかれ。（同）

●孟子見二梁惠王一。王立二於沼上一。顧二鴻雁麋鹿一。曰、賢者亦樂レ此乎。孟子對曰、賢者而後樂レ此、不賢者雖レ有レ此不レ樂也。詩云、經二始靈臺一。經レ之營レ之。庶民攻レ之。不レ日成レ之。經始勿レ亟。庶民子來。王在二靈囿一。麀鹿攸伏。麀鹿濯濯。白鳥鶴鶴。王在二靈沼一。於牣魚躍。文王以二民力一爲レ臺爲レ沼、而民謂二其臺一曰二靈臺一、謂二其沼一曰二靈沼一、樂二其有一麋鹿魚鼈一。古之人與レ民偕樂、故能樂也。湯誓曰、時日害喪。予及レ女偕亡。民欲レ與レ之偕亡一、雖レ有二臺池鳥獸一、豈能獨樂哉。（孟子）

●莊子與二惠子一遊二於濠梁之上一。莊子曰、鯈魚出遊從容、是魚樂也。惠子曰子非レ魚、安知二魚之樂一。莊子曰、子非レ我、安知二我不レ知二魚之樂一。惠子曰、我非レ子、固不レ知レ子矣。子固非レ魚也。子之不レ知二魚之樂一全矣。莊子曰、請循二其本一。子曰、女安知二魚樂一云者、既已知レ吾知レ之而問レ我、我知二之濠上一也。（莊子）

●子路問二於孔子一曰、君子亦有レ憂乎。子曰無也。君子之修行也、其未レ得レ之、則樂二其意一、既得レ之又樂二其治一。是以有二終身之樂一、無二一日之憂一。小人則不レ然。其未レ得也、患レ弗レ得レ之。既得レ之、又恐レ失レ之。是以有二終身之憂一、無二一日之樂一也。（論語）

●飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕レ之。樂亦在二其中一矣。不義而富且貴、於レ我如二浮雲一。（同）

【たばこ】煙草

相思草。南靈草。喫煙。禁煙。

持レ雲。捲レ霧。

けむりぐさ。すふ。輪にふく。

すいがら。

●あまり親しくもあらぬ人のもとにて物語し、例のいだしおさたろ、とかくして時移り、火も自ら消えぬる。たゞにさしおくが、口惜しければ、あるじや心づくと、暫しかきさぐり居るを、とく見て人呼びたるはよし。心安きわたりにてはいかにともせんを。

花やかに今様うたひ、いとなつかしうひきすましたる物のねに、きゝぬる人もおのづから時々壁うちそへ、かたはしづゝしりうたひつゝ興じたる、きゝしらぬあたりも、きせるしてしどけなく指子よりあたろ、さうざうしからぬわざなりや。

二つ三つばかりなるちごの見習ひて、ちひさき手をさしのべ、まさぐりつゝ、口に入れたるを、あやふしととらんとするを、むつかりすかしたる、いとうつくし。

輪にせんとて人のふきいでたる烟を、をかしくまどかにて、いくつもつらなりあがるを見て、我もなじかはあやまたん、いとよくしてん、見給へ、などあらがひつゝ吹き出したるに、あやしうみだれぬる、心うがりて、此たびはいかでと口つきいたうつくろひ心したるが、又吹きそこなひたるいとむとくなり。これをや烟くらべといふべからん。我烟に人のむせびて顔あかめ、しはぶきしきりにしたる、いと心ぐるし。

つゆばかりの吹びがらより火いで來て、多くの屋ども、やけうするためしもあなれば、ふかく此火の事を制するもことわりぞかし。それはさることにて常に衣などやきたるらし、或はたゞみにおとしてしらざるな、人にみつけ敎へられて、あわてふためき、ひろひすてたる、かたはらいたくすゝろにをかし。（宣長）

●夜道の旅のねぶたきとて腰に茶瓶も提げられず。秋のねざめの淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草の友となるこそ、琴詩酒の三にもまさるべけれ。埃のもえ杭なさがしたるは、客予が貴ねの目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍従が待宵ならん。（遠慮は九年の壁にむかひて炭團の重賀を悟り、四行は柳陰にしばし火打の光を樂む。されば出女の長ざせるは夕ぐれの柱にもたれて、口紅乃さして吸ひたる、少しは心づかひすらんな。船頭の短ざせるは柚さきに箱留て、有明の月を詠めながら大海へ吸がら投げたるよ、いかに心のはれやかならん。やごとなき座敷に線子張の煙草盆を、あたま數に引きわたしたるより、路次の待合に吸口包みたるは、にくからぬ風流なれど、さすがに辭義合に手間もとるべし。只木がらしの松陰に駕立て、、細ざせる取りまはせば、茶屋の嗚のさし心得て、蛇がらに藁火もりてさし出したる、一銭千金のたとへも此時をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、畑打のきせるにがん首さしあはせて、一ぷく吸ひ付けたる心こそ、深井が飯の情よりうれしさはまさらめ。そも煙草の徳もむかしより人のかぞへふるし。今さらいふもくどければ、かの愛蓮にならひて、只此類の品定せんに、酒は富貴なる者なり。煙草はさしつめ君子の番にあたりて、用ゐる時は一座に雲を起し、退く時は神のうちにかくる。こゝに神龍の働ありともいふべし。下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少なからず。今や稀なるたばこ好にして、野にも吸ひ、山にも吸へば、たばこ入の風流日々にさかんに、きせるの物ずきともくにあたらしくて、若輩の目を迷はせども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこにはさかぬなで差し出す、煙も一期身も一期。途には同じ灰となる、現の浮世うつの山。

（浄瑠璃、伊賀越）

●何のいの、こなさんは大事の御客、マア烟草飲んでゆるりつと、寝轉んだがよいわいの。いえ〳〵勿體ない師匠の内、ほんに此烟草はどこから參つた。ソリヤ親仁殿が旅戻りに、貰つてござつた上方烟草、ハアあなたのお口に合ふのなら、服部が國分か、此天氣にかうして置いたら濕りましよ。留守事に刻んで見ませう。幸爰に切莖庖丁、底に銀の葉揃へ、敵を睨き出す煙草の小口、葉巻手早くさり〳〵と、火の體を小廻りの、赤公ぶりもあはれなり。

（浄瑠璃、伊賀越）

●うばは御手を引き參らせ、下女の小まんは主思ひ、如才なしぢの烟草盆、道々つい

●取る口よりかけて眺むる煙草哉。（其角）
●盛みて下葉ゆかしき煙草哉。（蕪村）
●煙草ほす寺の座敷に旅寝哉。（几董）
●一つ家に年ある樓や若煙草。（太祇）
●若煙草丹波の鮎の片荷哉。（維駒）
●煙草とりて荒に就たる畠哉。（召波）
●みよし野も草の軒端の煙草哉。（暁臺）

●煙草のむ火もなき頃や雪。（安良）
●若葉ふく風や煙草の刻みよし。（風雪）
●たばこほす山田の畔の夕日かな。（其角）
●この蛇なたばこで透がす畑哉。（同）
●駿河路で煙草のむなら茶摘の火。（野坡）
●夏の暮煙草のむしの噪聲。（重厚）
●秋風や二番煙草のねざせ時。（游刀）
●引きよするたばこぼんなうの心なれや君があたりを立ちもはなれね。（東作）
●行人のくはへ煙管のすひがらも横に飛火の野邊の春風。（飯盛）
●吸ひつける煙草はたれと不知火のつくしがりする春の野遊。（たゞんど）
●細かにもきざむばかりで葉たばこのしめり程よき春雨の宿。（音成）
●煙草のみ友と思ひて花ほくち獨りうちねる庵のさびしさ。（冬名）
●大和歌から歌作る案のたれ煙草や言の葉草なるらん。（川かぜ）
●切りかゝるこはいくさかの煙草ぞもことをはやめてしのぎせつりつ。（友成）
●から人の船に積みこしきざみには嘘な葉なみもあらくありけん。（すみ）
●いかなれば此龍王の玉煙草神代のまきにきざみ落せる。（穗から）
●相思ふ草と此身をきざまなん戀しき君にてわかれて心もすまず、煙草のんでも煙管より、喉が通らぬ薄けぶり、よそへなびくもみんなたれゆゑ。（俗諺）
●さまといまの吸付煙草、こひがますやら火がわかぬ。（同）
●酒と煙草と一度にのめば思ひだしたりわすれたり。（同）
●伊勢ものはみなひおどしのたばこ入。（同）
●思ひねにする獨寝は、心もすみて月もさえて、煙草繼草伽となる閨の内。（同）
●三遍廻つて煙草にしよ。（俚諺）
●蛙に煙草を飲ませると腸を出して洗ふ。（同）
●南夷煙草昔誰栽。纔切盤中小作堆。不是碧筒通酒氣。應須玉管動霞灰。山中怡悦持雲贈。席上飛談捷霧來。莫問紫陽仙子術。餐霞吸露到蓬萊。（鵜樓）
●南洋航到異草。中土植芳芋。艷奪黄鵬色。香含碧絮烟。玉樓銷三卯酒。石室攪春眠。吹作連環起。隨風乍自遷。（江亭）
●相思南國草。獨得火行精。海舶纔傳種。風人未識名。剪爲金縷細。吹見綠烟生。莫道杯中物。偏能破不平。（新川）
●詩促歸心酒促眠。畫盆鏤管坐吹烟。氤氳自若兩廻紫。遊興何勞問李仙。

(風鳴)

●細前黄金縷。紛々色自分。似レ醒二楚王夢一。纔作二巫山雲一。 (閑亭)

【たび】 旅

客旅。覊旅。長路。短亭。行装。野店。荒村。關山。離歌。驟路。たびぢ。むまやぢ。關ぢ。たびゆく。旅のやどり。旅衣。草枕。

●さるを故郷の旅と思へば、さすがに節分の夏、早舩の守とさわがれて、少しは心の電東なき方もあらん。出立は茶漬にはしらかし、菅笠の緒の取いそぎたるも、さすがに界川越ゆる時心細く、見かへるは父母の國をはなるゝ成也。案のごとく、あゆみつかれては泊を待ちかね、わらぢの緒はときたれど、揚りはなに困手をつき、やゝひざがしらにて遣ひあがり、居風呂によびたてらるゝも、中々物うきばかりにて、桶に手をかけねれども、綠のいと高くおぼえて、横さまにまろびこみたれば、四方はせばくて眉はすぼめたり。折釘に物かけるなと、つゐのなとこに狐な付けられ、財布の置所に迷ふ。あるは名物の小刀仕出しの煙草入

(風鳴)

夢は七ツの鐘にゆすられ、起き出づる床のうさは戀の別にもまさりぬべし。鶏の聲もなきわたり、馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はのかるれど、日は猶さめかねて、追分の並松にだきつき、出ばなれの橋にて、茶の匂ひかうばしきは浦山しく、道端の家に松葉ばち〳〵と打つづく。道端の家に松葉ばち〳〵と打くべて、茶の匂ひかうばしきは浦山しく、心とまるわざなるべし。 (也有)

●此君もとより龍腦風閑の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外をいでさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めて叶はせ給はじと、御伴の人々かねては心苦しく思ひにかゝれる哥の浪、和歌吹上を外に見て、月に霊げる玉つしま、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王寺につき給ふ。 (太平記)

●旅はあはれなるこそよけれ。年へてのち其時の友人など相語ちふにも、そこの渡舟にて雪にあひつ、かしこの山にて雨にぬれて、こまりかねてなどいひいづれば、身にしみてなかしうも懐え、よろづ心にかなはぬ折ふしも、うき旅のさいつ頃、あるじのつれなかりし、飢ゑつ、こゞえつなど思ひ出せば、驕の心皆きゆ。家とめらん際は、ひとロふつか外へまかるにも、くひもの調度缺くることなく、思ふやうにしてとこそ用意すらめ。たゞ家にのりても行けかし。物打合はぬ中にこそ興ある事もあるなるをともむげに覚ゆるを、情も純心ゆかぬかたもあるべければ、猶つらしとかこつ時もあるべし。さはいへ、つれだつ人のもの輕くて極めて用ある調度など用意して、これ使へとてさし出したる折につけていとよし。かしこに知る人、あるじの心むつかしからず、食物きよく汚などひかせ、夜の衾心づかひしたるうれしきものにぞある。 (鶯庵)

●鳥は黒く生れながら、鷺の白からむ願ひもなし。雪はあるにまかせ、雨を凌ぐものに菅笠はあれど、今様は合羽で仕まふ。錢を入れたるは草鞋一足にて、天晴旅人の出立は出來たり。二月晦日といふ日に、蝸牛の家を離れ、名吉の國廻りにうかれ出で、田づらの柳、木瓜すみれ、道普の雉子のうす曇、旅の心にはなりきりたり。 (南行部)

●今はしばし休みぬべしとて、枕はかたぶけねれど、いつも旅にてはいざときくせにて、露まどろまれず。雨なほやまねば、をり〳〵はあれまもる雫の音いぶせく、松吹風も心ぼそきに、京には今や夢みるらんと思ひやりつゝ、からうじて、夜も明け行くに、雨やみて風は猶朝寒けれど、舟出して廿九日夕つかた京にかへりぬ。 (長伯)

●露も時雨も守山は、下葉殘らぬもみぢ葉の、夕日に色やまさるらん。古へ今も鏡山、形を誰か忘るべき。いさむ心は無けれども、其名ばかりは武佐の宿、まだ道路もあさぢふの、小野の宿より見わたせば、斧を磨きし磨針や、番馬と音の聞えしは、此山松の夕風、旅寢の夢も醒井の、白ら結ぶ草枕、誰か宿をも柏原、月もまれなる山中に、不破の關屋の板庇、久しくならぬ旅にだに、都の方ぞ戀しき。垂井の宿を過ぎ行けば、青野が原は名のみして、岩夕霜の白妙、枯葉にもろゝ草もなし。かゝる浮世に青墓や、捨てぬ心を抹瀬川、洲の俣海馬の渡りして、折津芽津打過ぎて、熱田の宮に參れば、蓬萊宮は名のみして、利錢に近き此身の、不死の薬やなかるらん。蘆間の風の鳴澤潟、千汐につるゝ捨小舟、さゝがにの、蜘蛛手に沖にや出でぬらん。さゝがにの、蜘蛛手にかゝる八橋や、澤邊に匂ふかきつばた、在原の中將の、はるゝ〳〵來ぬと詠ぜしも、今身の上に知られたい。猶行末は白眞弓、矢矧の宿赤坂、松にかゝれる藤がえの、楢の花を宮路山、わたうと今橋うち渡り、雲と煙とニ村山は、高師の名のみして、野里に道やつくらん。波の濡干の汐見坂、れうがい天に運りて、雲に濡ぎ入る沖つ舟、吳楚東南にわかれて、乾坤日夜うかべり。歸らんことをしらすかに、しばしおりゐる水鳥の下安からぬ心かな。 (謡曲、東國下)

●うき身は何と楢の葉の、柏崎をば狂ひ出で、越後の國府に着きしかば、人目も分かぬ我妻、いつまで草のいつまでと、知らぬ心は廣衣、浦はるゝ〳〵と行くほどに、松風遠くさびしきは、常盤の里の夕べかや。我にたぐへてあはれなるは此里、子故に身をこがしゝは、野邊のさじまの里とかや。降れどもつもらぬ淡雪の、淺野といふは是かとよ。桐の花咲く井の上の、山を東に見なして、西に向へば善光寺、正身の彌陀如來、わが狂亂はさておきぬ、死して別れし、夫を尊きおはしませ。 (謡曲、柏崎)

●牛若此笈おつ取つて、今ロぞ始めて憂き旅に、粟田口松坂や、四の宮河原逢坂の、關路の駒の跡に立ちて、いつしか商人の、主従となるぞ悲しき。藁屋の床の古へ、都の外の憂き住居、さこそはと今、思ひ栗津の原を打ち過ぎて、駒もとゞろと踏み鳴らし、熱田の長橋打ち渡り、野路の夕露守山の、下葉色照るロの影も、傾くに向ふ夕月夜、鏡の宿に着きにけり。 (謡曲、烏帽子折)

●歩みならはぬ道芝の、露か涙か、袖に貫く玉川や、後に流の關はあれど、若やは人

の火哉と、とつかはとして藤澤や、瀬むらさきの親子の絲、さても七世の孫にだに、逢へば逢ふとや浦島が、玉手箱根の山越えて、四なはるかに三島路や、弓手は沿海波々として、三保の松原さゝんざと、嵐につるゝ、イヤ夕波に、實に浮島がはらからと、此處に双兒の山見えて、手に取るやうに足柄や、愛鷹山とけおさるゝ、八重巻く雲の帶なして、鹿の子の小紬ゆきながに、伊達な駿河の富士の山、唐土までも高き名な、持つや田子の浦、あづま袋げの腰衣、着てこと見たれ清見潟、影も果なき波の上、月の限なる小夜千鳥、伴なふ人も荒磯の、海士の小舟に漕がれ行く、末は何處と遠江、濱名の橋の橋柱、立つる心も弱々と、只ある木陰に立寄て、少時くやすらひ給ひける。

（淨瑠璃、大原問答）

●見渡せば、春のひあしも走井や、ならはぬ旅に身もつかれ、世のうき事を夕嵐、さら〳〵さつと吹きくれば、つまも袋すそもひら〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵と吹き分くる、追分過ぎて大津のしゆく、今宵はこゝにかり枕、紬をかたしく旅やどり、つかれな晴させ給ひける。

（淨瑠璃、盛衰記）

●何國にか暫しは旅とつゞりけん、昔の人の筆のあと、つれ〴〵詫る假の宿、夜の視のすきもりて、風にまたゝく燈火の、かげも淋しき奥の間。

（淨瑠璃、朝顏日記）

●大君のみことかしこみおほの浦をそがひにみつゝ都へ登る。

（奈良歌）

●旅ねする木の下露の袖にまた時雨ふるなと、此處に双兒の山見えて、手に取るやうに足柄や、愛鷹山とけおさるゝ、八重巻く雲の帶なして、鹿の子の小紬ゆきながに、伊達な駿河の富士の山、唐土までも高き名な、持つや田子の浦、あづま袋げの腰衣、着てこと見たれ清見潟、影も果なき波の上、月の限なる小夜千鳥、伴なふ人も荒磯の、海士の小舟に漕がれ行く、末は何處と遠江、濱名の橋の橋柱、立つる心も弱々と、只ある木陰に立寄て、少時くやすらひ給ひける。

（淨瑠璃、盛衰記）

●見渡せば、春のひあしも走井や、ならはぬ旅に身もつかれ、世のうき事を夕嵐、さら〳〵さつと吹きくれば、つまも袋すそもひら〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵と吹き分くる、追分過ぎて大津のしゆく、今宵はこゝにかり枕、紬をかたしく旅やどり、つかれな晴させ給ひける。

（淨瑠璃、盛衰記）

●旅づかれやすめてねたりおきごたつうすきふとんなかけ川の宿。

（あぜ道）

●まづうれし近江表にみのぶとんねものがたりの相やどりして。

（紀逸）

●ふるさとも今日のふとばしかみならし今やくふらん餅好の妻。

（關月）

●夏の夜の短き夜着に足引の山郭公きく旅のやど。

（光一）

●雷雲で火にも旅のいとまごひ。

（川柳）

●川どめにてにはなをほす旅日記。

（同）

●旅だちははでながはやくくたびれる。

（同）

●初旅へ晩は是ぢやと二本出し。

（同）

●足洗ふ湯も水になる旅戻り。

（同）

●箭さび人なとがめそ旅ばおり。

（同）

●旅なれぬうちは桑名で日をやき。

（同）

●あしの湯の客と書付せぬばかり。

（同）

●連れ同士くわくしつになる宿をとり。

（同）

●投入のひからびてゐる間の宿。

（同）

●寐がへりの小つぶでいたむ旅まくら。

（同）

●きのふは袖に包みけり、けふ九重に旅のそら、ふりあげ見れば、鹿の子まだらにちら〳〵〳〵と、雪間に見ゆる富士の山、やう〳〵夏に清見潟、空にもせきのあるならば、月をとゞめて三保がさき、名にのみきゝし菊川に、夢も結ばぬ假枕、小夜の中山なか〳〵に、濱松が枝の若緑、さしでの光の小草にあれかゝる、思ひうらあるこ川や、げにけふばかり、くもれ近江のかゝみ山、旅のやつれの顏のみゆるに、涙の雨のもりやま、露にしつぼり〳〵、ぬれてこそゆけ。

（同）

●旅は日ぐれかもういものよ、忘れた繩を又思ひ出す。

（俚諺）

●旅はういものつらいもの。

（同）

●裸で道中はできない。

（同）

●可愛い子には旅をさせよ。

（同）

●旅の恥はかき捨て。

（同）

●旅は道連世は情。

（同）

●旅の辱は辨慶狀。

（同）

●樣々樣客眼常開。筵々青燈落曉灰。北雁有レ情書未レ到。寒衾無レ夢雨頻來。今年白髮看仍少。去日青春挽不レ回。別後故山應三好在一。小窗草夏翠雲堆。

（周紫芝）

●燕子花かたるも旅のひとつかな。

（芭蕉）

●初雞や明け行く花の旅ごゝろ。

（可風）

●くるしさも菜にはかつをぬ盆の旅。

（曾良）

●明ぼのはたちばなくらし旅塗。

（我峯）

●青梅のつくしにいさむ旅出かな。

（鬼貫）

●此寺の牡丹や旅の拾ひもの。

（凡董）

●四五日の旅おもしろき青田哉。

（千山）

●いたづらに菅蒲鬼くなり旅枕。

（月居）

●春の霜旅はさま〴〵の夜明哉。

（完來）

●長き夜も旅くたびれにねられけり。

（去來）

●浮島がはらふ路銀もつきはて、三國一のふじいうな旅。

（東作）

●朝もよひきちんどまりの出立は心のこんのともし火もなし。

（赤良）

●行く先の遠き親類とふまでは近き他人の旅の道づれ。

（美屋人）

●もろともにおほれと思へお月さま國のなじみはおまへばかりぢや。

（桃丸）

●日のあしの高なはへもうつきにけりならはぬ旅のうしの歩みも。

（參和）

●夏衣うすひ峠にきてみれば寒さながらも身は輕井澤。

（只取）

〔たま〕玉

尺璧。圭璋。温潤。粹精。上幣。
玉寶。石韞。山輝。夜光。瑕玷。
連城。卞和。璨然。塵琢。清輝。
まだま。から玉。あはび玉。し
ら玉。かざしの玉。まがりの玉。
しほみつ玉。しほひる玉。玉の
みはし。たまの光。

●成王又成時楚山に狩し給ひけるに、卞和尚先にもこりず、草庵の内よりはひ出でゝ、二代の君に二の足を斬られし故を語りて、泣く〳〵此石を成玉に奉りける。成王則玉磨を召して、これを琢かせらるゝに、其光大地に映徹して、無双の玉になりにけり。是を行路にかけたるに、車十七をばてらしければ、照車の玉とも名づけ、是を宮殿にかくるに夜、十二衢を輝かせば、夜光の玉とも名づけたり。誠に天上の摩尼珠、海底の珊瑚樹も、これにはすぎじとぞ見えし。此玉代りて天子の御寶となりて、趙王の代に傳はる。趙王これを重んじて、趙璧と名をかへて、更に身を放ち給はず。學窓に螢を聚めねども、書をてらす光暗からず、暫路に二月を得ざれども、路を分つ影明なり。

（大平記）

❶年たちかへるあしたのそらのけしき、名残なくくもらぬうらゝけさには、敷ならぬかき根の内だに、雲間の草花やかに色づきそめ、いつしかと緑色だつ霞に、木の芽も打ちけぶり、おのづから人の心ものびたかにぞ見ゆるかし。ましていとゞ玉をしける御前は、庭より初め、見所多く、みがきまし給へる御方々の有様、まれびたてんも言の葉たるまじくなん。

（紫式部）

❷此とまりの浜には、くさ〴〵のうるはしき貝石などおほかり。かゝればたゞむかしの人なのみこひつゝ、母なる人のよめる。よする涙うちもよせなん我戀ふる人わすれ貝おりて拾はん。

（文雄）

といへれば、ある人のたへずして、舟の心やりによめる。

忘貝拾ひしもせじ白玉をこふるなだにもかたみと思はん。

（大伴家持）

となんいへる。なんな子の爲には、親なさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをと人いはんや。されども死にし子がほよかりきといふやうもあり。

（諺曲、岩船）

❸花のもとに歌ひ、月の前にうそぶく身は、蓮城も得まほしからず、夜光も何かはせん。唯圓美流轉の如意珠こそ得まほしけれ。さてなん、めでたき玉の歌よみとも、世に光出づべき。彈丸の調得ざらん程は、みづからこそ卞和が思をなすとも、猶雅石を寶といたゞきもたる類ならんかし。

（文雄）

❹姫は此年二十にみたず。容顔閻浮より玉を欺く。巫山の神女が靈となりし、夢の面影を留め、小野小町が花に比へし、歌の風情を殘せり。

（馬琴）

❺跡に殘せし稚兒の、父よ母とよ啼くならば、非いかならん涙花津の、梅が笠屋と簗虫の、親の心は鬼ならで、黄金も玉も何にかせん、子にます寶なきものを。（同）

●かくて龍宮にいたりて、宮中を見ればその高さ、三十丈の玉塔に、かの珠をこめおき、香花を供へ守護神は、八龍並み居たり。

（謡曲、海士）

●又是なる玉は私に持ちたる寶なれども、あまりにめでたき御代なれば、龍女が寶珠とも思し召され候へ。

（謡曲、岩船）

●庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の屋、碑碟の行桁瑪瑙の

桓、池の汀の蓮葉は、蓬萊山もよそならず。

（謡曲、蓮葉）

❻其方邊も随分と、四季折々の実据ゑて、家を亂すな厄病に、よるな障るな拔かるなと、心と顔に知らせ合ひ、言はぬが言ふにまされる、物柔かにさばくのが、夫が當風今川の、名に流れたる四人の、寶を玉に喩ふれば、瑠璃しやこ瑪瑙珊瑚樹の、一對二對揃ふたる、園の緒じめは是なるはと、世の人感じ合ひにけり。

（淨瑠璃、忠臣菅原刀）

●德を包むは賢者のならひ、御光とは存ずれ共、夜光の玉は卞和が極め、寶殿の才器は見拔いた某、殊更近々異國攻め軍用士卒に事かゝれど、其乏しきは軍師の器量、揃者が調承引有り、何卒御入來下さらば、虎に翼を添たる幸。

（淨瑠璃、彦山權現）

❼白玉をつゝみてやらばあやめ草花橘にあへもぬくがね。

（家持）

●誰ゆゑに思ふとはしる初瀬女のてにまく玉のおのれみだれて。

（俊家）

❽松かげの清きなきさに玉しかば君來ませんか清き濱べに。

（八束）

❾妹がためわれ玉もとむおきべなる白玉よ

（萬葉）

こせ沖つしらなみ。

❿嶺の上につま木折りたきながづきこし沖の白玉。

（百橋）

⓫見わたせば近き物から磯がくれかゝよふ玉をとらずばやまじ。

（之仲）

⓬うたゝねの床にとまれる白玉は君がおきつる露にやあるらん。

（金村）

⓭古のさづけし玉はわたつ海のしほひしほみち心なりけり。

（後撰）

●しるや人たもつ心の玉だにもみがくにつけてひかりそふとは。

（家集）

⓮いとせめてとりえし玉の枝さへもおもひくだくる種となりにき。

（春海）

●七車てらすといふもみがきたるひとつ心のたまにしかめや。

（有功）

⓯玉といふ玉の中にもたまの緒のながきにまさる寶やはある。

（同）

⓰釣り上げし鰹の巨口玉や吐く。

（蕪村）

⓱瑠璃琥珀玉に香はなし桃の花。

（野坡）

●山吹は黄玉薔玉露ぞうき。

（其角）

⓲玉あらば愛で聞とれ白蓮社。

（同）

●夜光る梅のつぼみや貝の玉。

（同）

⓳玉すりの玉も景しといふ日哉。

（田福）

⓴玉打ちて雪に筋つく小路かな。

（一路）

㉑雫きえて玉打つ門のほこり哉。

（百橋）

㉒玉巻くや風もさわがぬ葛原。

（之仲）

㉓太刀魚や波の玉ちる岩の上。

（綠水）

㉔玉といふ玉の中にも七曲の玉はちゝもてみかきあぐらん。

（寂々）

㉕夕しほのみちひの玉も出でづべし花火のつゝの竹のうちから。

（古渡）

㉖物思へば川の花火も我身よりぼんと出でたる玉やとぞ見る。

（橘洲）

㉗白露は柳の糸の結び玉風より外にとく人もなし。

（白人）

㉘山のはの錦につゝむ月の玉いろや箱根のふたのあけ方。

（花也）

●見事にて手には取られず白露の消えやすきこそ玉にさずなれ。

（未得）

㉙玉といひ其上に又白かねと見るめはよくの道芝の露。

（千狀）

●正直な田舎そだちの芋の葉の露は玉とも人をだまさず。

（能言）

●蓮葉に雨のくれたる水玉ぬいけになげうつ風の涼しさ。

（宮人）

●盤もと草のへんくわが玉なればとれや川邊のあしをきる共。

（裏住）

●よく見れば疵の有るのがほんの玉。

●玉の挑弘法火師見付出し。（川柳）
●玉のてんとつたら御機平癒也。（同）
●供船へお玉の類はえり出され。（同）
●ふんこつさいふんの玉むしも持ち。（同）
●玉に疵つけて一ぷくのんでみる。（同）
●玉二つ男まさりの御軍配。（同）
●疵に玉だと梶原の歌を褒め。（同）
●小笹がうへにたばしるは、別の袖の白玉、おもひぶるやの軒に、積る恨も解てしのびね。（俗謡）
●烏のなくねにきぬ〴〵の、袖の白玉なにぞと問はゞ、露とこたへて消えぬ命をさ、思に沈む。（同）
◎幾花しなれて貴船の川も、袖の涙に玉ぞちる。（同）
●眼のよる所へ、玉がよる。（俚諺）
●玉に瑕瑾。（同）
●玉に瑕。（同）
●楚人和得二玉璞楚山中一、奉而獻二之厲王一。厲王使二玉人相一之。玉人曰石也。王以レ和爲レ誑、而則二其左足一。及二厲王薨武王卽レ位、和又奉二其璞一而獻二之武王一。武王使二玉人相一之。又曰石也。王又以レ和爲レ誑、而則二其右足一。武王薨文王卽レ位。和乃抱二其璞一而哭二於楚山之下一。三日三夜、淚盡而繼レ之以レ血。王聞レ之。使二人問一其故一曰、天下之刖者多矣。子奚哭之悲也。和曰、吾非レ悲レ刖也。悲夫寶玉而題二之以一レ石、貞士而名二之以一レ誑。此吾所二以悲一也。王乃使二玉人理一其璞一而得レ寶焉。遂命曰二和氏之璧一。（韓非子）
●人有見二宋王一者、錫車十乘、以二其十乘一驕二莊子一。莊子曰、河上有レ家貧恃レ緯蕭而食者。其子沒二於淵一、得二千金之珠一。其父謂二其子一曰、取レ石來鍛之、夫千金之珠、必在二九重之淵一、而驪龍頷下。子能得レ珠者、必遭二其睡一也。使二驪龍而寤一、子尚奚微之有哉。今宋國之深、非二直九重之淵一也。宋王之猛、非二直驪龍一也。子能得レ乘者、必遭二其睡一也。使二宋王而寤一、子爲二齏粉一夫。（莊子）
●子貢曰、有美玉於斯、韞レ匱而藏レ諸、求二善賈一而沽レ諸。子曰、沽レ之哉。沽レ之哉。我待レ賈者也。（論語）
●趙氏連城璧、由來天下傳。遂二君選一酒府一。明月滿二前川一。（揚炯）
●適二玉毀一珠。小盜不レ起。（莊子）
●金聲而玉振レ之。（孟子）

【たんじやう】誕生

出産。桑弧。蓬矢。麟兒。孺子。夢レ熊。贈レ鯉。孕レ靈。うまる。ある。

●十日のまだほの〴〵とするに、御しつらひかはるゝ白き御帳にうつらせ給ふ。殿より初め奉りて、公達、四位五位どもたちさわざて、御丁の帷かけ、御座どももてちがふ程いと騒し。日ひとひ、いとこゝろもとなげに、起臥くらさせ給ひつ。御物怪どもかり移し、限なくさわざのゝしる。月ごろそこら侍ひつる殿のうちの僧なば更にもいはず、山々寺々を尋ねて、驗者といふ限は殘なく參り集ひ、三世の佛もいかにか聞き給ふらんと思ひやらる。陰陽師とて、世に名ある限召し集めて、八百萬の神も耳振りたてぬはあらじと見え聞ゆ。御誦經の使たち、さわぎ暮し、その夜もあけぬ。御丁の東面は、内の女房參りつどひて侍ふ。西には御物怪うつりたる人々、御屏

風一枚ばかりさつぼね、局口には木丁をたてつゝ、驗者あづかり〳〵罵り居たり。南にはやんごとなき僧正僧都がさなり居て、不動尊の生きたまへる形をも、呼び出で顯しつべし。頼み〳〵恨み〳〵、整治なかれわたりにたる、いといみじう聞ゆ。北の御廂司と御丁との間、いと狹きほどに四十餘人ぞ、後に數ふれば居たりける。卿身動もせられず、氣あがりて物ぞ覺えぬや。今里より參る人々は、中に居籠められず、袋の褶、衣の袖、讀らんかたも知らず、さるべきおとなどは、忍びて泣き惑ふ。十一日の曉に北の御障子二間はなちて、廂にうつらせ給ふ。御簾なども得かけあへねば、御木丁を押し重ねておはします。僧正ぎやうてふ、僧都、法務僧都など侍ひて、加持參り、院源僧都、きのふかゝせ給ひし御願書に、いみじきことゞもかき加へて、讀みあげ續けたる音のはの、哀に尊く頼もしげなること限なきに、殿のうちもそゝめて、佛念じ聞え給ふほどの頼もしく、さりともとは思ひながら、いみじう悲しきに、人々涙を得ほしあへず、ゆゝしうかうなど互にいひながらぞ、得せさあへざりける。人氣多くこみては、いとゞ御心も苦しうおはしますらんとて、南東おもてに、出でさせ給うて、さるべき限、この二間のもとにはさふらふ。殿の上、讃岐と、宰相の君、内藏の命婦、御木丁の中に、仁和寺の僧都の君、三井寺の内供の君も召し入れたり。殿の萬にの〳〵しらせ給ふ御聲に、僧もけたれて音せぬやうなり。今一座に居たる人々、大納言の君、小少將の君、宮の内侍、辨の内侍、中務の君、大夫の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨よ。いと年經たる人々の限にて、心を惑はしたるけしきどもの、いと理なるに、まだ見奉り馴るゝ程なければ、類なくいみじと心一つに覺ゆ。又この後のきには、立てたる几丁の外に、内侍のかみの中務のめのと、姫君の少納言のめのとゝ、いと姫君の小式部のめのとなど、押し入り來て、御帳二つが後の細道を、誰人も通らば、行きちがひ身動く人々は、その顔などもすれば、見わかれず。殿の公達、宰相の中將雅通などは、更にもいはず、左宰相の中將經房、宮の大夫など、例は氣遠き人々さへ、御木丁のかみより、とへたるに、夜一夜罵りあかして聲もかれにけり。御物怪うつれと、召し出でたる人々も、皆うつゝでさわがれけり。午の時に空晴れて、朝日さし出でたる心地す。平におはします嬉しさのたぐひもなきに、男に見ゆるも、よろづ耻忘れたり。頂には、うちまきの雪のやうにふりかゝり、押し潤みたる衣の、いかに見苦しかりけんと、後にぞをかしき。御頂の御髮おろし奉り、御戒盲うけさせ奉り給ふほど、くれ惑ひたる心地に、こは如何なることゝ、あさましう悲しきに、平にさせ給ひて、後のことまだしき程、さばかり廣き世屋の南の面、高欄のほどまで、立ちこみたる僧も俗も、皆今ひとよりとよみて額をつく。（中略）今とせさせ給ふほど、御物怪の、姫み罵る聲などの、むゝつけさよ。源の藏人には心譽阿闍梨、兵衛の藏人にはそうそといふ人、右近の藏人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物怪にひき仆されて、いとゞほしかりければ、ねんかく阿闍梨をめし加へてぞのゝしる。阿闍梨の驗の薄きにあらず、御物怪のいみじう強きなりけり。宰相の君、なき人にゐかうをそへたるに、夜一夜罵りあかして聲もかれにけり。御物怪うつれと、召し出でたる人々も、皆うつゝでさわがれけり。午の時に空晴れて、朝日さし出でたる心地す。平におはします嬉しさのたぐひもなきに、男に

さへおはしましけるよろこび、いかゝは斜ならん。昨日しほれくらし、今朝の程、朝ざりにおほゝれつゝ女房など、皆たちあかれつゝ休む。御前にはうち老いたる人々の、かゝる折節つきゞ〳〵しき侍ふ。殿も上も、あなたに渡らせ給うて、月ごろ御修法、讀経に侍ひ、昨日今日めしにてまゐり集ひつる僧の布施たまひ、陰陽師など、道々の験あらはれたる禄給はせ、うちには御湯殿の儀式など、かれて儲けさせ給ふべし。（紫式部）

●さる程に、同じき十一月十二日の寅の刻より、中宮御産の氣ましますとて、京中六波羅ひしめきあへり。御産所は六波羅池殿にておりければ、法皇も御幸なる。關白殿を初め奉りて、太政大臣以下の卿相雲客、すべて世の人と數へられ、官加階に望なからけり、所帯所職に對する程の人の、一人も漏るゝはなかりけり。（中略）御産平安、皇子御誕生ましまさば、八幡、平野、大原野などへ、行啓あるべきよし御立願あり。仙源法師承りて、是を敬白す。神社は太神宮を始め奉りて、二十餘箇所、佛寺は東大寺、興福寺、以下十六箇所へ御誦經あり。御誦經の御使には、宮の侍の中に有冠の輩是を勤む。狂紋の狩衣に帶劍したる者どもが、いろ〳〵の御誦經物、御劍御衣をもちつゞきて、東の對より南庭をわたりて、四の中門に出づ。めでたかりし見物なり。小松の大臣は、例の善惡につきて、驕ざ給はぬ人にておはしければ、遙に程へて後、嫡子權亮少將維盛、以下の公達の車ども造り續けさせ、色々の御衣四十領、銀劍七つ廣蓋に置かせ、御馬十二匹引かせて參らせらる。是は覺弘に上東門院御産の時、御堂殿の御馬參らせられし、其例とぞ聞えし。大臣は中宮の御兄にておはしける上、取りわき父も是程までは憶せじものとぞ宣ひける。御驗者には、房覺、性運兩僧正、春尊法印、豪禪、實尊兩僧都、各僧伽の句ども上げ、本寺本山の三寶、年來所持の本尊達、貴め伏せ〳〵揉まれければ、誠にさこそはとおぼえて、尊かりける中に、をりふし法皇は、新熊野の御幸なるべきにて、御精進の序なりけるが、錦帳近く御座ありて、千手經を打ちあげ〳〵遊ばされけるにぞ、今一際事替りて、さしも蹈り狂ひけるよりまさどもが縛も暫く打ち靜めけり。法皇普賢延命に至るまで、殘る所なく修ぜられけり。護摩の煙御所中に滿ちて、鈴の音雲をひゝかし、修法の聲身の毛よだちて、如何なる御物怪なりとも、何面を向ふべしとも見えざりけり。猶佛所の法印に仰せて、御身等身の藥師、並に五大尊の像を造り始めらる。かゝりしかども、中宮は隙なくしきらせ給ふばかりにて、御産も頓に成りやらず。入道相國、二位殿、胸に手をおきて、こは如何せん、如何にせんとぞあきれ給ふ。人の物申しけれども、只兎にもかくも、善きやうに〳〵とばかりぞ宣ひける。あはれ淨海、軍の陣ならば、さりとも是程までは憶せじものとぞ宣ひける。御驗者には、房覺、性運兩僧正、春尊法印、豪禪、實尊兩僧都、各僧伽の句ども上げ、本寺本山の三寶、年來所持の本尊達、貴め伏せ〳〵揉まれければ、誠にさこそはとおぼえて、尊かりける中に、をりふし法皇は、新熊野の御幸なるべきにて、御精進の序なりけるが、錦帳近く御座ありて、千手經を打ちあげ〳〵遊ばされけるにぞ、今一際事替りて、さしも蹈り狂ひけるよりまさどもが縛も暫く打ち靜めけり。法皇

仰なりけるは、假令如何なる御物怪なりとも、この老法師が、かくて候はんには、いかでか近づき奉るべき。就中今顯はるゝ所の怨靈は皆我朝恩を以て、人と成りたる者ぞかし。假令法者の心なこそ存ずとも、いかでか當陣尋をなすべきや。速に罷り退き候へとて、女人生産し難からん時に臨みて、邪靈遮障して、忍び難からんにも、心をいたして大ひじゆを稱誦せば、鬼神退散して、安樂に生ぜんとあそばして、皆水晶の御珠數を押し揉ませ給へば、御産平安のみならず、皇子にてこそまし〳〵けれ。本三位の中將重衡の卿、その時は未中宮の亮にてわたりしが、御簾の中よりつと出て、御産平安、皇子御誕生候ふぞと、高らかに申されたりければ、法皇を始め參らせて、關白松殿、太政大臣以下の卿相雲客、各所修、陰陽の頭、典藥の頭、數輩の御驗者、すべて堂上堂下、一同にあつと悦びあはれける。聲は門外までもとよみて、暫は靜りもやまざりけり。入道相國嬉しさのあまりに、聲をあげてぞなかれける。悦泣とは是をいふべきにや。小松の大臣は、急ぎ中宮の御方へ參らせ給ひて、金銭九十九文、皇子の御枕に置きて、天を以ては父とし、地を以ては母と定め給ふべし。御命は方士東方朔が齢を保ち、御心には天照太神入り替らせ給へとて、桑の弓、蓬の矢を以て、天地四方を射させらる。

●すこし御聲もしづまり給へれば、ひまおはするにやとて、宮の御湯もてよせ給へるに、かきおこされたまひて、程なく生れ給へるひめ。うれしとおぼすことかぎりなきに、人にかりうつしたまへる御もの〳〵けどもの、ねたがりまどふけはひ、いと物さわがしうて、のちのことまだいと心許なし。いふかぎりなき願どもたてさせ給ふげにや、たひらかにことなりはてぬれば、山のざなにくれとやんごとなき僧ども。したりがほにあせおしのぐひつゝ、いそぎまかでぬ。（紫式部）

●惜これは御夫婦への話でない、後學の爲め卿の君樣へ御物語り、總じて勇士の戰場へ赴く時は、三忘と申して忘るゝ事三つあり。國を出る時家を忘れ、境を出る時妻子を忘れ、敵陣へ臨んでは我身を忘るゝ、婦人懷胎もまづその如く、既に月滿ち御産の緒を解かるゝは、彼の敵陣へ駈け入つて、これぞ能き敵御參なれ、遁すまじと引組んで、首を取るか取らるゝか、眞一つ子を產むか得產まぬか、生きるか死ぬるか生死の境、爰を能く御合點なされ、豫て無き身と思召さば、其期に臨んで不覺を取らぬ。（淨瑠璃、御所櫻）

●心わろげに御聲所、行惱み草にひれふして、御息も絶え〳〵に、夫婦嘆き集ひ寄り、さま〴〵勞り奉れば、折こそあらめ御產の氣づき、やす〳〵うみの產聲は、かいごの中の頻伽鳥、雲は玉の男御子、歎の中の悦びと、世の言草も是やらん。（淨瑠璃、津の國女夫池）

●後宮數多侍ひし、中に色ある紫や、藤氏の御方に、ひつぎの玉の男子親王、やすやすと降誕あり。產屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀、今日百二十日の御忌明き、特に山王權現に、御世方の御願ぞと、齡千歲の坂本に、產神詣でと聞えける。（淨瑠璃、東帶鑑）

●珍らしくけふ立ちそむる鶴の子は千世のむつきを重ぬべきかな。（大輔）

●嬉しくも卯月の七日あくるより此世に佛生れたまひし。（慈鎭）

●産ごゑをきいてうれしき初産に母も枕をやすらん草がくれつゝ。（家隆）
●ひんかしになびけて久しあれ出でし佛にそゝぐけふのましみづ。（千載）
●萬代をふべき宿こそたのしけれ鶴のかひ子のかへるゝも。（幸文）
●大原女の好い子産みけり春の月。（重厚）
●桑の弓蓬の矢歴然くなり。（大伴）
●産聲にたちちめを指て佛哉。（保吉）
●早乙女のよい時産んでほめらるゝ（移竹）
●産月の衣更うき女かな。（巴人）
●文月や産るゝ文字も母の恩。（其角）
●産湯かけ清おけかつほ時鳥天上天下釋迦の誕生。（玉兎）
●誕生につい一二文が餅つゝみ扨もお安いことでござれ。（貞柳）
●うぶ子をばあさとの玉どめでぬらん龍王湯を母にのませて。（春樹）
●汐みてる朝日とともに生れ出で顔に紅紛さす和子はめでたし。（光音）
●斑のなき玉の如くに生れ出でのちも男をみがくなるらん。（露滋）
●老松をそめしふすまに巣ごもりて母のうぶやのひな鶴の聲。（梅盛）
●産ごゑをきいてうれしき初産に母も枕を高うして寐る。（千取）
●初産をしらす便もいそぎ來て玉のやうなる汗やかくらん。（嶋子）
●うぶすなへまゐるうぶ著の桃いろもまだものいはぬ子にぞきせぬる。（陶）
●安く子を生みて身がるになるひさごかしましきとてすてられもせず。（秀丸）
●りん月の延び勘定に貸す金も安く子を生む宿の初産。（初丸）
●産み出すと目のある子かと塒頭聞き。（川柳）
●ふさ下げてちよツと男が産んで見せ。（同）
●安産の御使者は家中での乘人。（同）
●國の母産れた文を抱きあるき。（同）
●産見舞長口上は御退屈。（同）
●野良へ出た留守に一人で産んで置き。（同）
●嫁遠さおもんばかりありてぼろなため。（同）
●親類が來ると赤子の蓋をとり。（同）
●安産若鷲とずつぽん舞ひあそび。（同）
●わしをひやかす數の子男、何處の鯡がうんだやら。（俗謡）
●松が殿御で子を生めばこそ、山に小松が絶えませぬね。（同）
●あの子よい子ぢや牡丹餅喰、だれに似たやら子が出來た。（同）
●孤の上にも三年。（俚諺）
●産三兩に死五兩。（同）
●今日散幽愛。彈冠及新沐。兒聞萬里孫。已報三日浴。朋來四男子。大壯泰臨復。開書喜見面。未飲春生腹。無官一身輕。有子萬事足。擧家傳好夢。殊相勸凡目。烟々開眼電。磯々峙頭玉。但令強筋骨。可以耕衍沃。不須窺宮商文章。端解耘紙竹。君歸定何日。我計久矣然。長留玉車書。要使九子讀。鎭胡有內樂。軒冕無流螟。人言迫似我。窮達已可卜。早謀二頃田。莫待八州督。（蘇東坡）
●四十方始獲佳兒。渾舍洋々喜可知。我爲高吟老劉句。海中仙菜子生遲。（星巖）
●桑弧高挂照門楣。嬉納看他骨相奇。眞個聖尼親抱送。是書種子莫容疑。（同）
●多年香願奉猴仙。墮地之駒忽啞然。期汝前程一萬丈。官家新錦浴兒錢。（同）

●拳如山厳牛舒芽。庸似海楡新脫花。只管啼號覓母乳。嬉瞳猶未識二途々。（山陽）
●乃生男子。寢之牀。載衣之裳。載弄之璋。其泣喤々。朱芾斯皇。室家君王。（詩經）
●乃生女子。寢之地。載衣之裼。載弄之瓦。無非無儀。唯酒食是議。無父母詒罹。（同）
●大人占之。維熊維羆。男子之祥。維虺維蛇。女子之祥。（同）

ちノ部

〔ち〕地

地形。地理。地圖。地文。地球。地峽。地質。地勢。地味。采地。尺地。勝地。徐地。

つち。ぢひざき。ぢならし。あらがねの土。

●主上其御輿にめされ、六條少將忠顯朝臣ばかりを召し具して、潛に此所をぞ御出ありける。此體にては人の怪め申すべき上、駕輿丁も車かりくれねば、御輿をばとゞめられて、忝くも十善の天子、自、玉趾を草鞋の塵に汚して、自、泥土の地をふませ給ひけるこそあさましけれ。（太平記）
●都は既にうかれぬ。新都はいまだ事行かず。ありとしある人は、皆身を浮雲の思なし、もと此所に住むものは、地を失ひて憂へ、今移る人々は、土木の煩なのみなげきあへり。すべてゆめのやうなりし事どもなり。（平家物語）
●尼は地藏見參らせんとて居たれば、親どもは心得ず、などこの童を見んと思ふらんと思ふほどに、十ばかりなる童の來りたるを、くは地藏といへば、尼見るまゝに、是非を知らず、伏し轉びて拜み入りて土にうつぶしたり。（隆圓）
●門より見入れば、遙ひたりつる軍ども、目を瞋らし舌なめづりをして、我を見つけて、疾く率て來かしと思ひたる氣色にて、立ちさまよふを見るに、いとゞ土もふまれず。（同）
●日ごろふりつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだり、土などこそむら〳〵黑きなれ。屋のうへは唯おしなべて白きに、あやしき賤の屋もおもがくして、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。（清少納言）
●心ちよき人をみあつむれど、にるべくもあらざりけりとおぼゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞする。（紫式部）
●おそろしや、世は末世に及ぶといへど、日月は地に落ちず、まだ散りもせぬ花筐を、荒けなやあらがねの、土におとし給はゞ、天の告も忽ちに、罰あたり給ひて、わが如くなる狂氣して、共の物ぐるひと、いはれさせ給ふな。（謠曲、花筐）
●すはや地獄に踏るぞとて、大地をかつばと踏みならし、大地をかつばと踏み破つて、奈落の底にぞ入りにける。（謠曲、松山鏡）
●島に殘せし父上も、今は冥土の友千鳥、汝も冥土の友がらす、同じ暗路の苦患を見

よと、頭をつかんで引き上ぐれば、天にもつかず地にもつかず、中有の呵責を今ここに、唯悲の猛火は雨と降り、くる〳〵〳〵まつ倒さまに、おちて奈落の苦しみを、思ひ知れやと怨りの顔ばせ恨みの息つき、照日に移らふ明鏡の、光り波ろに異ならず。（浄瑠璃、平家女護島）

●守護として都に残るも、謀反の徒蕩を招くの一助、大地は打つに外るゝとも、脱んだ眼は違ふまじ。サア返答はと詰めかくる。（浄瑠璃、三韓貢）

●ことゝはぬ木にもありとも我せこがたなれのみ琴土におがめやも。（万葉）

●にはのおもの土さへさくる夏の日にひとりつゆけきひめゆりの花。（土御門院）

●土さけてくる日もしらずさえしぜぬ氷室は夏の外にやあるらん。（基俊）

●松が枝の土につくまでふるゆきをみずでやいもがこもりをるらん。（万葉）

●たちとまりゆきみの里に妹なおきて心そらなり主はふめども。（同）

●ここきそめし始もしらずあらがねの土よりなれるよもの海山。（讀人不知）

●いがばかりこしぢに雪のつもるらんつちにつきゆくには の松が枝。

●土かべに窓ぬりのこすいほまでもすさめずやどる秋の夜の月。（信濃）

●地をはしる雫をからしの初霽うりも瓢ら ね足の早さよ。（葛子）

●うせものをさせそふ虫の整聞けば東のすみの地に付きて鳴く。（石季）

●げさ秋の立つてくるのを驚きて地にはなつける露の荻はら。（折芳）

●天にあらばさゝぎなれや地に生ふる紅葉の橋のほし合のかげ。（内匠）

●遥び出す蛙の聲の地ひゞきに資生雲のかゝる夕だち。（里繁）

●餌をひろふ時に頭を地につけて鳩は三枝の禮をこそすれ。（一村）

●逢ひみては地をもちゝみにしてほしや越とは遠き君がかたびら。（橘洲）

●地ひゞきがしてせんだくの湯を貰ひ。（川柳）

●空をかけるつばさ地をはしる鰹。（同）

●信濃へは地ひゞきがして日が當り。（同）

●かしあげの砂は大地へ身をそがれ。（同）

●地名をば其まゝにして花の山。（同）

●夕立のつよく降れゝば大地までどろ〳〵とこそ鳴神の音。（信濃）

●かはらぬものは常磐木の、葉色に迷ふ人心、地を走るけだもの、空をかくるつばさも、こひにはたれも身をやつす。（俗諺）

●民もゆたかに住吉様の、岸の姫松しってん〳〵に、大悲の風ふかば、地には黄金の花が咲く。（同）

●栖の向ふの仙醉島は、地からはえたか浮島か。（同）

●地が傾いて舞が舞はれぬ。（俚諺）

●地入れば濱入る。（同）

●地にぬきあし。（同）

●元氣敷分、太極斯判、建三才一以可久、開二儀一以貞観、偉二坤德之無疆一、恢二地道之簡賛一、叶二高明一而資始孕。流潜而剛斷、空徴王世之圖、竟勞二賢亥之算一、用能載二九岳一、振二百川一、落二雲霧一、洩二風煙一、群物串賛、衆象森然、飛沉成逵、動植斯甄、五億十選、二萬八千、含二靈聰一節、蓄二聖懐一仙。元命之所二包奏一、乾倫之所二繋焉一。周易以爲二理契一於牝、曇程以爲二仁深一於天。由是開二階立一隆、提二衡建一極、匿二義和之官一、列二司徒之職一、審二其遠近一、辨二其紆直一、廣倫之敬不レ怠、爽陰之情不レ匿、用能竪二市朝一、明二匈儀一。既布、井而陳レ邑、亦列レ都而分レ州。雖盤沃瘠之品、原野墳衍之流、珍奇奇木之他族、鱗介羽毛之異儀、詭怪畢備、瑰瑋成周。銀鑪瑤檻、元闕丹丘、鄢郢之所レ不レ議、方朔之所レ難レ紬、積符應二於河粟一、災異紀二於春秋一。

●魯子問、天與二地孰仁一。墨子曰、程以二地爲一レ仁。太山之上、則封禪焉。培塿之側、則生二松柏一。下生二蒼苗一。蒲盧、龜魚、民衣焉、食焉、家焉、死焉、地終不レ貴二德焉一。故程以二地爲一レ仁。（墨子）

●至哉坤元。萬物資生。乃順承天。（易經）

●地方而無レ涯。故莫二能窺一其門一。（文子）

●地得レ一以寧。地無二以寧一、將二恐發一。（老子）

●夫地非レ不二廣且大一也、人所容足耳。（莊子）

〔ち〕 血

血液。血色。血管。血涙。血食。鮮血。滴々。淋漓。刺レ血。含レ血。濺レ血。瀝レ血。泣レ血。紅玉屑。ちしほ。血の涙。血になく。血をはく。血まなこ。血みどろ。

●刀自は頻にはふり落つる、涙といもに咳き入りて、あと叫びつゝふしまろべば、正忠慌てたすけ起し、心持はいかにおはすると、いへども刀自は應せず、とりすがるやうにしてかゝぐりながら正忠が、刀のつかをしかと取り、閃りと抜いてわれとわが咽へぐさとつきたつを、急所は少し外れたれど、大事の深手にほとばしる、鮮血は泉の涌くが如く、正忠は思もかけず、世の自害に周章し、あはやと抱きとむれども、とめかねたる今はの苦痛、見るに忍びず聲なふるはし、こは何故にか自殺し給ふ、物にや狂ひ給ふらん。淺ましや悲しやとさけびつよびつ。（馬琴）

●父が心のくるしさは、餓鬼道にこの身をおきて、那由陀阿僧祇の血蛭が、身體にひしととりつきて、血をすひつくし、尖をくらふにも百倍して、はなさんとすれど放しがたき、子は三界の絆なり。（同）

●或は高れの雲に枕を敧て、苔のむしろに袖を敷き、或は岩漏る水に渇を忍びて、朽

ちたる橋に肝をけす。山路もとより雨なくして、空裂帛に衣を濕す。みあぐれば萬仞の青壁刀に削り、みおろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間斯る險難を經させ給へば、御身も草臥れはて、流る〻汗水の如し。御足はかけ損じて草鞋皆血に染れり。（太平記）

●石の鳥居をすぐると見れば、我父と共に討死しける、人見四郎入道がかきつけたる歌あり。これぞまことに後世までの物語にとゞむべきことよと思ひければ、右の小指を食ひ切りて、其血を以て一首を側にかきそへて、赤坂の城へぞ向ひける。（同）

●宮の御鎧にたつ所の矢七筋、御頬さき二の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流る〻事流の如し。然れどもたちたる矢をもぬかず、流る〻血をも拭ひたまはず、數度の上にたちながら、大盃を三度傾けさせ給へば。（同）

●かのうれへせし工匠等をば、かぐや姫呼びすゑて、嬉しき人等なりといひて、祿いと多く取らせ給ふ。工匠等いみじく喜びて、思ひつるやうにもあるかなといひて、歸る道にて、事持皇子血の流る〻までちょうぜさせ給ふ。辭得しかひもなく、皆とりすてさせ給ひてければ、逃げうせにけり。（竹取物語）

●あけば尾張の國へ立越さんとすれば、男も女も人知れず。血の涙をながせどゝ逢はず。夜やう〳〵あけなんとする程に、女の方より出す盃に、紙なかきて出したり。（伊勢物語）

●血は涿鹿の河となり、紅波楯を流しつ〻、白刃竹を碎く苦しみ、月をも日をも手に取る影かや。（謠曲、籠）

●また御太刀つけのあとを見候へば、けしからず血の流れて候ふ。此血をたんだへ化生の者を退治仕らうずるにて候ふ。（謠曲、土蜘蛛）

●一世一生と念力に、切り込んだる右の肩先、胸板を筋違ひに、ばらりずんと切られても、尚身をひかぬ最期の身ぶり、橋はさながらもみぢ葉の、まれにあふせの敵と敵ふんごみ〳〵五刀、切られてのつけにかへせども、武士の死骸の見ごとさや、逃げ疵更になかりけり。市の進女を見失ひ、南無三寶と北へ走り南へ戻り、どこへうせたと小間々々をかき猫の、瓜をさがす眼の光

橋には死躰のたゝうつ。折しも七月中旬、血は流れてとう〳〵と、月こそうかべ伏見川、龍田の川とぞ紛ふたる。（淨瑠璃、鉢木三）

●血の涙おちてぞたぎつ白河は君が代までの名にこそありけれ。（素性）

●血を吐いて思ふあたりの時鳥。（言水）

●秋の蚊の血に膨れたるも哀也。（麥太）

●あけ方や鳴音血をはく蚊のあゆみ。（大江丸）

●血にないて人をよこすな郭公。（來山）

●血に染みし蚊の遣ひ歩く夜明哉。（五有）

●血を分けしものと思はず蚊の憎さ。（丈草）

●血をこぼす手負の鹿や芒原。（許六）

●血のつきし懐紙寒き枯野哉。（同）

●雪を血に染めて悲しき猟場哉。（里秋）

●から猫子の血を干しつけて牡丹哉。（李由）

●だきれする子は寐つきてものみと蚊のうを吸ひたがる夏の短夜。（穉方）

●落ちにける人は木傳ふ猿なれやきりし小指の血をみせてより。（安成）

●えりの毛を三本ぬいてやまざるにきのぼりしたる蟲血なるべし。（眞顏）

●ほと〳〵ぎす子で子ならねどもと騙れて血をはくばかり諷ふ寒聲。（綿糸）

●ほと〳〵ぎす八千八こゑ鳴きし其の山が血しほをみするもみぢ葉。（三嬉）

●血の池を出で〻おこればくれなゐの描ひ衣裳をみるめかくなは。（外也）

●妹が手にぬもりの血しほぬると見し夢も跡なくきゆるはかなさ。（內匠）

●傾城の小指から飛ぶ血の烏熊野の山で三羽なくかア。（高盛）

●よべ切りしゆびの血よりも色にそむあさの別ぞいたく悲しき。（度水）

●壁丁の血をうごかした宿下り。（川柳）

●四天王血にまじはつて人を喰ひ。（同）

●はんそうは血をはきそうな軍師なり。（同）

●切つても血の出ぬに番頭恐がり。（同）

●腹切つて青い血の出るは毛虫なり。（同）

●血の池へ赤鬼ばかりせめにやり。（同）

●あゝは別とかねては知れど、今朝のきぬ〳〵いつよりつらや。袖は血汐の涙となりて、恨みこがる〻身は盤衣、せめて一夜は

來ても見よ。（俗諺）

●月色の胸に片手網、ひきとゞむれば春のゆき、とけてみだる〻わが思、あまりてに（般文圭）

くい其人を、たれにそはせんれたましや。袖にながる〻血の涙、色になさけの二おもひ。（同）

●末の子は血のあまり。（諺）

●血で血を洗ふ。（同）

●血の涙を流す。（禮記）

●吾有二一腔血一、其色正赤、其性熱。不レ能レ灑二之明主前一、赤光燦向二廊堂一徹。又不レ能レ灑二之國家難一。留二衰大地一碧痕在。鬱積徒成磊塊癡。欲レ吐不レ吐中逾熱。一旦喀出學二李賀一、雖レ此楼地紅玉屑。或曰先生殺レ人手無レ銭。登レ仙擒伏由二鍾舌一。陽レ吏遭二姦雄逆一天罰一、唯陽之齒輒嚼齦。憤懣遂致二肺肝裂一。或曰先生殺レ人手無レ銭。登レ仙擒伏由二鍾舌一。以レ心誅レ心人不レ知。靈魂冥々懸陰血一、吾陽此語兩未レ眞。章手進曰走意別。先生肉中本無レ血。腹中奇字僅可レ識。瞳得杜康二爭戰レ酒。劍蔑如レ劍岳雪々。大福藏府受不レ起。溢爲二赤漿一戒二戰發一。咄哉此意愼忽レ說。（山陽）

●未レ有二火化一食二草木之實、鳥獸之肉一、飲二其血一茹二其毛一。（禮記）

●花心露洗猩々血。水面風披憑々羅。（般文圭）

●有レ淚皆成レ血。無レ聲不レ斷レ腸。（張說）

●裹レ瘡猶出レ陣。飲レ血更登レ陴。（張巡）

●列レ肝以爲レ紙。瀝レ血以書レ辭。（韓愈）

●鼠思泣レ血。無言不レ疾。（詩經）

【ち】智

智慧。智識。叡智。才智。英智。雋英。軼材。俊邁。茂才。さとし。ざえ。

●昔、西天竺に龍樹菩薩と申す上人ましまします。智惠甚深なり。又中天竺に提婆菩薩と申す上人、龍樹の智惠深きよしを聞き給ひて、西天竺に行き向ひて、門外に立ちて案内を申さんとし給ふ所に、御弟子外より來給ひて、如何なる人にてましますぞと問ふ。提婆菩薩答へ給ふやう、大師の智惠深くましますよし承りて、蟾蜍を凌ぎて中天竺より遙々參りたり。このよし申すべきよしの給ふ。御弟子龍樹に申しければ、小箱に水を入れて出さる。提婆試み給ひて、衣の襟より針を一つ取り出して、この水に入

れて隠し来る。これを見て龍樹大に驚きて、早く入れ奉れとて、房中を掃ひ清めて入れ奉る。御弟子怪み思ふやう、水を與へ給ふことは、道閑より遥々と来り給へば疲れ給ふらん、喉潤さんためと心得たれば、この人針を入れて返し給ふに、大師驚き給ひて、敬ひ給ふ事心得ざることかなと思ひて、後に大師にとひ申しければ、答へ給ふやう、水を與へつるは、我智恵は小箱の内の水の如し。しかるに汝萬里を渡ざて来る。智恵を浮べよとて水を與へつるなり。上人そらにその心を知りて、針を水に入れて返す事は、我針ばかりの智恵を以て汝が大海の底を極めんとなり。汝等年来隨逐すれども、この心を知らずして之れに問ふ。上人は始めて来れども、我心を知る。これ智恵のあるとなきとなり云々。即瓶水をうつすごとく法文を習ひ傳へ給ひて、中天竺にかへりたまひけりとなん。（隆圓）

㊀人の身に一の大寶あり。これを名けて智といふ。心の光明なるは萬の善悪是非邪正をわきまへしるのかゝみなり。若人の身に智なければ天地に日月なく、人に耳目なく、暗夜に燈なきが如く、又家に主なく、軍に大將なきが如し。いかに生れつきたる力量あり、忠信あれども、心くらく智なければ、行ふべき道を知らずして、みだりに行へば道にかなはず、ひが事多し。よろづにつけてよきあしきをわきまへざれば、わが身ひとつをだに治むること能はず。況や民をなづけ土地をさめん事は、いとかたき事なるべし。故に人身の大寶は智なり。其大寶をもとむるの道あり。よき師友を求めて其教をうけて、よきすぢの學問し、書をよみ、ひろく見多くきゝ、よく思慮してわが心に道理をもとめ、是を以て心をひらき智を明にすべし。師友に求むるの道はわが身をへり下りて自是とせず、こゝのんで人にとひてひろくきくべし、わが智に自滿して是をなか善といふ。まことの人は智もなく徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰かつたへん。これ徳をかくし、愚を守るにはあらずや。もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。（兼好）

㊁はや小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文、かきくれて降る智者は惑はず、勇者は恐れずの、やたけ心の梓弓、敵にはとり傳へじと、惜むは名のためをしまぬは、一命なれば身を捨てこそ後、記にも住名をとゞむべき。（謡曲、八島）

●提婆が悪も觀音の慈悲、槃特が愚癡も文珠の智恵、悪と云ふも善なり、煩惱と云ふも菩薩なり。（謡曲、卒都婆小町）

●炭焼山籠の衆を頼み、兼ては聖の力にもと、拵へ置いたる遠箸、しらせを見せたら刈り置いた、柴薪に火をかけ、鯨波の聲を上げてただべと、いひ合せたはこゝぞと思ひ、幸祖母が洗濯の、布にしかける相圖ののろし、四方八方合せ箸火、蒸立てられては六波羅勢、皆ちり〴〵に逃げ失せたは、我智恵のやうなれども、日頃話しに聞き置けば、やつぱり智の智恵なるぞや。（謡曲、東代楠）

が、計略と云はれん歟しさ。是程の事にさへ聞おぢする宇都宮、正成を討たんとは思もよらず。（浄瑠璃、楠昔噺）

●いかにしてつみのたきゞをうりはてゝ我智恵の火にやきつくさまし。（讀人不知）

●智恵袋に獏子の根間ひ糞間ひ哉。（雉琴）

●いり粉くふ附木の智恵や蓼の秋。（許六）

●ある智恵のあまりて咲くか芥子の花。（晋仲）

●漏智無智のあま酒造る松が岡。（蕪村）

●若水に智恵の鏡を磨うよや。（風雪）

●農先に智恵ぶら下げて鳥哉。（一茶）

●花ちるや宋代智恵の凡夫衆。（同）

●破つて飲む鳥の智恵なきこほりかな。（也有）

●蝙蝠や最一羽寄らば鳥の智恵。（同）

●愚痴無智の耳に通るや御忌の鐘。（杜音）

●温公の智恵も此ごろ習ひたし瓶のそこぬけで氷つめては。（松成）

●山河のわけへだてなく咲げばとて智者も仁者も花をたのしむ。（仮盛）

●山々もこの頃わらふ智恵つきてあたまてん〳〵春風ぞ吹く。（伊賀住）

●おほう草のむ三人も文球にて烟吹きあふ智恵の輪遊び。（床世）

●智者のすく水をはらみし蓮とて花も君子のとくひらけたり。（伊志丸）

●嶺はかけて耳はきこえず目も見えず老いてはちゑもさるが三匹。（秀葩）

●一枝をほしげに智恵もはなのさきにぶらつかせてやつけるたんざく。（讀人不知）

●うときにも智恵をかしまの要石神にぬけめのなくて尊さ。（立門）

●入智恵の紙子は嫁の里から出。（川柳）

●大男惣身へ智恵がまほりかね。（同）

●迷子札女房のちゑをはなへ出し。（同）

●十種香は惣身のちゑでかなにかき。（同）

●女房の智恵は花見に子を附ける。（同）

●智恵は小出しにせよ。（同）

●大智は智ならず。（同）

●下司の智恵は後から。（同）

●三人寄れば文球の智恵。（同）

●女の猿智恵。（同）

●朝師り行く時程の智恵は出ず。（同）

●智慧の出るまでは煙管を廻はしてる。（同）

●姉の智恵底の羽根へ球つぶて。（同）

●もし母うへの十郎ほと、おんたづれあるならば、秩父殿より内談の、御事あつてと其外は、汝が日頃の智恵出し、よきに御さげんはからへと、そゝろことばもそこ〳〵に、あわてながらも世をしのぶ、頭巾は時のかくれ笠、羽織ばかりのかくれ蓑、曾我の里から大磯へ、いろにひかれて迷ひゆく。（俗諺）

●いたはしやな母ゝへは、花のよそほひ引きかへて、しをる〳〵露の床のうち、智恵の鏡もかきくもる、法師にまみえたまひつゝ、母をまねけばあと見かへりて、さらばといはぬばかりにて、なくより外のことぞなき。（同）

●富は一生の財智は萬代の財。（俚諺）

●智恵は小出しにせよ。（同）

●大智は智ならず。（同）

●下司の智恵は後から。（同）

●三人寄れば文球の智恵。（同）

●女の猿智恵。（同）

●世之所謂智者、知二天下之利害一而審乎計之得失一、如斯而已矣。此其爲レ智、猶有レ所レ窮。唯見二天下之利一而爲レ之、唯其害而不レ爲、則是有レ時而窮焉、亦不レ能レ盡二天下之利一。古之所謂大智者、知二天下利害得失之計一而權レ之以レ人。（蘇轍）

●天下皆怯而獨勇、則勇者勝。皆閑而獨智、則智者勝。勇而過ㇾ勇。則勇者不ㇾ足ㇾ恃也。智而過ㇾ智、則智者不ㇾ足ㇾ用也。（同）

●知及ㇾ之、仁不ㇾ能守ㇾ之、雖ㇾ得ㇾ之必失ㇾ之。知及ㇾ之、仁能守ㇾ之、不ㇾ莊以涖ㇾ之、則民不ㇾ敬。知及ㇾ之、仁能守ㇾ之、莊以涖ㇾ之、動ㇾ之不ㇾ以ㇾ禮、未ㇾ善也。（論語）

●悠々上古。厥初生ㇾ人。倣然自足。抱ㇾ璞含ㇾ眞。智巧既萌。資待靡ㇾ因。誰其贍ㇾ之。（陶潛）

●大智若ㇾ愚。（老子）

【ちう】忠

忠義。忠誠。忠厚。忠烈。忠膽。忠實。孤忠。朴忠。盡ㇾ忠。致ㇾ忠。竭ㇾ忠。顯ㇾ忠。抗ㇾ忠。まごゝろ。

●抑　朝保元に謀叛用ゐられずといへども、ひとり生き殘りて沖江島守となり、惜しからぬ身のかくてありしはいかにもして新院をねすみ出し進らせ、再御旗をみやこにすゝめて、彼君の御代となし、父が孤忠を全うすべう思ひしに、新院崩御ましゝ、今は宿願を果すによしなし。然はあれ蔑光私に寄り來らば許すべからず。手緊にせんに、何の備にか及ぶべき。もし官軍の向ふとならば、潔く腹かき切つて屍をこの島に曝し、忠を黄泉に竭すべし。忠重嗚呼のしれものなりといへども、さゝら江が年來の誠忠はわれよくしれり。今父とともに國府に走らんとならば、速に身の暇をとらすべし。更に恨なしと宣へば、さゝら江涙さしぐみて、こは思はざる事を聞え給ふ。いにしへにも君が一度の情には妾が百年の命を惜まずとこそきけ。とてもかくても疑を、解くべきよすがもなき身なれば、只面のあたり刃に伏して、君が情に答へ奉らめといひかけて、件ちかなる刃をとつて、既に咽を刺さんとすれば、三人の稚子たちその手にすがり、よゝとないてとゞめたまふに、笹江もたへかねて一聲高く泣きしづめば、鬼俊又やがて其刀をうばひとつて、鞘に納め、こは物にや狂ひたまふ。殿にも御身の誠忠はよくしれりと聞えたまへば、しひて離別せんとにはあらず。さるを自殺に及ばゝ、却て殿を恨むるに似たり。思ひまどひて過したまふなゝ諫むれば、さては死ぬるに死なれずとてふしまろびてぞ泣きにける。（馬琴）

●抑元弘以來忝くも此君に源まれ進らせて、忠を致し功に誇るもの幾千萬ぞや。然れども此亂父出で來て後、仁を知らぬ者は、朝恩をすてゝ敵に屬し、勇なきものは荷も死を免れんとて刑戮にあひ、智なきものは、時の變を辨ぜずして道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで正成ほどのものは未なかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ聖主再國を失ひて、薄暮横に戚を振ふべき其前表のしるしなれ。（太平記）

●其時義繩、老尼に語りたまふやう、八島にて繼信、今はかうよと見えし時、思ふ事あらば、委しくいひおけと、くれ〴〵辱れとひしに、繼信其時に、忠の下より申すやう、弓矢とる身の、御身がはりにたつ事、二世の願ひや三世の、御恩を少し報謝する、命のかろき身は、露塵何かをしからん。さりながら故郷に、八旬に及ぶ母と、十に餘る童部、是等が事の不便さぞ、少し心にかゝる歎の、月に翳ひて光も閑くなる

知く、其まゝくれ〳〵と、終に空しくなりにけり。かやうに聊等をうたせつゝ、自手をくだき、忠勤まことに盡らずば、終に治まる世にいでゝ、繼信忠信が、子孫を召れ出して、命の恩を報せんと、思ひし事も空しく、我さへかゝる姿にて、其名をだに名乘りえね、うき身のはてぞ悲しき。（謡曲、摧待）

●昨くも我帝に賴まれ奉り、命を敵の矢先にかけ、身を戰場に抛つこと、譬を取りて名を殘さん爲にもあらず、子孫の榮華を希ふにもあらず、朝敵を亡し國家安全の、報盡かやすめ奉らんと、義を重んずる計りなり。今度の合戰味方必定打まけ、王法忽ち傾き御代を奪はれ給はんこと、鏡に照すが如くなれば我一つの誤をもつて、さま〴〵諫め申せ共、坊門の宰相よこしまの理をすゝめ、君川ぬさせ給はねば力なくうつ立つたり、父が一期の名殘に軍花々敷戰ひ、一戰に腹を切るべきぞ。おことは是より故郷に歸り、父が最期と聞くならば、獨身を全ふして、廿にもあまる時金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出で、近隣を切かし、討手向はゞ一命を、資由が矢先にかけ、義を紹信が黒烟にくらべせめ戰ひ、君を御代に立て參らせ、父が憤を散ぜんこと、いかなる佛事孝養も、是にはなどか勝るべき。今世にて汝が顔見るとも是迄ぞ。必詞を忘るゝなと、勇氣たゆまぬ弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはら〳〵とぞ流しける。（淨瑠璃、女楠）

●三千世界に子なもつた、親の心は皆一つ、子のかわいさに變な物、食ふなといふて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいといふ樣な、どうよく非道な母親が、又と一人あるものか。武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや、死ぬるなと、いつの世からの習はしぞ。今度の合戰味方必定打まけ、王法忽ち傾き御代を奪はれ給はんこと、鏡に照すが如くなれば我一つの誤をもつて、さま〴〵諫め申せ共、坊門の宰相よこしまの理をすゝめ、君川ぬさせ給はねば力なくうつ立つたり、父が一期の名殘に軍花々敷戰ひ、一戰に腹を切るべきぞ。おことは是より故郷に歸り、父が最期と聞くならば、獨身を全ふして、廿にもあまる時金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出で、近隣を切かし、討手向はゞ一命を、資由が矢先にかけ、義を紹信が黒烟にくらべせめ戰ひ、君を御代に立て參らせ、父が憤を散ぜんこと、いかなる佛事孝養も、是にはなどか勝るべき。今世にて汝が顔見るとも是迄ぞ。必詞を忘るゝなと、勇氣たゆまぬ弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはら〳〵とぞ流しける。（淨瑠璃、女楠）

●昨くも我帝に賴まれ奉り、命を敵の矢先にかけ、身を戰場に抛つこと、譬を取りて名を殘さん爲にもあらず、子孫の榮華を希ふにもあらず、朝敵を亡し國家安全の、報盡かやすめ奉らんと、義を重んずる計りなり。今度の合戰味方必定打まけ、王法忽ち傾き御代を奪はれ給はんこと、鏡に照すが如くなれば我一つの誤をもつて、さま〴〵諫め申せ共、坊門の宰相よこしまの理をすゝめ、君川ぬさせ給はねば力なくうつ立つたり、父が一期の名殘に軍花々敷戰ひ、一戰に腹を切るべきぞ。おことは是より故郷に歸り、父が最期と聞くならば、獨身を全ふして、廿にもあまる時金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出で、近隣を切かし、討手向はゞ一命を、資由が矢先にかけ、

●忠臣の晉の輿譲が網おろす川のすみ〳〵呑込んだ武士。（如意）

●忠孝で有馬のとうじとめ申し。（川柳）

●忠臣は根づよく申す御諫言。（同）

●四十七由來手下に侍ふ忠。（同）

●幾度か將棊の駒は返り忠。（同）

●吉良の忠臣しほん坊が溜めた金。（同）

●忠言耳に逆ふ。（俚諺）

●忠臣二君に事へず。（同）

●忠が不忠になる。（同）

●獻ㇾ策帝聞ㇾ不ㇾ得ㇾ達。決ㇾ志軍務堂生諍。且餘兒嬰繦。徹ㇾ志。全家血肉殲ㇾ王事。非ㇾ有ㇾ南柯ㇾ吞ㇾ蒼根。偏安北闕向ㇾ何處。塔山遙遙海水碧。吾來下ㇾ馬長庚驛。想見訣ㇾ兒呼ㇾ弟來賊ㇾ此。刀折矢盡臣事畢。北向再拜天日陰。七生人間滅ㇾ此賊。碧血痕化五百歳。浩々春蕪長ㇾ大夢。君不ㇾ見君臣相圖骨肉相呑。九葉十三世何所ㇾ存。何如忠臣孝子萃ㇾ一門。萬世之下一片石。留ㇾ無數英雄之淚痕。（山陽）

●先帝不ㇾ以ㇾ臣鄙、猥自枉屈、三顧ㇾ臣於草蘆之中、諮ㇾ臣以ㇾ當世之事。由ㇾ是感激、遂許ㇾ先帝ㇾ以ㇾ驅馳。後値ㇾ傾覆、受ㇾ任於

❶身のあだなる幸なさは、思ひがけなき譴責に、この春てこの世を辿り給ひし、忌の中には山鳥の、峰上へだて、妹と夫が、風房をともにせぬものなど、みこもりお、るは空矢の風なるべしと、殺しまの牡鹿にうら、決めかれしはまがつみの、この身にまも、神を誓に賠じかふ、清き心を君こそし、ほもなき事を、わけもたゞで去り歌を、理なくとらして親品に、預けて後安がほに、鬼くらすが本意かいな。（馬琴）

❷宿思今に止むべき人なければ、四打出で、先上宗子の御前に参り、今生の栄耀は、今日をかぎりの命なれば、両ら所にあらずふしの、討死仕り候ひし、戦場の同じ苔の下に埋れて、九品安養の同蓮に生る、身と涙なき給へと、泣く〳〵両念なく、こゝらして、神仏に誓ひてものいふあり。父にてお、しまする人の御せられしは、よのつねに、

❸勿論北条といひし老人の、常のことばに、

❹清き誓ひの、深き誓ひの数々に、千手の御手のとり〳〵、さまざまの誓ひあまねくて、国土満足をもらさじの、大悲の影をありがたき。

（謡曲、田村）

❺汝等かゝる大事を聞くからは、片時も早く都に上り、時平が上を奏聞せよ。我は見ていはりある人は、其言葉を信にせんと、神仏に誓ひていふ事あり。此人に常の行に、いつはりある人にはあらねど、実性かろ〳〵しき人の、ことばのつゝしみなくて、神仏に誓ひて物いふ事の、くせになりなんは、いましめ給ひき。（白石）

❻さて家にかへりて、このぞう永くたゞしくてはあらせじ。おはれといふ人もあらば、それをも恨みなど誓ひて、うせ給ひにければ、代々の御悪鏡とこそはなり給ひたれ。（為楽）

❼誓ひにも誠に採取不捨の、誓ひに誰が残るべき。一人なほ仏の御名を称れ見ん。おの〳〵、隣る法の場、知るも知らぬも心ひく、誓の網にもるべきや。（謡曲、実盛）

❽今もその、名に流れたる清水の、深き誓ひよくの誓ひまねくて、国土満足をもらさじの、大悲の影をありがたき。

（謡曲、田村）

❾汝等かゝる大事を聞くからは、片時も早く都に上り、時平が上を奏聞せよ。我は見

此罪、不可免也。因茲二十行一年災。先帝知臣誅賊、故遜位耳。今臣以大逆也。突今以来、風雲変成、恐抵神不救以後。先帝之明。故玉月渡瀬、深入不毛。今陣方已定、兵甲已足。当奨王事、而反北定中原。庶成前烈。諸葛亮、興漢討賊、不効則治臣之罪、以告先帝。而後陛下之責分也。（孔明）

●大丈夫能知一未来、中興可策、南伐当捷、動王義挙、金剛堅誓、速破醜衆、殄尽賊徒、還国復営、報効忠君、報酬無窮、剛誓無限。生命一片精気。（実朝）

●勤王精神太発起。当世恩、君臣義、一度想到此処、天涯地角、尺寸寸々。（大変）

●遠洋何況大明。毎、而遠征、渡亜細。唯欣一片風雲存。英烈偉中歴者、名。

（秋村）

●思則集二心。（千矢子）

〔ちかひ〕誓

誓願。誓約。誓詞。盟誓。信誓。弘誓。起請。

ちぎり。ちかひのふね。くせの光。ちぎりたがへ。

誓ひてしことをそとなく忘れなば人の上さへ数へざるかな。（寛方）

●天地の中に出でたち誓ひてし我や今更つまふたりねん。（詠人不知）

●住吉のあらびと神に誓ひても忘るゝ君が心とぞきく。（拾遺）

●誓をば千尋の海にたゝふなり袋もたのまれは数に入りなん。（続後撰院）

●ちとせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふかみ垣の松。（高良）

●いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言のは末もたのまん。（古今）

●ちはやぶる神引かけて誓ひてしことゆめ〳〵しくあらがふなゆめ。（続幹）

●四方をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかく我を思はゞ。（定文）

誓願を受け給はず、熊野の名有りて誠なし。

●我経を読る土佐坊が、七枚起請の先例なれど、お栄に於て不吉なり。夫までもなく御心を安め申さんそれ〳〵と、閨の下に親経、奥の様を申ければ、朱の鳥居のあり〳〵と、八幡宮の額をかけ、鏡をならべ玉垣の、燿く有光様は慥しくぞ見えにけり。

（浄瑠璃、鎌倉三代記）

●誓ひてしことをそとなく忘れなば人の上さへ数へざるかな。（寛方）

●天地の中に出でたち誓ひてし我や今更つまふたりねん。（詠人不知）

●住吉のあらびと神に誓ひても忘るゝ君が心とぞきく。（拾遺）

●誓をば千尋の海にたゝふなり袋もたのまれは数に入りなん。（続後撰院）

●ちとせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふかみ垣の松。（高良）

●いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言のは末もたのまん。（古今）

●ちはやぶる神引かけて誓ひてしことゆめ〳〵しくあらがふなゆめ。（続幹）

●四方をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかく我を思はゞ。（定文）

●誓ひてしことをそとなく忘れなば人の上さへ数へざるかな。（寛方）

●天地の中に出でたち誓ひてし我や今更つまふたりねん。（詠人不知）

●住吉のあらびと神に誓ひても忘るゝ君が心とぞきく。（拾遺）

●誓をば千尋の海にたゝふなり袋もたのまれは数に入りなん。（続後撰院）

●ちとせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふかみ垣の松。（高良）

●いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言のは末もたのまん。（古今）

●ちはやぶる神引かけて誓ひてしことゆめ〳〵しくあらがふなゆめ。（続幹）

●四方をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかく我を思はゞ。（定文）

●誓ひてしことをそとなく忘れなば人の上さへ数へざるかな。（寛方）

●天地の中に出でたち誓ひてし我や今更つまふたりねん。（詠人不知）

●住吉のあらびと神に誓ひても忘るゝ君が心とぞきく。（拾遺）

●誓をば千尋の海にたゝふなり袋もたのまれは数に入りなん。（続後撰院）

●ちとせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふかみ垣の松。（高良）

●いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言のは末もたのまん。（古今）

●ちはやぶる神引かけて誓ひてしことゆめ〳〵しくあらがふなゆめ。（続幹）

●四方をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかく我を思はゞ。（定文）

●誓ひてしことをそとなく忘れなば人の上さへ数へざるかな。（寛方）

●天地の中に出でたち誓ひてし我や今更つまふたりねん。（詠人不知）

●住吉のあらびと神に誓ひても忘るゝ君が心とぞきく。（拾遺）

●誓をば千尋の海にたゝふなり袋もたのまれは数に入りなん。（続後撰院）

●ちとせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふかみ垣の松。（高良）

●いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言のは末もたのまん。（古今）

●ちはやぶる神引かけて誓ひてしことゆめ〳〵しくあらがふなゆめ。（続幹）

●四方をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかく我を思はゞ。（定文）

㊀階老と誓ひのつち鼠死なばひとつの穴に入るべく。（天足）
㊁ふた心もたじと誓ふ武士のはげみ學ぶは文武兩道。（棋星）
●誓ひさへ水の泡とぞ成りてうきしやぼんの玉の消ゆるおもひに。（蘇軾）
●引き付けて離れもやらず吸玉の君と誓ひし中に血を見せ。（魚日）
●龍がたの神に誓ひかけまくも長いえにしをかきおくる文。（一蝶）
㊂二世かけて、かはす誓詞のちぎりさへ、しばしはわかれもありそうみ、などやむかしのまゝならぬ。（俗謡）
●恨みられては恨みもしたり。あらおそろしの誓の言葉。この行末をなにとせん。（同）
●身をば何せん誓ひし人の、命のみこそ惜まるれ。（同）（俚諺）
㊃誓言は神もうけず。
㊄約束へんがへ常の如し。（同）
●天と誓文。（同）
㊅商人のそら誓文。（同）
㊆傾城の千枚起請。（同）
●晉侯使二呂相絕一秦曰、昔逮二我獻公及穆公一、相好戮レ力同心、申之以二盟誓一、重之以婚姻。（左傳）
㊇臧洪歃辭。氣絕雲霓一、烈士誰霜。（蒼雖龍）
●豈要二黃河誓一。須勒二燕然名一。（崔湜）
㊈言笑晏々。信誓旦々。（詩經）
●苦辭指二黃壤一、要言刻二青瑯一。（蘇軾）

【ちから】力

力量。力行。力士。力政。力役。力戰。努力。活力。强力。戮力。ちからづく。ちからびと。ちからわざ。手ちから。

●大空より人雲にのりて降り來て、地より五尺許あがりたるほどに立て連れたり。これを見て、內外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、あひ戰はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取りたてんとすれども、手に力もなくなりて痿え風まりたる中に、心さかしきもの、ねんじて射んとすれども、外ざまへいきければ、筈も戰はで、心地たゞしれにしれて守りあへり。（竹取物語）
㊉すき〳〵しき心のすさびにて、人のありさまをあまたみあはせんのこのみならねど、ひとへにおもひさだむべきよるべとすればかりに、おなじくは我ちからいりをしなほし、ひきつくろふべきところなく、心にかなふやうもやとえりそめつる人の、さだまりがたきなるべし。（紫式部）
㊋身運はもとより薄ければ報をはぢ、命をかへり見て、うらみをかさめるに所なし。徒に貧泉の蝦蟇と成りて、身を藻によせて力なき音をのみなき、むなしく窮谷の埋木として、意樹に花たえたり。（光行）
㊌とはしらずして雛衣は、柴の扉に立ちよりて、只潛然とうちなきしを、やう〳〵思ひかへりけん、幾遍となく押拭ふ、涙を袖になをめめへず、眞白に細き手をあげて、敲くも力なよ竹の、籬に立てる女郎花。（馬琴）
㊍もし昔、五戒十善の力により侍りて、惡趣のちまたをはなれ侍りて、又人界へ來り侍るとも、法燈の末に望みて、風にほのめく時ならば、長夜のやみをも、照す事かたかるべし。（西行）
㊎景清追つかけ三保の谷が、着たる遖の鎧

をつかんで、うしろへ引けば三保の谷も、身を退れんと前へ引く、たがひにえいやと引く力に、はちつけの板より引きちぎつて、左右へくわつとぞ退きにける。（謠曲、八島）
㊏老武者の悲しさは、軍には力疲れたり。風にちゞめる枯木の力も折れて、手塚が下になる所を、郎等は落ちあひて、終に首をばかき落されて、篠原の土となつて、影も形もなき跡の、かげも形も南無阿彌陀佛、吊ひてたび給へ。（謠曲、實盛）
●貴を蒙る惡鬼の神通、頭力自在の勢絕えて、力たよ〳〵と足弱車の、遲り合ふべき時節をまつべしや。先つ此度は歸るべしと、いふ聲ばかりは、さだかにきこえて、姿は見えぬ鬼とぞなりにける。（謠曲、鉄輪）
㊐關八州に隱れなき勇士の重忠殿、力づくには劣らぬ樋口、とられし此腕もぎはなすは易けれど、智仁兼備の力には及びもない事、相手になられず、兎も角もはからはれよと、弓手の腕を押しまはせば、やおおるかく〳〵、忠義あつき樋口殿の力に重忠が及ばんや。（謠曲、鉄輪）
㊑岩戸わる手力もがなたよわき少女にしあればすべのしらなく。（手持女王）
●まさらなの山をぬくてふ力にもたへぬやこひのおもになるらん。（嘉暦）
●あしびきの山をぬくてふ手力を身にはおもはず心にもがな。（契沖）
●力をもいれぬ歌さへおしけどこしのをるゝん。（同）
●風あらく向ふ波路も友千鳥ともあはせくる力にぞゆく。（淨瑠璃、盛衰記）
●天づたふ日をおふ迄はなけれども力及ばず。（長流）
●君とわが腑とへそとのあかつきは鳥とかねとに力落ちたり。（皮種）
●あふまでは神をちからとかり枕わが思ふ人の心強きに。（浪栄女）
●かぼちやわる嬉こんがう力を出し。（川柳）
●貧乳に代る砧の力過ぎ。（同）
●力にまかせはふり出すしぶつかき。
㊒竹の子の力を誰にたとふべき。（凡兆）
㊓土深く爪立てにけり力草。（麥水）
㊔力なき脛を抱へて冬籠。（野坡）
●橋守の火を力なり山田守。（一茶）
㊕蝶とめる花の弟の菩我菊は霜にもまけぬ力づよなり。（宍圭）
●さむさにもやはかまくべきわらんべのまろがす雪の力くらべは。（橘洲）
㊖のみでこそ力ともなれよはの雪に持つべきものはこなからの酒。（笛成）
㊗いかでわれ項羽が力もちの衣に月のかくるゝ山をぬかまし。（飯盛）
㊘吹風といざや力をくらぶ野におしたふされねつよきすゝ萩。（眞萩）
●おもひとは只大石の如くにてすてんとすれど力及ばず。（眞德）
●君とわが腑とへそとのあかつきは鳥とかねとに力落ちたり。（皮種）
㊙あふまでは神をちからとかり枕わが思ふ人の心強きに。（浪栄女）
●かぼちやわる嬉こんがう力を出し。（川柳）
●貧乳に代る砧の力過ぎ。（同）
●力にまかせはふり出すしぶつかき。

（同）

●しんぎうはのむと力がつよくなり。

（同）

●十三度嫂はこんがう力を出し。（同）

●後世願ふ餘力に嫂をいびる也。（同）

●田村丸ふつてわいたる力を得。（同）

●およそ坂東八ヶ國がその中に、力自慢をするものは、朝比奈ならではおぼえなし。いらぬ勁しやうより、おいたがよい。そこをとめるがとめきのかをり、客といふ字をうの字にかいて、ういもつらいもこりやく〳〵しるものを。（俗謎）

●猴にうれしき男の力、じつと手に手をなんにもいはず、二人してつる蚊帳のひも。

（同）

●苦のすきまにもるロかげ、たよりなき身のたよりになれば、人の言葉は、のう力ぐさ。（同）

●色男金と力はなし。（俚諺）

●腑の垢を取ると力がなくなる。（同）

●蟻を喰ふと力が出る。（同）

●椽の下の力持ち。（同）

●逡巡小舟十舸直。踊躍長魚一夫力。（蘇軾）

●扶持自得二神明力一。正直原因二造化功一。

（杜甫）

●攘二彼造化力一。持爲二我神通一。

（李白）

●未レ聞積水厚。能負萬鈞力。

（袁昌）

●有レ力如レ虎。執レ轡如レ組。

（詩經）

●行有二餘力一、則以學レ文。

（論語）

●力抜レ山兮氣蓋レ世。

（項羽）

【ぢしん】地震　地動。激震。震動。鳴動。山崩。地裂。

なゐ。

●天暦二年の頃、大地震ふる事侍りき。其さま世の常ならず。山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸をひたせり。土裂けて水湧き出で、巌われて谷に轉び入り、渚漕ぐ船は波に漂ひ、道行く駒は足の立どをまどはせり。況や都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟一つとして全からず。或は崩れ、或は傾れたる間、塵灰立ちのぼりて、盛なる煙の如し。地の震ひ家の破るゝ音、いかづちに異ならず。家の中にをれば忽にうちひしげなんとす。走り出づれば又地われさく。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲に登らんこと難し。恐の中に恐るべかりけるは、只地震なりけりとぞ覚えし。其中にある武士のひとり子の六七許に侍りしが、ついひぢのおほひの下に、小家を作りて、はかなげなるあとなし事をして遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなくひらに打ひさがれて、二つの目など一寸許うち出されたるを、父母かゝへて聲も惜まず、悲みあひて侍りしこそ、哀に悲しく見侍りしか。子の悲には猛き者も恥を忘れけりと覚えて、いとをしく理かなとぞ見侍りし。かくおびたゞしく震ることは、暫にて止みにしかども、其餘波しば〳〵絶えず。世の常に驚く程の地震、二三十度震らぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかばやう〳〵間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大方其名残三月ばかりや侍りけん。（長明）

●同年の六月十八日の巳の剋より、同十月に至るまで、大地おびたゞしく動きて、日々夜々に止む時なし。山は崩れて谷を埋み、海は傾きて陸地になりしかば、神社佛閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千萬といふ数を知らず。却て山川江河、林野村落、此災に逢はずといふ所なし。中にも阿波の

湖の湊といふ浦には、俄に大山の如くなる潮湧り来りて、在家一千七百餘宇、悉く引潮に逐れて海底に沈みしかば、家々にある所の僧俗男女、牛馬雞犬、一も残らず底の藻屑となりにけり。（太平記）

●神田橋のこなたに至りぬれば、地またおびたゞしく震ふ。おほくの箸を折るごとく、また蚊のあつまりなくごとくなる音のきこゆるは、家々のたふれて人のさけぶ聲なるべし。石垣の石走り土崩れ、塵起りて空を蔽ふ。かくては橋も落ちぬと思ひしに、橋と塞との間、三四尺許くづれしかば、跳りこえて門に入りしに、家々の板のはなれて、大路に横はれるが、長き帛の風に飄りしが如し。（白石）

●時に大地震動するは、下界の龍神の参合か。すは八大龍王よ。難陀龍王、跋難陀龍王、婆迦羅龍王、和修吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、百千眷属引きつれ〳〵、平地に波瀾を立てゝ、佛の會座に出来して、御法を聽聞する。（謡曲、春日龍神）

●怪しや御座の疊の下、ぐわらり〳〵ぐわたく〳〵と、百千萬の地雷、天地も崩るゝ如く、御座の疊の下より、朝比奈が、踏んばだかつて立ちたるは、けんろう地震の湧出かと、恐れ慄く計りなり。（淨瑠璃、鎌倉三代記）

●地しんなまづしらぬがほなる竹の根を一ゆりゆする土龍一疋。（黒住）

●一とせをゆりをさめたる地震より萬歳楽の春やむかへん。（爲久）

●地震さへしらぬかしまの小松原六ッ八ッはなほそよぐ春風。（湊）

●地震ほどゆるぎてわらふ此殿の柱かぞふる御萬歳楽。（三陀羅法師）

●世界みなまんざいらくと治りて地震もさらに動きなき御代。（青物亭）

●ふんどしへ大小をさすゆりかへし。（川柳）

●塀門をくづす伏見の大地震。（同）

●地震ゆりくる屋川止る、花の善光寺や丸焼だ。（俗謡）

●地震雷火本親父。（俚諺）

●蔀にかいた地震。（同）

●地下で大鯰が動くと地震がゆる。（同）

●郵便得二京報一。變故昔未レ有。今月初二日。地震申至レ丑。總聞七度矣。連搖地欲剖。竊天沸二啼哭一。十室壊二八九一。提家席二通衢一。屋瓦墜二左右一。吾家無二虞字一。東望十揺首。遙想鴨厓屋。穉子依二弱嬭一。相率避二沙中一。又怕無二居守一。石岸應二盡頽一。唯餘露根柳。灘深沙渚遠。不レ知能逃走。大兒能厲揭。小兒付レ婢負。覆巣得二全卵一。結廬居二其毋一。盧任二一家憂一。向レ汝覺顔厚。爲レ書付二急遞一。待レ報旬餘久。存沒未レ可レ知。茫々曷向レ扣。災穀被二點漆一。豈可レ論二誰某一。側聞北關事。如星入二南斗一。垂拱萬不レ與。讀レ怒一漠受。蟪蛄致訴レ忠。具瞻可レ頼レ手。坂城及二餘霞一。江門定安否。羅慎當二孰膝一。喝々億萬々。吾聞天明災。三都相先後。信岳震且崩。饑民起相蹂。天数有二周復一。下土誰任レ咎。仰看雲北奔。海雨龍吟吼。耿々杞人心。長歌強排レ悶。（山陽）

【ちどり】千鳥

河ちどり。夕千鳥。友千鳥。濱千鳥。むれたつ。つまとふ。友まどふ。なちおなく。ありあけ

の聲。打わびてなく。うらづたひゆく。をちかへりなく。はがひの霜。

❶月いとあかうさしいりて、はかなき旅のおまし所は、おくまでくまなし。ゆかの上に夜ふかき空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、たゞこれ西に行くなりと獨ごち給ひて。

いづ方の雲路に我も迷ひなん月の見るらん事もはづかし、

とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥諸聲になくあかつきは獨寢ざめのとこもたのもし。（紫式部）

❷千鳥は冬ならではねじと思へりしな。十羽許むれゐて、水際をさらずあさるはいとめぐし。人のちかづけば遠くゆつゝ、いつも同じさまなり。繪にかきたるを見しとはことなり。身はほそりてながくなしへどりの形したり。とびたてば羽がちにてつばめに似たり。小波のよする時は歩みながら逃げゆき、ひくときは又したがひておさり、大浪のうちかゝれば、とびたちてすなはちみぎはにゐるさま、波に千鳥といはまほし。（綾女）

❸凄まじき物にいひおきたるしはすの月も、見る人からにや、宵すぎて出づる影さやかに澄み渡りて、雪すこしふりたる空のけしきの、さえわたりたるも、いひしらずに、夜ふかき空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、たゞこれ西に行くなりと獨ごち給ひて。

いづ方の雲路に我も迷ひなん月の見るらん事もはづかし、

とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥諸聲になくあかつきは獨寢ざめのとこもたのもし。（紫式部）

❷千鳥は冬ならではねじと思へりしな。十羽許むれゐて、水際をさらずあさるはいとめぐし。人のちかづけば遠くゆつゝ、いつも同じさまなり。繪にかきたるを見しとはことなり。身はほそりてながくなしへどりの形したり。とびたてば羽がちにてつばめに似たり。小波のよする時は歩みながら逃げゆき、ひくときは又したがひておさり、大浪のうちかゝれば、とびたちてすなはちみぎはにゐるさま、波に千鳥といはまほし。（綾女）

❸凄まじき物にいひおきたるしはすの月も、見る人からにや、宵すぎて出づる影さやかに澄み渡りて、雪すこしふりたる空のけしきの、さえわたりたるも、いひしらずおまし所は、おくまでくまなし。ゆかの上に夜ふかき空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、たゞこれ西に行くなりと獨ごち給ひて。

❶月いとあかうさしいりて、はかなき旅のおまし所は、おくまでくまなし。ゆかの上

いづ方の雲路に我も迷ひなん月の見るらん事もはづかし、

とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥諸聲になくあかつきは獨寢ざめのとこもたのもし。（紫式部）

❷千鳥は冬ならではねじと思へりしな。十羽許むれゐて、水際をさらずあさるはいとめぐし。人のちかづけば遠くゆつゝ、いつも同じさまなり。繪にかきたるを見しとはことなり。身はほそりてながくなしへどりの形したり。とびたてば羽がちにてつばめに似たり。小波のよする時は歩みながら逃げゆき、ひくときは又したがひておさり、大浪のうちかゝれば、とびたちてすなはちみぎはにゐるさま、波に千鳥といはまほし。（綾女）

❸凄まじき物にいひおきたるしはすの月も、見る人からにや、宵すぎて出づる影さやかに澄み渡りて、雪すこしふりたる空のけしきの、さえわたりたるも、いひしらずに、夜ふかき空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、たゞこれ西に行くなりと獨ごち給ひて。

❶月いとあかうさしいりて、はかなき旅のおまし所は、おくまでくまなし。ゆかの上

山、さかゆく事もありこしに、通ふ千鳥のちり〳〵〳〵と、よせくる〳〵、波もよせくるおもかぢ、取掛捕子そろへて、

（淨瑠璃、女楠）

❹いろにはやる潮なみだ川、こんのしがらみせきとめて、こひをする身は濱べの千鳥、夜ごと〳〵に袖しぼるしよんがへ。君に逢ふ夜はこゝろのからす。

（淨瑠璃、道行揃振袖）

❺思ひがねいもがりゆけば冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり。（貫之）

❻近江の海夕浪千鳥ながなけば心もしのに古おもほゆ。（人麿）

❼月きよみ蜑のかるもかきおけばまた來てあさる友千鳥かな。（後嵯）

❽須戸の關有明の空になく千鳥かたぶく月はなれも悲しや。（後成）

●有明の月の出しほやみちぬらん磯づたひして千鳥なくなり。（黒蔭）

❾難波潟朝みつ潮に立千鳥浦づたひする聲ぞきこゆる。（相模）

❿おられふりかしまのさきのあら波になればなれてすむ千鳥哉。（千陸）

●こゆるぎのいそぎてたてどむら千鳥波のおとにぞ聲はきこゆる。（實榮）

❽なくこゑも涙にまぎれてはるゝ〳〵とゆくかたしらぬ浦千鳥哉。（實長）

❾々なみのおともかしまの浦風にしばなくなく千鳥おりもさだめず。（枝直）

❶すむかげのくもるとみればかつはれて月にこぎるむら千鳥哉。（春海）

❷霜まよふ新防人が袖の上にゆふなみかけて千どりなくなり。（諸平）

❸星崎の關も出よとや啼く千鳥。（芦蘆）

❹よき日和に月のけしきや村千鳥。（其角）

❺荒磯や走りなれたる友千鳥。（去來）

❻花鳥や千鳥の花は沖に散り。（野坡）

❼なく千鳥不二を見かへれ汐見坂。（杉風）

❽酒風や巴をくづす村千鳥。（曾眞）

❾打よする波や千鳥の横あるき。（蕪村）

○唐崎や雨も千鳥も翠時雨。（蓮谷）

❶風はやく二つにわれてむら千鳥。（曉臺）

❷名にしおふ長ぬの浦は千鳥までしづりきらすかちり〳〵となく。（見龜）

❸淡路島かよふ千鳥を省にていくよ巢酒をすまの關守。（一圃）

❹眞砂地に道ある島の足がたはおのが名におふ千字文かや。（實栢）

❺あちこちにとぶや千鳥のちらし形袖の浦わはさて見もの哉。（走帆）

❻空と海ひつたりつきの山川のばら〳〵松にたつ千鳥哉。（赤眞）

❼縫ならで千鳥もすまの裾もやうばつと立居にさぶき汐風。（嘉名主）

❽高砂の浦わの風の手幕に涙間の千鳥ちりみだれ鳴く。（下長）

❾勘定もみなすみよしの裏千鳥磯うつ浪のさし引になく。（眞友）

❿あの中のどれが旦那か知らねども友よびつれて千鳥立つなり。（微龜坊）

❶蹴られた禿千鳥は飛んで行く。（川柳）

❷鴨の川瀬にすむ朝千鳥、さまな思へばいよさよ千鳥、霜のふる夜も雪ふる夜半も、しまちどりの御羽織で、裾に村千鳥を金砂で縫はし、だてな浦千鳥、戀となさけな千鳥がけにかけてめぐり、醉ひやあかさんとん友千鳥、かよふ心は千里が一里、いくよちぎりてかはらずばのう百千鳥。（俗謠）

❸汐風越して夜もすがら、月にみがける川涙も、くだけて物をおもひねの、ゆめをさそひてなく千鳥。（同　）

●いつの何時そなたを見初め、われが身はたゞ磯邊の千鳥、鳴かぬまもなや君ゆゑに。（同）

●涙に千鳥。（俚諺）

〔ちや〕茶

新芽。素濤。龍芽。蟹眼。湯煎。泉聲。僧窓。清茗。大茗。茗汁。七椀。

このめ。つみいづる。木の芽にる。けぶるこのめ。香に匂ふ。

●醉なる硬かきはらひて庭に草木石など、よしありてなし、松の濤音たてゝ、おもふ友誰でくれば茶點じてすゝめ、我ものみなどせんは、いと心ゆくわざにて文人歌よみなどのもてあそばんとつき〴〵しうこそおぼゆれ。さるを一文字もしらで何のみやびたる心もなきなのこの、たゞこれを大事とかまへて立居ふるまひ、露ばかりもあとに遺へじと心にかけて、儀式官のおほやけに仕ふるおもゝちせるに似たるは、いとかたはら痛さわざなり。又調度なども、昔の人は事そぎて、うるはしからぬ方を好めるは、故なきにあらねど、今は黄金をつみて珠玉をあたひを爭ふばかりなるを、人毎に挑みあへるは、うたてくぞおぼゆる。古への名高き人の筆のあと、上手のかける繪などは、其假のいみじう高からんも、とがなかるべし。きたなげなるすゑうつは物などの古びたるを、世になき寶なりと思へるは何事ぞや。されど家居の作りざま、調度の形などにはこのわざ好める人のしるしたるに、なかしきふしなきにしもあらず。そは古へのみやびざまにはあらねど、世にうづもれて事足はわび人などのもてあそばんには、却りてつき〴〵しきもありぬべし。又あまりに心を入れて作りなしたるには品おくれて厭はしきも多かり。（春海）

●宇治の里にても小屋多く造りて蔆簾を入れ置きたるは、八月十六夜の初霜より茶園に霜覆ひする爲なり。土をそゝり、やしなひを入れ、草をひき、虫を拂ひ、つゆさはりなく小枝ひとつもならさじと空吹く風に手をあて、あらき雨にはかからかさかくるばかりにおもひたるを、彌生の頃木の芽わづかに出づれば、茶つみの女ども、手ごとに籠をもちて摘みたるをとり集め、甑に入れ、焙爐をかけ、茶師の家に數十人の女、鍛冥黒く、薄げさうし、赤まへだれして、ひとやういでたち、打ならび烏の羽もちて、莚なかしく、曲おもしろく歌うたうて、上中下の茶の葉を撰びわくれば、茶き〴〵の人は色と形と氣味とを心み、すぐり究めて、うへつ方は御物の壺につめて參る。袋には何がしの茶と銘と名とをかきつけて、それ〴〵頼み來れる御方のあまたの壺に、ほど〳〵にまかせてつめ納むる。（狂歌咄）

●店のやまとの上戸の中に、一斗百篇の名に聞ゆる、李白先生が唐歌に、開〳〵門風動〳〵竹。疑是故人來とは、さておもしろき飲友達の、松としきけば竹におとづれけん。されど此庵の主は、關省の花のいとまなき身も、虚山の雨の淋しみをしたひて、その館のこなたに萱ぶきなしつらひ、四疊半に爐をかまへ、浮世の外の窓の前に、塵をへだての竹は植ゑ給へど、李白が秘藏の鵞鳥盃は、わたす玉川が數寄の焙爐茶を入れて、をり〳〵俳諧の友達をまねき、なら茶三石のたはぶれより、まさな事には遊び給ふらん。われも肩ぎぬのかたからねば茶人の三茶杓半をもまなびす。まして歌人の枕詞に

はあらぬ、うたかたの泡をへた〳〵とたてさせ、白花のひかりに香をそふれば、二椀三椀はさらにして、七椀にかの清風を生ず。清風いづこより來りぬらん。春は名に高きさりかやつの空にしられぬ雪ちりて、しら根の風もこゝにかよふらし。秋は紅葉山の鹿のねに、あと吹きおくる荻の風も、かの窓前の竹に吹きつたへて、竹にも千代のためしあればや、蓬が島のよろづ世までも、このたのしみはつきざらましを。（蓮二房）

●宇治は茶所袂所、見所多き其中に、春夏かけてざは〳〵と、所謂ふ茶摘歌、今日は殊更、通圓の茶摘とて、近所の雇女共赤前垂に赤手拭、摘茶の小籠ぶら〳〵と、先へ茶吉が茶摘の幟、てうさやようさと振りかたげ、茶園の小口に立て並て、サア〳〵女子衆、今日の仕事はこの茶園、茶摘の來行は兄息子の性悪殿、此樣に遲いのは何處ぞの茶園でこつそりと、恥しい事してではないか。（淨瑠璃、宵庚申薬指弦）

●先に立つて飛石の、詞もしどろ足取も、しどろに見ゆる酒機嫌、お戻りさうなと女房の、お石が輕う汲んで出る、茶屋の茶よりし氣の蟲奮、お突かうふと情氣せぬ、閻の鹽茶醉醒し。（淨瑠璃、忠臣藏）

●山吹の花をにろとはなけれどもこのめも同じ色にいづらん。（言道）

●夏くればみまくほし野の少女どもいかに群れてか木の芽摘めると。（同）

●こぞながらをしみ殘しの木の芽さへ壺の中にてふりぬるがうさ。（同）

●なべて世にかをりみちたる木の芽かな椿の尾山に植え擬ぎしより。（諸平）

●あかでしも春の木の芽をつみて煎て心はあきの水とこそすめ。（秋成）

●つみ〳〵て人あらはるゝ茶園哉。（閑更）

●心ならで廻るもをかし茶引草。（鬼貫）

●靈膳に新茶そふるや一つまみ。（浪花）

●茶屋の茶も匂ふ時なり郭公。（野坡）

●茶に醉ふて若竹敷の掃除哉。（士朗）

●やにせなくかわきぬるみの懸したふ茶うりもえんが深い中の間。（長持）

●しのぶみは人目をいかにせんじ茶のつまんでいはん折燾もなし。（千賀江）

●待合のひさしく門に立つる茶や手前かつ手にこゝ人ぞうき。（此主）

●ねそびれる茶はおろかなり宇治の里だれにきせんと衣うつらん。（龜丸）

●世にそむく深山すまひも手煎の茶にはよくあふ谷の下水。（敲龜坊）

●腰かけへもてこし下女が茶といもに酒までさます風の涼しさ。（深根）

●なら茶とはあし久保思ひ給ふなよ君をうかしてはなしたきまい。（五風）

●ほとゝぎすまつこゝろむねとつみ出す新茶も人をれかさゞりけり。（誠雄）

●久しいの何のかのとて茶計出し。（川柳）

●茶に醉うたふりで玄德のあいさつ。

●いくよもち筏理一ぺんの茶をのませ。（同）
●當年の茶を煮るうへを郭公。（同）
●水汲のねんごろぶりは茶をしかけ。（同）
●ひやめしなまじなふやうに茶をかける。（同）
●乳もらひの茶の有所も覚えてね。（同）
●下女をさし置いて嫁に茶を出させ。（同）
●つみやれ御摘みやれ宇治の里の茶摘、甘歳あまりは苔の花よ。甘の人の木とかいて、茶といふ文字に讀むわいな。伊勢踊おろしてちやと摘みやれ。（俗謡）
●股の小唄に茶はえんどころ、初庭の床のうみふかく、なみもこさじとちかひし誓詞、行末ちぎる松山の、まつにかゝりし蔦のもん。（同）
●茶腹も一ッ時。（俚諺）
●鬼も十七番茶も酢。（同）
●毎當三琴龍酒閑二汲三新泉一煎二活動爐一紅、聽松濤殿々一、不レ覺雨腋習々風生。（蘇東坡、試二徐州一詩）
●磁涂哦、味入神解、神魂俱爽。豈知二人間尚有一烟火一哉。地宜二竹下一、宜二薄苔一、宜二精虚一、宜二石砰上一。時宜二雨前一、宜二朗月一、宜二微吟成後一。倘則非二眠雲跋石人一不レ預也。（原采井）
●蟹眼已過魚眼生。颼々欲レ作二松風鳴一。蒙茸出レ磨細珠落。旋轉造レ瓯飛雪輕。銀鼎煮レ湯湯沸第二。未レ識古人煎レ水意。君不レ見昔時李生好客手自煎。貴下從二活火一發新泉。又不レ見今酒公煎二茶學一西蜀一。宦州花敷琢二紅玉一。我今貧レ病常苦レ飢。分無二玉盌捧二蟹眼一。且學公家作二茗飲一。漏盧石銚行相隨。不レ用撑レ腸拄レ腹文字五千卷。但願一歌常及二睡足日高時一。（蘇東坡）
●活火仍須二活水一烹。自臨二釣石一汲二深清一。大瓢貯レ月歸二春甕一。小杓分レ江入二夜瓶一。雪乳已翻二旬處一。松風忽作二渇時聲一。枯腸未易禁二三椀一。臥敷荒城長短更。（同）
●雷過谿山碧雲暖。幽芽半吐槍旗短。銀釵女兒相應喚。筐中摘得誰最多。歸來清爸猶在レ手。高品先將呈二太守一。竹爐新煽未レ得レ嘗。簾盛暖湖南酒。山家不レ解種二禾黍一。（高啓）
●採時宜レ及旗槍際。煮候當レ論老嫩間。最愛風爐火紅處。恍聞蟬語過二秋山一。（同）

【ちり】塵

塵埃。塵世。塵刼。紅塵。俗塵。黙塵。微塵。軟塵。飛散。浮揚。冥々。隨レ風。
あくた。ちりづか。ちりつもる。
ちりの世。ちりの身。

●つれ〴〵とあるほどに、彼岸に入りぬれば、猶あるよりは精進せんとて、上席たゝの席の清きに敷きかへさすれば、塵揩などするを見るにも、かやうの事は、思ひがけざりしものなど思へば、いみじうて、

うちはらふ塵のみつもる小席もなげく歎にはしかじとぞ思ふ。（道網母）

●かならずさしもすぐれ給はじ。人々しきほどならば、年比きこえなまし。あたらおとゝのちりもつかず、この世にすぎ給へる御身のおぼえありさまに、おもたゝしきはらに、むすめかしづきて、げにきずなからんと、思ひやりめでたきが物し給はねば、おほかたの子のすくなくて、心もとなきなはしかじとぞ思ふ。（道網母）
●吹風の下の塵にもあらなくにさも立ちやすき我うき名哉。（伊勢）
●敷たへの枕に塵やつもるらん月の盛はいこそねられね。（類家）
●待ちよわりしひてねるよの床のうへに何しか月の塵をみすらん。（契沖）
●ふる衣とりかへ川にすゝぎてもなほちりの身にならしつるかな。（同）
●みし人は衣手かれていねるみや床こそちりの山となりけれ。（長流）
●いつよりか空になき名の立ちぬらん塵もつかじとおもひけるを。（非海）
●人なげにめのまへをしもゆきかひて塵さへ我をかろめつる哉。（言道）
●やつの風穴のちまたをふくたびに人の心の塵ぞたちまふ。（蔵庵）
●うはのそらの風に先だつ塵よりもかろきは人の心なりけり。（たみ子）
●なんとけふの暑さはと石の塵を吹く。（鬼貫）
●底しみづ心の塵ぞしづみつく。（嵐雪）
●箱松や塵かく程の青嵐。（同）
●たゝよふや塵をくもりに郭公。（野坡）

めりかし。（茶式部）
●さるはあやしう黒みすゝけたる曹司に、さうの琴和琴、しらべながら、心にいれて、雨ふる日、琴柱たふせなどもいひ侍らぬまゝに、塵つもりて、よせたてたりし厨子と柱のはざまにくびさし入れつゝ、琵琶も左右にたて侍り。（同）
●岩もる水のほのかなるを竹の樋もて、すのこのもとにまかせやりつゝ、あやしき水舟にたゝへたるが、老寂となくしたゝる音の、いみじう心すみて、憂世の塵も、清うすゝぎ果てぬる心地す。（徒然）
●三つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる小指にとらへて、おとなどに見せたる、いとうつくし。（清少納言）
●關戸の宿は名のみして、泊りも果てぬ旅の習、憂き身はいつも変の、塵の浮世の芥川、猪名の小篠を分け過ぎて、月も宿かる昆陽の池。（謡曲、忠度）
●月は古殿の燈かゝげ、風は空廊の幣となつて、石上に塵なく浴なる、菩路をあゆみよるべの水、あらすごの山洞やな。（浄瑠璃、野中の隠井）
●おとづれは松に事問ふ浦風の、落葉の衣の袖そへて、木陰の塵を掻かうよ。（謡曲、大會）
●花壇には塵一本も置かず、日の前掃除はすれども、松楓樫木などの邊は、落葉丁寧なれども、松楓樫木などの邊は、落葉もかゝず捨ておきしは、心あつてか但し又、日通りでないと思ふ無精か。陰日向あつては後暗し。以來は晴み奉公せよとありければ、是は我の御意とも存ぜず。熊野の奥山家に、無骨には育ち候へども、御奉公に陰日向は仕らず。總じて塵はこりと申す物も、一ッ二ッ落ちるへば、其座を穢し見苦しく候へ共、又塵塚に山の如く集まる時は、多くても見苦しからず。それゆゑ花壇の塵は取り集て申せ共、楓樫木などは、落葉を御覧なさるゝが一興と存じ、わざ〳〵落を入れ申さず。（浄瑠璃、鬼一法眼）
●是を思へばお主ほど、世に大切なものはない。云ふ迄は無けれども、随分と奉公大事、親方の物、塵一本、粗末にせまい違へまいと、心頭懸けて勤めてたも。（浄瑠璃、野中の隠井）
●打拂ふちりのみつもる小庭もなげく歎に

●水はやし塵は安島の落すまで。（同）
●水つかね塵のはじめや下紅葉。（其角）
●葛水や浮べる塵か爪はじき。（几董）
●松風に塵のかたよる清水哉。（一道）
●皆の塵今朝福藁に明けにけり。（狸風）
●永き日や碓のひきりの塵積り。（林舎）
●うちはらふ枕のちりの日に入りてあきもおかれぬ中のわりなさ。（橘洲）
●げに酒は夏なればはらふはゝきなればいては塵にまさるきたなさ。（橘枝）
●忘らるゝ我身は露ときえもせん枕につもる塵哉川。（文斗）
●人にけふ枕の塵のはらひものやすくかはせる神ぞうれしき。（杣人）
●盃をさすかいなにはあくまよりうき世のちりをまづはらひけり。（彼の小つち）
●わけて猶淋しき庵のすまひとりもはや浮世の塵はつかまじ。（秋人）
●春風のふき清むるに書棚のまたもや塵を陌頭の枝。（土蔵）
●すゝはきの塵にまじはる神棚もけふよりわけて光ますらん。（市人）
□日沈かれて塵をひねるは古風なり。（川柳）

●お妾の聲うつばりの塵も落ち。（同）
●いかにせん、都の春をしけれど、なれし難波にちる花も、玉の塵とはたがつけて、ひとゝせぶりに又めぐり來て、つぼみのにほひふさのこす、あらしの音をきくにつけ、ねざめさびしきゆめの夢。（俗謡）
●涙ひまなき床の上、はらはぬまゝに塵ひぢの、つもる思は荒磯海の、濱のまさごのかずゝを、いひもはるけず起きわかれ。（同）
●頭へ芥をつけて居ると三百文損する。（俚諺）

●塵積つて山となる。
●大海は塵を撰まず。
●水晶は塵を受けず。
●若夫陰風發、陣雲屯、陽鼓鼙、紅旗翻、千乘動、萬騎奔、中原以之黯色、白日爲之曙昏。其興也勃、其怠也漸、或聚或散、乍舒乍斂、細不可拾、輕不可掩、衆籠隱而無覺、聚物不遺、逢輕風而復飛、積々塵値細雨而暫息、遂輕風而復飛、積々塵々、雰々霏々、將長軒而並出、與暮靄而同歸、任勁靡而無累、似識變而知機。若夫弥三殊烈生羅網、植三素鏡而鑒洗下離梁而歌發、散三項塞而類粉、布三玉階而似雪。蒙風發于銅臺、聚龍媒于金埒、有動必隨、無空不遍出入青琐游揚紫殿、流細影於廻裾、亂浮香於衆扇、隱洞房而難視、因隙光而可見、既洋溢若浮煙、又散漫如流霰。（謝恵）
●洛陽三月開芳菲、爭奈行遊滿素衣。客舍朝來遭雨洗、手聰影裡和烟微。人稀楊上長相委。歇罷梁頭落更飛。城市山林隨處是。斯生遊々復何歸。（東涯）
●曉紅輕折露香新。獨立空山冷笑春。春意自知無主惜。恋風吹送馬蹄塵。（崔魯）
●山國春寒雪未晴。滿橋冰柱白晶々。遙思京洛羅路。十丈軟塵紅濕城。（支峰）
●日々河邊見水流。傷春未已復悲秋。山中荷宅無人住。來往風塵共白頭。（戴叔倫）
●蓋人生天地之間也。若流電之過戸隙。（李康）
輕塵之棲蓬草。（李康）
●無將大車。維塵冥々。（詩經）
●和其光。同其塵。（老子）

つノ部

〔つか〕塚　（墓の部參照）

古墳。荒墳。斷碑。一丘。石槨。白楊。荒苔。纍々。蕭條。荊榛。くろ塚。ふる塚。こけむす。あととふ。風さわぐ。昔をのこす。なごりの露。手向の花。こけの下。

●諸國修行の心ばし侍りて高野を出で侍りに、さすがに過しがたくて、六田のあたりをよそながらも見なましと思ひて、其ほとりをさすらひ侍りしに、新しき塚の前に、十あまりなる童の伏し沈みてなげきぬけるを、哀なるさまの見過しがたくて、いかにと問ひ侍りければ、父は三とせばかり先に世を遁れて、いづちともなく出で給ひ、音信も候はぬを、世中の明暮なげき給ひしあまりに、御心の亂れて、過ぎつる夕ぐれの程にまぎれいでさせ給ひて、河淀のほとりに身を沈め給ひしを、人々のなきがらを尋ねて、この塚にこめさせ給ひて候へども、親しかりつるも疎き便もなく候へば、一方ならぬ悲しさに、かくて候ふなり。御經をよみて給ひてんといひし面影の見し心地しければ、あまり悲しく覺えていかにめぐり來にけんと、悔しきまでおもひ候ひながら、心強く經をもよみ、念佛手向けて、草の陰にはいかゞ思ふらんとおしはかるにも淚にむせび、殘しおきける童のさまを見るにもたへがたく、目もたげられ候はざりし。（松翁）

●江東平田邑、光明遍照寺の地に、先師ばせを翁の笠塚あり。十四世の俤菜蕪門に入りて學をつむ事二十餘年、恩は琵琶湖より深く、なしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ、夕には句を練つて推敲を定めん事を願る。むかし芳野山にのぼりては、花の明ぼのを見せかけ、竹植うる日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に、時雨霽のいかめしき音を侘びられたる佛もなつかしとて、死後に此笠をこひうけ、終に土中にこめて門人各一句、さゝげて、かの世の報恩を殘したる、長崎に尾花塚、深川に發句塚、越中に翁塚、木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば四行の塚として、國々に殘したるも、此類ならん。あなかしこ、死後の門人、師にま見えぬ事をなげく事なかれ。はやくこの塚に來り、季札が劍をかけて、一句をたてまつらば、生前の門葉にひとしかるべしと、弟子李由宇買年謹んでこれを書す。（李由）

●かういひやれかしとのたまふを、やがて來れたるを、かぎりなうめづらしきにも、をりふし覺しとむるさへ、いとゞなみだもとゞまらず。立かへりたが名はたゝじなど、かごとがましくて、

いける世のしには心にまかせねばさかでややまん君が一言。

塚の上にもかけ給ふべき御心の程と思ひたまへましかば、ひたみちにもいそがれ待らましをなどあるに、うたてもいらへをしてけるかな。かきかへでやりつらんよと、くろしげに覺して、物ものたまはずなりぬ。（紫式部）

●さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人は哀と見るべきを、はては風にむせびし松も、千年をまたで薪にくだ

かれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかたゝになくなりぬるぞ悲しき。（雅好）

●名ばかりは、在原寺の跡尋りて、松は老いたる塚の草、是こそそれよなき跡の、村すゝきの穂に出づるは、いつの名殘なるらん。草茫々として、露深々と古塚の、まことなるかな古への、跡なつかしきけしきかな。（謡曲、井筒）

●みだれあひたる淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露分け衣來て見れば、昔を殘す古塚に、朽木の柳枝さびて、影ふむ道はすゑもなく、風のみ渡るけしきかな。（謡曲、遊行柳）

●か計り深き御情に、敵對ふ矢先はあらねども、詞を番ふ弓取の、仰は蒙て鐘が崎、敢無く討死し玉ひし、御身の果を白張の親、我は元より浪人の、主も無ければわが子無し、二人の嬢も夏の露、果敢なく消えし三人の、菩提の道を求め塚、其古へを今爰に、南無阿彌陀佛、なむあみだ、念佛の聲と鹽波の聲、鬼の燒香野邊の旗、よし定めなき世の中や、時雨れぬ袖こそ無かりけれ。（淨瑠璃、新田系圖）

●陸奥のあだちの原のくろ塚に鬼こもれりときくはまことか。（狹衣）

●舟岡のすそ野のつかの數そへて昔の人に君をなしつる。（西行）

●たれとだにしられずのこる古塚のしるしの松もあはれいつまで。（蕭牆）

●もみぢ葉の血汐みだるゝ塚の上にけふもなくなく烏哉。（諸平）

●古塚のくさの葉さやぐ神かぜにあだのゝ露は殘らざりけり。（同）

●つゆしもの秋にしなれば虫すらもとめにこひて塚のへになく。（長流）

●少女塚しるしとつげの櫛なればいむとやさゝぬなだの汐燒。（同）

●もゝとせの苔の古墳たづね來てむかへば袖に露ぞみだるゝ。（蘆庵）

●わればにもなからん後のふる塚を思へばけふにまして悲しき。（同）

●この塚は柳なくてもあはれなり。（鬼貫）

●黒塚のまことこもれり雪女。（其角）

●一年の塚に髭なし春の水。（淡々）

●黒土の庵申塚や臘月。（許六）

●塚に添うて年寄る聲やきり〳〵す。（野坡）

●此塚の苔に折らん枯尾花。（五明）

●耳塚に月ぞかゝれる郭公。（露吹）

●かんこ鳥板屋の背戸の一里塚。（越人）

●蟬なくや古郷に近き一里塚。（愚水）

●町中の塚の茂りや苔うるし。（道彦）

●どつしりとすわるお寺のかうの物げに澤庵のおもしろい塚。（山丸）

●から風にむかしかたらん耳塚はつもるはなしもならね初雪。（萬丸）

●行人をいま半道とおくる身もわかれてはまた一里塚。（千萬里）

●星霜のつもりし雪のしほらしく名も面白き澤庵の塚。（笑）

●いにしへの軍の場所と夕立に縅合羽は今求馬塚。（網丸）

●物見塚むかしたづねてふみゝれば右と左につくば山人。（婆阿）

●名も高き甃てふ橋は耳塚のある都へも聞え渡らん。（鎌也）

●かる人のおれど不足はなつ草の猶つかつかとのびる錢塚。（貞三）

●さまよひし昔おもへば卯花を猛しも雪とみる常盤塚。（龜井）

●吹風も秋へ近みの一里塚しげる榎の木影すゞしき。（梁枝）

●一里塚近所沽券の高い所。（川柳）

●一里塚四瓜の皮なすつる所。（同）

●一里塚日本一は橋なかけ。（同）

●夢めしを喰つたかはりに求女塚。（同）

●比賣塚晦日に月の出た所。（同）

●桃青が塚は尻からきが當り。（同）

●欽慕塚 平生所ゝ爲制喪千百篇、取ゝ匣盛之、爲ゝ塚於名山之顚、大ゝ書其上ゝ曰、曲江張先不遇文塚。因醉ゝ酒而祝ゝ之曰、千百年後、有ゝ如ゝ張先其人者、將ゝ歌獻感慨而還ゝ弔之、庶幾稍慰ゝ吾文ゝ耶。（屋柴舟）

●英雄事去疑雖ゝ假。疑塚衆々半已崩。試問當時銅雀妓。定將ゝ若箇ゝ當ゝ西陵ゝ。（黄谷菅）

●疑冢衆々淳水頭。如ゝ山七十二高邱。正平只有墳三尺。千古安眠鷗鷺洲。（盍憤行）

●茫茫野田平極ゝ目。歷々古墳如ゝ覆ゝ屋。碑版無ゝ文刻蝕深。石獸沉淪松栢秀。（司馬溫公）

●碑文半缺碑常摧。新連塚久孤兎羽。（蕗逢）

すゞしき。（梁枝）

●一里塚近所沽券の高い所。（川柳）

●一里塚四瓜の皮なすつる所。（同）

●一里塚日本一は橋なかけ。（同）

●夢めしを喰つたかはりに求女塚。（同）

●比賣塚晦日に月の出た所。（同）

●桃青が塚は尻からきが當り。（同）

●欽慕塚 平生所ゝ爲制喪千百篇、取ゝ匣盛之、爲ゝ塚於名山之顚、大ゝ書其上ゝ曰、曲江張先不遇文塚。因醉ゝ酒而祝ゝ之曰、千百年後、有ゝ如ゝ張先其人者、將ゝ歌獻感慨而還ゝ弔之、庶幾稍慰ゝ吾文ゝ耶。（屋柴舟）

●英雄事去疑雖ゝ假。疑塚衆々半已崩。試問當時銅雀妓。定將ゝ若箇ゝ當ゝ西陵ゝ。（黄谷菅）

●疑冢衆々淳水頭。如ゝ山七十二高邱。正平只有墳三尺。千古安眠鷗鷺洲。（盍憤行）

●茫茫野田平極ゝ目。歷々古墳如ゝ覆ゝ屋。碑版無ゝ文刻蝕深。石獸沉淪松栢秀。（司馬溫公）

●碑文半缺碑常摧。新連塚久孤兎羽。（蕗逢）

〔つき〕月

月輪。素月。玉兎。玄兎。素娥。丹桂。玉檻。氷輪。金精。玉鈎。皎潔。嫦娟。亭々。皎々。似ゝ鈎。如ゝ壁。

かつらをも。月のふね。月のまゆ。月のわ。月のかゞみ。月の宮人。みねこす月。ますみの月。軒端の月。葉分の月。ちりもくもらぬ。いさよひのぼる。山のはしらぬ。はれみくもりみ。

ふるに遑あらず。まづ弓の師匠の何がしが女房は、老せぬ藥をぬすみて駈け込み、身剛といへるむくつけ男は、薪割をもて桂の枝をこなし、兎は米をつき、蟾蜍は油を絞り、その名もつきの宮人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のをどりがあるのと、月のかつらの根も葉もなく、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家の店先に二合半輪の秋をめで、歌人は居ながらめい〳〵にてる月次の定會の夜食にこそはありつきけれ。（蜀山人）

●いつとても、物哀ならぬ折はなきを、かう月の比と成ては、まだ出やらぬ空の程も、いと艷なるにもよほされて、端近くながめ出したるに、遥く出づるとか、待ちわびけん言の葉も、折ふし思ひ出でられて、山のあなたもと、おぼつかなく打守られつゝ、いとゞ心盡しの夕暮の程を、哀過さず鳴き出したる蟲どもの聲々も、心づからにや、月待顔に思ひなされてなん。（弘徽）

●望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待ち出でたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、ふかき山の松のこずゑに見えたる木のまの谷のふかゞくさまより、十九たちまち廿日餘、月も程なく出でさりける。そもゝ〳〵此月如何なるものぞと、破れたる壁の透間かぞへて、月の光に書たし。されば生きとし生けるもの、君は山間、夕にいたるまで、いづれか月を愛でざりける。

影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、しらかしなどのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ、身にしみて心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。（俳好）

●月親る哥の、いつとても物哀ならぬ折はなき中に、此哥の新なる月の色には、げに猶我が世の外まで、よろづ思ひながされ。（紫式部）

●ゆねの宿にやどる。今夜ばかりは、またもあらじ。夜深き月に、浜づたひせんとて、立ち出づるなり。月は海こしの山のは近く落ちて、波の上は、鏡のごとく平かに明かなれば、三保が崎、伊豆の山々、殊りなく、見渡さる。（貞徳）

●月は山、風そ時雨に鳴の海、波も粟津の森見えて、海こしの、幽に向ふ影なれど、月は眞澄の鏡山、山田矢走の渡舟の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はゞおのづから、船もこがれて出づらん。舟人もこがれ出づらん。（謡曲、三井寺）

●東海の、波路遥に行く船の、跡に入日の影残ろ、雲の旅手の天つ空、月また出づる北方より、山見たそめて程もなく、日本の地にもつきにけり。（謡曲、白楽天）

❹千五百世のかげになれませ月よみのもちこせる水いとらせわがせ。（久老）

❺あめの海に雲の涙たち月の舟星の林にこぎかへる見ゆ。（人麿）

❻ながむるに物思ふことのなぐさむは月はうき世の外よりやゆく。（袋草）

❼楠とりかけし三室のます鏡てる山のはと月もくもらす。（家隆）

❽うしとてもいかゞこの世をいとふべきうたゝあるよの月のかげかな。（俊恵）

❾大方は月をもめでじ是ぞこのつもれば人の老となるもの。（業平）

❿かりそめの浮世のやみをかきわけてうらやましくも出づる月かな。（匡房）

⓫行く水の末はさやかにあらはれて川上くらき月のかげかな。（景樹）

⓬播磨路や夕霧はれて久方の月おしてれりいなみ野の原。（眞淵）

⓭まことはたれか思ほんひとり見て後に今宵の月をかたらば。（西行）

⓮川船やよい楽よい酒よい月夜。（芭蕉）

⓯明なばの伽こゝら窓の月。（鬼貫）

⓰住の江や夜芝居過ぎて浦の月。（其角）

●雲井筒、井筒の水は濁られど、今は涙に袂にかきくもる、あしたの浦の空穂船。（浄瑠璃、筒井筒）

●親と妻とをもちし身は、何か歎は有明の、月さへ同じ月なれど、喃二人見馴れし閨の中、名残しば〳〵大村い、浦の浜風一村雨はさら〳〵と、はれても晴れぬ我涙。（浄瑠璃、国性爺合戦）

●廣き世界は廃けれど、京や浜華の住居さへ、せき留められし水車、月の影さへくる〳〵と、彼方此方に汲みわけられて、行けば丹波路もどれば大和、行くも戻るも二人連。（浄瑠璃、出世瀧徳）

●月毎に見る月なれど、此月の今宵の月を名月と、唐も倭も持囃し、分けて廓の大紋日、身振壁色浄瑠璃小歌、茶番狂言挙詰、座敷々々の興ひに、門は往来の人群集賞にぎ大磯の月見なり。（浄瑠璃、伊島波真龍）

●青海原さしもみちくる潮さゐは月の御舟出し東嶺に入西嶺。月自行其所可行、人豈得招而致之哉。人之興人相招也、必湓其酒者、桑其漉掃、折簡馳価、盍其趣意、猶且有不来者、而況於月乎。然世之愛月而欲招致之者多矣。有層樓傑閣、彫欄畫棟、以招月者、月不肯至也。有珠箔繍戸、金尊綺筵、以招月者、月不肯至也。何哉。絲竹爭奏、酒肉雑陳、語笑紛庞、而簪珥縦横、銀燭之烟、薫蒸酒勃、假使三月来乎。亦必踵階而止、至戸而退、踏趾逡巡、不能流光筵席、揚輝幔以答主人之意。是不招以其道易尤於月之不来乎。吾謂王摩詰詩云。獨坐幽篁裡、彈琴又長嘯。深林人不識。明月来相照。夫月豈獨厚於摩詰乎。招以其道焉耳。（賴山陽）

●一燈光濕夜濛々。點滴疎稀酒竹欞。忽見微波閃池面。月輪露出雨聲中。（支峰）

●豪門別墅占林邱。翠樹朱棚映水流。宴罷半宵人散盡。月高四十八城樓。（誠軒）

●誰人龍外久征戎。何處庭前新別離。（白居易）

●秋水波来船去速。夜雲收盡月行遅。（鄙遅）

●簾捲西風小院門。玉階涼動近黄昏。

●とこふしは雪の小貝か磯の月。（嵐雪）

●吹く風の相手や空に月ひとつ。（凡兆）

●京筑紫去年の月とふ僧仲間。（丈草）

●山寺に米搗くほどの月夜哉。（越人）

●月清し水より立つて五位の壁。（野坡）

●琵琶を抱く月満面の美人哉。（大江丸）

●柳堅すかして見れば半月の影さし櫛といふべかりけり。（一圃）

●五月雨の其さがりめもあがりめも猫の目ほどに出づる月哉。（里住）

●見れては雲の浪路を走り行く月の兎のおしたにぞなる。（一見）

●木のもとに立つて見ぬて見すかして見あひやして見ろこもちつき哉。（貞徳）

●公家も武家も今夜の月は町人もあれ出て見さいこれ出て見さい。（卜養）

●雲の帯に月と星との大小はさしこなしたるもろこしが原。（喜雲）

●所からかはらけなりに出る月の影をうつしてきた雄哦の川。（獨友）

●浮雲をつきのけて出る清光は月のかつらの男だてかも。（走帆）

●鳥は倦むに人は暮よりとび出づる名月ちやもの雲心あれ。（我童）

●色あげにちら〳〵殘るおぼろ月。（川柳）

●雪隠へ先をこされて月をほめ。（同）

●石山をすべつた月が膳所へてり。（同）

●月の出をそらいろの手で拝むなり。（同）

●大扉から勅使をうける月見をし。（同）

●比叡連理よの、てんに照る月は十五夜がさ、あの君さまは、いつもさかりよの。（俗謡）

●刈らばとくかれ淀野の眞菰。かれば月影したにすむ、そこにすむ。かれば月影したにすむ。（同）

●月かげにうつる姿のエーにくらしい朧かげ、髪かきなで、物思ひ、かうもやつるゝものかいな。（同）

●こひし〳〵がつい癪となる、胸にさしこむ窓の月。（同）

●月まつ月はさえもせで、君まつ月はさゆろよの。（同）

●月に村雲花には嵐。（俚諺）

●月と泥亀との遊。（同）

●月夜も十五日闇も十五日。（同）

●月夜には盆をぬかれる。（同）

●享名二招月。月可レ招也與哉。今夫離々然出二東嶺一、入二西嶺一。月自行二其所一可レ行、人豈得二招而致一之哉。人之興二人相招一也、必湓二其酒者一、槃二其漉掃一、折二簡馳一価、盍二其趣意一、猶且有二不一レ来者一、而況於月乎。然世之愛レ月而欲レ招二致之一者多矣。有二層樓傑閣一、彫欄畫棟一、以招レ月者一、月不レ肯レ至也。有二珠箔繍戸一、金尊綺筵一、以招レ月者一、月不レ肯レ至也。何哉。絲竹爭奏、酒肉雑陳、語笑紛庞、而簪珥縦横、銀燭之烟、薫蒸酒勃、假使三月来一乎。亦必踵レ階而止、至レ戸而退、踏レ趾逡巡、不レ能レ流二光筵席一、揚二輝幔一以答二主人之意一。是不二招以二其道一易レ尤於月之不レ来乎。吾謂二王摩詰詩一云。獨坐二幽篁裡一、彈レ琴又長嘯。深林人不レ識。明月来相照。夫月豈獨厚於摩詰一乎。招以二其道一焉耳。（賴山陽）

蛾眉一曲横二天半。疑是蜻蜓指爪痕。（芭蕉翁）

●獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不レ知。明月來相照。（王維）

●月花二上方一酒品靜。心持二半偈一萬緣空。（耶士元）

●可レ憐菜月横斜照。遠稿分明印二紙窗一。（許夫人）

●清風初號二地籟一。明月自寫二天容一。（東坡）

●作月明作レ竹。好風都之清。（唐子西）

●吹二玉笛一弄二明月一。（陳泗）

●猛虎一聲山月高。（俞秀老）

●月下烟飛自煮レ茶。（章縫窗）

●一輪明月脉前。（張瑞圖）

●一輪明月古今情。（星巖）

〔つくづくし〕土筆

筆頭菜。接續草。

つくし。

●花盛は更なり。さらでも柳など青やかにうち烟り、うら〳〵とてりたる日は、殊につくづくしなどいかならんと、野山のさまのみこひしう思ひやられて、庵の中にはこもりゐがたきを、人さへゆくりなくとひ來つ、近きわたりまで、いざ〳〵などそゝのかすめり。（庵主）

●かくてかのすみかに至るに、いみじう悦びて、所につけたるはゝこもちひ、歳、土筆、令法、壺草などをてうじ、あはせにしてあるじす。（陽綱）

●世の中は、しんき〳〵の新うつぼ、地水火風なかり住居、光陰早き八百屋見世、内証共に吉野葛、練れた親仁は結構者、ふきの姑子が口に、嫁業の袖をひたし物、千代とはあだの女松茸、二世の縁さへ瀬にかはる、淺草海苔と身は痩れ、何としやうがも松露にも、心計りをつくづくし、筆にはつきぬ奥ふしや。（浮瑠璃、二ッ腹帯）

●さほ姫の筆かとぞ見るつくづくし雪かきわくる春のけしきは。（爲家）

●雨ふればながるゝ庭のみづよりも頭いでたるつくづくしかな。（言道）

●なにごともえかゝぬ筆を少女どちとりあらそへるつくづくしかな。（同）

●山里はつみとる人もひとりなし畠のつくし春のたちがれ。（同）

●行く人をゐなか童の見るばかりたち並びたるつくづくし哉。（同）

●つくづくし春野の草といふめればかすみもそへて家づとにせん。（春海）

●一枝の花にまじへて山づとのあはれを見するつくづくしかな。（同）

●淺たつ野邊のけしきも見ゆるまで摘みつくしたる初草ぞこれ。（直好）

●野風の是を食ふらん土筆。（其角）

●川舟や手をのべてつむ土筆。（冬文）

●道の記に假の栞や土筆。（几董）

●つくづくし春の野邊の草ぐさに（支考）

●筆たて〳〵何々待つぞ土筆。（千代女）

●土筆ほうけては日の影法師。（召波）

●君いくら我ほや土筆五七本。（李東）

●もの書かぬ人に喰はせよ土筆。（流霽）

●雨は皆土筆になりぬ山畑。（月芳）

●いそがしや並をつめば土筆。（園女）

●水ぐきの岡べにおふるつくづくしつくづくみればおもしろきかな。（雄登魚）

●玉づさを書きつゞるごと乙女らは野べにつくしの筆やとるらん。（竹丈）

●角大師春の野もりにけぶも出てあくまでつまんつくづくしたんぼゝ。（堀狭）

●こまん〳〵とかき分け行けば春の野に夏毛の筆のつくづくしかな。（田乙）

●春の野に遊ぶよめ菜や小娘の跡からはしりつくした ぼゝ。（金吉）

●草臥てはやつく杖なつくづくし春の野もせに遊びほうけて。（卯波津）

●姑によめなは少し野遊の心づくしもよほど見えたり。（多夏猫）

●花もみなつくしの筆のちらし書さかへすくもをしき春の日。（蕉 ）

●長閑しな春の火なはやたんはこをのみちにひらふつくしいたどり。（秀成）

●鉾杉の並へ土筆で書いて見る。（川柳）

●土筆とつたり虫きゝに、來りし野邊もいつのまに、かはればかはる身のうへと、あとを見かへりたちどまり、しばし涙にしよんぼりと、げにもあにはれな立姿。（俗謡）

〔つゝじ〕躑躅

杜鵑花。山石榴。

岩つゝじ。葉つゝじ。岡つゝじ。つゝじ原。岩ねに根さす。花の八千しほ。山下てらす。松の下てる。夕くれなゐ。くれなゐの八しほ。

●磯邊のつゝじは、紅の露より折るかと疑はれ、五月の蓬のしづくは、古里の軒の玉水かと奇しみ給ふ。（源平盛衰記）

●岩躑躅、なりもて見れば妹が着し、紅染めの色香とも、和泉式部は詠めしに、外山の峰の躑躅原、下照る影も日の本の、唐紅の色ぞかし。酒くみて人々、此花にめで給へや。（謡曲、躑躅）

●こなたにも、忘れがたみの言の葉を盤手の森の下躑躅、色に出でやばそれぞとも、見てこそ知らめこの扇。（謡曲 班女）

●天皇の賢き御代を守るなる、右近の馬場の春を得て、花上苑に明にして、軒九陌の塵に交る神心。（謡曲、右近）

●其上貴殿は平家の侍、今又源氏に仕へては、二股武士と嘲り笑はん。但し源平兩家に仕へ、忠義を立つる謂ばし候か。ゝ、其謂こそ赤白に、分けて咲いたる此躑躅花、譬へて云はゝ我々兄弟 種は一つに分れ枝葉、汝は空しく枯れ果てゝも、殘りし一木に殘れる源平、（中略）細朝義經同じ源氏と云ひ乍ら、平家の仇と指す敵は、右大將賴朝一人、我君三位重衡と、源氏の大將義經卿と、俱に心を合さしめ、一身を以て源平二君に仕ふる某、取りも直さず此花の、一木に咲いたる源平躑躅花、花の都も錦倉も、一戰に攻め崩さん事、我掌の中にあり。（浮瑠璃、鐘懸の松）

●岩つゝじ折りもてぞ見るせこがきし紅そめの色に似たれば。（和泉式部）

●種しあればおひにけらしな岩つゝじ花さく春にあはんとや見し。（みつね）

●咲きぬれば散ることかたき岩つゝじ名にはたがはぬ色にぞありける。（能宣）

●何ごとをしのぶの岡の岩つゝじいはでおもひの色に出ぬらん。（賴圓）

●眼のをがをりしはやせば岡つゝじ若枝に花の咲きにける哉。（顯仲）

●紅のうす花櫻散りすぎてつゝじぞはるのちしほなりける。（宣長）

●さきにほふいそ山もとのしらつゝじしらずよ涙にまがふものとは。（春海）

●たび人の松のほかげとみるばかりもゆる山路のいはつゝじ哉。（千隆）

●山陰はくれぬにくれてつゝじ原てれる岡邊は入日をぞつく。（契沖）

●白砂のつゝじ花さく柴人のかへるさおそきこころも來にけり。（蘆庵）

●躑躅活けて其陰に干鱈裂く女。（芭蕉）
●其夕のはしゐはじむる躑躅かな。（其角）
●白つゝじ招くやうなり角櫓。（嵐雪）
●さし覗く窓へつゝじの日足哉。（丈草）
●手一杯ゆするかるたや躑躅山。（去來）
●つゝじ折る岡の姥や田植腰。（野坡）
●大原や躑躅の中に蔵立てゝ。（蕪村）
●香具山へ赤いもの干すつゝじ哉。（也有）
●白雲の根を尋ねけり岩躑躅。（召波）
●夕山をねこぢて歸る躑躅かな。（闌更）
●琴にもつくらぬうちに山つゝじ花はしらべの眞紅なりけり。（米人）
●さら山はみな錦手の紅つゝじあるは南京あるはりうきう。（金傳）
●いろ／＼に咲く深井の錦ぞとながめつゝじにたちとまりける。（安吉）
●花の名も所によりていはつゝじなにはの平戸江戸の琉球。（蜀山人）
●くれなゐのきぬかつぼみの勢はさかんとしたるつゝじ何本。（一元）
●植ゑおきて庵をつゝめる餅つゝじ朝な朝なの茶請ともなれ。（貞作）
●宿かしてくれなゐ里の岩躑躅火ともし頃の旅ぞ物うき。（白人）

●盗人と誰もさぞかし岩躑躅もちとさけよと思ふ此頃。（昇成）
●棹姫のもゆる思ひを岩躑躅胸にたく火か顔にたく火か。（深籔）
●千代はふるともかはらぬ色は、ときはの山の岩つゝじ、いはねば人のこひしきものと、おもひしよりも見にむかひ、よしなしごとを心にまかせ、かきてぞおくる藻鹽草。（俗謠）
●君は白玉千重の躑躅、見れば折りたしちぎりたし。（同）
●十七八は砂山の躑躅、寝入ろとすればゆりおこさるゝ。（同）
●山石榴一名山躑躅。一名杜鵑花。杜鵑啼時花撲々。九江三月杜鵑來。一聲催得一枝開。江城上佐間無事。山下劚得廳前栽。爛熳一欄十八樹。根株有數花無數。千房萬葉一時新。嫩紫殷紅鮮麴塵。涙痕裛損臙脂臉。剪刀裁破紅綃巾。謫仙初墮愁在世。姹女新嫁嬌泥春。日射血將滴地。風翻焰火欲燒人。閑折兩枝持在手。細看不似人間有。花中此物似西施。芙蓉芍藥皆嫫母。奇芳絶艶別者誰。通州遷客元拾遺。拾遺初貶江陵去。去時正値青春暮。商山秦嶺愁殺君。山石榴花紅夾路。題詩報我何所云。若云色似石榴裙。當時叢畔唯思我。今日闌前只憶君。憶君不見坐銷落日。西風起紅紛々。（白居易）

●泣露啼紅作麼生。開時偏値杜鵑聲。杜鵑口血能多少。恐是征人滴涙成。（楊萬里）
●五渡溪頭躑躅紅。嵩陽寺裡講時鐘。春山處々行應好。一日看花到幾峰。（張籍）
●山皆石身戴土。松爲之蔭。而紅杜鵑粧點於其間。殷血如滴。（拙堂）
●杜鵑花開春已闌。歸向陵陽釣魚晩。（李白）
●莫怪行人頻悵望。杜鵑不是故郷花。（司空圖）
●三月山松少步。躑躅紅千層。（韓愈）
●南漪杜鵑天下無。披香殿上紅氍毹。（蘇軾）
●一聲杜宇啼春風。明朝緋掛千山叢。（陳錦山）
●晩藥尚開紅躑躅。秋房始結白芙蓉。（白居易）
●夜遊人欲尋來把。寒食家應折得驚。（順）

【つゞみ】鼓

鼓舞。鼓噪。鼓腹。鼓饒。鼓吹。旗鼓。金鼓。鼙鼓。石鼓。鼓の聲。四ッの鼓。かけしつゞみ。萬世の聲。時つぐる。うつ。ならす。

●この賀陽院殿にてくらべ馬ある日、鼓は隱岐の前司明理の君ぞうち給ひし。一番にはなにがし、二番にはかゝしなどいひしかど、その名こそおぼえね。勝つべき方の鼓をあしくうちさげて、まけになりたりければ、その隨身のやがて馬の上にのりながら、ないばらをたちて、見かへるまゝに、あなわざはひや、かばかりの事をだにしぞこなひ給ふよ。かゝれば明理行成と一双口にいはれ給ひしかども、一の大納言にて、いとやむごとなくて候はせ給ふに、くだりたる隱岐の前司、ふる受領の鼓うちそこなひて、たち給ひたるぞかしと、はうごしたいまつりたるを、大納言きかせ給ひて、明理の濫行に行成が脇名呼ぶべきにあらず。いとからい事なりとて、わらはせ給ひければ、人々いみじうの給はせたりと興じ奉りて、その頃のいひごとにこそし侍りしか。（爲業）

●さる御大家御抱への世話とは、發に借着の御目見え、早逃の有付、始めての御能に、三番目の松風は、御扶持人の醫師、石川松庵が小鼓、大鼓は與左衛門、太夫も囃子も其日の大出來、こゝぞとうつ鼓に、いつのまにやら與左衛門が付髮落ちて坊主天窓ふりまはすを、御棧敷とても氣はつかず。松庵の後見に出でし生駒新八といふうろたへた男、落ちた付髮門たがへ、松庵の頭へむりやりに引付けしかども、もとより心は張弓の、いつのまに髮が出來たとも、時雨と見えしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらんと聲ちあげて、太夫ワキより樂屋へ入れば、引續いて笛小鼓、付髮の糯子髮にさしぬき、長袖の橋かゝり、大鼓は法躰して、緋袈斗目に長上下、棧敷々々の御目にかゝり思はずどつと鬨の聲に、二人とも心付きて頭を抱へ逃げ込みしが。（秋成）

●直冬朝臣、許否凡慮の及ぶ處にあらず。八幡の御寶前にして、御神樂を奏し、託宣の言につきて、軍の吉凶を知るべしとて、樣々の奉幣を奉り、蘋蘩をすゝめて、則神の告をぞまたれける。社人の打つ鼓の聲、ねぎが袖ふる鈴の音、深けゆく月に神さびて、聞く人信心を傾けたり。（太平記）

●然らばかゝる音樂の、舞樂も天鼓が手向の鼓、打ちてその聲出づならば、實にも天鼓がしるしなるべし。はや／＼鼓を仕れ。うれしや扨は勅諚ぞと、夕月かゝやく玉座のあたり、玉の笛の音聲すみて、月宮の昔もかくやとばかり、天人も影向、菩薩もこゝに、天降りますけしきにて、同じく打つなり天の鼓、打ち鳴らす其聲の、呂水の波は滔々と、打つなり／＼汀の聲の、より引く糸竹の、手向の舞樂はありがたや。（謠曲、天鼓）

●鼓の聲も時ふりて、日も西山に傾けば、夜の空も近づく、六つの鼓打たうよ。五つの鼓はいつはりの、ちぎりあだなる妻琴の、引きはなれいづくにか、わが如く忍び音の、やはら／＼打たうよや。四つの鼓は世の中に、戀といふ事も恨といふ事も、なき習ならば、一人物を思はじ。九つの、九つの、夜半にもなりたりや。あら戀しわが夫の、面影に立ちたり。（謠曲、龍太鼓）

●古き鼓の苔むして、打ちならす人もなければ君が代に、かけし鼓も、時守の眠、漏むらは難波の、鐘も浮き、浦は湖の、波の聲々、入江の松風、村鹿の葉音、いづれを聞くも悦の、諸鼓苔むし難波の島も、驚かぬ御代なり、有り難や。（諸曲、難波）

●耳にもかけず音近は、床に直せし鼓取り上げ、我壮年の頃武將足利義晴公、數度の軍功御賞美有り、猶も武名を鳴らせよと、こだまと名けし此鼓を下し給はり、年賀毎に打つが吉例　今六十の賀を祝す、謡ひ終らぬ其中に、用意よくと打ちならす、鼓のしらべ、白刃の乱抜放して立向ふ、互のかけ聲、鼓の矢聲、有りがたや、治まる御代のならひとて、山河草木種かに、五日の風や十日の、雨が下照る日の光り、鼠の光り打合ふ刃音。（浄瑠璃、名歌島鑑）

●鼓押し取りはた〳〵〳〵、女のかよわき胸先に、打ち立てられてハアはつと、誤り入つたる忠信に、鼓打ち付け、サア白狀々々。狐に元來波の音、狐は陰のけもの故、水を起して降る雨に、民百姓は悦の、聲を初めて上げしより、初音の鼓と名づけ玉ふ。其の鼓は私が親、私めは其の鼓の子でござります。（浄瑠璃、義經千本桜）

●波のうつ音を鼓にまがふれば入日の影のうちてゆらるゝ。（西行）

●うた舞のいつゝのふしもつゞみてふものゝねなくばうちもわがれじ。（眞淵）

●打ならす人しなければ君が世はかけしつゞみも苦むしにけり。（紀伊）

●石上ふるきつゞみは苦むしぬされどもひゞくよゝづる世の聲。（景樹）

●音たかき鼓の山の打はへてたのしきみ代となるぞうれしき。（行盛）

●春の夜や鼓しらべる誰が家ぞ。（几董）

●柳には鼓もうたず歌もなし。（其角）

●秋の夜をあはれ田守が鼓哉。（召波）

●涼み舟いとし若衆の小鼓は。（同　）

●日比きく鼓も雪のあした哉。（露沾）

●萬歳や凡そ千年の古鼓。（紫明）

●住の江の波の鼓や松ばやし。（今德）

●夕霞たゝきの鼓しらべけり。（蓼太）

●春雨や鼓はるかに家中町。（闕更）

●朝なぎにしらべの絲を帆かけ舟千鳥にうつや波の小づゝみ。（蓉明）

●音に立てゝなも鼓のうつゝなや三ツ地の文の長地短地。（狼人）

●萬歳がうてる鼓にかけし緒の千鳥あしたて舞へる才藏。（京竹）

●たまはりし嘉例の酒をたらふくにのむ萬歳のした鼓うつ。（眞吹）

●小つゞみのねながらかしらうちもたげ影もみつ地の月や泳めん。（定麿）

●小鼓のかはりやすさよ人ごゝろうちたえてより音づれぞなき。（忠澄）

●呑み喰ふとばしからざる君が代は舌鼓うつはらづゝみうつ。（早丸）

●張りつめし胸の思ひにあこがれてうつゝ鼓の膠もぬけたり。（静丸）

●庭火たく影に霜さえ夜神樂の鼓に冬もうちわすれけり。（木端）

●はらんではたぬきもつゞみそつと打ち。（川柳）

●うたゝれのうたひはしりがつゞみなり。（同　）

●大つゞみのどへとげでもたつたやう。（同　）

●あさぐろい男がならふ大つゞみ。（同　）

●一夜かりねの近江路の、朝潔やまは深からね、人の契の名なれやと馴れにし床の山風に、寢亂髪の柳影、梁かぬ舟のうきて世に、つひのよるべはいさや川、いさ白浪も撃そへて、うつや鼓のうつゝなや。（俗謡）

●われは小鼓殿はしらべよ、革をへだてゝねにござる。（同　）

●狸の腹鼓。（俚諺）

●曉撃隆々催二轉日一、暮撃隆々呼二月出一、淡城黄柳映二新鹿一、稻隆飛燕理二香情一、碓發千年日長白。李武樂王廻不レ得。從君翠髮盧花色。猶共南山守二中國一、幾回天上算二神仙一。（李賀）

●舜日堯雲曹、堯年積土墜。向二棲疑一吹聲。舞谷似二香旭一。仙鳩排二門起一。靈鼉帶二水吸一。巢云行已爽、疏日翼相成。（李嶠）

●城頭暮鼓聲。城下暮江清。欲レ問二流陽客一。時無二陶二正平一。（李商隱）

●金鼓一動。萬方拳臣。（柳宗元）

●鼓其鼓。馮馮用レ兵。土レ國城レ漕。我獨南行。（詩經）

●非二音雄一也。小十鳴二鼓、而攻之可也。（論語）

●春風入二鼓擊一

「つばき」椿

（杜甫）

秀色。繁根。不老。長青。輪囷。

蒼翠。老幹。播根。幾經二霜雪一。

扶二桑間一春秋。

玉つばき。八重さく椿。かた山つばき。白玉つばき。つら〳〵つばき。八千代のかげ。かはらぬ色。岩ねに生ふる。八千代葉がへぬ。青葉わか葉。

●わが君のかくいはけなき御齢に、世を保たせ給ふらんと、位保たせ給はん年の數そひ、末は長井の浦のはる〳〵と、濱の眞砂のかずもつきぬべく、みもすそ川のながれ、いよ〳〵久しく、位の山の年へさせ給はん。誠に白玉椿、八千世に千世を添ふる椿枕まで、四方の海の涙の音靜に見えたり。（讃岐典侍）

●椿はたゞありの人の、本妻なむかへたるが、端手なる風俗なども似ぜず、ありがいりに家を修め、身を修めるをもとゝし侍れども、さすが女色なれば、うす化粧に紅粉をたえさゝぬ身持のよき花なり。（許六）

●我は貴船の河瀬の螢火、頭に戴く鐵輪の足の、焔の赤き鬼となつて、臥したる男の枕によりそひ、如何に殿御よ珍らしや、恨めしや御身と契りし其時は、玉椿の八千代二葉の松の末かけて、かはらじとこそ思ひしに、などしも捨ては果て給ふらん。（謡曲、鐵輪）

●花の名の、白玉椿八千代へて、線にかへる空なれや。春の後瀬の山つゞく、青葉の木陰分け過ぎて、雲路の末の程もなく、都に近き丹波路や、氷室山にも着きにけり。（謡曲、氷室）

●鳥に比翼の翼あり。松は連理の枝交はす。況や人の身の上に、妹背の中は吉野河、淺からざりし年月の、千代に八千代の玉椿、變らぬ色を頼みつゝ、かけし情も徒に、秋ならねども散る紅葉、血汐に染みし御袖を、夢か現か、現とも夢とも眞に分さかれて、（浄瑠璃、傾城無間鐘）

●ずんど切に白玉椿、ハアヽ古歌の心で入れたり〳〵、置霜の白玉椿けふよりや、八千代の巻の始めなるらん。信長公を祝せし

生花めでたし〳〵。與一郎殿の生花は、水盆に落梅花、梅の花をしごき入れ、開いたると莟みたると、水上に浮いたる風情、詩歌によせたるこの生花。（浄瑠璃、三日太平記）

●こせ山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝ思ふなこせの春野を。（人足）

●つら〳〵に見れどもあかぬ玉椿たま〳〵さかばいかにたのまん。（春滿）

●あふことはかた山椿せめて猶葉がへぬ色をたのみわたらん。（千隈）

●なべて世は椰櫻をあしびさのかた山椿あはれとぞ見る。（契沖）

●河上のしら玉椿つら〳〵にみずばまがはんたきついはなみ。（長流）

●あなし山つばき咲きたるやつをこえしかまつ君がいはひづまかも。（諸人不知）

●松がえの峰に相生の玉椿ちよにやちよのかげぞならへる。（歴尚）

●おくつゆの白玉椿けふよりや八千代の秋のはじめなるらん。（雅言）

●梅もあれど年の内よりくる春のひかりを見する玉椿哉。（有功）

●年月のさかりもしらず花ざきて春をつらぬる玉つばき哉。（諸乎）

●濱の笠落したる椿かな。（芭蕉）

●水入れて鉢にうけたる椿かな。（鬼貫）

●一蓮放るやうらの赤椿。（去來）

●古庭に茶筅花さく椿かな。（蕪村）

●椿見ん數の中道頭巾より。（閑吏）

●活下手の椿にあちら向かれけり。（夢太）

●落ちなんを葉に抱へたる椿哉。（召波）

●鎌倉や昔どなたの手代椿。（一茶）

●庭の椿果報やけして咲かぬ哉。（道彦）

●君が代やみがく年なき玉椿。（越人）

●朝日さす巨勢野椿の花も葉もつら〳〵みれどあかぬ色哉。（白圭）

●花瓶に桃や椿をさしまぜて都のにせの雛祭哉。（千種）

●やり梅をこだちの椿受け留めて花の命は生けてこそみれ。（卜養）

●こせ山のつら〳〵椿金岡が重ねし山なし（絲樹園）

●名にも似ぬ白玉椿くだけずて軒の玉の上に落ちけり。（梁花園）

●咲く花の大和にしきに増りしはさらさ椿の花にぞ有りける。（三餘堂）

●落椿水をくゞりて美しや金魚の色を見る（花源樓）

●春雨の親のしつけの玉椿ちるにかたちも崩さゞりけり。（樞屋）

●日は酉にいりても家の蔭におちぬ椿の花のくれなゐ。（千春）

●葉がくれをたづねてみれば蝶鳥の飛び入りにさく椿美し。（幸久）

●落つるたび水にしわみて年を經し池のほとりに咲きし椿は。（小田時）

●立琴の瀧か岩ねのしら玉は床にさしたる椿りけり。（玉の屋）

●見るたびに、おかぬ色なり足引の、片山椿いまぞさく。花に心を越のゆき、その初あらしあかしれん、また青柳の、いとしほらしき玉水の、さきぶりもよき都紅粉、ふみからいとのいつくしま、たがひに蜂のゆきとけて、千年もちづる鹿のまつ、みちさえわたる照明の月、ときはやま、やつなの蜂の玉つばき、いろもかはらで幾代へぬらん。（俗謡）

●春をとなりに笑ひかけ、いと〳〵咲きたい玉つばき。（同）

●上古有二大椿者一、以二八千歲一爲レ春、以二八千歲一爲レ秋。（莊子）

【つばめ】燕

尼喃。上下。花間。梁上。双飛。對々。翩々。棲レ簷。入レ幕。入レ懐。

つばくらめ。つばさならぶる。こぞの軒ば。古巢わすれぬ。とびかふ。

●女房いと恨みて、水にすむ鷺、梁に巢をくふ燕も、翼をかはす契を忘れず。況や相馴れ連らせて、覺えず過ぎぬる十年餘の独の下に、二人の子どもをそだて、千代もと祈りしかひなくも、御身は今秋の霜の下に伏し、幼き者どもは、朝の露に先き立ちて、消えはてなん後の悲を堪へ忍びては、時の間もながらふべき我身かや。とても思ひにたへかねば、生きてあるべき命ならず。同じくは思ふ人と共に、はかなくなりて、埋れん苔の下までも、同穴の契を忘れじと、泪の床にふし沈む。（太平記）

●いとうらゝかなる日、思ふどち打つれゆくおほぢに、つばくらめのこなたかなたとびかひて、ふと独の下をすぎたる、手にもとらへつべくていとをかし。雨のなごりの猶かわかぬ方などにおりゐて、ひぢをふくみつゝ、童の走りくるに驚き立ちて、遠くかけりゆくもをかし。梁にすくひて、いつの程にか、あまたの雛おほしたるが、とびくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそ哀なれ。これがもちたる子安の貝とらんとて、あなひより落ち給ひけん君のさま、思ひやるも又なかし。唐土にて、赤き糸つけたりしが、又の春歸りきて、後の世をさへ契りけんなど、げに心ある鳥ならんかし。（廣足）

●燕もゆかりはわすれぬ鳥なり。終日にひるがへり、終日に囀りて、門にはかならず身なつくさずや。いはゞ江湖の僧の一夜二夜にちぎり捨て、身を雲水にまかせたるが年をへて後は、見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の、人にもおくられ、おのれもおくりたらんに、涙のこぼるゝはいかなる時にかあらん。かの法師ら、宿かし鳥とよみつゞけぬるより、孤竹に出で、夕陽をなきつくせば、誰が家にか今宵もおくらんと、あぢきなき事もおもはるゝなり。（支考）

●身も梁の燕のならびずみ、ねたき事か聞きながら、さゝをもすまでかへざるは、彼を思ふ故なるに、そも樣歴はいかなれば、此月若なばころしけん。（謡曲、竹雪）

●沉水羅紋海燕かへる。柳條うらみをひいて荊釵に玉る。徒に、朽木の柳時み得て、今ぞ御法にあひ竹の、直に導く、彌陀の教。（謡曲、遊行柳）

●愚なり楊貴妃、日頃の嫉妬今こそは、穆に顯はすぞ能つく聞け、三千人の人數に、召し出されし宮の内、何時年越も初夢も、結ばで悲し戀草や、軒の燕に春を知り、雁の歸るな秋と聞く、十四十五の花盛り、折らで散せし顏の數、憎し妬しの怨念が、積り〳〵て此驅動。（浄瑠璃、蓬萊鏡）

●此春もふるす巣ねて山がつのやどをわすれぬつばくらめかな。（頓河）

●行きかふは同じ空なるかよひぢもつばめにかはるの春のかりがね。（通村）

●人はいさ殘る古巢をわすれねばあれしさとにも燕來にけり。（有功）

●かたらはん友にもあらぬ燕ぞら遠く來るほうれしかりけり。（景樹）

●あさ月夜かへる燕の聲すなりすみし軒端もあきかぜやふく。（諸平）

●大殿の高き軒端のつばくらめはるかには今ぞすがくる。（宣旨）

●つばくらめ門田に今は群なす種かうすべき時やさるらん。（非洗）

●としのはにもれたつゝみやつばくらめ都の家のかつはつばに。（千座）

●春雨のふるすをしたふつばくらめしをゝにぬれてけふぞきにける。（萩子）

●浜千鳥ふきに及ぶ燕哉。（北角）

●乙鳥や赤土造のはね上り。（惟然）

●盃に泥を落したら燕、（芭蕉）

●水につれて流るゝやうな燕哉。（才麿）

●逆ぶとも行くとも知らぬ燕哉。（去来）

●大かたの鳥からかけぬ燕哉。（一茶）

●米ろとはやは住米飲ある燕かな。（太祇）

●大井川綿に乗法しゆく燕哉。（蕪村）

●関札の上にやすらふ乙鳥哉。（許六）

●羽抜に乙鳥吹るゝタかな。（召波）

●つばくらじの軒端につらをくはへ来てうら見るたびに出づる手貨。（とめ女）

●わが庵に土を運ぶの明日間はつばくらやみに羽をやうつばり。（宮江）

●近づきの門忘れてや幾度かのぞいては又のきのつばくら。（俊世）

●つばくらは打出の軒につばりの資こつちを日々にもて来る。（常雪）

●苗代の土を運びてつばくらわが手だねをおろす此頃。（我綱）

●つばくらや逃きしたしき中よりも近き他人の家ぞゆかしき。（稲成）

●かやぶきの巷のふしんにたのが屋のはきみをあてるのきの燕。（青虎）

●燕哉いくかほすらんつばくらのつちをおとせる軒のあげづき。（長根）

●燕かきかすゝて燕温るなり。（川柳）

●燕は筆字のやうに飛んで来る。（同）

●妹と背の、ちぎりたがくね燕は、人の軒端に、世帯をまうけ、小兒は生んで、酉のより求と何食をもとめ、きもうれしげにそや、咬の関屋の関の戸に、せきとめられて稲妻はれぬ胸のうち、つゝむにあまる袖の雨、紋は三つの盆に、ねだら食さうよ濡れつばめ。（俗諺）

●遠くとも、落き流の杜若、とんでゆきゝの編笠を、のぞいて来たか燕、顔が見たうちやないかいな。（同）

●花程度燕晴政業。（俳諧寂）

〔つみ〕罪

罪科。罪障。罪業。死罪。流罪。減罪。犯ノ罪。贖ノ罪。

つみとが。つみす。つみなふ。

●すべて然様に、刑のうたがはしきは、輕きにつくべきのよし、法令の定めありとかや。されば疑にかけて所の役人猶罰すべしで、その疑ふらん罪におきては、君の為世の為、させうくるしみあるまじくは、その罪なだめ輕めんこと、偏に徳政なるべし。然さ悪悪なるべし。然国の王の罪なまぎらかして、臣下の苦をかくし給ひけん、世に優たる御情なるべし。又夏の桀王の御時は、罪を行はれば、天下いましめがたしといひて、常になき給へり。時殊業とはこれなり。又殷の紂は、四の罪三を除きて、一を行はれけり。四面の網三面をとゝといくり。その意、史記に見えたり。されば我朝には、嵯峨天皇の御時より、死罪を止められにけり。（十訓抄）

●かくて又心のとくるまなく鉄かるゝに、ままかしらなどする人は、若き御ぞうに、などかくてはといふ事もあれど、人はいとつれなう、我やあしきなどうらもなう、罪なきまゝにもてなしたれば、いかゞはすべきなど、萬に思ふ事のみ多さを、いかでつゞくといひしらするものにもがなと、思ひ乱るゝ時、心づきなきや、胸うち騒ぎてものいはれずのみあり。（源氏物語）

●此君御治天の後、天下遂に穏ならず、剰百災忽に外祖の慶に変りぬれば、兵備に帝徳の天に背きぬる故なりと、罪一人に歸して、主上殊に歎き思召されければ、常は玉夏の天に至るまで、夜のおとゞにも入らせ給はず、元老宿儒の賢臣共を召されて、只経緯治武の忠き跡たのみ御覧ありて、曾て怪力乱神の徒なる事を聞召されず。（太平記）

●いたうこれより逃れて、はたちうちとそ縮よまゝず。心もいとゞたゆさまさり侍らん物を、心深き人まねの様に侍れど、今はたゞかゝるかたの事をだに思ひ給ふる。それ罪深き人は、又かならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるゝことのみ多く侍れば、よろづにつけてでかなしう侍る。（栄花物語）

●されば道心をおこさば、無始よりつみあつめ置る罪のさながら、皆きえて、本有常住の月を胸の中にすまさん事、更に遠きにあらず。本覚の月すむならば、立波吹風、皆妙なる御法にて侍るなるべし。（四行）

●おもしろの有様や、底にも見ゆる巌火に、驚く魚を追ひまはし、かづき上げすくひあげ、ひまなく魚を食ふ時は、罪も報いも後の世も、忘れはて、おもしろや。（謡曲・鵜飼）

●あるときは色に染み、食着の思ひ深からず、又あるときは離れきゝ、愛執の心いと浅き、心に思ひ口にいふ、忘言の業となる者を、誰にや皆人は、六座の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、見る事聞く事に、迷ふ心なるべし。（謡曲・江口）

●こゝはいかに、罪も同じ罪、配所も同じ配所、非業も同じ大数なるに、一人弥の網にもれて、沈みはてなん事はいかに。（謡曲・俊寛）

●先にすゝみし輿舟の、つくり配えし綱

男、親を殺せし不孝者、子は三界の首かせを、かゝつて思ひ白洲の庭、そろり〳〵とあゆみ行く。主を殺せし科人は十悪罪を引きしめて、つながれ出る猿眼、昔く手を以て謀判は、筆の咎や命毛を、とらるゝ迄は白髪髭、年に似合はぬ身の科は密夫の女を殺したる、罪を重ねて功者なり。海賊盗りの族盗者が三寸竹にからげられ、ひしがきゆひのしばり縄、りんとかゝつたにせ秤り、其外似せ金似せ物咎、似せ商人の店わたり、命はどうであつちもの、金銀店へ投金の、金の鎖でつないでも、助かり難き科人を、残らず白洲に引きすうる。 （浄瑠璃、時頼記）

●なにごともむなしき法の心にて罪ある身とはつゆも思はず。 （西行）

●打絶えて世にふる身にはあらねどもあらぬすぢにも罪ぞ悲しき。 （慈円）

●世の中に有りしにもあらずなれる身なしらばや何のつみの報と。 （和泉式部）

●命をもつみをも露にたとへけ　きえばともにや消えんとすらん。 （俊樹）

●すぎきつる世々にや罪を重ねけん報かなしゝ昨日けふ哉。 （實經）

●雪の友またんともせぬこもり江の釣舟のみは罪なかりけり。 （具恒）

●行く水に數かくとのみつくる罪あとこそ残れ結ぶ氷に。 （契沖）

●天つ罪はらふ夕は雲井ふく風もすゞしくなりにけるかな。 （眞淵）

●罪とがも佛の御名も残さじとあかつきかけて花たてまつる。 （春海）

●星の夜の寝られぬ罪や蚊がはひる。 （言水）

●尼が罪背梨ひとつうせにけり。 （大江丸）

●罪深く夜を疑ぬ蝿や爪の皮。 （几董）

●罪なくて配所の月や佐渡生れ。 （其角）

●蚊帳くゞる女は髪に罪深し。 （太祇）

●罪あらじ座頭の涼み耳なくば。 （一茶）

●罪深き小袖の下の紙衣かな。 （晋島）

●肌かくす女の罪のあつさ哉。 （田女）

●逆ふ鵜の呑み得ぬ鮎のはらわたも罪なうるかと思ひなしもの。 （綱丸）

●鯨とる罪にならくへしづむとも此世でうかむものは七郷。 （松風）

●罪なくて配所の月やいかならん都の花を錢なくてみる。 （粟殻僧部）

●をり〳〵は己がつみをも秋風にあてこすらるゝ狩人の家。 （裏風）

●隠れ家によしなき罪はつくらねど四つめごろしの闘棊のたのしみ。 （堅丸）

●我つみはけし炭にして煩悩のおこらぬやうに御名やとなへん。 （常持）

●鵜づかひのつみをしめすか降雨にこゝろもとなき舟の篝火。 （眞秋）

●行つきつはさみ将棊をさす舟のうにはくはせぬ罪ぞ悲しき。 （舞曲）

●罪といふ人の口には戸無瀬川なにたて通せ夜半の鵜遣。 （業技）

●仕盗りも作りしつみのきえてから。 （川柳）

●傾城の嘘ないはぬが罪になり。 （同）

●義時にぬちよくのつみで御座りやす。 （同）

●油揚の罪甚とんびなぞでなし。 （同）

●禿から目にもろ〳〵の罪を見て。 （同）

●すねてなにを紫の、ゆかりの色で仕方で知らせ、見かはす顔の罪なくも、月の都にわびずまひ。 （俗謡）

●つらき命のをしからねども、こひしき人は罪ふかく、思はぬことのかなしさに、捨てたうき、捨てたうき世の山かづら。

（同）

●思ひ思はじ唯身一つの、むくいの罪や數々の、うき名にたちし懺悔のありさま、岩もる水の思ひとなりて、なほあだしのゝ露涙。 （同）

●廓はなれて罪なき月を、いつか都の空に見ん。 （同）

●海賊は山賊の罪をあぐ。 （俚諺）

●汁を吸ふても同罪。 （同）

●ほその緒きるは罪うること。 （同）

●其罪を悪んで其人を悪まず。 （同）

●齊劍慨然曰、吁余死矣。夫余目獣ニ視其雄一、乃我目之罪也。余舌獣ニ罵其雄一、乃我舌之罪也。余足獣ニ食其雄一、乃我足之罪也。余心獣ニ待其雄一、乃我心之罪也。一身皆罪、吁余死矣。 （鶴梁）

●有罪不ニ敢赦一。帝臣不レ蔽。簡在ニ帝心一。朕躬有レ罪、無レ以ニ萬方一。萬方有レ罪、罪在ニ朕躬一。 （論語）

●天道福レ善。禍淫降レ災。于夏以彰ニ厥罪一。 （書經）

●多罪静思如レ刺レ蘊。教書纔聽似レ含レ飴。 （徐鉉）

●科條遮晩三千罪。閉囲應空十二州。 （李頎）

●捨罪暨ニ風俗一。流芳播ニ滄瀛一。 （李白）

●平生有ニ詩罪一。如ニ痼不レ可レ痊。 （黄庭堅）

●下レ視過ニ雄唬一。解ニ罪中ニ擘脱一。 （韓愈）

●天討ニ有罪一。五刑五用哉。 （書經）

【つめ】爪

爪牙。龍爪。鶴爪。利爪。搯レ爪。印レ爪。磨レ爪。麻姑爪。

つまはじき。つまよる。つまだつ。つましらべ。つまじるし。つまぐる。つまおと。

●三人の繪師各かくべき絹をひろげて、三人並びて筆を下さんとするに、聖しばらく、我誠の影あり。それを見てかきうつすべしとありければ、繪師左右なくかゝずして、聖の御影を見れば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右へ引退けてあるより、金色の菩薩のかほをさし出でたり。一人の繪師は十一面觀音と見る、一人の繪師は聖觀音と拜み奉りけり。 （隆國）

●斉信民部卿宰相の時、才幹すゝめるによりて、兄の誠信の右を越えて、中納言になり給ひしに、誠信我身のうきを忘れて、さし當りける恨にたへず、口惜しと思ひ給へりけるにや、七日といふに、恨死に死し給へり。手を握りて失せ給ひけるが、心やつよかりけん、指の爪皆甲へ通りけりとぞ。弟に越さるゝ事、帝王臣下を始めとして、さる例すくなからず、怨にかくしもあるべきかはと、おそろし。 （十訓抄）

●ある人の妻、夫の爪を取りぬるをとゞめて、けふは辰の日なり。爪をとり給ふべからずといふ。傍の人これをきゝて、いかなることにかとゝへば、辰は龍なり。龍は爪なくてかなふべからず。大切の日なりといふ。かたはらの人笑ひて、さあらばそのとは、酉の日ばかりに時をつくりて雄鳥をすゝめらるゝにやといへば、その妻大にいきどほりぬる。 （湛園）

●物ごとに鍛練あり。島原の局女郎に淺野といへるもの、爪を放つに細小刀にして二枚に剥ぎ、痛まぬやうに薄く指を殘しける。此程天神にいたるまで此淺野をたのみ、痛いめをせぬにて、弱き女も爪放つことがはやると大笑して、人の身の上を摘捜しける。 （西鶴）

●いらへわづらひ、はてはものもいはねば、あなかしこ御氣色もあしうあんめり。さらば今は仰せごとながらんにはきこえさせじ、いとかしこしとて、爪はじきうちして、物もいはでしばしありて立つぬ。（道綱母）

●箭のいふやう、御迎に來ん人をば、長き爪して、眼をつかみつぶさん。さが屢々取りて、かなぐり落さん。さが尻をかき出でいこらのおほやけ人に見せて、恥見せんよ（竹取物語）

●鮫は秋の霜の如し、三尺たれて腰すゑ。勝關の一陣には爪を揃にしてあだを雄伏し、逆茂手にしたがへて直に雄梅す。（光行）

●漸々としてくどん沙漠、起き直り給へども、打たれ給ひし杖蹟く、御衣も寸々に破れ亂れし玉葛、藤にて結べる水桶を、又御眉に打かけて、九十九曲なる谷道を、よろ〳〵と御幸なる昔は。五天の御主、金華帳の内にして、月卿雲客にかしづかれ玉ひし身の、御手足に眠きれて、御爪も缺け損じ、あるにもあらぬ御有樣、勿體なくも悼はしい。（淨瑠璃、釋迦如來）

●それもいざ爪に藍しむことのはのしるし（讀人不知）

●琴爪が秋にあるといふ賢屋。（同）

●爪に灯をともしおほせし江戸生れ。（同）

●爪に火は心よい日が二日あり。（同）

●火燵での異見爪をばとんなさい。（同）

●爪音のするは古風な花見なり。（同）

●琴爪で炙のまはりを調べさせ。（同）

●七くさにやりてもなしい爪をとり。（同）

●いかい御世話のわるじやれおいて、爪のかはりに鶏のはし、それをたよりのうさつとめ。（俗諺）

●爪に爪なく爪に爪あり。（俚諺）

●能ある鷹は爪を藏す。（同）

●餓くを知らぬ鷹は爪を裂く。（同）

●爪の垢ほど。（同）

●一文錢で生爪をはがす。（同）

●爪に火を燈す。（同）

●爪で拾つて箕でこぼす。（同）

●善攝生者、陸行不ㇾ遇ニ兕虎一、入ㇾ軍不ㇾ被ニ甲兵一。兕無ㇾ所ㇾ投ニ其角一、虎無ㇾ所ㇾ措ニ其爪一、兵無ㇾ所ㇾ容ニ其刃一。（老子）

●斗牛三尺龍老照、城郭千年鶴爪題。

●須叟遺出蟄玉龍。利爪排空盤且雄。（黃鎭成）

●風生龍爪玉屋香、露濕櫻唇金縷長。（葉顒）

●白面於菟行二雁草一。雄劍爲ㇾ牙戟爲ㇾ爪。（張協）

●爐獸金塗ㇾ爪。銀魚玉鏁ㇾ鰓。（韓偓）

●雲畔風生ㇾ爪。沙頭水浸ㇾ眉。（李白）

●世事已如二鴻印一爪。我生方類二鹿行一蹄。（戴良）

●虎有ㇾ爪分牛有ㇾ角。虎可ㇾ搏兮牛可ㇾ觸。（韓愈）

●泣若見二王方手一背痒莫ㇾ念痲姑爪。（蘇軾）

●拂ㇾ鬢苦逕遠。落ㇾ爪愛芽長。（陸游）

●將陣分ㇾ兩曹一、鷲ㇾ爪相搏擊。（莫宗道）

●叩ㇾ燈一爪剪、快若二懸針一縷。（蘇軾）

●靈間龍爪落、

●拔ㇾ檀指爪香。（李群玉）（陸游）

〔つゆ〕露

晨降。宵零。玉潤。珠光。滴瀝。銀珠。明珠。珠錯落。玉玲瑯。

日かげをうつす。露のしがらみ。風にみだるゝ。むすびもとめぬ。みだれてもろき。夕日こぼるゝ。ところせくおく。曉おきの露。

●九月ばかり、夜一よふりあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露、滴るゝばかりぬれかゝりたるも、いとなかしかし。すいがいのらもん、滿などの上に、かいたる蜘蛛のすの、こぼれ殘りて、所々に糸もたえざまに、雨のかゝりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじう哀になかしけれ。少し日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつる露のおつるに、枝の打動きて、人も手ふれぬに、ふと上ざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人の心地には、つゆをかしからじと思ふこそ、又をかしけれ。（清少納言）

●惟光も、更に え分けさせ給ふまじき蓬のつゆけさになん侍る。露すこしはらはせてなん、いらせ給ふべきときこゆれば、

たづねてもこれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を。（源氏）

●年の内よりも、急ぎし花の時を得て、小夜の春雨ふりてさみ、曙匂ふ有明に、夢かとびとりごちて、猶おりたまへば、御先の露を馬のむちして、拂ひつゝいれ來る。雨そゝぎも、なほ秋のしぐれめきて、打そゝげば御笠さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりてと聞ゆ。御指貫のすそは、いたうそぼちぬめり。（紫式部）

●尾花がうれを秋とはいはんと、あがれりし代の歌によみけるはことわりなりけり。秋の野の哀さも、なかしさも、淚にこそあれ。色々の花どもの中に、まじりて、露けたれず、葉の細やかなるが、なよ〳〵となびきて、露の玉をぬきとめたるなど、いはんかたなきに、又人招く袖と見ゆらんも、心あるさまなりかし。（高尚）

●露のけしきのをかしきを見んとて、曉の鳥よりさきに起き出でゝ、ませの眞萩を、松さして見めぐるに、花のかずゝ〳〵さきそめたるに、所せきまでおき渡したるなん、ゆかしかりける。からうじて、あけゆくまに〳〵、拾はゞ消えぬべきが、有明の月に、ほの〴〵亂るゝさま、紅葉の匂にも、をさ〳〵劣らじとぞ。（聲澄）

●年の内よりも、急ぎし花の時を得て、小夜の春雨ふりてさみ、曙匂ふ有明に、夢か

●白露の寂しき味を忘るゝな。（虎雄）
●朝露に蛍庵や草の上。（惟然）
●露踏むや裏道に近江に草の露。（鬼貫）
●白露や茨の刺に一つ〳〵。（無村）
●露や露をわけ行く園の花。（閑吟）
●浮草の探る遊びありけり露の玉。（風雪）
●朝露や格の臥姿の思ひがけ。（去来）
●庭掃くや露も穢に出る夕暮。（宮波）
●夕露に餅搗入つたる垣根かな。（太祇）
●いざ拾へ露の曲玉真い玉。（一茶）
●水はなに風の吹しく秋の淵にかゝる露の玉ぞうりける。（夏和）
●見ごとにて手にはとられず白露のきえやすきこそ玉にさすなれ。（来得）
●咲花の色につれてやもすぶん水引草に紅白の露。（赤人）
●大空の月のかゝみやかゝ〳〵とおきならべたる露の水かね。（定丸）
●庭草けしてやがて露とみだるゝかげろふの小野。（多羅雄）
●人とはゞ色もいさゝか白玉かなんぞといふときこたがる露。（三岸）
●秋の野の繪のまはしすまひ草所せきまで小むすびの露。（赤貫）

●野辺の秋草と笑はれぬ程に、霜枯に死ね。ヲ死ぬまでやむまい我心。若き時ら、仇風野辺の秋草に置く白露の、脆き命の果敢なさよ。（浮雲峰、能方武士蓬）
●うつろはんとにかゝしき秋草にたれり斗における露哉。（仲秀）
●立田姫かさしの玉のをゝしさや風れにけりと見ゆる白つゆ。（清輔）
●秋は皆思ふ、ことなきのはしも来たわもさす露は置うけり。（和泉式部）
●みかり野を朝ふみゆけば遊雲に玉なす露の、こぼれぬるかな。（仲資）
●花明の月の光のさやけさはやどす草葉のつゆや置きそふ。（宗宗）
●なきさはの松にたこせやおく露は猶その人の涙ならん。（秋瀬）
●玉とみて手にはとられぬ白露や月のかつらのしづくなるらん。（友仲）
●百ぢきの花といふとも秋のつゆおかずばか、るひかりをも見じ。（酒庵）
●花さかぬ、き萩に秋をかすがのや月かげきよきよはの白露。（宣長）
●あはれさの心にふかくしむものはおきのおしたの露にぞありける。（千陵）

現かとばかりに、露けき花の朝じめり、其まゝしぼめき夜は特、花も色深き、匂や露風し、風の上なる白玉ぶ、何ぞと人の問ひし時、露の命のはかなくも、消え行ふ世の中の、見はてぬ夢よりも、現の露をはかなき、筆の林の古くの、心をしていかがたき、一枝の花の露の間の、彼実の心を、誰かは知らん白露の、自然無心の盛りなき、宿りは山野草木の、色を色にて契人も、涙を添す露の玉の、おはれも此原ぶ、袋こそ限りなりけれ。（謡曲、露）
●野辺の秋色は物淋し。秋火の野守出でゝ見よ。今露日にて又此度に、婦ら人なら片糸の、糸もりかけて、白露を、玉にもぬけら作の仰とつらねたる、酉の大事これかとよ。日も夕夜の旅衣、一夜の宿を粗末の、森の下露つゆもりの下、洗れ袖の告げ渡り、夜の空もはの〳〵と、白きを見れば三芳野の、花を嵐に先づ見せて、露をめぐらす庵坂、野辺の寺は露ふりて、月花住の御堂をかゝげ、降不断の香も炎き、寒庭の松の風、鐘鳴の経に音づれて、猶も殊勝ご静りけるる。（浄瑠璃、大経師）

MISSING

行。雁聲續續。二日公花謝次飛。（風）

●南山斷處煙皆々。隔岸人家咳欲聾。江上秋風吹客恨。夕陽一笛到西樓。

（蘇東坡）

〔てがみ〕手紙

尺素。音信。書牘。手簡。雁信。魚書。鄭重。家書。緘書。封書。せうそく。ふみ。たよづき。かりのたより。ことよふ。はるけきそら。水茎のあと。心通はす。かくりごと。おとづれ。

●めづらしいふでさきにはあらねど、文こそ猶やさきものなれ。遠き世界にある人の、いかにくおぼつかなく、いかならんと思ふに、文を見れば、只今きしもかひたるやうにおぼゆる、いかに事なりかし。我思ふ事をかきやりつれば、おしこめてもゆかざらめど、こゝろゆく心地こそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし。さうらう非思ひ〳〵て、其人のもとへとて、こまん〳〵とかきておきつれば、おぼつ

の山。峰になく鹿それにはあらぬ鹿子の谷。むすびながらもいくよのしんき。

（同）

●月のタや紅葉の朝。ときはの松のかげ深く、ながめにおかぬ山のけしき。麓に近き道のべの、都かと見ゆる白菊の、花なかざして誰よりも、千年の秋をおくらん。

（同）

●げに見渡せば冬枯の。木々の梢やこのもかのも。ながめにおかぬ霜の花は、入相ごろも散うかけしき。（同）

●折りそへて、秋の暁や花紅葉。我も思のあれば、ニテ君ばほんに八洲の主。（同）

●手觀、夫已陵酈狀、在洞庭一湖、街遠山、吞長江、浩々湯々、横無際涯、朝暉夕陰、氣象萬千、此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽、南極瀟湘、遷客騷人、多會于此、覽物之悲、得、其、異乎。若夫霪雨霏々、連月不開、陰風怒號、濁浪排空、日星隱曜、山岳潛形、商旅不行、檣傾楫摧、薄暮冥々、虎嘯猿啼。登斯樓也、則有去國懷鄉、憂讒畏譏、滿目蕭然、感極而悲者矣。至若春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧萬頃、沙鷗翔集、錦鱗遊泳、岸芷汀蘭、郁々青々。而或長煙一空、皓月千里、浮光躍金、靜影沉璧、漁歌互答、此樂何極。登斯樓也、則有心曠神怡、寵辱皆忘、把酒臨風、其喜洋々者矣。（范文正公）

●蒸蒸之所、見、南北百里、東西一舍、溝洫洞流、風雲開闔、萩叫井榛出、沒於其前、衣則魚鼈悉嚮於其下、變化候忽、動心駭目、不可久視、今乃得玩之几席之上、舉目而足、西望武昌諸山、岡陵起伏、草木行列、煙消日出、漁夫樵父之舍、皆可指數、此非所以快哉者也。至於洞庭之濱、極域之墟、曹孟德孫仲謀之所以馳騁、周瑜陸遜之所以驅驟、其流風遺跡、亦足以勝、快非俗。（蘇軾）

●縈迴而登、紆餘而遊、則凡數州之土壤、皆在荏席之下、其高下之勢、峭然洞然、若垤若穴。尺寸千里、攫拏虧蔽、莫得逃隱。縈帶紫白、外與天際、四望如一。（柳子厚）

●出紫園而北望。山岳半折、縈樹之間、隱隱而見。家鄉悲沒、雨樹之深。（徐敬）

●江霞際浦人煙遠。綠水遶天雁聲遠。一

かなさをもなぐさむ心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかめる、げにこゝわりにや。（滴少納言）

●たとしへなくながめしほれさせ給へる夕ぐれに、沖の方にいとちひさき木の葉の、浮べると見えて清ぎくるを、あまの釣舟か、と御覧ずるほどに、都よりの御消息なりけり。濃染の御衣、喪の御ふすまなど、都の喪さむに思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふより、いといみじく、御胸もせきあぐる心地すれば、やゝためらひて見給ふに、あさましくもか、くて月日へにける事、今日あすとも知らぬ命のうちに、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらば、死出の山路も越えやろべうも侍らぬなんなど、いと多くみだれかき給へるを、御顔におしあて、、

たちちれの消えやらでまつ露の身を風よりさきにいかでとはまじ。

八百萬神もあはれめたらちれの我まちえんとたえぬたまのを。

初雁のつばさにつけて、こゝがしこより、哀なる御消息のみ常は奉るを、御覧ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。（増鏡）

●又いと惜しきは鵜の前がことなりかし。結髪せし牛若丸に、只一夜も添臥せず。底に沈みし硯の海に 筆の命毛こときれて、墨乾しあへぬ島つ鳥、迹は鬼界にかよへど、今は主なき玉章も、形見にこそと枕方なる、ふみかいとりて封おしきり、月をかりによみくだせば、手迹めでたき走りがきの、涙にふでをたてかねてや。思ふかざりはかゝざりけり。（馬琴）

●なに〳〵四谷の花、今をさかりと見えて候に、など御音信にもあづからざる。一筆啓上せしめ候ふ、古歌にいはく、けふ見ずばくやしからまじ花ざかり、咲きも殘らず散りもはじめず。げに面白き歌の心、たとひ音信なくとても、木陰にてこそ待つべきに。（諧曲、鞍馬山）

●さる程に兄弟、文こまゞゝと書きをさめ、是は祐成が、いまはの時に書く文の、文字消え滅くとも、形見に御覧候へ。皆人の形見には、手跡に勝るものあらじ。（謡曲、夜討曾我）

●五月雨の、空言なりとも一度の返事もなうて、いま百年となるが報うて、あらん戀しや〳〵。（謡曲、卒都婆小町）

●お次も心は諸共に、ついて行きたき後影、見るめ涙の敷居の上、落ちたる狀は、ヤア御隱居樣の御手跡、書き殘す一通、此度獻上の金の雞、鎌倉にて目利者に見せ候處、似せ物に相極り驚き候へ共、獻上の日限延べがたく、似せ物と知りながら指上候。もしこのとがめ參り候はゞ、いか體の過怠も計られず。夫故に辰五郎を勘當致し候ふは、この難義を掛けまい爲、猶行末を賴入候。ヤア扨はそうしたお心か、御慈悲の上のお情な、あだ疎に思すなと、言うても屆かぬ女心、只伏拜み伏沈む。（淨瑠璃、三組盃）

●こふれども人の心の解けぬにはむすばれながらかへる玉づさ。（美濃）

●玉づさの通ふ斗になぐさめて後の世迄のうらみ殘すな。（新葉）

●こひはたゞ二文字なれど玉づさにかきもつくさぬ心地こそすれ。（有房）

●こひしなん後ははかなき玉章をもしや見るとてかきぞおかるゝ。（賴政）

●今しばし空賴めにも慰めて思ひ絶えぬるよひの玉章。（通親）

●かへるかりおなじ都のほとだにも我玉章を君につてなん。（師賢）

●なほざりのつらさなりせば玉づさのつてにも人にうしといはまし。（藤原）

●かすゞ〳〵につれなさみする玉づさはうらみよとてのすさびなるらし。（通蓮）

●玉づさはよしかへすともむすびめのかはらばせめてみつと思はん。（春海）

●つらくとも人めを忍ぶ玉章にくだく心のほどはしらなん。（盧庵）

●たのまずよあだなる露の玉づさにかくる言葉のなさけばかりは。（宣長）

●途に逢うて手紙披けば春の風。（几董）

●春屆く文したゝめつ年籠。（同）

●落着に荷分の文や天つ雁。（其角）

●京からの文にも見えず時鳥。（野坡）

●北山の僧都の文やそと匂ふ。（黄口）

●つゞがなき母の便や更衣。（支考）

●文も來ぬあはれや雁の初便。（南兆）

●迎ひ火のかげに及んで手紙かな。（琴風）

●はつ雪や手紙の文と消え殘る。（也有）

●墨の文としらで立ち給ふほたるかな。（大江丸）

●書きそへて封じ直せばふうじ目のあはぬもつらし文はやれども。（同）

●封じをもきらで返せしふみは只わけを涙につゝみたるまゝ。（一村）

●玉づさに未御意得ず空に鳴く雁のたよりのたつた一筆。（藤住）

●思ひつめかくばかりなる玉章に夜はしらみても尚またれけり。（青葉）

●力ある仁王いのりてやる文をかんですてたる人ぞつれなき。（清澄）

●おくられし手紙の無事をきくの酒珍重陽にぞんじさふらふ。（未曾良）

●そもじさまと書く玉章に見ゆる哉朱雀の空を歸るかり金。（貞柳）

●やうつりのかゆい所へ手紙ともかきあつめつゝ壁を卷雨。（吉成）

●文書きしあとさへ人に知られじと筆にも笠をきせて忍びぬ。（卷守）

●玉章に思ひのたけの長き日も今日ばかりとやつかひきり紙。（手丸）

●國の親ふうたいを見て封をきり。（川柳）

●時々は國から釘をふうじて來。（同）

●殘やどへつゝ一ばいの手紙つけ。（同）

●こわりの手紙でえりをぐツとふき。（同）

●國の親手ごたへのする封をきり。（同）

●手紙には猩猩には鯉をのせ。（同）

●國の狀おこしのやうに分けてやり。（同）

●衣類までまめで居るかと母の文。（同）

●候べく候に書いた文貰公模。（同）

●手紙にも候といふ字はちゝこまり。（同）

●かほみつぼねのその日より、こんな緣はあらざけと、ぬる夜の汗を引きかへて、かく玉章の百ひろや、まるでいはれぬ包む名の、こぞんじよりをあらけなく、地の田舍のと陸口も、根が泥ゆゑの言の葉か。（俗諺）

●いつそかうかと言草に、露の玉章しげ〳〵の、たよりもいとゞなつかしう、おもひまゐらせ候べくとの、しめしはあだに煎じ茶の、かはらぬ色と千代こめし、松にかゝれる葛のもん。（同）

●書翰はなるべく敬ツてかけ。（俚諺）

●情話忽在レ峽。欲レ言人萬里。何以達二余親一。惟有書一紙。低レ頭拈二禿筆一。絮語不レ啓レ吐。喜怒皇二心顏一。訊述雜二彼此一。如レ耶二七絃琴一。其音俱在レ指。聲飛入二蓬蔔一。儼若二

吾隣交。閉レ緘忧面諾。指屑過二文史一。小弟聴或験。老眼開而喜。盲之不レ見レ人。聆者先以視。途使二孤客歎一。邈然盈二衆耳一。伊誰洞二此術一。縮地差足レ擬。用以畫二鵝懸一。萬金貨而抵。古人重二骨肉一。後人重二朝市一。但願名利生。不レ畏二別離死一。我生豈大愚。胡爲亦若レ是。風雪滿二都城一。驚レ寒常夜起。妻孥誰在レ眼。開咳骨還蘇。偶聞征雁鳴。念欲レ見二雙鯉一。披裘拂二長劍一。指倒書愈駛。結念繞二庭闈一。餘情遶二桑梓一。嗟予對妹人。庶免呼庚癸。心長日若レ炊。語亂復几俚。鄰雞忽鳴レ晨。刺々猶未レ已。獲偉儀贈送。吉祭酺正美。（張船山）

●欲レ枕慙頽午夜砧。客窗風雨一燈深。五千里外常飢走。二十年來愛苦吟。白髮高堂遊子夢。青山老屋故鄉心。家書祇作尋常看。翻向燈前仔細尋。（同）

●洛陽城裡見秋風。欲レ作二家書一意萬重。復恐匆々說不レ盡。行人臨レ發又開レ封。（張籍）

●越山北望指吳閩。一月緘書幾往還。數日不レ傳雲雁客。那知非復在人間。（陳子龍）

●故園今在二湖陵西一。江畔逢レ君醉不レ迷。小弟隣莊尚漁獵。一封書寄二數行啼一。（王昌齡）

●未二諳三晉中語一。憂懐已覺レ寛。遐前看二封牘一。區宇有二平安一。（高啓）

〔てき〕敵

敵手。敵軍。敵對。敵意。敵國。敵強。敵勁。敵。朝敵。仇敵。匹敵。抗敵。

あた。かたき。たふせぐ。

●はやう皇太后宮に、ゐぬたきといひて、名高き下仕なんあいける。美濃守にて亡せにける藤原時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立よりて、これやこの高名のゐぬたき、などさも見えぬといひける返事に、それは時柄もさも見ゆる名なりといひたりけるなん、敵に撰りても、いかでかさる事はあらん。殿上人上達部までも、興あることにのたまひけるを。（清少納言）

●七つになりたまへば、ふみはじめなどせさせ給ひて、世にしらずさとくかしこくおはすれば、あまりにおそろしきまで御覽ず。今はたれも〳〵えにくみたまはじ。母君なくてだにらうたうし給へとて、弘徽殿などにもわたらせ給ふ。御ともにはやがてみすの内にいれたてまつり給ふ。いみじきもの、ふあたかたきなりとも、みてはうちゐまれぬべきさまのし給へれば、えさしはなちたまはず。（紫式部）

●波等二人馳せ參りて、事の由を申しければ、兩六波羅は櫛鋒とも濡まれたりける、名越尾張守はうたれぬ。是ぞ骨肉の如くなれば、さりとも武心はおはせじと、水魚の思をなされつる足利殿さへ、敵になり給ひぬれば、盛む木の下に雨のたまらぬ心地して、心細さにつけても、今まで附きまとひたる兵共も、又さこそ見あらめと、心のおかれぬ人もなし。（太平記）

●君臣父子萬里に隔り、兄弟夫婦十方にわかれ行けば、或は再會の期なきことを悲しみ、或は一身の置きどころなきことを思へり。今も逆旅の中にして　重れて逆旅の中にゆく。行くも敵の陣、かへるも敵の陣なれば、誰が先に討たれて哀ときかんずらん。誰が後に死してなき數を添へんずらんと、詞に出してはいはねども、心に思はぬ人はなし。（同）

●我が入苦の淵はおもけれど、念佛のくすりにいへぬべし。名利の敵はうかゝふとも、非人の身を敵とせし上界天人の快樂も、（光行）

●由耳之助下知して曰く、夜討の大事は奇正の變、敵をあかりにおびき出し、味方は暗みを小栖にとれ。女童に手な負はせそ。天下を恐る〳〵敵討、矢を放つとも射越さすな。火の用心に心をつけて、繋ぎ馬を放すな。折々に合圖の笛吹き合せ、敵に中をわらるゝな。敵をさへ討つならば、名乘つて勢を引まとめ、合調を常にして、味方討たすな同士討たすな。合調も三度にかへ、乘込む時は山か鐘、軍になつては花か海、退口は笠か鞠、向ふ者は討つて捨て、逃ぐる敵を追ひ駈けて、無益の高名手間取るな。取るべき首は唯一つ。（淨瑠璃、菅盤大平記）

●短夜に敵の後を通りけり。（凡董）

●さす敵に矢はとり落す寒さ哉。（召波）

●遠く霜の敵を味方に水仙花。（乙州）

●大年を思へば年の敵かな。（凡兆）

●花に下戸あはぬ敵とは無念なり。（大江丸）

●年も今日にせまるだん〳〵檀の浦敵とみえてつどふ掛乞。（嘉祐）

●讒信の長尾の村にさす敵と武田が團扇なしで拂ふ蚊。（東月）

●乞食ともいはれてものを戴かぬ天秤でつて敵てふ金。（似猿）

●人形はいづれ實とも敵ともわかぬ蝸牛の角の出つがひ。（長根）

●一門の仇は禪尼の慈悲から出。（川柳）

●百石は敵にもらふむかふきず。（同）

●うつくしいてきは夜うちと心がけ。（同）

●御無用の壁が敵に其まんま。（同）

●野末の草の葉がくれに、葛の恨のうらめしく、親の敵のうつゝにも、ゆめにも忘れやるかたも、ないておかしくよ〳〵と、鳴れてもゆる孤火は、炎となつてさりやらん。（俗諺）

●怒るは敵と思へ。（俚諺）

●男は數居を跨げば七人の敵あり。（同）

●金が敵の世の中。（同）

●敵の家に行きても口を濡さずに歸る者でなし。（同）

●油斷は大敵。（同）

●小敵と見て侮るな。（同）

●江戸の敵を長崎で打つ。（同）

●爲レ兵之數存二乎粟財一而財無レ敵。存二乎論工一而工無レ敵。存二乎制器一而器無レ敵。存二乎選レ士而士無レ敵。存二乎政教一而政教無レ敵。存二乎服習一而服習無レ敵。存二乎偏知二天下一而偏知二天下一無レ敵。存二乎明二干機數一而明二干機數一無レ敵。故兵未レ出レ境而無レ敵者入。（管子）

●朝風吹レ雪透二刀瘢一。飲馬長城窟更寒。夜半火來知レ有レ敵。一時齊保賀蘭山。（成弱）

●劍一人敵不レ足レ學。學二萬人敵一。於是項梁敎二籍兵法一。（司馬遷）

●過レ敵舞二臨者一。逢レ談挹二塵柄一。（陸龜蒙）

[illegible]（元好問）

[illegible]（司空圖）

[illegible]胸中秋を識る[illegible]

[illegible]

●神魔如左。[illegible]

【てふ】蝶。[illegible]

粉翅。香蝶。衒飛。游蝶。入夢魂。

偷香。傅粉。[illegible]紅[illegible]

探花。[illegible]

こてふ。[illegible]

ゆめ。そのゝこてふ。菜花に[illegible]

●荘周が夢の中に胡蝶となりて[illegible]胡蝶といふもの、[illegible]

[illegible]稀に見えしかど[illegible]やあらん。立ちかねて、猶花びらにすがりて[illegible]前栽の花にすみて、玉すだれ近く[illegible]ひとときはあてにうつくしけれど[illegible]おながちにとめき[illegible]

（[illegible]）

●蝶の夜に[illegible]

[illegible]つながり稀にさゝ[illegible]美人の[illegible]

[illegible]といふ虫もあるを[illegible]（也有）

●野原のわたり、いつも蝶多し。今日は殊更なり[illegible]びくらし、いかにつかれて、あしたの露と[illegible]の中の[illegible]知らぬにや[illegible]出らん。[illegible]までこそうらやましけれ[illegible]

●四季折々の[illegible]をかけまくも[illegible]野[illegible]花に蝶舞ふ[illegible]

[illegible]法は引かれ佛果に[illegible]

[illegible]の、明け行く空に羽ね打ちかはし[illegible]

●[illegible]胡蝶の[illegible]

[illegible]光る源氏のいにしへも、胡蝶の[illegible]官位[illegible]

[illegible]花園の胡蝶[illegible]

[illegible]人目稀なる木の本に、宿らせ給へ我[illegible]

[illegible]（同じ）

●廿一期の色ざかりをば、戀と情に國を捨[illegible]二世のかための[illegible]

[illegible]花さそふ蝶は菜種の妹[illegible]

[illegible]（[illegible]）

●花その[illegible]見しゆめは[illegible]こはまぼろしか現とやせん。[illegible]（[illegible]）

●百とせの花にやどりてすぐしてき此世は[illegible]一睡の夢。（匡房）

[illegible]

●夢たえしうきねの袖か波のほの[illegible]

[illegible]して胡蝶とぶなり。（[illegible]）

[illegible]見て花なら[illegible]

●釣鐘にとまりて眠るこてふ哉。（蕪村）

[illegible]

●海路につれて居眠る胡蝶かな。（[illegible]）

●夕日影町中に飛ぶ胡蝶哉。（其角）

●夕風や野川の蝶の[illegible]（白雄）

●山里は蝶に[illegible]

●花に戯る蝶の羽のまゝふよりも手になつきたるせみの羽衣。（宵江）

●春をしたふ相蝶に似たり遅櫻若葉の中へ飛びゝくに咲く。（積丸）

●こはいかに一輪白き山吹を折らんとすれば蝶の飛び立つ。（停口）

●春の野はふぐ汁よりもめでたいかに大根の花に蝶の横飛。（眞顔）

●うば玉の夜のものとも思はれず花にきてねる蝶の羽袖は。（為成）

●己がみな花形にして蝶と蝶とつぐや畑のなこどいらずに。（米人）

●きまかせに蝶はとまれど菜の花のとうに立ちてや厂の行くらん。（行就）

●うたゝねの袖に毛虫の這び入りて蝶ともならで夢はさめぬる。（杣人）

●めかれせぬ花にうかれて春の日もながしと知らで遊ぶ蝶かも。（清藻園）

●花となる蝶も梢をはなれけりあたするものは風にざりける。（好文）

●すべらかし尻のあたりで蝶がまひ。（川柳）

●菜の花にあれ見やぬしの紋が飛ぶ。（同）

●蝶々の近つきでない袖もなし。（同）
●いづく泥花境人を迫ふ小蝶。（同）
●蝶の來る程摘み殘す庵の畑。（同）
●あれ虫さへも、つがひなれぬ揚羽のてふ、われ〳〵とても二人づれ、粋な同士のなか〳〵に、はるにもそだつ花さそふ、菜種の蝶は花しらず、蝶はなたれの味しらず、しらずしられぬ中ならば、うかれまいものさりとては。（俗謡）
●あふぎ蝶々菜種の花さきみだれ、すゞな嵐に假寢の枕、ぴんとすれたる外の花、水はなさけの中なほり、しどけないのが蝶のくせ、とんで枝葉の葉がくれは、かわいらしいじやないかいな。（同）
●あふことの、なき世なりせば世の中に、にくいつれないこの味を、しらぬ菜種のうかれ蝶、ぎりにたちより遊ぶもなかし。（同）
●つがひはなれぬ蝶々さへも、水のもよりで離れゆく、人の口ゆゑ遠ざかる。（同）
●蝶は菜の味しらず、菜の葉は蝶の味しらず。（俚諺）
●蝶は捕ふればわらはやみせさす。（同）
●背老、莊周夢爲二胡蝶一栩々然胡蝶也。自喩適レ志與、不レ知レ周也。俄然覺則蘧々然周也。不レ知周之夢爲二胡蝶一與。胡蝶之夢爲レ周與。周與二胡蝶一、則必有レ分矣。此之謂二物化一矣。（莊子）
●秋花紫蒙々。秋蝶黃茸々。花低蝶新小。飛戲露西東。日暮涼風來。紛々花落レ露。蝶老花深白露冷。蝶已死露中。朝生夕已死。氣類各相從。不レ見千年鵬。多棲二百丈松一。（白居易）
●問レ蝶仍尋レ線。倭々九十春。翅輕惟是舞。眉細也能顰。午透衣中影。徐來扇外塵。韓魂與二莊夢一、誰復辨二其眞一。（蘇東坡）
●雨前初見二花間蝶一、雨後猶無二蝶底花一。欲レ蝶飛來過レ墻去。却疑春色在二鄰家一。（王駕）
●江空月落雁聲悲。霜染二丹楓一百草萎。胡蝶不レ知身是夢。又隨二秋色一上二寒枝一。（朱靜庵）
●泥香江暖燕來時。紅白花深桃李枝。草色一簾門半掩。臥看雙蝶趁二游絲一。（居節）
●雙眉畫二靚絲一。兩翅傳二金碧一。初來花爭レ妍。忽鬼去無レ迹。（紫式部）
●愚哉關東の勇士、久しく天下を保ち、威を遠く海内に震ひしかども、國を治むる心なかりしかば、堅甲利兵、徒に提攜のために擒はれて、滅亡の辱目の中に得る事、驚れるものは失し、倦なるものは存す。古より今に至るまでこれあり。此裏に向ひて頭を迴す人、天道は盈てるを缺くことを知らずして、獵人の欲心の厭ふことなきに溺る。昔迷ほざらんや。（太平記）
●二位えもいはぬ法どもをわれもし、又人しても行はせて、さりともと心のどかに覺せ。何事も人やはする。只天道こそ行はせ給へとたのめきこゆ。（榮華物語）
●女は天道にまかせ來る。天のおきてあらば國母女御ともなれ。掟なくば山賊民の子ともなれ。（宇津保物語）
●日、野の草のつゆよりいでゝ、若木の枝にのぼらず。雲はみねの松風にはれて、山の色天と一つにそめたり。道心の感心情つきがたし。（光行）
●且暮の露の身は、山かげの草をおき所とすれども、朝霞はのぞみ絶えて、天を仰くにむなし。（同）
●や此衣をかへしなば、舞曲をなさで其まゝに、天にやとり給ふべき。いや疑は人間に在り、天に偽無きものを。あらはづかしやさらばとて、羽衣をかへし與ふれば、少女は衣を奪しつゝ、覺束羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、一曲をかなで舞ふとかや。（謡曲、羽衣）
●げに人々はよも知らじ。天も納受章見坂の、資をこゝに降さんとて、天の岩船雲の波に、只今こゝによすべきなり。（謡曲、岩船）
●いづくの春もをしなべて、のどけき影はあり明の、天も花に酔へりや。面白の春べや。（謡曲、田村）
●秀衡入道白さるゝは、我夜半の夢の中、男山へ社參せしに、神前の松が枝に、平家の赤旗幾流れ、秋の紅葉と翻る。其心に思へらく、此御社は幾歳か、源氏守護の神なるが、平家の旗は心得ず不思議ながらも禮拜し、立歸らんとせし所に、俄に雷電しやくして、彼赤旗をふり流し、忽ち源氏の白旗と、見るに空晴れくわん〳〵とて、夢は正しく覺めてけり。熟愚案を巡らすに、清盛官祿重疊し、君を惱し世を貧り、神明佛陀も放たれて、彼惡逆の煩惱の赤旗を、天道雷雨の洗濯に、潰ぎはがし押流し、元の白地の白旗や、源氏の世となし玉はん日月の御瑞相、天の鏡に明白たり。勇めや悦べ者共、奇變を以て判すれば、皆々喜びも合されど、はつと答も一時に、偏に天の御惠、あら有難やといふ所へ。（淨瑠璃、末廣十二段）
●夫天は一物の元氣にて、混沌たる其中に、浮み出づ。萬物に始めて生ある。地も亦同じ靈氣にして、沈み止まるの形なり。あらゆる世界の森羅萬象、此内よりして體を成す。日は太陽の精にして明かにして晝を分ち、月は所謂大陰の位をなして夜を照す。續いて四季の序あり。方角に顯はしては東西南北に相應ず。（淨瑠璃、三韓責）
●天の原ふりさけ見れば大君のみよはとこしへあまたらしぬる。（大津宮）
●山のはのさゝらへをとこ天の原とわたる光みらくしよしも。（坂上郎女）
●久方の月かげ清し天の原雲ゐをわたる夜はのあまかぜ。（後鳥羽院）
●たつ雲も鳥もおよばぬ久方の天のみやこにゆく心かな。（有功）
●おほけなく眺めてけりな久方の空にしられん我身ならぬを。（清平）
●思ふ空やすの川原もありとさく雲の上こそこひしかりけれ。（同）

【てん】天

天道。天意。天空。天象。天眼。天網。昊天。蒼天。洞天。壺天。九天。上天。
●あめ。みそら。おほそら。あまつそら。あをぞら。くもゐ。青雲たなびく。
●世の中のこと共さうし給ふついでに、いとそうしがたくて、かへりては、つみもやまかりあたらんと、思ひ給へはゞかることおほかめれど、しろしめされぬにつみおもくて、天の眼おそろしく思ひ給へらるゝをも、心にむせび侍りつゝ、いのちをはり侍りなば、なにのやくかは侍らん。佛も心ぎたなしとや覺しめさんとばかり、そうしさして、えうちいでぬことあり。（紫式部）
●愚哉關東の勇士、久しく天下を保ち、威を遠く海内に震ひしかども、國を治むる心なかりしかば、堅甲利兵、徒に提攜のために擒はれて、滅亡の辱目の中に得る事、驚れるものは失し、倦なるものは存す。古より今に至るまでこれあり。此裏に向ひて頭を迴す人、天道は盈てるを缺くことを知らずして、獵人の欲心の厭ふことなきに溺る。昔迷ほざらんや。（太平記）
●二位えもいはぬ法どもをわれもし、又人しても行はせて、さりともと心のどかに覺せ。何事も人やはする。只天道こそ行はせ給へとたのめきこゆ。（榮華物語）
●女は天道にまかせ來る。天のおきてあらば國母女御ともなれ。掟なくば山賊民の子ともなれ。（宇津保物語）
●日、野の草のつゆよりいでゝ、若木の枝にのぼらず。雲はみねの松風にはれて、山の色天と一つにそめたり。道心の感心情つきがたし。（光行）
●且暮の露の身は、山かげの草をおき所とすれども、朝霞はのぞみ絶えて、天を仰くにむなし。（同）
●や此衣をかへしなば、舞曲をなさで其まゝに、天にやとり給ふべき。いや疑は人間に在り、天に偽無きものを。あらはづかしやさらばとて、羽衣をかへし與ふれば、少女は衣を奪しつゝ、覺束羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、一曲をかなで舞ふとかや。（謡曲、羽衣）
●げに人々はよも知らじ。天も納受章見坂の、資をこゝに降さんとて、天の岩船雲の波に、只今こゝによすべきなり。（謡曲、岩船）
●いづくの春もをしなべて、のどけき影はあり明の、天も花に酔へりや。面白の春べや。（謡曲、田村）
●秀衡入道白さるゝは、我夜半の夢の中、男山へ社參せしに、神前の松が枝に、平家の赤旗幾流れ、秋の紅葉と翻る。其心に思へらく、此御社は幾歳か、源氏守護の神なるが、平家の旗は心得ず不思議ながらも禮拜し、立歸らんとせし所に、俄に雷電しやくして、彼赤旗をふり流し、忽ち源氏の白旗と、見るに空晴れくわん〳〵とて、夢は正しく覺めてけり。熟愚案を巡らすに、清盛官祿重疊し、君を惱し世を貧り、神明佛陀も放たれて、彼惡逆の煩惱の赤旗を、天道雷雨の洗濯に、潰ぎはがし押流し、元の白地の白旗や、源氏の世となし玉はん日月の御瑞相、天の鏡に明白たり。勇めや悦べ者共、奇變を以て判すれば、皆々喜びも合されど、はつと答も一時に、偏に天の御惠、あら有難やといふ所へ。（淨瑠璃、末廣十二段）
●夫天は一物の元氣にて、混沌たる其中に、浮み出づ。萬物に始めて生ある。地も亦同じ靈氣にして、沈み止まるの形なり。あらゆる世界の森羅萬象、此内よりして體を成す。日は太陽の精にして明かにして晝を分ち、月は所謂大陰の位をなして夜を照す。續いて四季の序あり。方角に顯はしては東西南北に相應ず。（淨瑠璃、三韓責）
●天の原ふりさけ見れば大君のみよはとこしへあまたらしぬる。（大津宮）
●山のはのさゝらへをとこ天の原とわたる光みらくしよしも。（坂上郎女）
●久方の月かげ清し天の原雲ゐをわたる夜はのあまかぜ。（後鳥羽院）
●たつ雲も鳥もおよばぬ久方の天のみやこにゆく心かな。（有功）
●おほけなく眺めてけりな久方の空にしられん我身ならぬを。（清平）
●思ふ空やすの川原もありとさく雲の上こそこひしかりけれ。（同）

●はてはいさはじめもしらぬ天の原たゞおほそらと見てあふぐのみ。（春滿）
●よと〻もに見つ〻くらせどさまぐにあかぬは空のけしきなりけり。（筑波子）
●うごきなき日嗣のくらゐたかしるや天の御かげなよ〻につたへて。（春海）
●日のあゆみ星の宿もゆきめぐる天の道こそ時をたがへね。（同　）
●鳴立つて秋天ひくきながめ哉。（蕪村）
●天にあらば比翼の籠や竹婦人。（同　）
●神國は天から薬ふりにけり。（一茶）
●上行くと下りくる雲や秋の天。（凡兆）
●酒の瀑布冷麥の九天より落つるならん。（其角）
●天高し錐りんだうのたまり水。（木導）
●靑天に向つて開く牡丹哉。（紋村）
●星逢を思ふ蛙や蚊帳の天。（米山）
●中天ないざよひの月の出かけ哉。（曉臺）
●春ぞとは天にいつはりなき物などうそ寒き風の吹くらん。（三陀羅法師）
●春の夜の眠りなさめよと天の戸をやをら細めに曙の空。（嫁口）
●久方の空錠なれや天の戸をあけたつ年の限りなければ。（岡持）

●天の原月すむ秋なまふたつにふり分け見ればちやうど仲麿。（渓江）
●つ〻たゝば天にのぼらんふんのばす足高山やふじのねすがた。（信海翁）
●天も桃の花に醉へりや水の面に月もうかれてめぐるさかづき。（登）
●相替らず軒にあやめなふき自在天の惡みと卯供祝うた。（貞柳）
●家々の軒にかやりなたてならべ天暗うなる〻煙かな。（雄長老）
●天のはらへることもなくはるぐと道につかれの見えぬ日のあし。（卯雲）
●新ぞうのけだし天より座敷持ち。（川柳）
●朝蹈り天高けれどせぐ〻まり。（同　）
●あかゞりで下女天文を考がへる。（同　）
●凉蓋天はどうしたものといふ。（同　）
●なほも自在のすがたとなつて、爰にあらはれかしこにたちて、天にあがらは月宮殿まで、おつかけおつつめ地にまた入らば、金輪奈落のそこまでも、思ひつめては中々に、恨みつ泣いつ亂菊の、此の姿も恥かしや。（俗謠）
●針の穴から天覗く（俚諺）
●天に口なし人な以て言はしむ。（同　）

●天に私無し。（同　）
●天に二日無し。（同　）
●天道人な殺さず。（同　）
●天知る地知る。（同　）
●天道は盈つるを虧く。（同　）
●天可ㇾ必乎。賢者不ニ必貴一、仁者不ニ必壽一。天不ㇾ可ㇾ必乎。仁者必有ㇾ後。二者將ニ安取ㇾ衷哉。吾聞ㇾ之申包胥曰。人衆者勝ㇾ天、天定亦能勝ㇾ人。世之論ㇾ天者、皆不ㇾ待ニ其定一而求ㇾ之。故以ㇾ天爲ニ茫茫一。（蘇東坡）
●善者以怠、惡者以肆、盜跖之壽、孔顏之厄、此皆天之未ㇾ定者也。松柏生ニ於山林一、其始也困ニ於蓬蒿一、厄ニ於牛羊一。而其終也貫ニ四時一、閱ニ千歲一而不ㇾ改者、其天定也。（同　）
●虧盈益謙、天之道也。禍淫福善、天之察也。春榮秋落天之時也。晝明夜晦、天之運也。擊電鼓雷、天之怒也。蒸雲施雨、天之澤也。因ㇾ斯以言、則庶類萬物、非ㇾ天無ニ以成ニ受ㇾ形育ㇾ氣、非ㇾ天無ニ以立一。大哉博哉、乾之化也。（盧綸）
●予欲ㇾ無ㇾ言。子貢曰、子如不ㇾ言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉。（論語）

●天蒼々、其正色邪。其遠而至ㇾ所ㇾ至極ㇾ邪。其視ㇾ下也、亦若ㇾ是則已矣。（莊子）
●嘉樂君子。顯々令德。宜ㇾ民宜ㇾ人。受ニ祿于天一。保佑命ㇾ之。自ㇾ天申ㇾ之。（詩經）
●幾人富貴不ㇾ能ㇾ閑。夜還ニ牙籌一日游ニ鐵籍一。役々一生忙裏過。不ㇾ知屋上有ニ靑天一。（戴復古）
●天行ニ阿健一。[illegible]無ニ高蹤一。有ㇾ洲赴ニ陽[illegible]。[illegible]（[illegible]）
●大哉乾元。萬物資始。乃統ㇾ天。（易經）
●氣混天宇淸。心淡塵累空。（張[illegible]）
●天游ニ强健一[illegible]。（陸游）
●靑ニ天涵ㇾ海一夜氣爽。（宋[illegible]）

【てんにん】天人。

天仙。霓裳。羽衣。天女。（[illegible]）
天つ少女。あまくだる。天の羽衣。
あまつかぜ[illegible]。
●[illegible]

り。（中略）立てる人どもは、裝束の淸らなること物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に[illegible]まうで來[illegible]と言ふに、猛く思ひつる造麿も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。[illegible]汝をさなき人、聊なる功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、片時のほどとて下しを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身を換へたるが如くなりにたり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、暫時おはしつるなり。罪の限はてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く能はぬことなり。はや返し奉れといふ。翁答へて申す。かぐや姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時とのたまふに怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらんといふ。ここにおはするかぐや姫は、重き病をしたまへば、え出でおはしますまじと申せば、その返事はなくて、屋の上へ飛車を寄せて、いざかぐや姫、穢き所にいかでか久しくおはせんといふ。立て籠めたる所の戸、即ち唯あきにあきぬ。格子どもも人はなくして開きぬ。嫗抱きて居たるかぐや姫、

外に出でぬ。[illegible]御衣を[illegible]（中略）天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。[illegible]天人の天人いふ。壺なる御藥奉れ。穢き所のもの聞こしめしたれば、御心地惡しからんものぞとて、[illegible]持てよりたれば、聊なめ給ひて、少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まんとすれば、或天人包ませず。御衣を取り出でて着せんとす。その時にかぐや姫、暫時まてといひて、衣着せつる人は心ことになるなり。物一言いひおくべき事ありけりといひて文かく。天人遅しと心もとながり給ふ。かぐや姫物知らぬ事なのたまひそとて、いみじくしづかに、おほやけに御文奉り給ふ。（中略）頭中將呼び寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつる事も失せぬ。この衣着つる人は、物思ひもなくなりにければ、車に乘りて百人許天人具して昇りぬ。（竹取物語）
●尼君はよろこびて、せめておくらすとおもひ[illegible]。（[illegible]）

あさましう、ひきゆひてうちやりつれど、いたうもみだれず、ときはてたれば、つや〳〵とけうらなり。一年ならねつくもがみ、おほかる所にて、めもあやにいみじき天人の、おまくだれるを見たらんやうに思ふも、あやふき心ちすれど、などかいと心うく、かばかりいみじく思ひ聞ゆるに、御心をへだて〻はみえ給ふ。いづくにたれときこえし人の、さる所には、いかでおはせしぞと、せめていふを。（紫式部）

●一所だにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人多らせ給ひて、これはいま少し花やぎ、猿楽言などうちし、誉め笑ひ興じ、我もなにがしが、とある事かゝる事など、殿上人のうへなど申すをきけば、猶いと変化の物、天人などのおり来るにやと覚えてしな、侍ひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。（清少納言）

●水の緑も空色の、青垣山の山際に、天降りつゝ乙女子が、其唐玉衣を、かなでそめしも我ぞかし。其時葛山雲つきて、明々とある晴天に、一輪みてる夜の、清光何れの処にか、至らぬ隈もあらし吹く、松聲もこゑすみて、琴の秘曲にしたがひ、天女卽ち舞ひつつる、月の花蔭、雲の羽袖を飜して、左右颯々の、妙なる舞状の跡とめて、豊の明の明けき、五節の舞姫の、奏は今に絶せず。（謡曲、吉野琴）

●此御詞を聞くよりも、いよ〳〵はくれうやいまの白ゆき。（契沖）力を得、本より此身は心なき、天の羽衣とりかくし、かなふまじとて立ちのけば、今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。とやあらんかくあらんとかなしめど、はくれう衣をかへさねば、力及ばず。せんかたも涙の露の玉襷、かざしの花もしほ〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えておはしや。（謡曲、羽衣）

●花も酔へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや。みかはの水に、戯れ戯るゝ手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥風に和しつゝ、雲路に移れば、王母路の、ゆくへも知らずぞなりにける。（謡曲、西王母）

●水の緑も空色の、青垣山の山際に、天降りつゝ乙女子が、其唐玉衣を、かなでそめしも我ぞかし。其時葛山雲つきて、明々とある晴天に、一輪みてる夜の、清光何れの隈にか、至らぬ隈もあらし吹く、松聲もこゑすみて、琴の秘曲にしたがひ、天女卽ち舞ひつつる、月の花蔭、雲の羽袖を飜して、左右颯々の、妙なる舞状の跡とめて、豊の明の明けき、五節の舞姫の、奏は今に絶せず。（謡曲、吉野琴）

●此御詞を聞くよりも、いよ〳〵はくれうやいまの白ゆき。（契沖）力を得、本より此身は心なき、天の羽衣とりかくし、かなふまじとて立ちのけば、今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。とやあらんかくあらんとかなしめど、はくれう衣をかへさねば、力及ばず。せんかたも涙の露の玉襷、かざしの花もしほ〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えておはしや。（謡曲、羽衣）

●花も酔へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや。みかはの水に、戯れ戯るゝ手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥風に和しつゝ、雲路に移れば、王母路の、ゆくへも知らずぞなりにける。（謡曲、西王母）

●水の緑も空色の、青垣山の山際に、天降りつゝ乙女子が、其唐玉衣を、かなでそめしも我ぞかし。其時葛山雲つきて、明々とある晴天に、一輪みてる夜の、清光何れの隈にか、至らぬ隈もあらし吹く、松聲もこゑすみて、琴の秘曲にしたがひ、天女卽ち舞ひつつる、月の花蔭、雲の羽袖を飜して、左右颯々の、妙なる舞状の跡とめて、豊の明の明けき、五節の舞姫の、奏は今に絶せず。（謡曲、吉野琴）

●此御詞を聞くよりも、いよ〳〵はくれうやいまの白ゆき。（契沖）力を得、本より此身は心なき、天の羽衣とりかくし、かなふまじとて立ちのけば、今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。とやあらんかくあらんとかなしめど、はくれう衣をかへさねば、力及ばず。せんかたも涙の露の玉襷、かざしの花もしほ〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えておはしや。（謡曲、羽衣）

●花も酔へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや。みかはの水に、戯れ戯るゝ手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥風に和しつゝ、雲路に移れば、王母路の、ゆくへも知らずぞなりにける。（謡曲、西王母）

●水の緑も空色の、青垣山の山際に、天降りつゝ乙女子が、其唐玉衣を、かなでそめしも我ぞかし。其時葛山雲つきて、明々とある晴天に、一輪みてる夜の、清光何れの隈にか、至らぬ隈もあらし吹く、松聲もこゑすみて、琴の秘曲にしたがひ、天女卽ち舞ひつつる、月の花蔭、雲の羽袖を飜して、左右颯々の、妙なる舞状の跡とめて、豊の明の明けき、五節の舞姫の、奏は今に絶せず。（謡曲、吉野琴）

●此御詞を聞くよりも、いよ〳〵はくれうやいまの白ゆき。（契沖）力を得、本より此身は心なき、天の羽衣とりかくし、かなふまじとて立ちのけば、今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。とやあらんかくあらんとかなしめど、はくれう衣をかへさねば、力及ばず。せんかたも涙の露の玉襷、かざしの花もしほ〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えておはしや。（謡曲、羽衣）

●花も酔へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや。みかはの水に、戯れ戯るゝ手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥風に和しつゝ、雲路に移れば、王母路の、ゆくへも知らずぞなりにける。（謡曲、西王母）

房見たがよい。器量はどてん天人姿、天降してお目にかけふ。爰ぢや〳〵と手招きに、下り来る坂の段かづき、屋敷が町と三賀の聲、堅う見せどもしどけなく。（浄瑠璃、伊賀越）

●ふじのねに昔くだりし天少女ふりげん袖やいまの白ゆき。（契沖）

●久方の天つ小女が夏衣雲居にさらす布引のたき。（有家）

●悔しくぞ天つ少女となりにける雲路尋ぬる人もなき世に。（滋包女）

●雲居なる高間の櫻散りにけり天つ少女のそでにほふまで。（後鳥羽院）

●袖かへす天つ少女も思ひ出づや芳野の宮の昔がたりな。（後醍醐天皇）

●降るゆきな天つ少女や手向くらん白木綿かくと見ゆる榊葉。（寂念）

●くもりなき豊の明に見つる哉あまつ少女のまひのすがたを。（六條院大進）

●天人も泣顔わろしねはん像。（已百）

●霞む日やさざ天人の御退屈。（一茶）

●花風や天女負れて歩渡り。（其角）

●天人の肘に泪や涅槃像。（召波）

くる〳〵峰のいはほを。（足白）

●天乙女誰をこふらん白雲の袖より落つる雁のたまづさ。（喜撰）

●天人とみれば思ひもますら男の肩の up なづる傾城。（道晃）

●かくばかり苦のむせしは天人のちつとしなでぬいはになるらん。（路阿）

●ねはんえのみな〳〵中に心なくあそぶ風間の天人の樂。（朝風）

●天人も下る吉野の山ざくらさかりは外と別世界なり。（夏屋）

●天人の撫づるいはほに苦むして手もつけられぬ御代ぞめでたき。（物梁）

●羽衣のうらみかけてもなびくこと叶ふまじとて立ちのくぞうき。（橘洲）

●天人も一度人別帳につき。（川柳）

●羽衣をかへさぬ内は飯も炊き。（同）

●天人も舞へとはきつゐゆすりやう。（同）

●天人もはだかにされて地者なり。（同）

●羽衣をかへしてしまへばおさらば。（同）

●羽衣をてん〳〵舞でとりもどし。（同）

●降りくる雪の肌自慢、これ見よがしに三保の松、羽衣といふなぞかけた、天津乙女は浮氣かあだか、男ひでりか此年月を、賤が伏屋に假枕、糸も綴り候はたをり〳〵に、雲裳羽衣の曲をなし、吾妻遊の駿河舞、雨にうるほふ花の袖。（俗謡）

●さまは天人、それ〳〵とんとろり、乙女の姿、雲の通路、ちらと見た、とんとろり。なとめのすがた雲のかよいぢ、ちらと見た、とんとろり。（同）

●よをてらす白玉の歯、の光ならずば、天津乙女のかざして、月に遊なぶるらん。（同）

●天人の五衰人間の八苦。（俚諺）

〔てら〕寺

梵刹。浄刹。伽藍。寶閣。唐廊。沙界。祇園。細点。紺宇。招提。蘭若。卓錫。布金。白馬。金鐘。野寺。山寺。古寺。法の庭。法の聲。あかの水。塵の外なる。法のともしび。

●松風木高く吹きわたりて、はる〳〵と登りゆく道のをかしきに、大きやかなる碑の

●山形領に、立石寺と云ふ山寺あり。慈覚大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々のすゝむるに依りて、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。杜下の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巌を重ねて

山とし、松柏年旧り、土石老いて、苔滑に、岩上の院々、扉を閉ぢて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行くのみおぼゆ。（芭蕉）

●長谷にまゐりつきて登る。樓を入るより、貴く面白き事の、世にあるべしとも覺えず。らんしゆのけしきも、並べてならず貴くかひがしく、心にしむる面影信起りて、年月のあらまし、今日こそと嬉しき事限りなくて、御帳もあきて拜まれさせ給ふ、おりなん後、いかゞと覺ゆ。（道綱母）

●金堂の御本尊は、如意輪の佛像、救世觀音とも申すとか。太子の御前生、震旦國の思禪師にて、渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつゝ、今日域に至るまで、佛法最初の御本尊と、顯はれ給ふ御威光の、誠なるかなや。末世相應の御誓、然るに當寺の佛閣の、御作の品々も、赤栴檀の霊木にて、塔婆の金寶に至るまで、閻浮檀金なるとかや。萬代に、澄める龜井の水までも、水上清き西天の。無熱池の、池水をうけつぎて、流れ久しき世々までも、五濁の人間を導きて、濟度の舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の聲、異浦々に響き來て、普き誓満潮の、おし照る海山も、皆成佛の姿なり。（謠曲、弱法師）

●月雪の、古き寺井は水澄みて、庭の松風さえかへり、更け行く鐘の聲までも、心耳を澄ます夜もすがら、實に聞けや峰の松、谷の水音澄み渡る、嵐や法を稱ふらん。（謠曲、舍利）

●積りける、岩のひまより落ちくる、水の音さへよしありて、緑蘿の垣翠黛の山、繪にかくとも筆にも及びがたし。一宇の御堂あり。甍破れては、霧不斷の香を焼き、扉おちては月も又、常住の灯をかゝぐとはかゝる所か物すごや。（謠曲、大原御幸）

●寺は讃法のかみにたち、海は福壽の波をたゝふ。大悲のちかひ淺からぬ、道を傳へてかぞへ歌、是なん和國のだらにとかや。ふだらくやきしうつ波はみくまのゝ、なちのお山にひゞく瀧津瀬、二ばんにきみゐ寺、ふる里をはるばるこゝにきみゐ寺、花の都も近くなるらん。（淨瑠璃、三井寺開帳）

●拜み巡りて法住寺、人の願も我がごとく、誰をか戀のいのりぞと、仇の悋氣や法海寺、東は如何に大教寺。（淨瑠璃、曾根崎心中）

●豐浦の寺は露ふりて、月常住の御燈をかゝげ、霧不斷の香を焚き、寒庭の松の風、讀誦の經に音信れて、猶も殊勝ぞまさりける。（淨瑠璃、大職冠）

●谷しげみ跡だに見えぬ古寺は覺の水のゆゝにてぞしる。（顯仲）

●つくづくとすぎもゆく哉山寺に入相の鐘のこゑばかりして。（仲實）

●宿を出でば尋ねてゆかん清水寺名にたがはずば住やとまると。（忠房）

●世を背く所とかきくおく山は物思ふにぞいるべかりける。（道命）

●名にたかき嵐の山の麓寺入相の鐘に松風ぞふく。（爲家）

●藤かづら絶えぬ根ざしをとゞめけるあともかしこき多武のやまでら。（蒿蹊）

●こがねもて造る佛をてらふとや世にかゝやかぬ寺とてはなし。（春満）

●山寺のあかつきおきの袖のつゆかゝるばかりもいとはしの世や。（たみ子）

●くれゆけば菜つみ水くむ人かげも絶えてさびしき峰のふる寺。（同）

●かねの聲を峰のあらしのさそはずばよにふる寺もありとしらめや。（春海）

●古寺や菜ないけたる椽の下。（鬼貫）

●山寺や五色にあまる花御堂。（蓼太）

●尼寺の鉦からつゞくきぬた哉。（也有）

●此の寺は庭一ぱいの芭蕉かな。（芭蕉）

●山寺や子に迷ふ親の衣くばり。（一茶）

●古寺の瓶子も背し冬構。（凡兆）

●ひつそりと秋は過ぎたる淨土寺。（利牛）

●寺々を通りぬけたり花盛。（白雄）

●大寺も小寺も花の盛かな。（逸流）

●何宗と昔かざる寺や探梅。（李流）

●山寺に月まつほどの紅葉碑般若湯でもちと出でよかし。（金埒）

●ものくはで夜こもりての初瀬寺ひばらにひゞく曉のかね。（旅顔）

●此緣起御ものがたり申すべしさればとよらの寺のいにしへ。（米人）

●なにはづにつくり立てたる天王寺是も伽藍の火かぶらなり。（長丸）

●雁深きこのみはたすけ給ふともくりかきおれし古寺の庭。（道則）

●お住持はお宿なるかと伺へば内にはれいの聲のきこえる。（古渡）

●跡もなく客殿はなど朽ちにけん土塵にくりのうたをのこして。（智恒）

●本堂のつま戸の尻はくされたり達磨を祖師と賴む古寺。（卯波澄）

●御佛のはくははげてもなめくじり光をのこす雨のふる寺。（梅丸）

●いくとせをふるてふくりの土塵まで朽ちてきのこの出づる山寺。（里近）

●いつの頃屏にさしたる傘をしろしにやせん雨のふる寺。（廣丸）

●古寺の軒ばに下るくものすも佛の御手のいとゞ尊き。（金也）

●訴訟にも緣起をまぜる寺の公事。（川柳）

●怪我なした鐘三井寺で疵もいゝ。（同）

●年玉を寺は夏からこねまはし。（同）

●鰻貧にうす氣味わるい寺があり。（同）

●たのしみは嫁ないぢると寺參り。（同）

●此寺と芝で公家衆へ申し上げ。（同）

●旦那寺食はせて置いて扨といふ。（同）

●過去帳をくるがお寺の店卸し。（同）

●[illegible]寺へ行つて我身にして歸り。（同）

●山門へ霞のかゝる母のこゑ。（同）

●森の間からお寺が見える、お寺寂しや小僧一人。（俗謠）

●我寺の佛尊し。（俚諺）

●尊い寺は門から知れる。（同）

●寺から里へ。（同）

●悄然誰禮梵王宮。惡樹千尋倚二碧空一。萬迢盤風鴉點黑。一星寒レ月鳥燈紅。興衰如レ夢斜陽返。須彌無レ壞浩劫同。時有二樵人一拾二遺供一。細敲二佛骨一辨二奇銅一。（張船山）

●野寺殘僧少。山園細路高。麝香眠二石竹一。鸚鵡啄二金桃一。亂石通二人過一。懸崖置二屋牢一。上方重閣晩。百里見二秋毫一。（杜甫）

●香刹夜忘レ歸。松清古殿扉。燈明方丈室。珠繫比丘衣。白日傳心淨。青蓮喩法微。天花落不レ盡。處々鳥銜飛。（綦毋潛）

●不レ知香積寺。數里入二雲峰一。古木無二人逕一。深山何處鐘。泉聲咽二危石一。日色冷二青松一。薄暮空潭曲。安禪制二毒龍一。（王維）

●雲抱二龍堂一蘚石乾。山遮二白日一寺門寒。長松瀑布饒二奇狀一。曾有二仙人駐レ鶴看一。（朱慶餘）

●金界時來一訪レ僧。天香飄レ翠瑣レ窗凝。碧池靜照寒松影。清夜深懸古殿燈。（李涉）

●千里鶯啼綠映レ紅。水村山郭酒旗風。南

朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。（杜牧）
○道入空山一依野僧。花天酒地悲豐臨。悲涼無限後春意。風雨滿々酒二佛燈。（江城）
●林間花賛送清聲。池底鳴蛙池上蛩。僧院無人閑似水。燈前雨滴淨名經。（船山）

とノ部

【とうろう】燈籠

灯樓。

高どうろう。墓どうろう。石どうろう。きりこ燈籠。㊂

●其中にありがたき事と、世にきこえけるは、大臣の常に住みたまひける所をば、東へ十二間、南へ十二間、西へ十二間、北に十二間の屋をたて、四方に四十八の間を點じ、一方の十二間に十二光佛を、一體づゝ立て奉りたりければ、四方に四十八體の十二光佛御座しけり。其御前ごとに常燈を燃さゝれければ、四十八の燈籠にぞ似たりける。晝夜の星の澤邊の螢に似たりけり。上は二十歳下は十六歳色深く、身盛に、妓人に勝れ、形類なき美女四十八人揃ひて、常燈に一人づゝ付け給ふ。油をそへ燈を挑げてぞ置かれける。（三十にもあまりければ、取替もなく、前裝の繁みにたてるに、火いれたるに、ほのかなる影に青葉の露、さら〳〵と見えて、同じく吹く風も、殊に涼しくぞ覺ゆる。夏の月なき程は、庭の光なき、いとむづかしくおぼつかなき物なるに、此の光なからましかば、いと物のはえなからましなどて、皆人めであへるに、主のしたり顏なるもことわりなりかし。（宰長）

㊁げにこそ心ことによしありて、おなじ木草をもうゑなし給へり。月もなき頃なれば、やり水にかゞり火ともし、とうろなどにもまゐりたり。みんなみ面いときよげにしつらひ給へり。（紫式部）

㊂たいにわたり給ひて、とみにもいり給はず。いたうながめて、はしちかうふし給へり。とうろとほくかけて、ちかく人々さゝ

らはせ給ひて、物語などせさせ給ふ。（同）

●是お見やれ、最初になたより、根笠の燈籠に水晶珠を飾り、上には蕊が羽を伸し、鯉を銜む作り物、總に心は飛び立つ斗り、模樣に花、障ば落ちよの心を悟り、油をかた敷き、二人寢んとの返事のたが紬、又此方より松に楓の燈籠、焦れ待つとの心を受け、色に引かれて廻り寄るとの、此花車事ない。（淨瑠璃、大塔宮）

●今日浦盆の祝儀とて、燈籠を贈ること、往昔一條の院の御宇に、御堂の關白道長公、天文地理を勘辨あり。七月は天の相氣除分に萌す故、人間の精氣撓むなり。去るによつて燈籠に、陽火を點じ對すれば、陰氣の疫疾打拂ひ、壽命を延ぶる例とて、禁裏仙洞宮方へ、送り初め給ひしなり。去るに依て此公を燈籠の關白とも名けて傳ふ。（淨瑠璃、甲陽軍鑑）

●美女美男燈籠に照す迷かな。（其角）
●盆までは秋なき門の燈籠哉。（闌雪）
●咲き亂れ山路の菊を燈籠哉。（支考）
●染ざめに線香や盆燈籠。（許六）
●世は燈籠油の有無の影迷し。（越人）

㊃影さすは月になりしよ高燈籠。（大江丸）
●長旅の城下へ出れば灯籠哉。（召波）
●灯籠を三たびかゝげぬ露ながら。（蕪村）
●高灯籠しばらく有つて嶺の月。（北枝）
●山寺の嶺より高き燈籠哉。（探丸）
㊄神棚のあかしの上も燈籠の光源氏をまち（赤良）
おひの辻。
㊅いにしへのなき玉菊が燈籠にうつてかはりしおもてうら盆。（人成）
●あげそむる高燈籠をふみ月の足しろにして秋や立つらん。（川住）
●人の身はまほり燈籠にさも似たり火がきえぬればいきぞとまれる。（行順）
●蜂のすに似し麻の葉をほりぬいて軒はにかけるきりこ燈籠。（眞顏）
●秋風の吹きも落さで火ともせる水に一葉のきりこ燈籠。（七葉）
㊆あそび女も額あつめてみつるかな百ふ盞ふがく水の燈籠。（椿の屋）
●兩方へふり分髪もおもしろく井げたにさしこ燈籠。（塵外樓）
●とうろうに來てくむ酒の中の町てうしの外にかはりめもある。（喜好）
●まつらるゝたまはさもあれよし原に苦界の卵はきえぬ灯籠。（小二）
㊇たまだなへたむけし馬に引かへて風があふりをあへるとうろう。（唯仲）
●大原女のさまをそのまゝうつしては影さへ黒きまはり燈籠。（卸代作）
●夜よりは我見るための石どうろ。（川柳）
㊈しのぶ夜の霜にもならぬ石燈籠。（同）
●今ごろは灰になつたと燈籠を見。（同）
㊉役者の素顏は燈籠の雲英色。（同）
㊋重き利生に燈籠のみかげ石。（同）
㊌先祖代々賢り殘る石燈籠。（同）
●とうろうの伊逢も佛の道から出。（同）
㊍火の消えた廻り燈籠。（俚諺）
㊎高燈籠の油盜人。（同）

【とき】時

時代。時日。時節。片時。四時。光陰。寸陰。知レ時。救レ時。待レ時。逢レ時。惜レ時。如レ矢。如二流水一。

かたとき。ときいま。きえゆく時。かへらぬ時。時失へる。時をたがへぬ。時えたる。時めく。

●都にも猶世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼしなげきて、園しかの守のうちつづき時のいたれるにや、御垣守にさへふらふつはものども、御風色をばのどかにけれども、さうざうしう思ひつゝにて、なほかりてかくろくねんと思ひつゝにおなじ月の廿四日のあけぼのに、いみじくたはかりてかくろくねんと思ひつゝにおなじ月の廿四日のあけぼのに、いみじく

（堀錦）

●ものを引きのばして、時うしなふものありけり。人のさなくうつろふころ、たれほどこしてけり。葉月のころわせの穂の出でたるに、風ふきてけれど、花ちりのこなげくなれ。わかいねはこの世うしかば、あらしのわざはひにもおひ作らず、人にたかぶりけり。人のかりをさむる比、少しはかりの穂の見えたるが、はや霜のおきてけれど、かゝかれぬ。こゝしはいと早う霜のおきしなりとて、年をのつみして、いまだきとらりしとなり。

（榮錦）

●四季をり〳〵は目の前にて、非覚秋冬盛木千草も、一日に花さけ。おもしろやふしぎやな。かくて時すぎ頃まれば、五十年

●時うつる比（四人）

●時雨には天も心ありて、知れる者人感ありて、袖にも木の葉ばかりぞ散りかゝる。

●雲雀えさだにもとめず、花には鶯もなき、月には郭公も来ず、雪には梅もほころびず、これらの人の主設

●心なき身にも哀は知れ、鴫立つ沢の秋の夕暮、これは西行の歌にて、三夕の一つなり。

●時は、死人に同じ。光陰何の役にか立つと、なほ思ひなせば、外に出でなくしてなほ、心に思ふ事なく、

●時うつる比（四人）

●時雨には天も心ありて、知れる者人感ありて、袖にも木の葉ばかりぞ散りかゝる。

●雲雀えさだにもとめず、花には鶯もなき、月には郭公も来ず、雪には梅もほころびず、これらの人の主設

●心なき身にも哀は知れ、鴫立つ沢の秋の夕暮、これは西行の歌にて、三夕の一つなり。

●時は、死人に同じ。光陰何の役にか立つと、なほ思ひなせば、外に出でなくしてなほ、心に思ふ事なく、

●時世時節。（同）

●時は得難く失ひ易し。（同）

●春うちに時なし。（同）

●並國卒有採薪之憂、麒麟徒伏櫪之間、何意爲造化小兒苦、鴻鵠長繫樊籠之中、口不能言、同陳仲子之居於陵、脚不能行、似卞和氏之在楚山、爲世人嗤、將何及、遇時窮阨、嚬眉獨泣。天之將喪斯文也命也。天之未喪斯文也時也。時之不可失、不敢不告也。（春滿）

●蒯通曰、夫功者難成而易敗、時者難得而易失也。時乎、時不再來。（司馬遷）

●百畝之田、勿奪其時、八口之家、可以無飢矣。（孟子）

〔とく〕徳

徳行。徳義。徳政。徳色。徳器。恩徳。高徳。陰徳。盛徳。報徳。令徳。明徳。

めぐみ。徳に報す。なつく。したひよる。

●後白河の御時、兵革おこりて、姦臣世を亂り、天下の民殆塗炭におちにき。頼朝一臂を振ひてその亂を平げたり。王室は古にかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし、東より西よりこの徳に服せしかば、實朝なくなりても、背く者ありともきこえず。これにまさる程の徳政なくして、いかでたやすく覆へさるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民やすかるまじくば、上天よもくみし給はじ。（親房）

●回祿のよし尋ぬるに、彼唐堯舜の君は、支那四百州の主として、其徳天地に應ぜしかども、茅茨不剪、柴椽不削とこそ申しつたへたれ。矧や粟散國の主として、此大内を造られたる事、其徳相應ずべからず。後王若し無徳にして、居安からしめんと欲し給はゞ、國財力も依って盡くべしと、高野大師之に鑑み、門々の額をかゝせ給ひけるに、大極殿の大の字の中を引切りて火といふ字になし、朱雀門の朱の字を米といふ字にぞ遊ばしける。（太平記）

●わが智をとりいでゝ、人にあらそふは、角あるものゝ、つのをかたぶけ、牙あるものゝ、きばをかみいだすたぐひなり。人としては、善にほこらず、ものにあらそはざるを徳とす。他にまさることのあるは、大なる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ、ことばにいでゝこそいはねども、内心にそこばくのとがあり。つゝしみて、これを忘るべし。（兼好）

●されどもあるじの年、いまだ甚老いず、徳いやましに隣ありて、是より栄きつゞけば、ほどなく、又棟にも充ちぬべし。（也有）

●それ草木心なしと申せども、花實の時をたがへず、陽春の徳をそなへて、南枝花はじめて開く。（謡曲、高砂）

●げにありがたや御めぐみ、直なる御代に歸るしるしも、思へば保ちし僕の徳。（謡曲、花筐）

●君神明の徳に長じ、自ら萬機の政務を執り、賢を敬ひ能を擧げ、才を愁しみ、不能を勸め玉ひければ、文學盛り盛んにして、四海に洩るゝ民も無く、王化古今に秀でしかば、世々に斉道の譽の、例を仰ぐ時なれや。（浄瑠璃、七小町）

●年來の恨もきれて悦を、積み重ねたる富士の譽、去年より今年は百倍倍に、植ゑ廣げたる御供田、あら人神の御威勢も、孝行の徳武勇の徳、正直の徳慈悲の徳、君が威徳に榮え行く、御代は萬歳松竹の、直なる民こそ目出たけれ。（浄瑠璃、曾我虎が磨）

●累持が愚痴も徳あり年忘、（言水）

●折られけりいらって梅の徳は何。（同）

●大人に徳あり菊の酒はやし。（亀世）

●徳に入る門のとびらと見ゆるかなのりに板めの本の表紙は。（故白）

●明徳は我身にあれど水がねをたづぬる間にや腰もかゞみや。（同）

●詩は知らず歌はもとより知らぬ身のつくすたはけも戯作者の徳。（三馬）

●心學の徳にあふぎの要草おろかなるみのしなりとぞなる。（巴）

●鬼毛なる參もをさまる世にあへば徳のはしかや歌に和らぐ。（香折）

●三徳を兼ねたとみつの朝戸出や證者の様も智仁勇く。（君丸）

●山住の賤の女もみやこ人にみつ見られたと花の徳なる。（若糸）

●灰かきに花を咲かせる御神徳。（川柳）

●御扇は君子の徳の風を出し、（同）

●酒の徳秋の夕も花の春。（同）

●陰徳あれば陽報あり。（俚諺）

●信心も徳の餘り。（同）

●徳人者、居無思、行無慮、不藏是非美惡、四海之内、共利之之爲悦、共給之之爲安。怊乎若嬰兒之失其母也、儻乎若行而失其道也。財用有餘、而不知其所自來、飲食取足、而不知其所從。此謂徳人之容。（莊子）

●修之於身、其徳乃眞。修之於家、其徳乃餘。修之於郷、其徳乃長。修之於國、其徳乃豐。修之於天下、其徳乃普。（老子）

●履徳之基也。謙徳之柄也。復徳之本也。恒徳之固也。損徳之修也。益徳之裕也。困徳之辨也。井徳之地也。巽徳之制也。（易經）

●鳳凰無竹實、無以充朝饑、麒麟遇敢夫、乃比犢與羆。君子負道徳、不遇將奚爲。所以谷中叟。終身竟栖々。（王稚）

●孔耽道徳、契須是鄙、蕭樂琴書、田園不履。若能超然。投迹高軌、敢不斂衽、敬讚徳美。（陶潜）

●孔子曰、有徳者必有言。非有言也、徳之發於口者也。又曰、我戰則克、祭則受福。非能戰也、徳之見於怒者也。（蘇東坡）

●君子之徳風、小人之徳艸。艸上之風必偃。（論語）

●努力崇明徳、皓首以爲期。（李陵）

●徳潤身。（大學）

●蹈徳詠仁。（黄覇）

●茂徳淵冲。（陸機）

●脩徳守約。（賈至）

●玄徳升聞。（書經）

●徳無常師。（同）

●寛仁厚徳。（漢玉銘）

〔どく〕毒

毒藥。毒草。毒蟲。毒殺。毒害。毒言。鴆毒。劇毒。藥毒。漸毒。五毒。流毒。荼毒。螫毒。

そこなふ。

●氏光罷りかへりて後、將軍の宮此藥を御覽ぜられて宣ひけるは、病の未見はざる先に、かねて療治を加ふる程に我等を思は

ゝ、此一室の中に押こめて、朝暮物を思はすべしや。これは定めて病を治する薬にはあらじ。只命を縮むる毒なるべしとて、鹿へ打すてんとせさせ給ひけるを、春宮御手に取らせ給ひて、抑尊氏卿義等、此程に情なき所存を挿むものならば、縦令此薬をのまずとも通るべき命かは。是元來所願成就なり。此毒を呑み世なはやうせばとこそ存じ候へ。夫、人間の習、一日一夜を経る間に八億四千の念あり。一念悪を發せば、一生の悪身を得、十念悪を發せば十生悪身をうく、乃至千億の念も又閻なりといへり。如是一日の悪念の報受け盡さん事猶難し。況や一生の間の悪業をや。悲哉未來無窮の生死出離何れの時ぞ。富貴榮花の人に於て猶此苦を遁れず。況や我等籠鳥の雲をこひ、淵魚の水を求むに如くるなりて、聞くにつけ見るに随ふ悲の中に、待つこともなき月日を送りて、日の積るをも知らず、悪念に犯されんよりも、命を鴆毒のために縮めて、後生善處の望を遂せんにはしかじと仰せられて、毎日法華経一部あそばされ、念佛唱へさせ給ひて、此鴆毒をぞきこしめされける。將軍の宮是を御覧じて、誰とても斯る憂き世に、心をとゞむべきにあらず。同じくは後生までも、御供申さんこそ本意なれとて、諸共に此毒薬を七日までぞ聞召しける。嬉て、春宮は其翌日より、御心地例に違はせ給ひけるが、御修法の儀閣りるが、御修法の儀閣にして、四月十三日の暮程に忽に隠れさせまでも、陰山の烏其流をあぶるとき、水還つて給ひけり。將軍宮は廿日餘まで御座ありけるが、黄疸といふ御いたはり出で來て、御遍身黄にならせ給ひて、是も終にはかなくならせ給ひにけり。

（太平記）

❶なほ執念おこつて、野澤が命を失はん悪事をたくみ、或時菓子に斑猫の大毒を仕込みて野澤のかたへおくりけるに、此山吹餅なひとりは開かずして、女蔵中間よび集め、茶事して之をもてなしけり。又は胸をいたませ或りて血をはくもあり。又は腹中燃えて、憂き目を見せて、殺さんとはしなく、彼是七人の女房たち同じ枕に命終りて、小梅一人生き残るを穿鑿しけるに、因果は免れず、毒薬のこと終にあらはれ、此科の果す處、牛裂にしても猶あきたらず、日日の所に穴をあけて彼木の箱をさして、女を入れ、毒害におひし女房どもの親兄弟をよびよせ、恨をはらすためとて、此箱の蓋より、身にこたふる程の大釘をうたせける。

（西鶴）

❷仙源澄むと雖も、烏浴して流を濁らすとて、仙宮より流れいづる河は、仙人集つて仙薬を洗ひすゝぐ故に、下流なくむものまでも、必、長命なり。而るを其河の中間に、水還つて毒と變ずといへり。

（源平盛衰記）

❸ありがたし〳〵や、誠に呪咀諸毒薬念彼観音の力をあはせて、すなはち浸着於本人の、かたきは亡びにけり。これ観音の佛力なり。

（謡曲、田村）

❹昔が今に至る迄、非義反逆を工むは、皆子孫に榮花を見せん爲め、勝元悪心挟み、この水毒と知るならば、悴が飲むなうかゝと、見て居る親や候べき。存ぜぬ證據明白なり。強て毒見を勧めたる、そやつめこそ此水の、起りは胸に籠めつらむ。そこらにこゝろをつけられよ。

（浄瑠璃　室町合戦）

❺三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子のかはいさに毒な物、喰ふなといふて呵るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいといふ様な、どうよく非道な世親が、又と一人あるものか、武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや。

（浄瑠璃、先代萩）

❶毒断の敷にいりけり衣がへ。（尺草）
❷毒を盛る親は涙のすゝ哉。（野坡）
❸ねむ散るや毒ありげなる水の面。（素堵）
❹毒虫もいつか一度は草の露。（一茶）
❺毒だめの其名もゆかし春の草。（凡兆）
❻毒だちに障らぬ程のにほひかな。（李東）
❼白きものさして毒とはおもはれず日薬ほどの庭の初雪。（藍水）
❽毒氣立つ石の上ともみかり場の地へ空よりも烏のむちぐさ。（浪影）
❾つれ〴〵の床の海にも松といふ名にぞ戀路の毒の有る魚。（蕉輔）
❿薬てふ苔清の軒のうらにわきてさすから毒と知る時候虫。（滿丸）
⓫毒にせんなど、言葉のあぶら櫂たしらで盃いてをりもおらうと。（和琴）
⓬おのづからわれて口をばはきながら毒はくはせぬさんごじゅの玉。（古正）
⓭夜を豊と寝ずにかせぎてなまなかの日くさり金を持つも身の毒。（純々亭）
⓮くれなゐの梅は珊瑚の玉の露くだく風こそ華に毒なれ。
⓯ほと〳〵ぎす待つ明けがたの一聲にしびれぐすりの毒もさめけり。
⓰高野山月の中なる薬には毒もきえなん玉川の水。
⓱見る目にも毒はこれなれ高野山白なみたてる玉川の岸。
⓲さんごじゅのしらぬふりする毒も有り。（川柳）
⓳りん病の毒もあいつと伍子胥いひ。（同）
⓴毒だてに鼻の先のほいひにくし。（同）
㉑地廻りの來て御席の毒ないひ。（同）
㉒毒水をのむ氣づかひは女なし。（同）
㉓山にさく花嵐が毒よ、わしは君さま見るがどく。（俚諺）
㉔毒を食はゝ皿まで。（同）
㉕毒薬變じて薬となる。（同）
㉖怨毒之於人甚矣哉。王者尚不能行之於臣下、況同列乎。（司馬遷）
㉗清涼破二洪毒一、哀意欲レ登レ蓬。（杜甫）
㉘民之貪亂、寧爲二茨毒一。（詩經）
㉙愛忠之來深二人心一、非二特蜂蠆之螫毒一。（淮南子）
㉚見レ之自清涼。洗盡煩悶毒。（蘇軾）
㉛能解二玉露毒一、不レ救二讒言傷一。（同）
㉜暫解二露露毒一、稍知二江上寒一。（范梈）
㉝無門無毒、一宅而寓二于不一。得レ已、則幾矣。（莊子）
㉞虚名自昔敬椽虚。流毒于今幾卷書。（丁翁）
㉟書狂逸飛蛇。非毒甚含蠆。（王令）
㊱山蛭負レ毒不レ足レ憐。盡貸蛭蝓留報レ喜。（陳造）

〔とし〕年

年序。年期。年華。年月。豊年。凶年。忘年。窮年。新年。としのあゆみ。としたつ。すぎにし年。としわされ

❶思ふやう侍りて、大學の道にしばしならはさんの本意侍るにより、いま二三年ないたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも、つかうまつりぬべきほどにもならば、いま人となり侍りなん。

（紫式部）

❷そは氣色ある所なめり。ゆめいぬなれうがいの事あらんに、あなかしこ。おびえ驚かせ給ふな。息ひせでふさせ給へといが、又と一人あるものか、武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや。

（浄瑠璃、先代萩）

❶毒断の敷にいりけり衣がへ。（尺草）
❷毒を盛る親は涙のすゝ哉。（野坡）
❸ねむ散るや毒ありげなる水の面。（素堵）
❹毒虫もいつか一度は草の露。（一茶）
❺毒だめの其名もゆかし春の草。（凡兆）
❻毒だちに障らぬ程のにほひかな。（李東）
❼白きものさして毒とはおもはれず日薬ほどの庭の初雪。（藍水）
❽毒氣立つ石の上ともみかり場の地へ空よりも烏のむちぐさ。（浪影）
❾つれ〴〵の床の海にも松といふ名にぞ戀路の毒の有る魚。（蕉輔）
❿薬てふ苔清の軒のうらにわきてさすから毒と知る時候虫。（滿丸）
⓫毒にせんなど、言葉のあぶら櫂たしらで盃いてをりもおらうと。（和琴）
⓬おのづからわれて口をばはきながら毒はくはせぬさんごじゅの玉。（古正）
⓭夜を豊と寝ずにかせぎてなまなかの日くさり金を持つも身の毒。（純々亭）
⓮くれなゐの梅は珊瑚の玉の露くだく風こそ華に毒なれ。
⓯ほと〳〵ぎす待つ明けがたの一聲にしびれぐすりの毒もさめけり。
⓰高野山月の中なる薬には毒もきえなん玉川の水。
⓱見る目にも毒はこれなれ高野山白なみたてる玉川の岸。
⓲さんごじゅのしらぬふりする毒も有り。（川柳）
⓳りん病の毒もあいつと伍子胥いひ。（同）
⓴毒だてに鼻の先のほいひにくし。（同）
㉑地廻りの來て御席の毒ないひ。（同）
㉒毒水をのむ氣づかひは女なし。（同）
㉓山にさく花嵐が毒よ、わしは君さま見るがどく。（俚諺）
㉔毒を食はゝ皿まで。（同）
㉕毒薬變じて薬となる。（同）
㉖怨毒之於人甚矣哉。王者尚不能行之於臣下、況同列乎。（司馬遷）
㉗清涼破二洪毒一、哀意欲レ登レ蓬。（杜甫）
㉘民之貪亂、寧爲二茨毒一。（詩經）
㉙愛忠之來深二人心一、非二特蜂蠆之螫毒一。（淮南子）
㉚見レ之自清涼。洗盡煩悶毒。（蘇軾）
㉛能解二玉露毒一、不レ救二讒言傷一。（同）
㉜暫解二露露毒一、稍知二江上寒一。（范梈）
㉝無門無毒、一宅而寓二于不一。得レ已、則幾矣。（莊子）
㉞虚名自昔敬椽虚。流毒于今幾卷書。（丁翁）
㉟書狂逸飛蛇。非毒甚含蠆。（王令）
㊱山蛭負レ毒不レ足レ憐。盡貸蛭蝓留報レ喜。（陳造）

〔とし〕年

年序。年期。年華。年月。豊年。凶年。忘年。窮年。新年。としのあゆみ。としたつ。すぎにし年。としわされ

❶思ふやう侍りて、大學の道にしばしならはさんの本意侍るにより、いま二三年ないたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも、つかうまつりぬべきほどにもならば、いま人となり侍りなん。

（紫式部）

❷そは氣色ある所なめり。ゆめいぬなれうがいの事あらんに、あなかしこ。おびえ驚かせ給ふな。息ひせでふさせ給へとい

ふをきくにも、いといみじう侘しく恐ろしうて、夜をあかす程、千年をすぐす心地す。（孝標女）

●この小石が幼な心に覚えてありし、その面影に似たまへば、掛上にてましますべし。十年の月日百年も千歳も過ぐる心地して、こひしたひ奉れるを、便なしとおぼさずや。（馬琴）

●離れがたきは女の誠、分つ袂にふり棄てられて、あこがれて死なんより、おん身の刃にかけてたべ。百年の後を冥土にて、また侍らんとかきくどく。（同）

●かくて年逝き年来りて、過ぐる月日に関守なく、既に十年の星霜をへて、小石纔十六歳、香樹丸十四歳になりたまふ。（同）

●つれ〴〵と一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしと思ばゝ、千とせをすぐすとも、一夜のゆめの心地こそせめ。（兼好）

●かやうに治まれる四つの時、いく年々を送りけん。花の雅、紅葉の秋の夕時雨、古きを守るためしまでも、あふぐや寄によし、奈良の代々ぞひさしき。（謡曲、佐保山）

●忘れて年を経し者な、又思ひ染む言の葉の、草の隆野の露の世を、いとふまでこそかたからめ。（謡曲、江口）

●さて花は散りても、又もさかん。春は年々、頃は弥生に、又花のさくぞや。（謡曲、三山）

●水汲み薪慣るばかり、憂苦と思ふ浅ましさよ。無常の刹鬼身を離れず、煩悩業苦に日を送らせ、日数積りて月となり、月重りて行く年は、嶺より落つる車の如く、繋ぎも留めぬ玉の緒の、一生の楽み翻つて、無数の苦患となる、大紅蓮の水を汲み、無間の薪を樵り運ぶ、苦に比ぶれば、此難行は（浄瑠璃、釈迦如来）

●あさましげに世のうきことを忍ぶとて歎せしまに年ぞへにける。（勧撰）

●何事をまつともなしにながらへてなしらぬ身の年をふる哉。（守覚法親王）

●梓弓はるたちしより年月のいるが如くおもほゆるかな。（躬恒）

●年ふれど春にしられぬ埋木は花の都にむかひざなき。（顕仲）

●眤たき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがとおもほゆるかな。（憶良）

●神垣にかゝる小鈴のしめくちてならぬこひにも年をふるかな。（春海）

●いたづらにへにける年のくやしさも逢ひみてこそは思ひしらるれ。（同）

●彦星にこひはまさりぬあら玉の年にもあはでくれぬと思へば。（土満）

●なにをしもあかぬ事には思ふらんしづけかる世にこゝら年へて〳〵（千陰）

●そむくともいまいくほど〳〵よのうさにたへてあまこの年もへにけり（蘆庵）

●年なれば虎も涙や忘れ草。（鬼貫）

●月花を見かへすや年の峠より。（同）

●年忘三人よつて喧嘩かな。（芭蕉）

●年と年よきにやかへん宿の主。（野坡）

●餅さりに残らぬ年の仕舞かな。（杉風）

●年すでに明けて逢坂の尻目哉。（嵐雪）

●羽織着て馬追ふ年の貫哉。（白嶌）

●年もはや半ば流れつ御抜川。（素堂）

●年々や里の山畑打ちのぼる。（曉臺）

●あらほれて百年目とはなりにけり又一年もかたらはゞ間に。（雪業）

●くる年も又くる年もわくせきとかせげどもいとならぬ口すぎ。（貞宮）

●年ばかりつみ重ぬとは何事ぞまつも新に

うりはつるよな。（智恵内子）

●孫彦のつるもさかえて覆たんの百なりといふ年ぞめでたき。（蒲萄）

●年々のとしは形にゆづりやりて心にしはとらせずもかな。（友住）

●前九年年賦のやうに首を取り。（川柳）

●女房に土手であつたが百年目。（同）

●九年目にいのめのあたりぶよ〳〵し。（同）

●しかるに息子代をとつて二三年。（同）

●ねざめする、小夜の枕の年月を、いかでしのぶの軒の松風、風身にしみて、いとゞつゆけき秋なるらん。（俗謡）

●世の中は物かはり、星移れども春の花、柳の糸のたえやらで、来る年々のたのもしき。（同）

●作草もやゝ夏草も、たけゆく君が年月の、晴れるまもなき懸衣。（同）

●たつた錦木かひなく朽ちて、そはで年ふる身ぞつらき。（同）

●宇治の橋守哀と人は、いはで年ふる袖の色、。（同）

●来年の事をいへば鬼が笑ふ。（俚諺）

●年とはんより代をとへ。（同）

●年ぎり。

●狗猶食二人食一、而不レ知レ捻。塗有二饑挙一、而不レ知レ発。人死則曰二非レ我也歳一也。是何異レ於二刺レ人而殺レ之、曰二非レ我也兵也。王無レ罪レ歳、斯天下之民至焉。（孟子）

●錦衾玉帯雪中眠。醉後詩魂欲レ上レ天。十二萬年無二此楽一。大呼前輩李青蓮。（張船山）

●三寸箱空落舒泉。才華泉抑玉堂僊。洞簫吹断無二消息一。山月江風五百年。（星巌）

●加二我数年一、五十以学レ易、可二以無一大過一矣。（論語）

〔とみ〕富

富貴。富豪。富國。富強。豊富。殷富。

とみ人。とみさかゆ。時めく。ゆたかなる。

●唐に闘茶子といふものありけり。二三年の中に、家大にとみ栄えたり。其妻みどり子を抱きて泣きかなしめり。姑大に怒りて、これを問ふに、妻答へていはく、我間く、能なくして官あるを禍喙とす、功なくして富めるを積殃といふ。楚の令尹叔敖、家貧しくして國宮めりし、福子孫にさつ、名を後代に顕しき。今答子能なく功なくして、宮み栄えたる事後害を顧ざるべし。我きく南山に麦豹あり。七日雨露にかくれて、おのが衣毛しほれん事を惜みて、あへて食物を求むる心忘れたり。この故にや、居ながら害をのがる。犬馬に至りては、偏に食物をのみ思ふ故に、害をまつなり、是卽答子に似たり其故になくぞと答へける。答子遂に害にあひにけり。かやうの妻に作へらん男は、たのもしくや。（十訓抄）

●富貴は皆人のほつする所にて、予も是をにくめるにはあらねど、もし唯世の中のたのしみを論ぜば、身のよせも重からで、寶もたず、衣食の事はいづれの境になれるにも、人の恵むばかりのさへありて、皆人のきそひあらそふ富貴のみちは、少しそむけつゝ須磨の秋、吉野の櫻、只心にまかせて時におくれず、又思ふ人あれば千里の遠きをも必訪れ訪はん事こそ、いと興深からんとは、我のみ思ふかもしらず。されど又同じ事いひし人なきにもあらず。（南総、

●月は武蔵野水に宜、何は兎もあれ難波津は、朔の大阪大分限、年中絶えず國々へ、

祖るや淀の鳥替金、宮にあかせし物好の、散寄屋の掃除小坊主が、朝から晩まで掃く茶臼、しんきな事と咳いて、ふくら雀は風に揉まるゝ、ふら〳〵眠り、家にもまるゝ、柳腰、年若ながら助の、数にも入りしお次迚、器量も揃ふ利勘者。（浄瑠璃、三組盃）

●浮める雲にたとへたる、不義の富貴に引かへて、月日もおほふ村雲も、今時を得て晴れ渡り、新に作る普請の結構、玉を敷く駒沢が、直なる心の上やしき、殊に今日は殿のお入りときめいて、腰元はした取をに、掃除しまうて寄りこぞり、コレ菊野、今日殿様のお入りとて、此様な結構なお坐敷なそうぢして、きれいな事ぢやないかいのう。（浄瑠璃、朝顔話）

◐富人の家の子供のきるみなみくたしすつらんきぬわたらはし。（徳長）

●今年より門を開きて富をまてやそうど人のあともつがせん。（相模）

●人のいふ富は思はず世の中にいとかくばかりやつれずもがな。（幸文）

●今更に身にはねがひはなけれどもふてやまたん花の上の富。（直好）

●人の世の富は草葉におく露の風をまつまの光なりけり。（盧庵）

◐家富みてあかぬ事なくつかふとも報いんものか親のめぐみは。（同）

●年にそふこがれ白がね玉がきの内つ御園雨にけふは大風。（深藪）

◐富貴ある天にもちかく舞ふつるはめでたきもの、此上ははし。（行竹）

◐富でなほ継続に心かけもの、一ぷくに見る七ふくの神。（武雄）

◐盗人にあへば隣でけなるがり。（川柳）

◐二代目ものろまで金の番をする。（同）

◐高野山金もちの灯にけちをつけ。（同）

◐村分限澄酒ばかり飲んで居る。（同）

◐右の手に開扇を持たぬ株になり。（同）

◐金の番とろとろとしてうなされる。（同）

◐江戸者の生れそこなひ金をため。（同）

◐親は子のためにかくしてためるなり。（同）

◐金持を見くびつてゆく初鰹。（同）

●金持になると受合ふ八卦おき。（同）

●これの御庭へ若荷ふきうゑて、みやうが日出たや富貴繁昌。（俗謡）

●富む家に痩犬なし。（俚諺）

◐富は一生の財、智は萬代の財。（同）

◐金持はもつ程金につかはれて利足のあしの休む間もなし。（投網）

◐富貴天にありと思ふて仰向けばきのふは雨にけふは大風。（深藪）

◐富貴ある天にもちかく舞ふつるはめでたきもの、此上ははし。（行竹）

◐夕立やどの金持の死ぬる時。（許六）

◐金ためて歌よみ顔の手爐かな。（蕪太）

◐葛飾のむべ富みけり三葉芹。（月守）

◐菊咲くや島の金持来るといふ。（道彦）

◐されば こそ賢女は富まず敗荷。（蘇村）

◐或は臣或は富貴露の海。（淡々）

◐魚洗ふ軒の富貴や竹の雫。（同）

◐倶に倦く硯もとしの富貴哉。（同）

◐富貴とはこれを楽活に来のめし酒もこと

たる小槌ひと槌。（東作）

◐富貴天に在りされば こそ郭公聞くも聞かぬも人の耳たぶ。（薬丸）

●金持の富貴の相か山の手に舛かけ節とみ（尾白）

◐富貴や家に我が貧しさは雨もりのそのた（花盛）

●富潤ノ屋。（大學）

「とも」 友

友情。友誼。変友。心友。舊友。金蘭。断金。漆膠。莫逆。忘年。心契。芝蘭。刎頸。ともだち。友のなさともがき。ともとちぎる。老の友。むつまじき。

●ひとり郷里を別れて遙に新路におもむく。しらず、いづれの日か故郷にかへらん。影をならべゆく道づれはあまたあれども、心ざしはかならずしも同じからねば、心に准ずる氣色は友をそむきて、似たれど も折にふれ 物のあはれは心なき身にもさすがに覚えて、風原が澤に呻吟て漁夫があざけりをはぢ、揭岐が路になきて騒人のうらみをいだきけんも、身のたとへにはあらねども、逆旅にして友なきあはれにはなにとなく心ぼそく、空におもひしられて。（光行）

●病なく身強き人、四には酒を好む人、五には武く勇める人、六には慮言する人、七には欲ふかき人。善き友三つあり、一には物くるゝ友、二には醫師、三には智恵ある友。（養好）

●しらぬ世界にめづらしきうれいのがぎりみつれど、都のかたよりとて、ことゝひおこする人もなし。たゞ行方なき空の月日の光ばかりを、古郷の友とながめ侍るに、うれしきつりぶねなん、かの浦にしづやかに、かへろふべきくま侍りなんやとの給ふ。（紫式部）

●それ人の友たるものは、富めるをたふとび、ねんごろなるを先とす。かならずしも情あると、直なるとをば愛せずたゞ糸竹管絃を友とせんにはしかず。（長明）

●若くて十人の友を失ひたらむも、たとへば髪のぬけたるごとく、日あらば又生ひ揃ひぬべし。かなしき哉、老いて一人の友の罹けたるは、齒の落ちたるが如く、ふたゝび生ひ出づるたのしみなし。（也有）

◐芦垣のまぢかくて、心のうとからむよりは、萩の葉の稀なる音信も、心のしたしきは老を慰む友なるべし。（同）

●富むとも貧を忘るな。（同）

◐金持と灰吹は溜る程汚し。（同）

◐長者富に飽かず。（同）

●長者二代なし。（同）

●長者に貧な語るな。（同）

●君不ノ見富家翁。舊時貧賤誰比數。一朝金多結二豪貴一。百事勝ノ人健如ノ虎。千孫成行滿二眼前一。要能管絃妾能舞。自矜一身忽如ノ此。却笑侯人獨悲苦。（高適）

●君家稻田冠二西蜀一。擁ノ玉揚ノ珠三萬斛。寒江流水起二幷樓一。碧瓦朱欄照二幽谷一。傾ノ家取ノ樂不ノ論ノ金。散二盡黄金一如二轉燭一。（蘇東坡）

●君子富好行二其德一。小人富以適二其力一。淵深而魚生ノ之、山深而獸往ノ之、人富而仁義附焉。是故本富爲ノ上、末富次ノ之、姦富最下。（司馬遷）

●飯二疏食一飲ノ水、曲ノ肱而枕ノ之、樂亦在二其中一矣。不義而富且貴、於ノ我如二浮雲一。（論語）

◐滿而不ノ溢、所二以長守一ノ富也。（孝經）

●聞知ノ眞富貴。醉到古乾坤。（葛天民）

◐金紫雖ノ榮富貴卷。（韓偓）

●俗矣富人。（詩經）

●忘れて年を経し物を、又いにしへに帰る波の、何はの事のよしあしも、実に隔てなき友とかや。朝に落花を踏んで相伴なつて出つ。夕には飛鳥に従つて一時に帰る。然れば花鳥遊楽の現蹤、風月の友にさそはれて、春の山邊や秋の野の、草葉にすだく虫までも、聞けば心の友ならずや。（謡曲、松虫）

●とぶらふ人も、訪はろ、我も、いにしへ今こそかはれども、故郷に、住みしは同じ雄波人、篷火焼く屋も市廛形も、かはらぬ契を忍ぶ草の、忘れ得ぬ友ぞかし。あらなつかしの心や。（同）

●春の日長きも分きまへず、秋の夜しばし明くるなと、思ふも友の心なり。いつまでも離れね、此友ぞ嬉しかりける。（謡曲、市人猛々）

●ヤレ暫く〳〵、文遠は我が昔の友、義に背き事を謀る罪にあらず。それこなたへと下知すれば、大門開き悠々と、おめず臆せず立入る文遠、不思議の對面満足と、面はゆるがず以前の明友、座について調をしづめ、御邊と我は竹馬の交り、睦まじく語らひしに、今かく敵味方と隔つる事、弓矢のならひ是非もなし。籠城の急難、疲労を忍めん爲、軍中の見舞、昔を忘れぬ計りなりと、しみ〴〵語るにぞ、関羽顔ばせ快く、朋友の親切謝するに餘なし。折節雲南の酒も貯へず、山海の幸もあらず、何を以て饗さん。チヽそれよ〳〵、君子の交は水の如し、この壺の水を流し、客の衣を濕さん。（浄瑠璃、孔明鼎軍談）

●四郎兵衛忠信、判官殿に引別れ、所存あつて立帰る、都も今は敵の中、夜さへ忍ぶ深編笠、室町に來りしが、芝蘭の友も面を背け、笑の中に刃を研ぐ世の中、たとい安督は變らずとも、二親の心計られず。（浄瑠璃、鎌倉實記）

●草が江の入江にあさる蘆たづのあなたづ〳〵し友なしにして。（萬葉）

●谷の間にひとりぞ松はたてりけるわれのみ友はなきと思へば。（西行）

●常よりもむつまじきかなほと〳〵ぎすしでの山ちの友と思へば。（烏羽院）

●有明の月より外に誰をかは山路の友と契りおくべき。（寂超）

●物思ひなきを心の友にして住みなれて見んよもぎふのおく。（枝直）

●心から人はなれたるすみかにはけしきある鳥の聲も友なる。（筑波子）

●おなじ世におなじすみの友もがなふることしのぶ心かたらん。（春海）

●ひとりのみ三つの小みちをゆきかへり心の友のなき世をぞ思ふ。（蔦蹊）

●竹馬に道くらべせしそのかみの友は多くぞさきだちにける。（長流）

●いつよりかおもて皺びて老のどちいづれも同じ友垣ぞかし。（言道）

●友猿の友ぎらひする花衣。（其角）

●うき友にかまれて猫の空ながめ。（去來）

●子の日しに都へ行かん友もがな。（芭蕉）

●角いれし人なかしらや花の友。（丈草）

●蚊帳釣てくる〳〵友あり草の庵。（太祇）

●まな鶴をほとりの友や春の水。（召波）

●いさよひも更けて人なし老の友。（杉風）

●こちらから友達にせん春の月。（大江丸）

●母見えも精進の友よ海松海雲。（許六）

●善悪の友ある花見もどりかな。（也有）

●世なすて〳〵友だち多くなりにけり月雪花に由ほと〳〵ぎす。（列綱）

●軒ちかきかれ木も山のにぎやかしはなしに見ゆる友もありけり。（花盛）

●友達もいまちと待ちてくれねかしの鐘のなるまでみよし野の花。（とほうも内子）

●友を呼ぶ手紙に筆はとりながら鳥の後さへなしむほつ雪。（蟹子丸）

●名たゝるもさらぬもなべてことのはの友としきけばなつかしき哉。（井仁子）

●むつれつゝ世のあなどりをふせぎあふ友ぞ心のちから草なる。（守明）

●菊の酒過ぎてはいつも帰るさを枝にもたるゝ花の友どち。（織圭）

●友呼びてさけびやすらん二たび栗ひろふこざるもみゆる秋の野。（業枝）

●院宿はとまれ気のあふ友人がうつ非の磐に白のめぞみる。（吉備丸）

●友だちへふんまのてうで御用あひ。（川柳）

●断金の交りうたひからおこり。（同）

●友達のひや！〳〵思ふほど言葉、（同）

●女房は風月の友をわろくいひ。（同）

●友達に骨を折らせた女房なり。（同）

●新造のうきが友にはねずみなり。（同）

●鳥は古巣へかへれども、ゆきてかへらぬ死出のたび、野邊よりあなたの友とては、金剛界のまんだらに血脈ひとつに數珠つ連、これが冥途の友となる。（俗諺）

●初卯かへりに梅屋敷、藁を葺ふ窓や、枝に宿かる心根は、アレしほらしい春の友。（同）

●竹馬の友。

●犬も朋輩鷹も朋輩。

●類は友を呼ぶ。

●隔巷孤寒士、出門苦悩々。雖云志氣在、豈免顔色低。平生同門友。逈隔霄漢梁。遇來雲雨睽、正逢下金闕。曩者膠漆契。遐棄如遺跡。朝歸軒騎五門西。是時天久陰。三日雨凄々。褰簾避路立。肥馬當風嘶。朝頭忘相識。占道上沙堤。昔年洛陽社。貧賤相提携。今日長安道。對面隔霊泥。近日多如此。非君獨慢悽。死生不變者。唯聞任與斉。（白居易）

●伐木丁々。鳥鳴嚶々。出自幽谷。遷於喬木。嚶其鳴矣。求其友聲。相彼鳥矣。猶求友生。神之聽之。終和且平。（詩經）

●同人先號咷而後笑。于曰、君子之道、或出或處、或默或語、二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭。（易係辭）

●益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。（論語）

●有朋自遠方來、不亦樂乎。（同）

●親朋無一字。老病有孤舟。（杜甫）

【ともしび】燈

寸暉。餘燼。燦爛。明滅。冷烟。短熠。幽暗。短檠。孤光。長照。あぶら火。ともす火。光うすき。かげそふ。そむくる。しめるともしび。ほのほ短き。風にまたゝく。ともなふかげ。かげよわりゆく。光さびしき。殘るともしび。

●いと暗き殿の内に、隈々しき所もなく、あまたかゝげたる燈火の光は、昼よりもけざやうに、心も晴々しうこそおぼゆれ。またほのかなる火影を、なすの内深く見いれたる、空たきものなつかしう薫り出でゝ、立ちまよふ人の影さへゆかしう見ゆ。文机のもとなるは更なり。友だち打つどひて、近うかゝげたるいとをかし。夜深き雨の音に

驚きたる性がみに、影幽にまた、きたる、いみじう心細し。起き出で、かゝげる火に、花の大きなるが、ふと落ちたるいと口なし。山里の火影こそいみじう哀なれ。隣と軒むも遠く隔りて、竹のすきなどよりすきて見えたるいと哀なり。盞のすみかは豊にも似ず静なるに、あやしげなる窓よりもりくる影は、網を結ぶにやと思ふもいとをかし。（廣足）

●こよひばげに思ひ出でつゝ、唯涙の流るゝに御経一巻読み奉らんと思ひつゝ奥床を見れば、虫などの仕けん、御燈火二ところまで消えたり。尼たちも軒合せて臥し給へるに、火を打出して御燈火を照らし、提婆品といふ御巻を心静に読み居けり。さて悟の道には男女の相なしてふ事を、わだつみの神の娘にとき給ひし所にいたりて、燈また二所ながら晴くなるに、御経をよみさして、立ちて捧げんとすれば、火はそのまゝにてる。さてよといふ聲す。さて見れば白き衣を身にひきまとひたる赤通女の、頭の髪はいと黒くて、俯伏に伏し居たり。（綾足）

❼燈明常燈にはあらで、うちに又人の来りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のさにともし立れば、深夜のやみ、白日とこそ輝きけれ。（浄瑠璃、大友眞鳥）

●長き夜の更けゆく程のかげみえて光そうすきまどの燈。（為氏）

●つく〳〵と明けゆく窓の燈のおりやと斗りとふ人もなし。（定家）

❽さえやらで残る影こそ哀なれ我世ふけそふまどの燈。（家隆）

●ともしびのもとの心やたどるらんこれぞかたみとみづぐきのあと。（春渡）

●ほかなしやわが身一つのまどのうちもてらしかねたる夜半の燈。（春滴）

●ぬる玉は結ぶほどなくをだえしてみはつる物はまどの燈。（契沖）

❿みなと江や星かとまがふともし火をしるべによする沖のもゝふね。（千隆）

●ふみよむとさよふくるまでかゝげてもとる心のともし火のかげ。（宣長）

●いにしへの雪をあつめし心にはそむけにてたるまどの燈。（涌蓮）

●きえやらでのこるもさびし有明の月かげほそきまどの燈。（枝直）

❹花の香や雛眠の燈消ゆるころ。（無村）

❹燈のしまらぬ色や夜の雛。（永花）

❹燈が香や紙燭きえたるそのくらき。（架下）

❹灯のかすかなりけり梅の花。（釣雪）

❹何人の寝ぬ燈ぞ小夜時雨。（麥太）

❹燈にこがるゝ蝶を夢路かな。（暁臺）

❹朝顔やまだ灯の影もあり。（千代女）

❹初雁に燈とるやまくらもと（落梧）

❹なにいそぐ家ぞ燈ともす秋の墓。（几董）

❹寒き夜や隣の燈壁を洩る。（春樹）

❹文みればむかしの人も目の先へちら〳〵とする燈灯の影。（一遍）

❹ひとつ家はこゝにもありと燈のさしてをしふる夜はの山道。（景道）

❹朝もよひきちんどまりの出立は心のこゝのともし火もなし。（赤良）

●ともし火はいつもありしに吹きけしてさてくらしよき松の下庵。（菅江）

❹燈灯もはやきえがての枕もと只一すぢに妻やこふしか。（百川）

❹不思議やな風のまた〳〵く燈のきえぬと思へば螢にて候。（貞臺）

❹燈もさらへやけつく明がたに猶ちり〳〵と千どりなくなり。（吉住）

❹灯をけしたけさぬとあらそひの理も非もなしに月のさやけき。（須穂）

❹まつ宵は消ゆるに近きともし火も男になれとかき立てぞする。（めし盛）

❹すがかきに咸陽宮に灯がとぼり。（川柳）

●えんなき衆生あんどんと落向ひ。（同）

●あんどんをとぼしてではる十三日。（同）

❹壁はそもけろ燈の、またゝきのころ夜もすがら、窓うつ雨の音きけば、いとゞさへねられぬ。（俗謡）

❹心細くもともしび更けて、まつは命の消えもせず。（同）

❹燈火将に消えんとして光を増す。（俚諺）

❹貧者の一燈長者の萬燈。（同）

❹燈臺下暗し。（同）

❹風前の燈。（同）

●峡深終無レ倫。頭燕亦自来。花時閉レ酒逸。雨後背レ窗休。冷暗黄昏驟。暗明紫桂燈。錦瑟名湘掩。玉局敗棊攻。何處無二佳夢一。誰人不二隠愛一。影圍二簾押一轉。光信二壁文一流。客自勝潘岳。儂今定哀愁。固應レ留二半醉一。廻照下レ離レ筵。（李商隠）

❹照盡離人千古情。圖書一掃毎三更。詩成時寫二岸巾影一。花落不レ絲二棋子盤一。涼夜誰

求盞燈力。寒官自勝曙光明。十年對雨作二何事一。懶祭納皮途二此生一。（東涯）

●春遊二紗籠一暖。草心花自抽。光照二金鷺一遍。飛生二玉釘頭一。疎堕孤館夢。寒雨五更愁。水夜落還結。不レ同二華燭流一。（南海）

●向レ夕燈稍遠。空堂獨寂莫。光寒對二愁人一。時復一花落。但恐明見レ累。何愁暗難レ托。懇君秋夜永。無使二闌幷漏一。（劉長卿）

●凝寒結二飛雰一。遥瞻二芳蕊一。青空逐二洞水一。燄在同二燼火一。懇影未レ成レ眠。更就二餘光一坐。（高啓）

●情別終宵話不レ休。煌々燈燭照二離愁一。纔花本是無情物。特向二人前一也淚レ流。（張弘範）

●月華星彩坐來収。獣色江聲暗結レ愁。牛夜燈前十年事。一時和レ雨到二心頭一。（杜荀鶴）

●殘燈猶未レ滅。將レ窓更掲レ輝。惟餘一兩點。纔得解二羅衣一。（紀少瑜）

●二十三年陳往事。一燈寒照雨簾櫳。（星巌）

●青燈昨夜挑二殘雨一。（郭鈺）

●燈影搖二鄉夢一。（同　）

〔とら〕虎

猛虎。電目。雷威。震怒。猛烈。鈎爪。長嘯。咆哮。班皮。負レ嵎嘯レ谷。

とらふす山。手がひのとら。うゑたる虎。からふす虎。虎の子。虎の野べ。野にふす虎。虎のふしど。

●これも今は昔、筑紫の人商しに新羅に渡りけるが、商はて、歸路に、山の根に添ひて、船に水汲み入れんとて、水の流れ出でたる所に船を留めて水を汲む。その程船に乗りたるもの鮭にゑて、うつぶして海を見れば、山のかげ寫りたりばかり餘りたる上に、虎つゝまりゐて物を伺ふ。その影水にうつりたり。その時に人々につげて、水汲むものを急ぎ呼び乗せて、手ごとに船を押して急ぎて船を出す。その時虎躍りおりて船に乗るに、船は疾く出で來ぬ。泳ぎて陸ざまに上りて、汀に平なる石の上に登るを見れば左の前の足を膝よりかみ食ひ切られて血あゆ。鰐にかみ切られたるなりけりと見る程に、切れたる所を、水に浸してひらがりなるを、如何にするにかと見るほどに、沖の方より、鰐、虎の方をさして來ると見る程に、虎右の前足をもて、鰐の頭に爪かうちたてゝ、陸ざまに投げ上ぐれば、一丈ばかり濱に投げあげられぬ。のけざまになりてふためく。風の下を躍りかゝりて、食ひて二度三度ばかりうち振りて、なよ〳〵なして、肩にうちかけて、手を立てたるやうなる岩の五六丈あるを、三の足をもちて、くだり坂を走るが如く登りてゆけば、船の内なる者ども、これが所業を見るに、なかばは死に入りぬ。船にとびかゝりたらましかば、いみじき鋭刀を抜きて合ふとも、かばかり力強く早からんには、何事をすべきと思ふに、肝心失せて船こそそらもなくなん。（筑紫にはかへりけるとかや。）（隆國）

●虎は五百歳の齢ありて、山獣の長なるがゆゑ、かりにも武士の箙先をおそるゝことなく、甚拳大にひろし。されどたま〳〵狗子をくふときは、忽酔ひたふれ臥すをもて、狗子の盛の酒とはいふめり。彼の野馬に馬酔木の花あるに似たれば、必しも此はかりごとに落ちて、終に地獄の底にうりわたされ、赤鬼の犠牲となるべからずといふ事をいましむ。（重厚）

●大塔の尊雲法親王ばかりは、虎の口を逃れたる御さまにて、こゝかしこさすらへおはしますもやすき空なく、いかで過しはつべき御身ならんと、心苦しく見えたり。（増鏡）

●もとより虎亂の勢猛く、左も右も餓の如くに、竹枝を折つて金鼓にかゝれば、悪虎を卷んとおほひかゝるを、背けて追つゝめ食ほんとすれば、金龍雲井に通に上れば、悪虎はいきほひ厳に上り、はるかに見遣り、無念の勢あたりを拂ひ、また竹林に飛び歸つて、其まゝ岩洞に入りにけり。（話曲、龍虎）

●唐土の事にやありけん、母を悪虎にとられ、其敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出でゝねらふ。ある夕暮に、尾上の松の木陰に、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひ、つがへる矢なればよつぴいて放つ。この矢すなはち巌に立ち、たちまち血流れけり。（話曲、放下僧）

●されば大國に千軍を翔る虎は、一毛を惜んで吹き來る風を含みて、その身をかへて死すとかや。（謡曲、元服曾我）

●爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獣の所爲と覚えたり。二十四孝の揚香は孝行の徳によつて、自然と脱れし悪虎の難、其孝行には劣るとも、愚義に勇む我勇力、唐へ渡つて力始め、神力ます〳〵日本刀、双で向ふは大人氣なし。虎は愚か衆でも鬼も一揉きと、尻引つからげて身繕ひ、世を園うて立つたるは、四天の獅子王も恐れつべう見えてけり。案に違はず吹く風と共に荒れたる猛虎の形、藤棲に頬を摩りつけ〳〵、岩棧に爪研ぎたて、二人を目がけいがみ掛かるを事ともせず、弓手に搦り馬手にうけ、振つてかゝれば身をかはし、撓めばヒラリと乗り移り、上になり下になり、命競べ根くらべ、壁を力にえい〳〵、虎の怒り怨聲、山も頽るゝ如くなり。（浄瑠璃、國姓爺）

●虎穴に入らずんば、虎の子は得がたし。危きに臨みて福を得るは人間の習ひ、明日辛いめに遇うかとて、水の呑み置飛りならず。此進物返濟と突きもどせば、ソリヤ卑劫、羊が虎の皮をかぶり、豺を見てなのゝく。秦村といふ虎の威を借つて助かるとも、豺といふ時頼の政道にあはゞ、罪科遁がれず、其時こそ一家のつらよごし。（浄瑠璃、時頼記）

●から國のとらふすといふ山にだに旅にはやどる物とこそきけ。（諺人不知）

●有りとても幾世かはふる唐國の虎ふす野べに身をもなげてん。（同　）

●淺ぢふのを野の篠原いかなれば手がひの虎の臥所なる。（同　）

●古の虎のたぐひに身をなげばさかと斗はいはんとぞ思ふ。（拾遺）

●あたむくふ思はてすにたぐへては虎もつたなき物とこそ見れ。（春満）

●さす竹の君がおましと唐土のとらとふ神の衣たてまつる。（魚彦）

●からくにのとらてふ神をとりえつゝうつはさにせりかしはでのおみ。（千隆）

●身をすてゝ戀もするかなもろこしの虎ふすのべも遠くやはある。（通蓮）

●用ゐねば虎も猫なる世の人をかたちのみ

見て定むるがうさ。（晉道）
●久方の天つ空なる不二のねの石にも虎の名こそ高けれ。（有功）
●虎の尾をふみつゝ暮に講岡哉。（森村）
●かげろふにねても動くや虎の耳。（其角）
●年ふれば虎も涙や忘れ草。（鬼角）
●蚯にや腹巻ながら虎の巻。（旨原）
●虎の皮やめてふしどの寒さかな。（也有）
●耳伏せて虎の出て来る霰哉。（李遥）
●掲虎ぞと取遂へたる頭巾哉。（召波）
●櫻なきこと國人もうとむらんとらてふ神の風をおこさば。（星客）
●うそぶきて時かぜむこすけものこそ櫻のさかぬ國にすみけれ。（便々齋）
●入川の竹にはことなかゝずして虎のすまざる國ぞめでたき。（来人）
●虎の住む竹の林に玉霰ひやうかと計りおどろかれぬる。（由彦）
●恐ろしき寅の年の尾ふみこえて光のどけき玉の卯の春。（列翁）
●虎の住む敏にそだちし筍は喰うても跡にかはなのこせり。（夢流）
●雨をよび風を起せば心せよ小町ざくらに虎の尾ざくら。（橘近）

●二千里をてり渡る月にかげもなし雲おこす龍風おこす虎。（袖廣）
●虎は千里の敏さへこすに、障子一重がゝならぬ。（有功）
●東風吹けば今年も首をふる法師はりこの虎の眷なむかへて（東作）
●虎口を逃れ龍穴に入る。（俚諺）
●虎になれ賢人になれくれ竹のよしおもしろき風の友ずれ。（鬼角）
●虎は千里の敏を越える。（同）
●虎は死して皮を遺す。（同）
●不用なもの虎のくび撓の胴。（川柳）
●虎の鳴聲を聞かれて儒者こまり。（同）
●虎の子の様に大切にする。（同）
●虎は千里いつて千里かへる。（同）
●征韓之役、豊公下二命薩侯一曰、欲レ得二虎肉一以賚レ藥、須二獵以貢一之。書以二文祿四年正月二五一軍。時積雪滿レ山、不レ可レ得而獵一焉。三月八日薩侯與二世子一、乘二船於唐島一、至二昌原一、明日勒レ隊圍レ山、終日無レ所レ見。其翌披二荊棘一、踰二險阻一、深入數里、列卒數千、分レ山鳴噪。山嶽爲震、俄而雨降、烟霧濛密。有レ虎走出、將突レ圍。安田次郎兵衛者、島津守右衛門尉彰久之臣也。舞レ刀逐レ之。虎還順迎咬。安田刺二其口一寢之。須臾二虎跳躍飛走、直逼二麾下一。世子懇二其道一父也、將レ身當レ之。舍人上野權右衛門、揮双迎撃。虎攫膊咥之、牙投可二五歩一、負嵎大吼。帖佐六七、急奪レ所レ

頭、刀三下。虎怒噬二其股一側有二老松一、枝條下垂。福永助十郎、捽レ尾擲レ枝、極レ力遠曳。永野助七郎、進撃殪レ之。其一逸道、六七亦斃レ窮死。於レ是薩侯狀二其事一献二幾于屈前行營一。豊公大悦、下二手書一褒賞。世傳レ之以爲二虎狩一云。（宕陰）
●陣風偃レ林萬籟呼。鳥獣無レ聲日將レ晡。長嘯一聲震二暗谷一、出レ窟獨行草二於莵一。鋸牙鉤爪描作殊。練然蔑視似レ非レ圖。斯圖姿徒供二奇觀一。畫師寄レ意寓不レ遷。國著二壯士如二虎賁一、掉レ臂猶足當二萬夫一。承平偃武不レ忘レ亂。爪牙誰可レ廢須臾一。君側借人畀汝屠。草間何問狸與レ狐。頭城尾旌何勇敢。仗レ汝手秋驚二天都一。而今召南澤正満。方以二經術一餐二剛謨一。練行猛威無所レ施。汝僣亦遂化二騎虎一。（六如）
●陰風吹レ林鳥鵲悲。猛虎欲レ出人先知。日光晦々當レ路蟄。將軍一見弧矢暫。幾家捕縛高作レ門。未到二日沒一收二豬豚一。猛虎雖レ猛猶可レ喜。橫行只在二深山裏一。（高啓）
●虎求二百獣一而食レ之、得レ狐。狐曰、子無二敢食一レ我也。天帝使レ我長二百獣一。今子食レ我、是逆二天帝命一也。子以レ我爲二不信一、吾爲レ子先行。子隨二我後一、観二百獣之見レ我而敢不レ走乎。虎以爲レ然、故遂與レ之行。獣見レ之皆走、虎不レ知二獣畏一レ己而走也、以爲レ畏レ狐也。（戰國策）
●不二敢暴一レ虎。不二敢馮一レ河。（詩經）

〔とり〕鳥

群鳥。海鳥。水鳥。群飛。翔翔。羽族。飲啄。和鳴。轉レ枝。結レ巢。
うかれ鳥。羽ぬけどり。ひなどり。むらとり。朝とり。沖つ鳥。ねぐら求むる。打むれてとぶ。もゝちのとり。しげき聲々。
●鳥は、他處のものなれど鶏鶏、いと哀なり。人のいふらんことをまねぶらんよ。杜鵑、水雞、鴫、みこ鳥、鷽、火燒、山鳥は、友なこひてなくに、鏡を見せたれば慰むらん、いと哀なり。谷へだてたる程など、いと心ぐるし。鵲はこちたくさまなれど、鳴くも聲井まできこゆらん、いとめでたし。頭赤き雀、斑鳩の雄、巧鳥、鷽はいと見るめもみぐるし。眼皮などもうたて、萬になつかしからねど、萬木の森にひとりはねじと、争ふらんこそをかしけれ。容鳥、水鳥は、鴛鴦いとあはれなり。互に居かはりて、羽のうへの霜を拂ふらんなどいとをかし。都鳥、川千鳥は友まどはすらんこそ。雁の聲は遠くきこえたるあはれなり。鴫は羽の霜うち拂ふらんと思ふにをかし。（清少納言）
●はしるけだものは、をりにこめ、くさりをさゝれ、飛ぶ鳥は、つばさをきり、こに入れられて、雲をこひ、野山をおもふうれひ、やむ時なし。そのおもひ、わが身にあたりてしのびがたくば、心あらん人これをたのしまんや。（兼好）
●かくうたふを聞きつゝ清ぎくるに、くろとりといふ鳥、いはほのうへに集りをり、その巌のもとに、なみ白くうち寄す。かちとりのいふやう、くろき島のもとに、しろき波をよすとぞいふ。（貫之）
●おきふし安き獨住には、山の鳥どもいたう馴れて、朝夕に此水のほとりに下り來つゝ、はねうちそゝぎなどするも、またなき友と思ひむつばれてなん。（廣足）
●迦陵頻伽のたぐひなき、聲をたぐへて諸共に、孔雀鸚鵡の同じく、囀づる鳥のおの

づから、光も影もおしなべて、至らぬ隈もなければ、無邊光とは名けたり。 （謡曲、姨捨山）

●夫れ迦陵頻迦は卵の内にして、衆諸鳥にすぐれ、鷲といふ鳥は小さけれど、虎を害する力あり。 （謡曲、望月）

●四百四病の煩ひより、貧程つらひもの有らうか。我子に飲ます人參の、償にせんと鷄をうち、其鷄故に我命、取らるゝのみか子も死ぬに、思へば是迄多くの殺生、數多の鳥を殺す中にも、まだ巣離れもせぬ小鳥を、育てん爲に親鳥の、野山に下りて餌を尋ぬる、夫とも知らず親鳥を、殺せば殘りし子鳥も死ぬる、まづ其如く我々も、子に助けんとて此親が、死すれば殘りし子も死ぬるは、歴然報う因果の道理、親故不慈の死をさすか。 （浄瑠璃、奥州安達原）

●國に親と子東に夫、思ひは千筋百筋の、我は涙のながせ綴る、眞麻をくるとや世のうはさ、手でせき派ぬる河水に、洗ふ雌子播磨潟、ろくに寝ぬ夜の目もとぼ〳〵と、咲きぶれの髮形、漸やく浦の鵆にも劣る、山田鳥の鳥おどし、さりとは鳥おどし、あはの鵜や澤の田鶴、ひよ〳〵となくはひよどり、小池に住むはなしどり、鴛鴦のしかもやもめのつまの留主もり、男やもめの憂き住ひ、鳥の上にも吹かれて、いとゞ涙の種ぞかし。 （浄瑠璃、鎗の權三）

●夕さればむこの浦しほ滿ちぬらし入江のすどり聲さわぐなり。 （業俊）

●鳥の子はかへりて後ぞなかれける身のかひなきを思ひ知りつゝ。 （讀人不知）

●明けぬとて何急ぐらんひな鳥のまだとぐらなる聲にやはあらぬ。 （同）

●入日さす時ぞ悲しきむら鳥のおのがちり〴〵なりぬと思へば。 （同）

●離鳥のかざきりよわみ飛ばれねばすごもりながらねをのみぞなく。 （業平）

●山深く入りもやられずはなち鳥猶このことをかけておもへば。 （知家）

●むら鳥も心々やかはるらん世を見きくには友なかりけり。 （契沖）

●山かげにねぐら定むる鳥みれば我友えたる心地こそすれ。 （蘆菴）

●鳥すらも思ふ心のあればこそかたみになばなきかはしけれ。 （同）

●人すまで年をふるやはあれにけりあやしき鳥の聲のみはして。 （春海）

●五百津鳥ふみおどろかし御狩人朝けの風に袖ふきかへす。 （魚彦）

●夏の山靜に鳥の鳴音哉。 （召波）

●明月や木末の鳥の夢の聲。 （松風）

●鳥飛んであぶなきけしの一重かな。 （落梧）

●明月や鳥もねぐらの戸をさゝず。 （千代）

●鳥の音も絶えず家陰の椿かな。 （支考）

●難波津や梅に巣ぬけの鳥の聲。 （野坡）

●巣の鳥の口あく方や暮の鐘。 （一茶）

●雨の日や花に色めく鳥の聲。 （可石）

●嚶々と鳥も啼くなり夏木立。 （曉臺）

●曉の鳥はものかは通路を背から守る鵜の目鷹の目。 （三馬）

●日は長し眠氣はさしぬ一つかみ鷹のつめ茶をなれもほうじつ。 （舟積）

●かつこうと舌つゞみうつ鳥の音は夫と林のうちにこそきけ。 （好秋）

●びろてんの目とも志らしにかゝるのはうぐひすも有りみそさゞい有り。 （參二）

●まれにあふ戀としりなば曉のとりもからすもねわすれてくれ。 （有竹）

●手に持ちし杖の鳩まではなしけり放せし鳥に指をさすとて。 （市人）

●鳥にだもしかざる內儀うつくしさ。 （川柳）

●風上へ廻ってすてる鳥のはね。 （同）

●むつかしい鳥でおぼつかなくとよみ。 （同）

●下女籠の鳥だと文へかきやあがり。 （同）

●面影のつく〴〵と、忘れもやらで、思ひ寝の、夢だに見えて明けぬれば、逢はでも鳥の音ぞつらき。 （俗謡）

●雪の外山の曙つらや、かやが軒端の鳥の聲。 （同）

●思ひなほしはないかよさまよ、鳥は古巣へかへらぬか。 （同）

●其禽は樹を擇んで棲む。 （俚諺）

●鳥を吸ふともどり食ふな。 （同）

●鳥の一穴。 （同）

●たつ鳥跡を濁さず。 （同）

●籠の鳥雲を戀ふ。 （同）

●鳥影がさすと珍客が來る。 （同）

●足下から鳥がたつ。 （同）

●翼々歸鳥。晨去レ于レ林。遠之二八表一。近憩二雲岑一。和風不レ洽。翻レ翮求レ心。顧レ儔相鳴。景庇二清陰一。 （陶淵明）

●翼々歸鳥。載翔載飛。雖レ不レ懷レ游。見レ林情依。遇レ雲頡頏。相鳴而歸。遐路誠悠。性愛無レ遺。 （同）

●翼々歸鳥。馴レ林徘徊。豈思二天路一。欣レ及二舊棲一。雖レ無二昔侶一。衆聲毎諧。日夕氣清。悠然其懷。 （同）

●翼々歸鳥。戢二羽寒條一。游不レ曠レ林。宿則森標。晨風清興。好音時交。矰繳奚施。 （同）

●秋風吹二漏蓉一。紅葉落如レ雨。樹杪月升時。棲禽皆可レ數。 （笛浦）

●乞二得名花一盛開。飛來佳禽自語。 （東坡）

●清陰花落後。長日鳥聲中。 （徐致中）

●東風度二花梢一、春音入二禽哢一。 （章粲）

●春情寄二柳色一、鳥語出二梅中一。 （猶子範）

●雨過庭翠滋。一鳥發二清籟一。 （田倫霞）

●鳥之將レ死、其鳴也哀。 （論語）

●有レ鳥高飛。亦傅二于天一。 （詩經）

●花發鳥啼千里心。 （吳融左）

●幽禽含過隔レ墻花。 （章醍齋）

●斜陽牛岸鳥呼レ晴。 （桂屋）

●林鳥相惡。 （許棐）

な ノ 部

〔な〕 名

名義。名目。名稱。佳名。雅名。盛名。功名。才名。雅號。稱號。なづく。なのる。なき名。うき名。あだなる名。をしき名。埋もれぬ名。名にたつ。名をながす。

●遁世の姿すでに定りぬ。さてはうき世の名にもあらじ。さるべき二字にあらためばやと、名を思ひ字をゑらむに、今は父母も世にましまさず、宮路もいとひはなれたれば、忠孝の字義をとらんも、跡のまつりとやいふべからん。よし又四書古文の抜萃も、あまねく人の取りつくし、まして歸去來の辭など、あらゆる隱者のむしりとりて、骨ばかりにくひちらしたる、さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども夫れは耳遠かれば、名はいかにと問ひきかん人の、とみに心得ぬかほの口をしく、ほね折りの詮なき心地すれば、

これは其男のたが言なりなど、一人々々に講釋せんはいとむづかしかりねべし。菩提の道も疎ければ、四念浄蓮にてあるべからず。されば世の人のうへを見るに、金藏といふも貧にせめられ、萬吉も不幸はのがれず、玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はその人によらねものかも。よしさらばたゞ御市走女も侫よく、娘も娘もかきやすからんをと、皆人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ暮水とはかきはじめける。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此語によるならんと、蛇に足をそへ、摺小木の耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又をかしかりねべし。（也有）

●ひかる源氏なのみことゝくしう、いひけたれ給ふ、とがおほかなるに、いとゞかゝるすきごとゝもを、すみの世にもきゝつたへて、かろびたる名をやながさんと、思ひ給ひけるかくろへごとをさへかたりつたへけん、人の物いひさかなさよ。さるはいといたくよをはゞかり、まめだち給ひける程に、なよびかになかしきことはなくて、かたの〳〵少將にはわらはれたまひけんかし。（紫式部）

●寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくる事、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまゝに安くつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目馴れぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事も珍しき事を求め、異說を好むは、淺才の人の、心あることなりとぞ。（兼好）

●又四月二十五日、祭なれば、御啓などしめく。めん〳〵に葵つけなどするも、年に一たびも、幾めぐり逢ひぬらんと、おもふに去年のこの頃も、只今の心地して、侍るほどなさも哀れにて、その名につけて、古を忘れず、忍ぶ人もあるらん。（中務内侍）

●ひかる源氏なのみことゝくしう、いひけたれ給ふ、とがおほかなるに、いとゞかゝるすきごとゝもを、すみの世にもきゝつたへて、かろびたる名をやながさんと、思ひ給ひけるかくろへごとをさへかたりつたへけん、人の物いひさかなさよ。さるはいといたくよをはゞかり、まめだち給ひける程に、なよびかになかしきことはなくて、かたの〳〵少將にはわらはれたまひけんかし。（也有）

●げにやいはれを聞くからに、其名ゆかしき老人の、昔を語る小忌衣、頃しも今は、春の夜の、潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし其時は、我名や名のらん。たとひ名のらずとも名のるとも、よしつねの浮世の夢ばし覺まし給ふなよ。（謠曲、八島）

●物い名も、所によりてかはりけり。難波の芦の浦風も、こゝには伊勢の濱荻の、音をかへて聞きたまへ。（謠曲、阿漕）

●あゝかゝ樣、祖父樣に恨はない。負けはわしが未熟から、大事の役目を仕損じた。憎いやつぢやとゝ樣に、叱らりやうかと夫が悲しい。もし尋ねてなら笹市に負けはせぬ、怪我につい切られたと、いうて詫して下されと、今はの際も名を惜む、稚心のいぢらしさ。（淨瑠璃、名歌島蓬）

●行末をおもへば悲し津の國の長柄の橋も名は殘りけり。（後賴）

●蘆のねのうきみながらの橋柱かくて打ちかなる木の下。（謠曲、野宮）

●ふしぎなりとは海士人の、あまり委しき物語、其の名をなのり給へや。我名を何と夕浪の、引くや夜潮も朝倉や、木の丸殿にあらばこそ、名のりをしても行かまし。げにや言葉を聞くからに、其名ゆかしき老人の、昔を語る小忌衣、頃しも今は、春の夜の、潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし其時は、我名や名のらん。たとひ名のらずとも名のるとも、よしつねの浮世の夢ばし覺まし給ふなよ。（謠曲、八島）

●物い名も、所によりてかはりけり。難波の芦の浦風も、こゝには伊勢の濱荻の、音をかへて聞きたまへ。（謠曲、阿漕）

●あゝかゝ樣、祖父樣に恨はない。負けはわしが未熟から、大事の役目を仕損じた。憎いやつぢやとゝ樣に、叱らりやうかと夫が悲しい。もし尋ねてなら笹市に負けはせぬ、怪我につい切られたと、いうて詫して下されと、今はの際も名を惜む、稚心のいぢらしさ。（淨瑠璃、名歌島蓬）

●行末をおもへば悲し津の國の長柄の橋も名は殘りけり。（後賴）

●蘆のねのうきみながらの橋柱かくて打ち

なん名こそなしけれ。（家衡）

●世を厭ふ名をだにもさば止め置きて數ならぬ身の思出にせん。（四行）

●流れての名だにもとまれ行く水の哀はかなき身はきえねとも。（行盛）

●もろ共に苔の下には朽ちずして埋れぬ名をみるぞかなしき。（和泉式部）

●うせにきと身こそ聞ゆれ石上ふるき名うせぬ君にぞありける。（貫之）

●さゝなみや近つあふみは名のみ殘てみるめもからぬ浦のあま人。（千陸）

●よしや名のたゝばたちねと思ふまでしのぶ心のいつよわりけん。（枝直）

●妹が名もわか名もなしとおもへこそ夜深く露のおきてしもくれ。（土蜘）

●涙だにあまるたもとはこひ衣たちとたつ名ないかでつゝまん。（宣長）

●旅人と我名呼ばれし初時雨。（芭蕉）

●名に啼くかよし原雀行々子。（北枝）

●茂れ〳〵名も玉川の玉柳。（桃隣）

●川今皆出でたる山に名はなきか。（杉風）

●名も知らぬ小草花さく枯野哉。（道彦）

●はつ春のめでたき名なり賢魚。（越人）

●おもしろき名の有りがたやわかの春。（凡董）

●黄菊白菊其外の名はなくも哉。（嵐雪）

●八重の名は霞にも遲し梅のはな。（也有）

●白梅にかくす名もなし古男。（麻白）

●幾千代と祝ひぬ松にあふ坂のまち得た町の名もかはらずに。（龍丸）

●玉の名のあふみは名のみ仇し名のばつとたつたる花のさゝ涙。（仲眞）

●おのが名を告てふ鳥となのるならはきゝ〳〵鳴けよ雲のあし間に。（登 ）

●ちる花に浮世の名をばけし坊主からしてはたくあたまてん〳〵。（立賢麿）

●明らけきこよひの月はみちのくのあふま川も名のみなりけり。（際住）

●何ほどか尾花のしなはかられじますほといへる名には有れどもつこそ立つ名なれ。（乘方）

●村長の名にさし合は心してさまづけにせゝ次郎左衛門びな。（椎喜）

●人心うごかすまでは花咲かぬ岩木は山の名のみなりけり。（千島園）

●朝夕にながめ樂しむ此花をなどて茨聲の名をやつけゝん。（春道）

●てらすべき身に月のわのありながらなど已が名なくまとよぶらん。（有數）

●通り名は系圖の中をすぐとほり。（川柳）

●まよひ子の名を八兵衛と呼で行き。（同 ）

●しわんぼう土鍋のふたにおてらの名。（同 ）

●先の名が長くて樣に頭がつかへ。（同 ）

●金平も今は女の名となりて。（同 ）

●なま長い御名はこの花さくや姫。（同 ）

●子を持て近所の犬の名を忘え。（同 ）

●蝶千鳥山より高き名を殘し。（同 ）

●とても立つ名が止まばこそ、こちへ御寄りやれのう、柴垣ごしに、ものいはう。（俗謠）

●逢ふは稀よ、一人寢は繁し。あの君ゆゑにあらぬ名のたつ。（同 ）

●逢ふてたつ名が立つ名の内か、逢はでたつこそ立つ名なれ。（同 ）

●人目しのびはその名もいはで、思ふあたりのことぞきく。（同 ）

●人は一代名は末代。（俚諺）

●名は體を表す。（同 ）

●抜かぬ太刀の高名。（同 ）

●名の下空しからず。（同 ）

●名高の件高。（同）

●予謂、史王桓溫之言、曰大丈夫不ㇾ能ㇾ流ㇾ芳百世、亦當ㇾ遺ㇾ臭萬年。然後歎、不ㇾ畏ㇾ名者之害、至於此之極也。夫人之爲ㇾ惡、至於亂逆而止也。若桓溫者、可ㇾ謂亂臣賊子矣。而其所ㇾ以甘爲ㇾ亂逆而不ㇾ悔者何歟。彼惟以ㇾ芳名之不ㇾ足ㇾ愛也。故舍ㇾ其忠義而不ㇾ爲。彼惟以ㇾ醜名之不ㇾ足ㇾ畏也。故安於亂臣而不ㇾ顧。使溫而猶知ㇾ畏ㇾ名者、必不ㇾ敢以ㇾ亂逆之言、直然而出之口、則必不ㇾ敢以ㇾ亂逆之行、顯然而見ㇾ之事矣。甚矣不ㇾ畏ㇾ名者之害也。（吳成佐）

●内不ㇾ足者、急於人知。孺子有ㇾ餘、厥聞四鄰。今日背ㇾ女、知名之法、勿ㇾ病無聞、病其譁々。昔者子路、惟恐有聞。陡然手戟、德衰愈厚。於三女文章、貝錦讒、乘三人不能。捨以自取。女非其父、女非其師、不ㇾ譴而敎、譴云不ㇾ敢。欺以實憎、捨以讀怨女皆不ㇾ寤、以及於疑。小人在ㇾ昇、亦克知悔。及其既寧、終莫能戒。既出女心、又銘女前。女如不ㇾ順、褊亦宜ㇾ然。（韓愈）

●自是三子第一名、内家監理獨分明。美容殿上申元日。水拍銀盤異化生。（薛能）

●夫名者實之賓也。有ㇾ名而無ㇾ實。猶三醒而稱ㇾ醉、人誰信ㇾ之。（息軒）

●名可ㇾ名非ㇾ常名。無名天地之始、有名萬物之母。（老子）

●名ㇾ子不ㇾ以ㇾ國、不ㇾ以ㇾ日月、不ㇾ以ㇾ山川。（禮記）

【なぐさみ】慰

●御かへり參らせて、少し程へて參りたり。いかゞと例よりはつゝましうて、御几帳にはたかくれたるを、あれは今まゐりかなど笑はせ給ひて、にくき顏なれど、此をりは、さもいひつべかりけりとなん思ふを、見つけては暫これには慰むまじけれなどのたまはせて變りたる御氣色もなし。（清少納言）

●法皇は龜山殿に過ぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひもきこえず。哀なる程の御ありさまにて、靈をすりたらんやうなる空の氣色のうとましげなるを、ながめさせ給ひなどするに、例の中將そぼちまゐりて、侍めくもの一二人、弓などもたせて、御宿直つかうまつらせ侍るべし。なにがしも侍のかたに侍らんなど申すにぞ、いさゝかたのもしくて人々慰め給ふ。（增鏡）

●博勞のきじのつまをしたひ、枝にはなれし簀虫の、父よとなけど慰むる、よすがもたえて夏の日の、長きにいとゞくらしかれ、身はうつせみのから衣、乾かぬ袖をかたしきて、住みつかぬ宿は水無月も、秋風びしさや。（兼好）

●名高の件高。

●予謂、史王桓溫之言、曰大丈夫不ㇾ能ㇾ流ㇾ芳百世、亦當ㇾ遺ㇾ臭萬年。然後歎、不ㇾ畏ㇾ名者之害、至於此之極也。夫人之爲ㇾ惡、至於亂逆而止也。若桓溫者、可ㇾ謂亂臣賊子矣。而其所ㇾ以甘爲ㇾ亂逆而不ㇾ悔者何歟。彼惟以ㇾ芳名之不ㇾ足ㇾ愛也。故舍ㇾ其忠義而不ㇾ爲。彼惟以ㇾ醜名之不ㇾ足ㇾ畏也。故安於亂臣而不ㇾ顧。使溫而猶知ㇾ畏ㇾ名者、必不ㇾ敢以ㇾ亂逆之言、直然而出之口、則必不ㇾ敢以ㇾ亂逆之行、顯然而見ㇾ之事矣。甚矣不ㇾ畏ㇾ名者之害也。（吳成佐）

●内不ㇾ足者、急於人知。孺子有ㇾ餘、厥聞四鄰。今日背ㇾ女、知名之法、勿ㇾ病無聞、病其譁々。昔者子路、惟恐有聞。陡然手戟、德衰愈厚。於三女文章、貝錦讒、乘三人不能。捨以自取。女非其父、女非其師、不ㇾ譴而敎、譴云不ㇾ敢。欺以實憎、捨以讀怨女皆不ㇾ寤、以及於疑。小人在ㇾ昇、亦克知悔。及其既寧、終莫能戒。既出女心、又銘女前。女如不ㇾ順、褊亦宜ㇾ然。（韓愈）

●自是三子第一名、内家監理獨分明。美容殿上申元日。水拍銀盤異化生。（薛能）

●夫名者實之賓也。有ㇾ名而無ㇾ實。猶三醒而稱ㇾ醉、人誰信ㇾ之。（息軒）

●名可ㇾ名非ㇾ常名。無名天地之始、有名萬物之母。（老子）

●名ㇾ子不ㇾ以ㇾ國、不ㇾ以ㇾ日月、不ㇾ以ㇾ山川。（禮記）

【なぐさみ】慰

愚安。愚耕。愚樂。娛愚。弔愚。撫愚。訪愚。愚問。

●同じ心ならん人と、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなくいひなぐさまんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひぬたらんは、一人ある心地やせん。互にいはんほどの事をば、實にときくかひあるものから、聊たがふところもあらん人こそ、我はさやは思ふなど、爭ひにくみ、さるからさぞともうちかたらはゞ、徒然慰まめと思へど、實には少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大かたのよしなしごとこそあらめ。まめやかの心の友には遙にへだゝる所のありぬべきぞわびしさや。（兼好）

●御かへり參らせて、少し程へて參りたり。いかゞと例よりはつゝましうて、御几帳にはたかくれたるを、あれは今まゐりかなど笑はせ給ひて、にくき顏なれど、此をりは、さもいひつべかりけりとなん思ふを、見つけては暫これには慰むまじけれなどのたまはせて變りたる御氣色もなし。（清少納言）

●法皇は龜山殿に過ぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひもきこえず。哀なる程の御ありさまにて、靈をすりたらんやうなる空の氣色のうとましげなるを、ながめさせ給ひなどするに、例の中將そぼちまゐりて、侍めくもの一二人、弓などもたせて、御宿直つかうまつらせ侍るべし。なにがしも侍のかたに侍らんなど申すにぞ、いさゝかたのもしくて人々慰め給ふ。（增鏡）

●博勞のきじのつまをしたひ、枝にはなれし簀虫の、父よとなけど慰むる、よすがもたえて夏の日の、長きにいとゞくらしかれ、身はうつせみのから衣、乾かぬ袖をかたしきて、住みつかぬ宿は水無月も、秋風はやく立ちにけり。（馬琴）

●産六これを諫めて、いかでさる事のあらん。疫といふものゝ悩ましきはあまた見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべしと、安げにいふぞたのみなる。みる〳〵露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ地を敲きてなき悲しみ、ともにしと物狂はしきを、さまん〳〵といひ慰めて、かくてはとてつひに荒野のけむりとなしはてゝ。（秋成）

●いざ〳〵さらば琴のねに、立てゝも忍ぶ此思ひ、せめてや暫し慰むと、かきなす琴のおのづから、秋風にたぐへば、なくむしの聲も悲しみの、秋や恨むる戀や憂き、何をかくれる女郎花、我も憂き世のさかの身ぞ、人にかたるなこの有樣もはづかしや。（謠曲、小督）

●其時時宗も、歳の守りを取りいだし、是は時宗が、形見に御覽候へ。形見は人のなき跡の、思ひの種と申せども、せめて慰むならひなれば、時宗は世上に、添ひ申したると思し召せ、今までは其主を、守り佛の觀世音、此世の緣なりと、來世をば助け給へや。（謠曲、夜討曾我）

●さてなぐさみは浦の名の、群れゐる田鶴を御らんぜよ。などか雲井に歸らざるらん。旅人の故郷も、都と聞けばなつかしや。（謠曲、八島）

●入らざるそなたの讒言だて、悋氣の樣で見苦しい。大將の御榮耀、珍らしい事ども なし。女護の島へ渡らうと、仰せられても是非ないに、屋形の内の御慰み、重疊の義と思うて居る。（淨瑠璃、鎌倉三代記）

●なき人をしのぶ思の慰まばあとをも千度とひこそはせめ。（西行）

●墨染に衣はなりぬ慰むる方なきものは涙なりけり。（靜圓）

●哀ともたれかこゝろをなぐさめん身より外にはしる人もなし。（隆信）

●つらさをばおもふ餘りに忘れてこひしきことのなぐさめしがな。（經正）

●こひしきに身もなげつべしなぐさむることにしたがふ心ならねば。（與風）

●こひかねてものなぐさにと世の中をうしといふをぞ日なれにけるゝ。（蕙華）

●あはぬ夜はなにゝさぐさむおもひして月なもやつす涙なるなん。（宣長）

●うちみつゝなぐさみぬべき月花のなどおもかげをさそひきぬゝん。（千陰）

●わかの浦にいたらぬまでもきのくにや心なぐさのやまと言のは。（長流）

●ゆきめぐり慰む時もあるものを思ひぐまなく月ながめそ。（眞淵）

●無弓や琵琶に慰む竹の奥。（芭蕉）

●秋來ぬと思ひ慰むあつさかな。（桃妖）

●草臥や百合になぐさむ風來寺。（曉臺）

●なぐさめて粽解くなり母の前。（太祇）

●いやな風をひらきてうけて、ほのじがするうきつとめ、あたしんきなと口ぐせに、いうてなぐさむ心のそこも、ふかいあさいのわけこそかはれ、どうで戀路のみをつくし。（俗謠）

●此頃はいとゞしく、都の方のこひしきに、かゝる所の人心、うきを慰む今宵かな。（同）

●物や思ふといふ人あらば、せめてかたりや慰めん。（同）

●自二八九年一來、與二足下一小通、則以ㇾ詩相戒、小窮則以ㇾ詩相勉、索居則以ㇾ詩相慰、同處則以ㇾ詩相娛。（白居易）

●隣翁意緒相安慰。多說明年是稔年。（陸龜蒙）

●伊余難ㇾ寡ㇾ慰。殷憂暫復ㇾ輕。（謝曛）

●未暇申二安慰一。含情空激揚。（杜甫）
●有二子七人一。莫レ慰二母心一。（詩經）

【なげき】歎

歎息。歎願。歎聲。悲歎。愁歎。號歎。永歎。浩歎。

なげきの森。なげきのかす。なげきこる。

●時しもこそあれ、故大納言殿の百箇日に當りける日、御産事故なくして、若君生れさせ給へり。あはれ其昔ならば、御祈の貴僧高僧、歡喜の眉を開き、幣帛の御使、天下に聞えて、門前の車馬群をなすべきに、梁の弓引く人もなく、蓬の矢射る所もなきあばらやに、透間の風あさましけれども、防ぎし除もかれはてぬれば、御乳母なんど附けらるゝまでも叶はず、只母上自ら懐きそだて給へば、漸く故大納言殿に似たまへる御顔つきを見給ふにも、形見こそ今はあだなれこれなくば、忘るゝ時もあらましものをと、古人のよみたりしも、泪の故となりにけり。悲歎の思胸にみちてうぶやの籬未乾かざるに、中院中將定平の許より、使を以て御産の事につきて、内裏より草ねんごろに仰する事候。もし若君にても御渡り候はゞ、御乳母に懐かせて、是へ先入れ進らせられ候へと仰せられければ、母上あな心うや、故大納言の公達なれば、胤の中までも、あけて御覽ぜらるべしと聞えしかば、若君出來させ給ひぬと、もれきこえけるにこそありけれ。歎の中にも此子をそだてゝこそ、故大納言殿の忘形見とも見、もし人となならば僧にもなして、なき跡をも弔はんなどと思ひつるに、未ちぶさも離れぬみどり子を、武士の手にかけて失はれぬときゝて、有りし別の今の歎に、消えわびん露の命を、何にかけてか堪へ忍ぶべき。あるを限の森に秋ふけては、梓の色のうすきをも覺らむ。（也有）

●むすぼれとけぬより糸の、みだれ苦しき物思ひ、下枝の黄葉色に出で、なのへの鹿と音にぞなく、戀もやすると問はるゝまでに、病の床にふし柴の、こるばかりなる歎すと、いはで忍ぶにえぞしらぬ、君に知らるゝ由もがなと、思ふはきのふけふのみならず。（馬琴）

●我も近き比、十九の愛女を先だてり。されば君が心、我よくしりぬ。君又はじめて我を察すべし。我かの魚にして魚をいさむ。只なげき給へ〳〵。けふも歎きあすもなげき、なげき〳〵てゆくまゝに、なげきの森に秋ふけては、梓の色のうすきをも覺らむ。

●わりなくしぶ〳〵に起きがたげなるを、しひてそゝのかし、あけ過ぎぬ、あな見苦しなどいはれて、うち歎くけしきも、げにあがず、物うきにしもあらんかしと覺ゆ。（清少納言）

●こはいかに罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人晉の網にもれて、沈みはてん事はいかに。此ほど三人一處にあつまりつるだに、さも恐ろしく冷まじき、荒磯島にたゞ一人、離れて淳士の捨草の、波の藻屑のよるべもなくて、あられんものかあさましや、歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりのありさまかな。（謠曲、俊寛）

●夫れ受け難き人身を受け、逢ひ難き如來の教法に逢ふ事、開夜の燈、渡りの船待ち得たる心地して、昔と覺めん夢の世に、今を捨てずば徒に、又三途にも歸らん事、歎きても猶餘りあり。（謠曲、高野物狂）

●悲しきかなや、惡業は山よりも高く、善根は塵ほどもたくはへず。かく三途の故郷にかへつて、本願の塲に至らざらんは、歎の中の歎、かなしみの中の悲しみたり。（謠曲、更級）

●實にや思ひうちにあれば、色ほかにあらはる。よしやよしなき世のならひ、歎きてしまた餘りあり。（謠曲、熊野）

●思へば此身は先の世で、いか成事の罪せしぞ。扨も扨もおぢきなや。こがれ〳〵た其人に、逢うてもしらぬ盲目の、此目はいか成惡業ぞや。夫の跡を慕ひしたひ、石に成つたる松浦潟、ひれふる山の悲しみも、身にくらべては數ならず。三千世界を探れても、こんな因果が又と世に、あるべきかはとくどき立て、拳をにぎり身をふるはし、流涕こがれ嘆きしは、餘所の見る目も哀也。（淨瑠璃、朝顔日記）

●なげきあまり知らせそめつることのはも思ふ斗りはいはれざりけり。（明惠）

●ひとゝきもうたて歎かじと思へどもなひにければ忍ばれぬ哉。（相模）

●なげきつゝ獨ぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる。（道綱母）

●なげゝとて月やは物をおもはするがほなるわがなみだ哉。（西行）

●濟の名のうちいでんことも思はめやがなき海と身をなげきつゝ。（春海）

●をのゝえもはやくちぬらんこひの山あはぬなげきをこるとせしまに、（落水）

●あふことの其世に人のこりぬるはつひにわが身のなげきなりけり。（成章）

●もろともに老曾の森と契りおきてわがげきのみ只しげれとや。（契沖）

●わすられてうき心のから衣なれてもばかゝるなげきせましや。（宣長）

●つれもなき人に心をつくば山うべもなげきのかすはしげらん。（土滿）

●風詭を吹いて晉秋嘆ずるは誰が子ぞ。（芭蕉）

●鬼灯のさすればつぶす歎哉。（風雪）

●行平の三とせきぬれどとぶらひの今日の歎のかへらぬぞうき。（己成）

●慇懃で女房のおてる大三十日。（川柳）

●妾が笑顔に一家中大なげき。（同）

●慇懃がはづれ泣くのは金主也。（同）

●女湯で羽衣ほどに下女歎き。（同）

●さえ渡る月を咲いて集に入り。（同）

●よしや咲かじ、叶はぬとても、定めなきこそ浮世なれ。（俗諺）

●なにゝ歎くぞ川端柳、水の出ばなをなげくかや。（同）

●嗚呼汝病吾不レ知レ時、汝殺吾不レ知レ日。生不レ能二相養一以共レ居、殁不レ能二相撫一以盡レ哀。歛不レ遮二其棺一、窓不レ臨二其穴一、吾行負二神明一而使二汝天一不孝不慈而不レ得二與レ汝相養一以生、相守以死一、一在二天之涯一、一在二地之角一、生而形不レ與レ吾形相依、死而魂不レ與レ吾夢相接一。吾實爲レ之、其又何尤。彼蒼者天、曷其有極。自レ今以往、吾其無レ意二於人世一矣。當レ求二數頃之田於伊穎之上一以待二餘年一、教二吾子與二汝子一、幸二其成長一、吾女與二汝女一待二其嫁一、如レ此而已。嗚呼、

言有レ窮、而情不レ可レ終。汝其知也邪。其不レ知也邪。嗚呼哀哉。尚饗。（韓愈）

●浩々沉湘。分流泪兮。修路幽藍。道遠忽兮。曾傷爰哀。永歎喟兮。世溷濁莫二吾知一。人心不レ可レ謂兮。懐レ質抱レ情獨無レ匹兮。伯樂既沒。驥焉程兮。民生稟レ命。各有レ所レ錯兮。定レ心廣レ志。余何畏懼兮。知二死不一レ可レ讓。願勿レ愛兮。明告二君子一。君将二以爲一レ類兮。（屈平）

●多病文園苦二消渇一。時々浩歎捉二毫管一。縦無二夜雨一何曾寐。不レ爲二秋風一也自悲。今歲相驚絲鬢改。此生雖レ繼錦江遊。欲レ談二舊事一無二人共一。日落鶺鴒又倚レ樓。（陸放翁）

〔なし〕梨

梨雪。濃艶。清妍。清艶。清香。素容。素雲。輕素。霜容。つまなし。山なし。かたえの梨。ゆきにまがふ。枝たわむ。

●梨の花、世にすさまじく怪しき物にして、目にちかく、はかなき文つけなどだにせず、愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりしておいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて、泣きけり。帯の落ちぶれて、身體疲悴する、小町ぞあはれなりける。（謡曲、鸚鵡小町）

伯樂既沒。驥焉程兮。民生稟レ命。各有レ所レ錯兮。定レ心廣レ志。余何畏懼兮。知二死不一レ可レ讓。願勿レ愛兮。明告二君子一。君将二以爲一レ類兮。（屈平）

●多病文園苦二消渇一。時々浩歎捉二毫管一。縦無二夜雨一何曾寐。不レ爲二秋風一也自悲。今歲相驚絲鬢改。此生雖レ繼錦江遊。欲レ談二舊事一無二人共一。日落鶺鴒又倚レ樓。（陸放翁）

〔なし〕梨

梨雪。濃艶。清妍。清艶。清香。素容。素雲。輕素。霜容。つまなし。山なし。かたえの梨。ゆきにまがふ。枝たわむ。

●梨の花、世にすさまじく怪しき物にして、目にちかく、はかなき文つけなどだにせず、愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりしておいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて、泣きけり。帯の落ちぶれて、身體疲悴する、小町ぞあはれなりける。（謡曲、鸚鵡小町）

●梨花一枝、雨を帯びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅、未央の柳の線も、是には如何で優るべき。實にや六宮の粉黛の、顔色のなきも理や。（謡曲、楊貴妃）

●お湯上りと呼はりて、近侍の女官携へる、瑠璃の鏡奩しやうらんの、伏籠に薫ゆる羅衣や、浴衣もたゆき楊貴妃の、ほのめく肌うき〳〵と、春日に玉を走らしめ、素顔の露曉に、物言ふ雪と梨花の雨、帯解けひろげほら〳〵と、こぼれかゝりし髪の髪、かゝる姿を正眞の棚機津女も及びなき。（浄瑠璃、蓬萊鶴）

●もみぢばの匂ひはしばしもかはれど先なしの木を折りてかざらん。（謡人不知）

●ふる雨にまじらぬ雪の枝たわにつもる色そふ山梨のはな。（通茂）

●としふれどかはらずながらつまなしのあらぬものにもよくぞなりぬれ。（家長）

●人毎にさけと願へる花なれば下戸と化物なしの木にこそ。（謡人不知）

●極樓殊さへ今は散りはてゝ外にはなしの花計りなり。（卯雲）

●庭るさへも花のきまゝに白妙のしら〳〵しくも軒の妻なし。（嘉和種）

●かひがねはうべこそ雪の消えざらめふとも白き山なしの花。（嘯海）

●もの思ひはなしの花こそ咲きにけれあはれ樓も散りはてぬ間に。（清漢園）

●大和路も霞の海となりにけり今やさくらん山なしの花。（明代）

●いろ〳〵に春のもやうを染め出す中に白地のつまなしの花。（眞隆）

●引になす天の岩戸やしろ〳〵と梨よりあくる戸隠の山。（椿の屋）

●つれ合ひの日さと道手は梨を喰ひ。（川柳）

●梨の木の下で冠はたと落ち。（同）

●手廻しは山吹よりも梨子畑。（同）

●八重に花もつても古河の梨子は落ち。（同）

●泡雪と逆意も消ゆる梨子の状。（同）

●手を出して梨子ないたゞく下戸者。（同）

●冠をおさへて梨子を一ツ取り。（同）

●櫻花背蒲に似たる杜者。私しや御前に水仙の、外に殿御は梨の花。（俗謡）

●有る時には蟻があり、無い時には梨がなし。（俚諺）

●梨の尻に柿の頭。（同）

●梨の皮は乞食に剥せ。（同）

●梨も礫も無い。（同）

●珍寶濕疑露結成。香葩況是雪侵精。仙驚磊落堆盤出。旋剖輕盈照骨明。唐橘謝勞誇二夏熟一。蔗漿次許新二朝酲一。唉餘更檢桐君錄。快果知非二浪得一名。（朱熹）

●燒燈過了客思レ家。獨立二衡門一數二鴈鴉一。燕子來レ來梅落盡。小窓明月属二梨花一。（法眞）

●清晨睡起覺二衣單一。亭舘東風怕レ倚レ欄。一夜好春吹作レ恨。梨花寂寞雨悤寒。（金消）

●梨花有レ意絲如レ葉。一樹江頭惱二殺君一。最似二蘇閨少年婦一。白粧素袖碧紗裙。（白居易）

●桃花人面各相紅。不レ及天然玉作レ容。總

●片枝みて年なへにけり中垣にさくやとなりのつまなしの花。（有功）

●絶えて世になくばなしにてあらましを花しきまゝにありのみぞうき。（盲道）

●枝に葉に露なればおびて雨にぬさ花のひもとく庭のやまなし。（春滿）

●たなやめの姿を今もしのべとや雨に匂へるやまなしの花。（春海）

●はるのよの月の光はうすけれど物おもひなしの花はくもらず。（枝直）

●梨ばかり夕日に醉はぬ山路哉。（葛臥）

●捨てしのに梨の接穂や山屋敷。（芭蕉）

●馬の耳すぼめて寒し梨の花。（支考）

●梨の木に寄てわびしき月見哉。（蕪村）

●隣に家や梨一もとの花ざかり。（閑吏）

●わび花と聞けばだかし梨の花。（几董）

●梨の花咲くやむかしの小野の宿。（汶村）

●誰が園ぞ月夜春の夜梨の花。（鴛伽）

●梨の花咲くや手次の坊が庭。（道彦）

●水梨や幾秋の夜の露の味。（乙刕）

●咲や今ない所にはなしの花ある所にはありあまるほど。（梅丸）

●白きとて雪にも似ねば櫻ほど疑ふこともなしの花さく。（湖近）